

博士論文

認知言語学から見た日中空間辞の意味と 機能拡張に関する比較研究

2016年3月

宇都宮大学国際学研究科博士後期課程

国際学研究専攻

134602K

趙 無忌

目次

目次	ii
序章	1
1. 研究の背景	1
2. 研究の対象	2
3. 研究の目的	4
4. 本論文で用いる用語について	4
4.1 トラジェクター (trajector) とランドマーク (landmark)	5
4.2 イメージ・スキーマ (image schema)	6
4.3 メタファー (metaphor) とメトニミー (metonymy)	8
5. 本論文の構成	9
第1章 日本語の「上(うえ)」と中国語の「上(shang)」との比較	13
1. はじめに	13
1.1 問題の提起	13
1.2 本章の目的	13
2. 先行研究と研究の背景	13
2.1 日本語の「上(うえ)」に対する先行研究	13
2.2 中国語の「上(shang)」に対する先行研究	16
2.3 空間辞の多義性：語彙的な意味と機能的な意味との連続性	18
3. 日本語の「上(うえ)」の意味	19
3.1 辞書における解釈	19
3.2 「上(うえ)」の空間的な意味	20
3.2.1 「上(うえ)」：物体の外側	20
3.2.2 「上(うえ)」：位置的高所	22
3.3 「上(うえ)」の非空間的な用法：語彙的な意味拡張	23
3.3.1 「上(うえ)」：優れる	23
3.3.2 「上(うえ)」：高い地位	24
3.3.3 「上(うえ)」：数量が多い	24
3.3.4 「上(うえ)」：表向き	25
3.4 「上(うえ)」の非空間的な用法：事柄の関係を示す機能拡張	26
3.4.1 物から事柄へ：メタファーによる拡張	26
3.4.2 「うえで」の機能	28
3.4.2.1 「うえで」①：前提・継起	28
3.4.2.2 「うえで」②：領域・側面	30

3.4.3 「うえに」の用法：添加.....	31
3.4.4 「うえは」の用法：因果関係.....	32
4. 中国語の「上(shang)」の意味.....	34
4.1 語源・辞書における解釈.....	34
4.2 「上(shang)」の空間的な意味：位置的な高所.....	35
4.3 「上(shang)」の非空間的な用法：語彙的な意味.....	38
4.3.1 「上(shang)」：優れる.....	38
4.3.2 「上(shang)」：高い地位.....	39
4.3.3 「上(shang)」：数量が多い.....	40
4.3.4 「上(shang)」：順序.....	40
4.4 「上(shang)」の非空間的な用法：場所性を与える機能拡張.....	42
4.4.1 場所化とは.....	42
4.4.2 メトニミーと機能拡張.....	43
4.4.3 場所性を与える機能とメトニミー.....	45
4.4.3.1 「上(shang)」：水平面の場所化.....	47
4.4.3.2 「上(shang)」：垂直面の場所化.....	48
4.4.3.3 「上(shang)」：天井面の場所化.....	50
4.4.3.4 「上(shang)」：乗り物の場所化.....	51
4.4.3.5 「上(shang)」：行為の存在する場所.....	51
5. 「上(うえ)」と「上(shang)」の相違点.....	52
5.1 語源に見られる相違点.....	52
5.2 「上(shang)」にならない「上(うえ)」.....	54
5.2.1 「上(うえ)」が持たない用法①：順序.....	54
5.2.2 「上(うえ)」が持たない用法②：垂直面の場所化.....	54
5.2.3 「上(うえ)」が持たない用法③：天井面の場所化.....	56
5.2.4 「上(うえ)」が持たない用法④：乗り物の内部の場所化.....	56
5.2.5 「上(うえ)」が持たない用法⑤：行為の存在する所の場所化.....	58
5.3 「上(うえ)」にならない「上(shang)」.....	59
5.3.1 「上(shang)」が持たない用法①：物体の外表面.....	59
5.3.2 「上(shang)」が持たない用法②：前提・継起.....	60
5.3.3 「上(shang)」が持たない用法③：添加関係.....	61
5.3.4 「上(shang)」が持たない用法④：因果関係.....	62
6. まとめ.....	62

第2章 日本語の「下(した)」と中国語の「下(xia)」との比較.....	63
1. はじめに.....	63
1.1 研究の背景.....	63
1.2 本章の目的.....	64
2. 「下(した)」と「下(xia)」の空間的な意味.....	64
2.1 「下(した)」の空間的な意味.....	65
2.1.1 「下(した)」：下方の用法.....	65
2.1.2 「下(した)」：下部の用法.....	66
2.1.3 「下(した)」：内部の用法.....	68
2.2 「下(xia)」の空間的な意味.....	69
2.2.1 「下(xia)」：下方の用法.....	70
2.2.2 「下(xia)」：下部の用法.....	70
2.2.3 「下(xia)」：基部の用法.....	71
2.3 空間的な意味の対照.....	74
2.3.1 「下(した)」と「下(xia)」との共通点.....	74
2.3.2 「下(した)」と「下(xia)」との相違点.....	74
3. 「下(した)」と「下(xia)」の非空間的な意味（語彙的な意味拡張）.....	78
3.1 DOWNに関わる方向性のメタファー.....	78
3.2 「下(した)」と「下(xia)」：数量が少ない.....	80
3.3 「下(した)」と「下(xia)」：劣る.....	81
3.4 「下(した)」と「下(xia)」：低い地位.....	83
3.5 「下(xia)」：順序.....	84
4. 「下(した)」と「下(xia)」の他の機能拡張.....	85
4.1 「下(した)」にならない「下(xia)」：予備行動.....	85
4.2 「下(xia)」にならない「下(した)」.....	88
4.2.1 「基部の用法」からの拡張：支配のシーンについて.....	88
4.2.2 「下(した)」が持たない用法：「影響」と「支配」.....	90
4.2.3 「下(した)」が持たない用法：「情動による行為」.....	93
5. まとめ.....	94
第3章 日本語の「前(まえ)」・「先(さき)」と中国語の「前(qian)」との比較.....	96
1. はじめに.....	96
1.1 問題の提起.....	96
1.2 本章の目的.....	96
2. 日本語の「前(まえ)」・「先(さき)」と中国語「前(qian)」の空間的な意味.....	96
2.1 研究の背景.....	97

2.1.1	空間的参照枠.....	97
2.1.2	方向付け方略.....	97
2.2	日本語の「前(まえ)」と中国語の「前(qian)」の空間的な意味.....	98
2.2.1	身体・生物の形状に依存する場合.....	98
2.2.2	物の機能に依存する場合.....	100
2.2.3	視点の位置に依存する場合.....	103
2.3	日本語の「先(さき)」の空間的な意味.....	106
2.3.1	「先(さき)」の「方向性」と「移動性」.....	106
2.3.2	スキーマの複合と変換.....	107
2.3.3	前方を示す「先(さき)」の意味構造.....	108
2.3.4	「先(さき)」で示された前方の特徴: 心的な移動.....	110
3.	空間的な意味の対照.....	111
3.1	「前(qian)」とは対応しない「前(まえ)」: 移動を伴う場合.....	111
3.2	「前(qian)」とは対応しない「前(まえ)」: 移動の傾向がある場合.....	112
3.3	「前(qian)」とは対応しない「先(さき)」: 位置を示す役割.....	114
4.	日本語の「前(まえ)」・「先(さき)」と中国語の「前(qian)」の時間的な意味.....	116
4.1	時間メタファー理論.....	116
4.1.1	Lakoff & Johson (1980, 1999)の時間メタファー理論 (2分類).....	116
4.1.2	Moore (2001, 2014) の時間メタファー理論 (3分類).....	118
4.1.3	主体性と時間メタファー.....	119
4.1.4	時間メタファーの新分類: A、Bシリーズの時間概念が共存できるタイプ...122	122
4.2	日本語の「前(まえ)」の時間的な意味.....	127
4.2.1	「前(まえ)」: 過去.....	127
4.2.2	「前(まえ)」: 未来.....	127
4.2.3	「前(まえ)」: EARLIER.....	128
4.3	日本語の「先(さき)」の時間的な意味.....	129
4.3.1	「先(さき)」: 過去.....	129
4.3.2	「先(さき)」: 未来.....	130
4.3.3	「先(さき)」: EARLIER.....	130
4.3.4	「先(さき)」: LATER.....	132
4.4	中国語の「前(qian)」の時間的な意味.....	132
4.4.1	「前(qian)」: 過去.....	132
4.4.2	「前(qian)」: 未来.....	133
4.4.3	「前(qian)」: EARLIER.....	134

5. 「前(まえ)」と「前(qian)」および「先(さき)」と「前(qian)」の時間的な意味の比較	135
5.1 「前(まえ)」と「前(qian)」との共通点	135
5.2 「前(まえ)」と「前(qian)」との時間的な意味の相違点	136
5.2.1 「前(まえ)」にならない「前(qian)」:「上(shang)」との対応	136
5.2.2 「前(qian)」にならない「前(まえ)」:「までに」との対応	138
5.3 「先(さき)」と「前(qian)」との時間的な意味の共通点	140
5.4 「先(さき)」と「前(qian)」との時間的な意味の相違点	142
5.4.1 「前(qian)」にならない「先(さき)」	142
5.4.2 「先(さき)」にならない「前(qian)」	146
6. まとめ	147
第4章 日本語の「後(あと)」と中国語の「後(hou)」との比較	149
1. はじめに	149
1.1 研究の背景	149
1.2 本章の目的	150
2. 日本語の「後(あと)」と中国語の「後(hou)」の空間的な意味	151
2.1 日本語の「後(あと)」の空間的な意味	151
2.1.1 「跡(あと)」の特徴:残存と移動	151
2.1.2 「後(あと)」:移動する主体の「後方」	152
2.1.3 「後(あと)」:余地・残留の用法	153
2.2 中国語の「後(hou)」の空間的な意味	154
2.2.1 「後(hou)」:「後方」の用法	154
2.2.2 「後(hou)」:「後部」の用法	155
2.3 「後(あと)」と「後(hou)」との空間的な意味の相違点	156
2.3.1 「後(hou)」にならない「後(あと)」:参照物が静止している場合と「後部」	156
2.3.2 「後(あと)」にならない「後(hou)」:「余地・残留」の用法	158
3. 日本語の「後(あと)」と中国語の「後(hou)」の時間的な意味	159
3.1 日本語の「後(あと)」の時間的な意味	159
3.1.1 「後(あと)」:Laterの用法(現在・発話時を参照する場合)	159
3.1.2 「後(あと)」:Laterの用法(現在・発話時を参照しない場合)	160
3.1.3 「後(あと)」:「残りの時間」の用法	161
3.2 中国語の「後(hou)」の時間的な意味	161
3.2.1 「後(hou)」:Laterの用法(現在・発話時の状況と関連する場合)	161
3.2.2 「後(hou)」:Laterの用法(現在・発話時を参照しない場合)	162

3.3 日本語の「後(あと)」と中国語の「後(hou)」の時間的な意味の相違点.....	162
3.3.1 「後(あと)」と「後(hou)」の相違点	162
3.3.2 「後(あと)」と「後(hou)」と対応できない理由.....	164
4. まとめ	165
終章	167
1. 本論文で明らかになったこと.....	167
1.1 「上(うえ)」と「上(shang)」について	167
1.2 「下(した)」と「下(xia)」について	171
1.3 「前(まえ)・先(さき)」と「前(qian)」について.....	174
1.4 「後(あと)」と「後(hou)」について	176
2. 今後の課題.....	177
参考文献	179
引用例文出典	189
謝辞	197

序章

1. 研究の背景

認知言語学は、言語という対象が、言語を使用する人間という主体から自律的 (autonomous) な存在ではなく、人間の認知的なプロセスによって動機づけられた (motivated) ものである、という基本的な立場にある。つまり、認知言語学の言語観によれば、言語がありのままの客観的な現実を語るものではなく、言語には人間という概念主体の主観的な捉え方が反映されており、すなわち、言語がわれわれ人間の体験を通じた世界を語るものである。1990年代に入ってから、認知言語学の言語観の影響は次第に拡大しつつあるが、それまでの言語学の研究 (例えば、構造主義言語学、生成文法) では、言語を自律的かつ客観主義的に取り扱う傾向があり、人間の捉え方という要素が言語研究の場から外されていた。

例えば、言語を自律的なシステムと見なす構造主義言語学は、言葉の意味をいくつかの要素から構成された構造体と捉えており、他の言葉との関係と比較しながら分析する。この意味を分析する方法は成分分析 (componential analysis) とも呼ばれている。例えば、「夫」、「妻」、「配偶者」という3つの表現は、次のように示すことができる。

- (1) 夫=[+人間][+既婚][+男性]
- 妻=[+人間][+既婚][-男性]
- 配偶者=[+人間][+既婚][±男性]

構造主義言語学の分析によれば、「夫」、「妻」、「配偶者」という言葉の意味が、[人間]、[既婚]、[男性]という3つの素性の設定を通して把握できる。「夫」と「妻」は、[男性]という素性の値の違いによって、区別できる。また、「配偶者」は、性別を示す[男性]という素性の値がマイナスでもよいし、プラスでもよい。したがって、「配偶者」という言葉は、「夫」及び「妻」より意味の領域が広いため、上位語である。これに対して、「夫」及び「妻」の意味領域は、「配偶者」と比べ狭いため、下位語となる。

このような構造主義言語学の分析方法は、一見したら言葉の意味を詳しく的確に記述できるように見えるが、実際には、上記に取り上げた親族名詞のほかに、ある言葉の意味素性について、マイナスであるかそれともプラスであるかを、明確に決めるのは極めて困難である。構造主義言語学の意味を分析するアプローチは、言語事実を正確に反映しているか、母語話者の語感と理解を妥当な形で反映しているか、また、文化による影響も反映しているか、といった疑問が投げかけられている。

これに対して、認知言語学は、言葉の意味を人間の認識、思考から独立させて分析する構造主義言語学とは異なり、言葉の意味を人間の主観的な意味づけの過程とのつながりで捉えていく。認知言語学の言語観に基づけば、人間の空間を把握する能力は、最も基本的な認

知プロセスの 1 つとして、言語の様態に大きな影響を与えている。つまり、認知言語学では、空間の捉え方は、単なる空間的な概念を把握するだけでなく、多くの言語表現の源となっていることが多く、人間が意思を疎通するために必要な共通理解の土台を提供しているということである。

具体的に言えば、言語における空間表現に関する研究は、勿論、認知言語学以前にもあるが、空間表現および空間表現の多義性に関する考察を、言語研究の中心的な位置の 1 つに位置づけているのが認知言語学である。認知言語学の基本的な考え方によれば、われわれ人間は、空間におけるモノと人間、またはモノとモノとの位置関係を、物理学や地理学のように中立的で客観主義的に捉えているのではなく、人間の視点から捉えている。そして、認知言語学は、このような人間主体と環境との相互作用を反映する主観的な捉え方に基づき、他の非物理的、非空間的な記述と分析にも用いられている。

例えば、*I awoke in my room.* と *I found the box in my bedroom.* という 2 つの文における *in* という英語の前置詞は、空間的な位置関係を表しているが、*I read it in the book.* と *John is in love.* という 2 つの文における *in* は、非空間的な概念を示している。以上のような空間的な概念を表す表現を用いて、非空間的な概念を言語化することは、一見したら当たり前のように思われているが、なぜ可能であるかという素朴な疑問について、従来の構造主義言語学のような言語理論に基づく説明では困難である。これに対して、認知言語学は、各空間表現の本来の空間的な意味を記述したうえで、メタファーやイメージ・スキーマをはじめとする理論の枠組みに基づき、非空間的な意味がどのように生み出されているかについて詳しく分析している。

特に近年の認知言語学は、異なる言語を使う人間は、それぞれに空間におけるモノと人間、モノとモノとの相互関係をいかに捉えているか、そして、どのように言語によって表現されているかについて盛んに研究されている。また、最近では、方向をはじめとする空間表現が、各言語では、どのように空間という具体的な概念領域から、他の抽象的な概念領域へと拡張していき、他の意味を持つようになったのか、という問題も認知言語学の研究における重要なポイントとなっている。

2. 研究の対象

研究の対象を述べるに先立って、まず本論文で取り扱う空間表現について述べる。空間表現とは、人間が外部の世界を把握し、そこから得られた経験を言語で示したものである。このような空間表現には、位置の変化の有無によって、静的な位置関係を示す表現と動的な位置関係を示す表現とがある。ただし、ここで注意しておきたいのは、人間の日常の言葉における空間表現が、物理学的または地理学的な述べ方のように、始終ありのままに空間関係を客観的に示すものではなく、多くの場合では、言語を使用する主体の主観的な捉え方が空間表現に反映されている、ということである。つまり、空間表現は、外部の世界に対する人間ならではの捉え方または認識の仕方を示すものである。

日本語でも、中国語でも、人間とモノ、モノとモノとの空間における位置関係を言語化するには、前方や後方、上方や下方といった方向または部位を示す空間表現が不可欠である。このような空間表現は、日本語の研究では「関係名詞 (relational nouns)」(Tagashira 1999: 249-267)、「空間名詞」(田中 1997: 7-8, 安 2014: 1-14)、また、中国語の研究では「方位詞」(王 2009: 90-95)とも呼ばれている。本論文では、これらの日中両言語における方向または部位を示す空間表現を、「空間辞」と呼ぶことにする。

英語をはじめとする他の言語における空間辞と同様に、前方や後方、上方や下方を示す空間辞は、日中両言語においても基礎的な表現である。また、一般的な言語現象として、日本語と中国語の空間辞も、空間という具体的な概念領域を起点にして、種々の抽象的な概念領域へと拡張している現象が見られる。本論文では、日本語における「上(うえ)」、「下(した)」、「前(まえ)」、「先(さき)」、「後(あと)」という5つの空間辞と、中国語における「上(shang)」、「下(xia)」、「前(qian)」、「後(hou)」という4つの空間辞を研究対象にして、それぞれの意味を考察し、比較する。これらの空間辞を研究対象に選定する理由については、以下の3点にまとめられる。

第一に、上記に取り上げた前後および上下の空間辞のほかに、左右、東南西北といった空間的な概念を示す言葉もあり、これらの表現も重要な空間辞であるが、なぜ本論文の研究対象に選定しないかの理由については、次のとおりである。確かに、「左(ひだり)」、「西(にし)」といった空間辞は、モノどうしの位置関係を言語化するには不可欠な表現であるが、空間的な領域を超えて、他の機能及び非空間的な意味への拡張が非常に限られているからである(金子 2004: 370-380)。本論文は、空間辞の空間的な用法のみならず、方向や部位を示す空間辞がどのような拡張プロセスを介して、他の機能、意味を持つようになったのかというところも1つの重要な点として分析する。

第二に、日本語の表現には、その出自から見れば、日本の本来の「大和言葉」、中国から入ってきた「漢語」、そして、中国を除く外国から取り入れた「外来語」という3種類の言葉がある、とされている。大和言葉の空間辞のみを日本語の分析対象に選定する理由について、詳しく言えば次のようになる。

言語においては、空間的な関係を言語化する表現は、変化がそれほど多くなく、比較的安定した性質を持っているとされている(Taylor & Evans 2003: 47)。日本は、古くから他の国の言語を取り入れながら、複雑な表現世界を作り上げてきた。空間についての言葉もその例外ではない。現代日本語では、上方や後方、前方や後方を示す表現は、上記に取り上げられている空間辞に限らず、勿論ほかにも複数ある。例えば、上方という空間的な概念を示す言葉として、少なくとも大和言葉の「上(うえ)」、漢語の「上(じょう)」、外来語の「アップ」といった表現が存在している。本論文では、「上(うえ)」、「下(した)」、「前(まえ)」、「先(さき)」、「後(あと)」という大和言葉の空間辞のみを、日本語の研究対象にしたが、これは、日本特有の言葉に対する考察を通して、方向という空間的な概念が本来日本語ではいかに言語化されていったのかが、より明らかに見られるからである。

第三に、日本語では、「上(うえ)」と「下(した)」のほかに、大和言葉の「上(かみ)」、「下(しも)」も上下を示す空間表現であり、なぜこの2つの空間辞を分析する対象にしないのかというと、主な理由は現代日本語では「上(かみ)」及び「下(しも)」の使用が非常に限られているからである。例えば、1億430万語のデータを収めている『現代日本語書き言葉均衡コーパス』では、「上(うえ)」と「下(した)」を含む用例の件数がそれぞれに44766件と19603件であるのに対して、「上(かみ)」と「下(しも)」の用例の件数はそれぞれにわずか125件と25件である。

「上(うえ)」、「下(した)」、「前(まえ)」、「先(さき)」、「後(あと)」という5つの大和言葉の空間辞が示している上下前後の空間的な概念は、中国語では「上(shang)」、「下(xia)」、「前(qian)」、「後(hou)」という4つの空間辞で言語化する場合が多い。これらの日中両言語における空間辞は、共通しているところがあるが、相違点も少なくない。本論文は、上下前後という空間的な概念を言語化する際に、日本語または中国語の一方のみでは観察しにくい特徴を、両言語の比較によって明らかにするという考察の方針を採っている。具体的な研究の目的を次の3節で述べることにする。

3. 研究の目的

本論文の目的は、認知言語学の枠組みに基づき、日本語と中国語における空間辞の意味的・機能的な共通点と相違点を記述することである。日中両言語の空間辞の使用については、従来の辞書においても記述されている。しかし、各意味項目のつながりをどのように説明するか、また、非空間的な意味・機能を含め、各空間辞の全体像がどのようになっているのか、といった問題をめぐって、更に掘り下げて詳しく考察する余地がある。

つまり、本論文の記述は、単なる意味項目の羅列ではなく、各項目間の関連性を重視する立場から、上記の日中両言語における空間辞の意味構造を浮き彫りにし、それぞれの異同を述べる、ということである。このような研究の目的を踏まえ、本論文では、次の3つの問題意識を持ちながら研究を進めていく。

第一に、空間におけるモノ同士の位置関係を言語化する際に、日本語と中国語における空間辞がどのような共通点と相違点を持っているか、第二に、空間辞は空間的な意味のみならず、非空間的な意味・機能もあり、日中両言語の空間辞の非空間的な意味にはどのような共通点と相違点が見られるか、第三に、空間辞の非空間的な意味の相違は、どのように本来の空間的な意味の相違を通して説明するか、という問題意識である。

4. 本論文で用いる用語について

本論文は、Lakoff(1987)、Langacker(1987, 1991)、Talmy(2000a)、Evans and Tyler(2003)を始めとする認知言語学の理論に基づき、日本語と中国語における空間辞を分析する。そして、空間的な用法であれ、非空間的な用法であれ、空間辞の意味と機能を説明する際には、トラジェクターとランドマーク、イメージ・スキーマ、メタファーとメトニミーといった用語を

使用する。これらの重要な認知言語学の概念を概観すると、以下の 4.1～4.3 節のようになる。

4.1 トラジェクター (trajector) とランドマーク (landmark)

認知言語学では、我々人間は客観的に外部の世界を客体として捉えているのではなく、認知主体の捉え方や解釈によって、状況が同様であっても、異なるものとして捉える。Langacker (1988, 2006) によれば、言葉の意味の構造は、背景的な要素の役割を果たしているベース (base) の概念領域と、焦点化された部分、すなわちプロファイル (profile) と呼ばれている部分との総合的な関係によって決められる。このような背景的な要素と焦点化された部分の違いを説明する有名な例は、次の図 0-1 の「ルビンの壺」と呼ばれている多義図形である。この図形では、黒い部分をベースにとすれば、白い部分がプロファイルされて、向き合っている 2 人の横顔が見られる。一方、白い部分をベースに見なす場合、黒い部分がプロファイルされて、1 つの壺が見える。



図 0-1 ルビンの壺

言語表現の例で言えば、例えば、英語には、**elbow** (肘) と **hand** (手、手首を含まない) という前肢における 2 つの異なる部位を示す表現があり、この 2 つの表現のいずれも **arm** (腕) というベースに基づいている。**elbow** は、**arm** における上腕と前腕とをつないでいる関節の部分をプロファイルしている。これに対して、**hand** は、**arm** における手のひらから指先までの部位をプロファイルしている。

プロファイルされている場合に、顕著さの違いも生じてくる。つまり、ある参加者とほかの参加者との関係を示す際に、両者ともプロファイルされていても、両者の間にプロファイルされている顕著さには違いがある。最も顕著にプロファイルされている参加者が、トラジェクターである。トラジェクターの顕著さより低く、あるいは、トラジェクターほど際立っていない参加者はランドマークである。

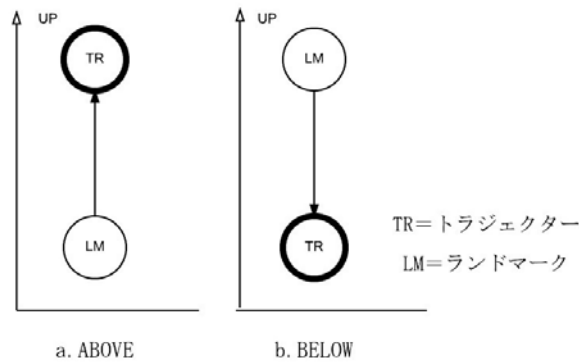


図 0-2 ランドマークとトラジェクター (Langacker 1998: 11, 一部修正)

例えば、①The knob is above the keyhole.と②The keyhole is below the knob. という2つの文によって示されている物体と物体との位置関係は、同様な客観的な事態であるが、どれがトラジェクターとして、最も顕著にプロファイルされているかという点で、相違している (Langacker 1998: 1-39)。①では、文中の *above* という前置詞から分かるように、カギの穴の位置が先に認知主体によって認識され、このカギの穴を手掛かりにして、さらにノブの位置が表されている。従って、①では、カギの穴が参照点の役割を担い、ランドマークであり、ノブのほうが比較的顕著な位置にあり、トラジェクターとして認識されている。一方、②の文では、ノブとカギの穴との関係が逆転され、ノブが参照点の役割を果たしている。②の前置詞 *below* によって示されているように、トラジェクターのカギの穴の位置は、ランドマークのノブに依拠している。

以上のように、トラジェクターとランドマークという概念は、空間的な位置関係に対する解釈のみならず、時間をはじめとする他の領域で事態と事態との関係を説明するうえでも、非常に有用かつ重要である。

4.2 イメージ・スキーマ (image schema)

イメージ (image) とは、我々人間の日々の具体的な身体経験に依拠して形成される心的表象の一種である (山梨 2012: 11-16)。このような心的表象は、研究者によって、視覚に限らず、聴覚、嗅覚、味覚といった経験から生じた感覚記憶あるいは感覚像と解釈される場合もある。認知言語学の言語観によれば、想像的なイメージ能力は、概念化及び言葉による言語化より先に存在する認知能力の1つである。イメージ能力は、人間の認知能力の中核を成しており、外部世界の理解と言語化を可能とする概念体系の根幹に関わるとされている。

イメージという心的表象は、スキーマ (schema) 化ができる。スキーマ化というのは、抽象化のことであり、個々のイメージの具象的な特質を捨象して、より抽象的かつ高次的な知識にするというプロセスである。例えば、各種の卵のイメージとしては、ニワトリの卵、ウズラの卵、ダチョウの卵などというように、種々の比較的具体的なイメージを考えることが

できる。このような各自のイメージには、種類、大きさ、重さなど様々な相違が存在している。各種の相違を捨象して、つまりスキーマ化を通して、包括的により抽象的なレベルで、卵という概念のイメージを捉えることもできるということである。

一般的には、スキーマ化された感覚記憶すなわち各種の類似的なイメージの抽象化の結果は、イメージ・スキーマ (image schema) となる。イメージ、イメージのスキーマ化、イメージ・スキーマという3つの概念の関係について、容器に関する認識を例にして言えば、次のようになる。

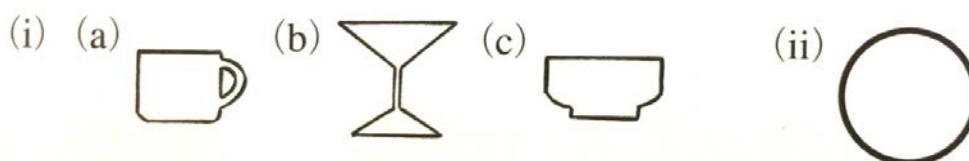


図 0-3 容器の各イメージと容器のイメージ・スキーマ (山梨 2012: 13)

図 0-3 における (i)の標識は、カップ、グラス、お椀という三種類の日常生活でよく使用されている容器のイメージの一部である。図 0-3 における (ii)の円形は、(ia)、(ib)、(ic)のような具象性が高い容器のイメージと異なり、「容器」というより抽象的な概念を示している。(i)のような容器ごとの特徴が捨象され、(ii)のような「容器」というより抽象度が高い認知構造が形成されたことは、容器のイメージのスキーマ化である。そして、形成された「容器」という概念に関する認識構造は、「容器」のイメージ・スキーマである。また、図 0-3 の(ii)では、「容器」のイメージ・スキーマを円形で示しているが、円形で描く必然性はない。三角形や四角形といった形の図形を、「容器」のイメージ・スキーマとして示すのも不可能なことではない。

上記では、イメージ・スキーマという用語を概観したが、注意を要するのは、イメージ・スキーマという用語が示す範囲については、認知言語学の中で各研究者によって異なっているという点である。Turner (1991)をはじめとする研究では、スキーマ化された感覚記憶は、抽象度の度合いを問わず、すべてイメージ・スキーマと見なされている。例えば、道の様子(a visual image of a road)、叫び声 (an auditory image of a scream)、松の香り (an olfactory image of the smell of pine) などの五感すべてによるイメージは、イメージ・スキーマと見なされている (Turner 1991: 55-59)。つまり、イメージ・スキーマを広義の立場から捉えるということである。

一方、Johnson (1987, 2005)、Clausner and Croft (1999, 2005)、鍋島 (2011)、山梨 (2000, 2012) などの多くの研究では、イメージ・スキーマという用語が狭義の立場で使用されている。狭義のイメージ・スキーマというのは、極度にスキーマ化された少数の認知的パターンのことである (鍋島 2011: 26-28)。このような狭義のイメージ・スキーマの典型的な例としては、<容器> (CONTAINER)、<上/下> (UP/DOWN)、<前/後> (FRONT/BACK)、<力>

(FORCE) などのイメージ・スキーマが考えられる。

本論文は、イメージ・スキーマという用語について、基本的にはこうした狭義の立場に立脚して、使用する。また、各種の狭義のイメージ・スキーマを、本節以降では一律に「スキーマ」と省略することにする。

上記では、イメージ・スキーマという用語について概説した。この節を終える前に、イメージ・スキーマと比喩との関係について、〈容器〉の例を通して簡単に説明することにする。狭義のイメージ・スキーマは、空間的な概念の理解に役立つのみならず、他の概念を理解する規範としても機能する。つまり、イメージ・スキーマは、人間が具象的な概念を生かして、比喩的な写像を介して、複雑で捉えにくい概念を言語化できる重要な手段である、ということである。

- (2) a. He is in the car. (物理的な空間)
- b. He is in the Navy. (社会的な空間)
- c. He is in a rage. (心理的な空間)

(伊藤 2013: 106)

〈容器〉のイメージ・スキーマは、内側、外側、境界といった設定に基づき、実際の物理的な空間のみならず、社会的な空間や心理的な空間もコップやバケツなどの容器のように捉えられるようになる。英語の具体例を挙げれば、(2)における 3 つの例文では、いずれも前置詞の in が用いられているが、それぞれが車の内部という物理的な空間、組織という社会的な空間、心理的な空間すなわち人間の感情を示している。

このようなイメージ・スキーマに依拠して、空間に関わる経験を生かして、他の概念を捉える現象は比喩的な拡張とも呼ばれているが、その詳細については次の 4.3 節で概観する。

4.3 メタファー (metaphor) とメトニミー (metonymy)

事物と事物との間における類似性に基づく比喩であるというのが、メタファーに対する伝統的な解釈である (山梨 2013: 133-135, 笠貫 2014: 55-60)。つまり、メタファーは、従来ある事物について話す際に、別のことを表す語を転用するという修辞法の一つであると見なされてきた。例えば、You are my sunshine. という文は、その真理条件から見れば「偽」であるにもかかわらず、you と sunshine が自分を明るくしてくれるという点で類似しているから、この類似性に依拠し、メタファーを通して、文が成立することになる。

上記のメタファーに対する伝統的な見解によれば、メタファーはあくまでも語レベルの問題であり、表現の面に限定されており、言葉の通常の意味から逸脱し、非日常的に言葉を使用する修辞法となる。しかし、認知言語学の視座から見たメタファーは、決して語レベルの一種のレトリックではなく、外部世界を理解するという概念レベルの問題である。

認知言語学的なメタファー論の特徴を示せば、主に次の 3 点にまとめられる。第一に、メ

メタファーの本質は、語と語の関係ではなく、ある概念領域に関する経験を基にして、別な概念領域のことを理解するという認知のプロセスである。例えば、「夏休みが来た」における「来る」や「長い年月を経た」における「長い」といった例に示されているように、人間は、時間的な概念を言語化する際に、多くの場合に空間的な表現を伴っている。第二に、メタファーは、飾りの表現のみならず、人間の言語の至るところに存在している。第三に、メタファーは、起点領域から目標領域への写像であり、2つの概念領域の間における身体的な経験に基づき、構造的に成立している。つまり、認知言語学は、メタファーの成立の原因を、類似性のみならず、身体性と構造的に帰しているということである。

伝統的なレトリックの研究におけるメトニミー (metonymy) は、言葉の置き換え手段として、また、メタファーと並んでもう一種の修辞法であるとされてきた。メトニミーは、類似性に依拠するメタファーとは異なり、事物と事物の間における近接性あるいは隣接性を基盤にしている。例えば、「春雨やものがたりゆく蓑と笠」という与謝蕪村の俳句における「蓑と笠」、及び「漱石を読んだ」における「漱石」は、いずれもメトニミーの実例である。前者の「蓑と笠」は、蓑と笠そのものを示すものではなく、蓑と笠を着用している人のことを意味している。このメトニミーでは、全体が部分によって示されている。また、後者の「漱石」は、文字通りの夏目漱石ではなく、夏目漱石の作品を意味している。このメトニミーの例では、製作者が作品によって示されている。

しかし、認知言語学から見たメトニミーは、従来のレトリック研究の視点から見たメトニミーと相違しており、その違いは主に次の2つの点にある。第一に、認知言語学も、隣接性と近接性というメトニミーの2つの特徴を重視している。また、認知言語学では、ある概念がそれと隣接した概念あるいは近接した概念によって置き換えられるという現象の背後に見られる人間の捉え方、すなわち参照点能力も重視している。第二に、メトニミーは、単なる言葉の修飾に関する現象にとどまらず、メタファーと同様に、人間の日常的な言語の隅々に浸透した現象であり、言葉の意味変化や多義語の意味拡張において重要な役割を果たしている。

5. 本論文の構成

序章では、本論文における研究の背景、研究の対象、研究の目的、認知言語学の重要な用語（ランドマークとトラジェクター、イメージ・スキーマ、メタファーとメトニミー）及び本論文の構成について説明する。本論文は序章と終章を含めて全部で6章からなる。以下に、第1章からの内容を概観する。

第1章では、日本語の「上(うえ)」と中国語の「上(shang)」という2つの空間辞の意味と機能を比較する。この章は、6つの部分から構成されている。まず第1節では問題の提起と本章の目的を述べる。第2節では、日本語の「上(うえ)」と中国語の「上(shang)」に関する先行研究を整理して、空間辞の語彙的な意味と機能的な意味との連続性を紹介する。第3節では、日本語の「上(うえ)」の各種類の空間的な意味を分析し、物と物との位置関係から事

柄と事柄との抽象的な関係へというメタファーによる拡張のプロセスを取り上げ、「上(うえ)」の機能を考察する。第4節では、中国語の「上(shang)」の空間的な意味を分析し、接触ありの高所から存在の場所へというメトニミーによる拡張のプロセスを取り上げ、「上(shang)」の「場所化」という機能を検討する。第5節では、「上(うえ)」と「上(shang)」との用法の相違点と共通点を明らかにする。最後に第6節で、本章のまとめをする。

第2章では、日本語の「下(した)」と中国語の「下(xia)」という2つの空間辞の意味と機能を比較する。第2章の内容は5つの部分からなる。まず、第1節では、研究背景として先行研究を概観し、「下(した)」と「下(xia)」との比較研究が現時点では極めて稀だという研究の状況を浮き彫りにしたうえで、本章の目的を述べる。第2節では、「下(した)」と「下(xia)」のそれぞれの空間的な意味を分析し、両者の共通点と相違点を説明する。第3節では、拡張のプロセスを通して、「下(した)」と「下(xia)」との共通の非空間的な意味をまとめる。第4節では、スキーマ変換という認知の現象を取り上げ、日本語における<裏/表>と<上/下>との緊密な関連性を論じ、「下(した)」の非空間的な機能の特徴を分析する。また、「メトニミーからのメタファー」という拡張の現象を取り上げ、「下(した)」と対応しない場合の「下(xia)」の用法を考察する。最後に第5節で、本章のまとめをする。

第3章では、日本語の「前(まえ)」・「先(さき)」と中国語の「前(qian)」という3つの空間辞の意味と機能を比較する。この章は大別して空間的な意味に対する分析と、拡張の視点から時間的な意味を考察するという2つの部分から構成されている。まず第1節では、本章全体に関わる問題提起と本章の目的を述べる。前半の部分については、第2節で空間的な参照枠、2種類の方向付け方略(対峙的方略と同方向的方略)という概念を紹介して、「前(まえ)」・「先(さき)」、「前(qian)」の空間的な意味を考察したうえで、第3節で「前(まえ)」と「前(qian)」、「先(さき)」と「前(qian)」との空間的な意味の相違点を明らかにする。後半の部分については、第4節で認知言語学の時間メタファー理論の変遷を概観し、空間から時間へという意味拡張のプロセスを踏まえて、主体性という概念も加味しながら、本論文の新たな分類方法を説明する。それを受けて、第5節で「前(まえ)」と「前(qian)」、「先(さき)」と「前(qian)」との時間的な意味を比較する。最後に第6節で、本章のまとめをする。

第4章では、日本語の「後(あと)」と中国語の「後(hou)」を分析対象にして、両者を意味と機能の拡張の観点から比較する。この章は主に3つの部分からなる。第1節では研究の背景を説明し、「後(あと)」のみを対象とした、あるいは、「後(hou)」のみを対象とした先行研究はあるが、比較の視点により「後(あと)」と「後(hou)」との共通点と相違点を分析する研究は、現時点ではまだないという現状を述べたうえで、本章の目的を述べる。第2節では、「跡(あと)」という日本語の表現に対する考察を含め、「後(あと)」と「後(hou)」との空間的な意味を記述したうえで、両者の違いを分析する。第3節では、第3章で提唱された時間メタファーに対する本論文の新たな分類に基づき、「後(あと)」と「後(hou)」の時間的な意味の相違点を明らかにする。最後に第4節で、本章のまとめを行う。

終章では、この論文で論じられた日中両言語の空間辞の意味と機能拡張の異同について

明らかになったことを章ごとにまとめる。また、今後の課題を展望する。

最後に、第1章から第4章までで取り上げる例文の種類および出典の示し方を説明する。本論文の例文は、先行研究における用例及び筆者による作例を除き、辞書・新聞からの用例、コーパスからの用例、グーグルブックス検索を利用してデジタル書籍から得た用例という3種類の例文に分けられる。この3種類の例文の出典については、例えば次のように示すことにする。

(3) これは上からの指示だ。

(『大辞林』)

(4) a. 上世紀的遺物。

b. 前世紀の遺物。

(『中日・日中辞典』)

(5) 事件の背景を解明するうえで、有力な手掛かりになるとみて調べている。

(『朝日新聞』 1997.5.29)

(6) 在宋朝之前，城市的居民區和商業區分離。

(宋の前は、市民が住む場所と市場とはそれぞれ分けられていた。)

(《人民日報》1994.2.10、日本語訳は筆者による)

(7) a. 把白襯衣的領子翻在軍裝外面，顯得很有精神。

b. 白いブラウスのえりを軍服の上に出して、とてもかっこうがよかった。

<CJBC> (張海迪著 《輪椅上的夢》)

(8) 世間は、AさんがBさんより社会的な地位が上だとか、年収が高いとか、そういうことが大事で動いている。

(茂木健一郎著 『脳が変わる生き方』)

(9) 李誠銘坐在筆記本電腦前，神情嚴峻地看著計算機屏幕。

(李誠銘がノートパソコンの前に座り、厳しい表情でモニターを見つめている)

(張軼驍著 《保送生活》、日本語訳は筆者による)

(3)と(4)に示したように、辞書から例文を引用する際には、引用された辞書のタイトルを記載する。(5)と(6)のように、新聞による用例の場合では、新聞名のほかに発行の日付も明記する。また、(7)に示したとおり、(7a)のようなコーパスからの例文については、コーパスのタイトルを略称で表記したうえで、作者名及び作品名に関する情報を提示する。なお、(7b)については、コーパスに収録されている日本語の対訳である。本論文では、主に『現代日本語書き言葉均衡コーパス (The Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese)』と『中日対訳コーパス・第1版 (Chinese-Japanese Bilingual Corpus)』と『北京大学中国語研究中心語料庫 (Center for Chinese Linguistic PKU's Corpus)』という3つのコーパスを使用する。そして、この3つのコーパスのタイトルをそれぞれ<BCCWJ>、<CJBC>、<CCL>と略称

して、表記することにする。さらに、グーグルブックス検索を介して、収集した公刊物からの引用は(8)と(9)の例に示している。本論文では、日本語原作の作品を二重のカギ括弧で、中国語原作の作品を二重の角括弧で示すこととする。

以上、各引用例文の出典の詳細については、本論文末尾の「引用例文出典」に記載し、章ごとに掲載ページ順に並べることとする。

第1章 日本語の「上(うえ)」と中国語の「上(shang)」との比較

1. はじめに

1.1 問題の提起

日本語でも、中国語でも、物体がある参照点より高いところに位置するという空間的な位置関係を言語化するには、「上」という漢字が使用される。日本語の「上(うえ)」と中国語の「上(shang)」との意味及び用法は、多くの場合では対応している(例えば、「上(うえ)へ行くエスカレーター」と「往上(shang)走的電梯」、「平均より上(うえ)だ」と「在平均水平之上(shang)」)。このため、両者は日中両言語における同形同義語のように扱われているとされている。しかし、実際の用例を分析すると、「上(うえ)」と「上(shang)」の用法は、空間的な意味でも非空間的な意味でも、互いに対応する事例が少なくないにもかかわらず、対応しない事例もある。

1.2 本章の目的

本章の目的は、日本語と中国語の比較研究の立場から、「上(うえ)」と「上(shang)」という2つの空間辞を対象に、それぞれの空間的な意味と非空間的な意味を調べ、両者の共通点を把握したうえで、相違点を対照することである。本章の構成は、大きく4つの部分に分けられる。第2節では、「上(うえ)」と「上(shang)」に関する先行研究をそれぞれ概観する。また、語彙的な意味と他の機能の間に緊密な関係があり、多義語の全体像を探るには、語彙と機能の関連性を重視しなければならないという本論文の多義語観について述べる。次に、日本語の「上(うえ)」と中国語「上(shang)」の各語彙的な意味及び各種の機能を、第3節と第4節でそれぞれ分析する。第5節では、「上(うえ)」と「上(shang)」の相違点を対照する。

本章では、「上(うえ)」と「上(shang)」について、(i) 語源から見られる相違、(ii) 空間的な意味、(iii) 語彙的な意味拡張、(iv) 機能拡張、という4つの視点から考察する。「上(うえ)」の機能をメタファーによる拡張と捉え、「上(shang)」の機能をメトニミーによる拡張で説明するのが、本論の特徴的な点である。

2. 先行研究と研究の背景

2.1 日本語の「上(うえ)」に対する先行研究

日本語の空間辞「上(うえ)」は、対象物の上方や上部といったようなモノ同士の位置関係を表すことができる一方で、社会的地位などの意味も含まれている。さらに、「上(うえ)」は、「が」や「で」などの格助詞との複合を通して、複合接続語になり、文脈に合わせて文と文の関係を指示する機能もある。

「上(うえ)」の多義性をめぐって、すでに先行研究では様々な角度から論じられている。これらの研究を、理論の枠組によって大別すると、2種類に分けるとことができる。1つは、認知言語学の理論に依拠し、「上(うえ)」の多義構造を説明するアプローチである。もう1つ

は、品詞分類を重視し、「上(うえ)」の用法を、「実質名詞」や「形式名詞」や「複合接続助詞」にそれぞれに分けて考察する、という日本語学の分析方法である。この二種類の先行研究の内容を概観すると、次のようになる。

まず、認知言語学の視座から、「上(うえ)」の意味を説明する代表的な研究として、森田 (1980)、荒井 (2011)、長谷部 (2013)が挙げられる。森田 (1980)は、モノとコトの違いを踏まえ、モノどうしの位置関係を示す「上(うえ)」の用法について、空間の認知主体の視点の変化に注意し、「方向」、「位置」、「段階」と分けて説明した。森田 (1980)は、「上(うえ)」の用法を、包括的に整理したが、モノどうしの位置関係を示す「上(うえ)」と、コトの間の関係を示す「上(うえ)」の関わりについて、「『上』がある事物がすでにあるのに、それに重ねて(後略)」と提示したものの、詳しい分析をしていない。

- (1) a. 上からはばらばら焼夷弾が降ってきました。 (方向)
- b. こたつの上にふとんを掛ける。 (位置)
- c. 上の二段がまだあいている。 (段階)

(森田 1980: 46,48,49)

長谷部 (2013)では、森田 (1980)の「上(うえ)」に対する分析を踏まえ、近年の認知言語学の発展にも留意し、従来の研究に比べ、「上(うえ)」の多義構造を整理している。長谷部 (2013)は、空間的な意味を<表面>、<物理的高所>、<概念的高所>、<語句の先頭>という4つのカテゴリーに分け、また、非空間的な意味を<領域・基盤>、<添加用法>、<継続用法>、<因果用法>という4つのカテゴリーに分けている。しかし、空間的な意味と非空間的な意味との拡張関係について、長谷部 (2013)ではある程度の言及がある一方で、詳しく分析されていない。

次に、日本語学のアプローチに基づいて、「上(うえ)」の意味を説明する代表的な研究として、田中 (1999)、馬場 (2005)、方 (2005, 2013)が挙げられる。田中 (1999)では、「上(うえ)」の非空間用法のみに焦点を当て、(2)のように「うえで」の用法を<前後関係>と<用途>と、「うえに」の用法を<添加>と、「うえは」の用法を<既定条件>と名付けて分析している。

- (2) a. <前後関係>の意味

7人の上陸の意図や背後関係などを調べたうえで、最終的に強制送還する方針だ。

(『朝日新聞』 2004.3.26)

- b. <用途>の意味

事件の背景を解明するうえで、有力な手掛かりになるとみて調べている。

(『朝日新聞』 1997.5.29)

c. <添加>の意味

もともと、めいっばい手の込んだ事件に仕立て上げられているうえに、私にそれほどハッキリとして殺人の動機がないからでもある。

<BCCWJ> (藤井淑禎著 『清張ミステリーと昭和三十年代』)

d. <既定条件>の意味

しかし、すでにカトリックに帰依するときめたうえは、すこしぐらいの不便は我慢しなくてはならない。

<BCCWJ> (石川淳著 『焼跡のイエス・処女懐胎』)

田中 (1999)を踏まえて、馬場 (2005)は、「うえで」、「うえに」、「うえは」という3つの用法における「うえ」の機能を改めて考察し、この3つの用法で示されたコトとコトとの間に見られる「相互に不可欠な前件と後件の累加」という共通点を取り上げている。

方 (2005)では、「上(うえ)」の意味を、品詞分類を重視する立場から、<形式名詞>、<後置詞>、<接続助詞>という3つの種類に分けて考察を行った。そして、方 (2013)は、通時的な視点を加えて、明治時代の日本語と現代日本語における「上(うえ)」の非空間的な用法を分析した。「したうえで」という用法は、明治時代でも、現代でも前提条件を表す表現として使用できる。一方、方 (2013: 219)では、(3)のような、いわゆる「評価の側面」を示す「するうえで」という用法は、明治時代の日本語では確認できず、現代になってから新しく発展してきた用法であると主張している。

- (3) たとえば、交通手段や情報メディアのグローバル化に関しては、彼らも自分たちの活動を行う上で大いに利用している。

(方 2013: 217)

坂詰 (2007: 149-163)は、日本語史における和語名詞が形式名詞の用法から接続助詞的な用法への変換という普遍的な現象を取り上げ、「うえは」を通時的に分析した。坂詰 (2007)によれば、「うえは」の用法に関しては、次の2点を指摘している。「うえは」が接続助詞として使用された時期については、「うえに」といった接続助詞の用法が奈良時代以後の文献に見られるが、鎌倉時代以降という比較的遅い時期から、「うえは」が接続助詞の用法を持つようになった、ということである。「うえは」は、接続助詞として用いられる際に、命令形や推量といった発話者の主観的な態度を示す表現と共起するという特徴である。

以上みたように、日本語学のアプローチからの研究は、「上(うえ)」の非空間的な用法を、統語的な面と通時的な研究の面を重視する立場から、綿密に考察している。しかし、これらの日本語学の枠組みを踏まえた先行研究では、各意味項目の関連性をあまり考慮しないという傾向がある。「上(うえ)」の非空間的な用法と、「上(うえ)」の空間的な用法との関連性について、まだ掘り下げる余地があるところが2点ある。第一に、例えば「相互に不可欠な

前件と後件の累加」という馬場 (2005)によって提起された共通点は、本来の「上(うえ)」との繋がりをどのように積極的に説明していくかという問題である。第二に、「上(うえ)」の接続助詞の用法を通時的に考察し、記述したが、これらの用法の派生について、空間表現の意味拡張というより大きな視野でいかに説明するか、という問題点である。「上(うえ)」の意味を認知言語学のアプローチにより検証する先行研究について、「上(うえ)」の空間的な意味及びメタファーの認知プロセスによって、社会的な地位や品質といった用法に関しても詳しく論じられている。ただし、「上(うえ)」の多義構造を構築する際に、「うえで」、「うえに」、「うえは」といった非空間的な意味をどのように説明するかという点に関しては、さらなる研究が必要である。

2.2 中国語の「上(shang)」に対する先行研究

「上(shang)」という語は基本語彙として、上代中国語の時代から使用されてきた。中国語が変貌するとともに、「上(shang)」という空間辞の語彙的な意味と機能的な意味も変化しつつあり、多義的な表現に発達してきた。本節では、「上(shang)」の意味に関する先行研究を概観する。「上(shang)」の多義性に関して、数少なくない研究が報告されているが、それらの先行研究は、研究の目的によって大体2種類に分けることができる。1つは、通時的な視点により、各時代の中国語における「上(shang)」の用法を記述し、「上(shang)」の意味の発達過程を究明する研究である。もう1つは、中国語教育の分野での研究である。「上(shang)」という空間辞は基本語彙として高い頻度で用いられている一方で、中国語学習者にとって「上(shang)」の理解と習得が容易ではなく、中国語の学習者によりよく空間辞を習得させるために、「上(shang)」の各用法について調べるものである。

通時的な視点から「上(shang)」を分析する研究は多数あるが、特に代表的なものとして、葛 (2004)、林 (2006)、馮 (2010, 2011)が挙げられる。葛 (2004)では、上古の前秦時代から現代までの中国語における「上(shang)」の各意味を考察し、「上(shang)」の各用法に関して、次の(4)に示されているとおりに、3種類に分けている。葛 (2004: 5-8)は、「上(shang)」の空間的な意味について、対象物が参照物より高いところに位置している場合に、対象物と参照物との接触のない「上₁」と、接触がある「上₂」に区別している。また、「上₃」は、対象物が参照物に付着している場面を示す空間辞であり、「表面」と「付着」という2つの要素が含まれている。そして、通時的な考察を通して、葛 (2004: 8)は、「上(shang)」の空間的な用法は「高い」の意味合いが減少しつつあるが、「参照物が対象物を支持するか、あるいは付着されているか」の意味合いが上昇すると主張している。

- (4) a. 上₁: 飛機從大橋上飛過。
b. 上₂: 城牆上站着一個人。
c. 上₃: 黑板上貼了一幅畫。

(葛 2004: 8)

林 (2006)は、魏晉南北時代から唐朝までの文献を中心に、コーパス統計の研究方法を通して、「上(shang)」の「虚化」という意味拡張の過程を考察している。「上(shang)」の「虚化」の各現象が発生した時代について、林 (2006)と葛 (2004)では、それぞれに異なる仮説を立てているが、「上(shang)」の意味拡張の順序は基本的には両研究で一致している。また、林 (2006)では、「上面 (shang mian)」と「上邊 (shang bian)」と「上頭 (shang tou)」という3つの複合空間辞の起源についても調べている。

以上見たように、「虚化」という概念を導入し、「上(shang)」を通時的に捉えることによって、「上(shang)」の意味の全体像が見えるようになる。ただし、「虚化」という概念は、中国語学の用語であり、近年では言語学の「文法化」という用語によって解釈される場合が増えている。「上(shang)」の虚化が、文法化の視点からどのように認知言語学の理論で解釈するかについて、さらに探究する余地がある。

中国語教育のための「上(shang)」の考察について、代表的な研究として、緜 (2004)、李 (2014)、傅 (2014) が挙げられる。緜(2004: 429)は、「上(shang)」のイメージには「参照物が面のように扱われている」ということが含意されていると主張している。また、中国語学習者にとって、「上(shang)」の習得が困難である原因は、参照物が抽象的なものであっても、面のように認識するのが難しいからであると指摘している。

- (5) a.上_A : 放在桌子上。
- b.上_B : 寫在黑板上。
- c.上_C : 吊在天花板上。

(緜 2004: 426-427)

具体的に言えば、緜 (2004) によれば、(5)における「上_A」は、対象物が参照面より高いところに位置し、あるいは参照面の上方の領域にあるという空間的な関係を示している。

「上_B」は、対象物が重力の影響を克服し、垂直の参照面に付着している場面を示している。また、対象物が参照面の下方の部分にくっ付いているように、参照面より低いところにあるにもかかわらず、中国語では「上(shang)」で表現する。これが「上_C」の用法である。緜 (2004) は中国語学習者にとって、「上_C」の習得が容易ではないとされているとも指摘している。

李 (2014)と傅 (2014)は、中国語学習者の作文を収録しているコーパス(『HSK 動態作文語料庫』)を駆使し、「上(shang)」の誤用について調査したうえで、誤用の種類を分類している。傅 (2014: 27-30)は、日本語を母語とする中国語学習者のよくある「上(shang)」の誤用例をめぐって、「抜け落ち」、「冗長」、「入れ替え」の3種類に分けている。「抜け落ち」とは、(6)のように、「上(shang)」の使用が必須の場面で、使用していないという誤用である。また、(7)で示しているように、「世界上」という用法自体が現代中国語では正しいが、「世界」が「全」に修飾された場合では、「上(shang)」と共起しにくくなり、「冗長」の誤用例に当たる。

「入れ替え」は、(8)のように本来「上(shang)」で言語化する空間関係が、間違っって他の空間辞が使用されてしまった誤用例である。

- (6) a. ?把自己的東西放在行李架。
b. 把自己的東西放在行李架上。
(自分の荷物を網棚に置くには…)

(傳 2014: 27 日本語訳は筆者による)

- (7) a. ?環境汚染在全世界上很多地方都存在。
b. 環境汚染在全世界很多地方都存在。
(環境汚染はどこでも発生している。)

(傳 2014: 28 日本語訳は筆者による)

- (8) a. ?在博物館的大草坪裡，總是會看到許多團隊在排隊。
b. 在博物館的大草坪上，總是會看到許多團隊在排隊
(博物館の芝に、多くの団体が行列で並んでいるのをよく見かける。)

(傳 2014: 30 日本語訳は筆者による)

以上見てきたように、中国語教育の視点からの研究では、「上(shang)」の誤用例が各意味項目ごとに詳細に分析され、指導の改善策も提案されているが、誤用になった原因についてさらに掘り下げる余地がある。日本語を母語とする中国語学習者は、なぜ上記のように、「上(shang)」を誤用しているのかといった現象を説明するには、中国語から原因を探るだけでなく、日本語と中国語を比較する研究が必要である。

2.3 空間辞の多義性：語彙的な意味と機能的な意味との連続性

言葉の多義性に関する研究は、メタファー認知を重視する認知言語学の分野においては、極めて重要な位置を示している。しかし、従来の認知言語学では、ある語の多義性を分析する際に、その語の語彙的な意味と文法的な機能を分けて、そして語彙的な意味に対する考察のみ重視する傾向がある (大谷 2012: 108)。つまり、語彙の多義性の語彙的な意味項目に一边倒し、多義語研究の範囲を語彙的な領域に限定して、語彙の機能への関心が浅いという現象が見られる。近年では、大谷 (2012) をはじめとする研究では、多義語の意味と機能の連続性」を中心とする視点から、語の語彙的な意味と非語彙的な機能をまとめて、1つの有機的な連続体として考察し始めている。

非語彙的な機能は、文のレベルでは、格やアスペクトを言語化するという文法的な役割と、文と文をつなげる標識を示すという談話的な役割の二種類に分けられる (大谷 2012: 112)。このあと本章では、「上(うえ)」と「上(shang)」の多義構造に対する対照研究の広がりやをさらに拡大し、両者の語彙的な意味と他の機能とを全面的に考察する。

3. 日本語の「上(うえ)」の意味

本節では、「上(うえ)」の辞書における解釈および語源について概観して、認知言語学の視点から「上(うえ)」の空間的な意味を分析する。

3.1 辞書における解釈

言葉の多義性を考察する際に、辞書における記述を元の言語データにして分析することが多いが、国広 (1997, 2006)が指摘しているとおり、日常の辞書では、多義語の各意味項目の相互関係を明示していない場合が少なくない。すなわち、意味どうしのつながりを明らかにするには、記述の面だけでなく、説明の面にも力点を置かなければならないということである。

『日本国語大辞典』では、上代日本語の時代から現代日本語の時代までの「上(うえ)」の意味について、次のような語義を取り上げている。下記の記述からわかるように、「上(うえ)」の名詞としての空間的な意味に関わる記述は、(9)に示されるように、主に〔1〕と〔2〕と〔3〕という3つの下位項目がある。「上(うえ)」は、〔1〕と〔2〕の用法で使用される事例がよくあるが、〔3〕という「付近」を表す用法は現代日本語ではそれほど多くない。そして、『日本国語大辞典』では、「空間的に高い位置」と「表面」という2つの意味項目の通時的な関係に関して、【語誌】の部分で補足的に記述されている。

(9) 【1】名詞

- 〔1〕空間的に高い位置。また、階級・地位・身分の高い状態や程度・数量などの多い状態。
- 〔2〕物事の表面。また、表面に現われる状態や表面をおおうもの。
- 〔3〕あるものの付近。辺り。ほとり。
- 〔4〕(形式名詞として用いられる)
 - ① (前の語句に示された) ある人や物事に関する消息、事情、経緯など。また、物事をある面から特に取りあげて問題とする場合にいう。
 - ② 他の物事に更に加わる状態を示す
 - (イ) (多く、「上に」の形で) さらに加わるさま。そのほか。…に加えて。
 - (ロ) 目上の肉親、親族の呼び名に付けて用いる。
 - (ハ) …した結果を踏まえて。その事柄を条件として。
 - (ニ) (「上は」の形で) ある物事が起こってしまった以上。…からには。

【2】接尾

目上の人の呼び名につけて敬意を表わす。

【語誌】

「うえ」の対義語としては、古代から現代に至るまで「した」が安定して、その位置をしめている。しかし、中古から中世にかけて「うえ」は、【1】〔2〕

のように表面の意を持っていたため、「うら」とも対義関係を持ち、「うらうえ」という複合語も作られた。しかし、この対義関係は、中世頃から〔2〕の意味が衰退するのに伴って、次第に「うら—おもて」という対義関係にとってかわられた。なお、「うら—うえ」の対義関係が消滅した後も、「うらうえ」は残存したが、その語義は、元来の「裏と表」から「左右」へと変わり、さらに、近世になると「あべこべ」の意で用いられるようになった。

(『日本国語大辞典』)

上記に取り上げられた【語誌】の記述によると、「上(うえ)」の空間的な意味は、中古から中世までの日本語においては、「した」のみならず、「うら」とも対応していたが、中世以後から、「うら」との対応関係が衰えてしまった。さらに、『岩波古語辞典』では、「上(うえ)」の表面義と他の各意義との関係に関して、「最も古くは、表面の意」と記述されている。

(10) 磐余の池の水下ふ魚も紆陪(ウへ)に出て嘆く

現代訳：磐余(いわれ)の池の水下経(みなしたふ)魚も、水面に出て賛嘆する。

(『新編日本古典文学全集』)

(11) 水のうへに遊びつつ魚(いを)を食ふ

現代訳：(白い鳥が)水の表面で自由に泳ぎ回りながら魚を食べる。

(『学研全訳古語辞典』)

しかし、「上(うえ)」の物の表面という意味項目は、現代日本語での用例がそれほど多くなく、「うらうえ」といった極少数の表現にしか残存していない。例えば、(11)の「水のうへ」という古い日本語における表現は、現代語に翻訳する際に、「水の上」という訳がまったくできないとは言えないが、「水の表面」という訳の方がより自然であるため本来の「うへ」の意味に近いと言える。

次節でまた詳細に論じていくことになるが、「上(うえ)」と「うら」との対義関係が、確かに語彙的な面から見れば、現代日本語では衰退しているようにみえる。以下では、「上(うえ)」の各意味項目を改めて認知言語学の立場から説明する。

3.2 「上(うえ)」の空間的な意味

3.2.1 「上(うえ)」：物体の外側

3.1節における分析から分かるように、「上(うえ)」の表面の用法は、上代や古代の日本語に集中しているとされ、現代日本語では用例を見つけるのが容易ではないが、いくつか類似的な例も見られる。

例えば、次の(12a)における「上(うえ)」は、「神像」と「錦の服」が、それぞれランドマークとトラジェクターに対応し、「神像」の表面にさらに「錦の服」で覆うという位置関係を

示している。(12b)も同様に、「表着」にさらに「唐衣」を被せる場面が現れている。「表着の上」という表現は、ランドマークである「表着」の表面を意味している。(12)のような「上(うえ)」の用法を「物体の外側」と名付ける。

- (12) a. 名を呼びかけてお祭りし、錦の衣服は土の神像の上に着せました。
 <BCCWJ> (清水茂訳『水滸伝』)
- b. 唐衣:貴婦人の正装で、表着の上に着る丈の短い衣服。
 <BCCWJ> (稲賀敬二, 森野繁夫ほか編著『高等学校 古典・古文編』)

(12)における「上(うえ)」は、「物の表面」という語源で説明できないわけではないが、(12)と(11)の用法に関して次の2つの相違点が見られる。第一に、(11)の「物の表面」を示す「上(うえ)」の場合では、ランドマークとトラジェクターがいずれも水であり、同質なものである。すなわち、トラジェクターは、ランドマークの一部であり、最も上方にある部分ということである。一方、(12)の場合では、ランドマークとトラジェクターとは、同じものではなく、ランドマークの外側を意味している。

第二に、(11)では、魚と水との位置関係は重力軸(国広・木村によれば、鉛直軸 [vertical axis] とも呼ばれている)という上方と下方が対立している空間軸に従っているのに対して、(12)では、錦の衣服と神像、および表着と唐衣との関係は、重力軸で捉えにくく、表の方と裏の方との対立による付着という関係にある。すなわち、ランドマークが「表面」とは異なり、トラジェクターを囲んでいる包みのようなものである。ただし、これは内側のランドマークが外側のトラジェクターによって全部包まれて、あるいは覆われているとは限らない。この「物体の外側」におけるランドマークとトラジェクターとの関係を示せば、次の図 1-1 となる。

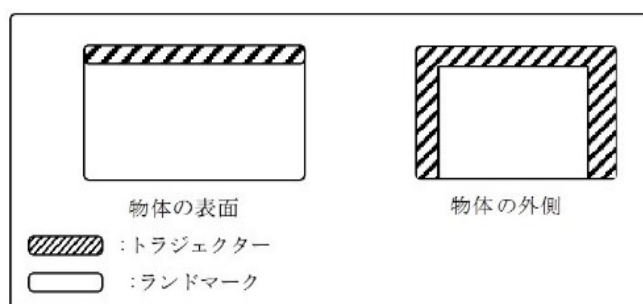


図 1-1 物体の外側

また、「上(うえ)」の物体の外側という意味項目は、他の空間的な意味に比べると衰退しつつあるが、「上(うわ)」という語素によって受け継ぎされている。「上貼り」や「上塗り」や「上包み」や「上敷き」といった表現からわかるように、「上(うわ)」は、モノを覆うという

意味を含意している語素との複合が特徴的である。

さらに、興味深いことに、この「上(うえ)」の物体の外側という用法は、単にトラジェクターがランドマークの外側に位置しているという空間的な位置関係を示すものではなく、多くの場合では、衣類の積み重なりのようにトラジェクターとランドマークとの間に重なり合いがあるという意味特徴も含まれている。

3.2.2 「上(うえ)」: 位置的高所

『日本国語大辞典』をはじめ、多くの辞書では、最初に取り上げられた「上(うえ)」の意味は「空間的に高い位置」という項目である。この意味項目を、認知言語学の用語を用いれば、それは、対象物のトラジェクターが参照物のランドマークより高い位置にあるという意味である。このような「上(うえ)」の用法を本研究では「位置的高所」と呼ぶことにする。ランドマークとトラジェクターと直接的に接している場合もあるが、両者が離れている場合もある。この2つの位置的な関係は、次の図 1-2 における a の部分と b の部分でそれぞれに示されている。

(13) 冷蔵庫の上に置いてあるポットから、お湯を注ぐ。

<BCCWJ> (滝本竜彦著 『NHK によろこそ!』)

(14) フキは寝床の中で両手を頭の上に伸ばし、全身に力を入れて思いきり伸びをした。

<BCCWJ> (有吉佐和子著 『和宮様御留』)

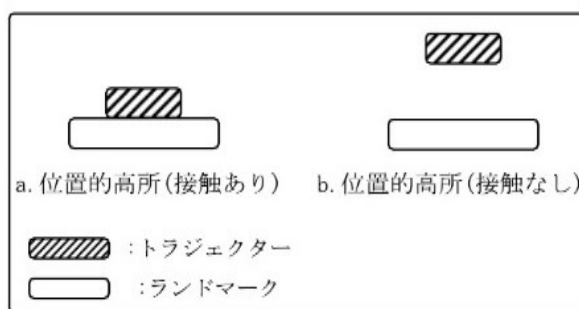


図 1-2 位置的高所

(13)においては、文に現れるトラジェクターの「ポット」はランドマークの「冷蔵庫」より、高いところに位置している。(14)も同様に、トラジェクターの「両手」はランドマークの「頭」より、高い位置に伸ばしている。両例文の異なる点は、(13)では、「冷蔵庫」と「ポット」が接触しているのに対して、「頭」と伸ばしている「両手」とが接していないという点である。垂直方向から見れば、ランドマークの位置がトラジェクターの位置より高い場合には、接触の有無をとわず、「上(うえ)」で言語化できる。

3.3 「上(うえ)」の非空間的な用法：語彙的な意味拡張

Lakoff and Johson (2003)では、人間は、空間における実体と実体との上下関係を捉える身体的な経験に基づき、数量、感情、社会的等級など、多くの非空間的な概念で、抽象的な概念を捉えることができる、と指摘している。例えば、英語では、量が多いことが上であり、高い地位が上であり、良いことが上であるといった上方という空間的な概念に由来するメタファーを取り上げている。

つまり、認知メタファー理論によれば、UP (前置詞の up のみならず、rise、climb、peak、top といった上方に関わる概念の集合) という<上/下>のスキーマに属する空間的な概念は、メタファー的に他の領域に投射され、様々な抽象的な領域の概念と構造的に対応するようになっていくということである。

上記の英語における上方を示す言葉と同様に、「上(うえ)」は、その空間的な意味に基づき、他の語彙的な意味を持っている。「上(うえ)」の非空間的で語彙的な意味は、主に「優れる」、「より高い社会地位」、「数量が多い」、「表向き」という4つの種類がある。

3.3.1 「上(うえ)」：優れる

日本語の「上(うえ)」は、より良いというプラスの価値が付与されて、「優れる」という語彙的な意味を持っている。Taylor and Evans (2003)では、トラジェクターがランドマークより高い位置にあることの結果の1つとして、トラジェクターが優れる状況にあるということを指摘している。山梨 (2012: 63)によれば、垂直軸における上方という空間的な概念は、日本語でも「製品の質が上がっている」における「上がる」を含む用例から分かるように、上方が優れるという価値が付与されている。ここで指摘したいのは、「上(うえ)」も、top や「上がる」のように、物の品質、機能または人の能力、人柄といった抽象的な概念が比較される際には、参照される物、事よりも優れ、より望ましいという意味を有する、ということである。

- (15) a. 太郎の技術は次郎より上だ。
- b. 高等数学に対する 15ヶ国の学生の能力評価で、11ヶ国が米国より能力が上であった。
- c. 海外メーカーより、国内メーカーの方が品質が上だと思う。

(『白水社 中国語辞典』)

例えば、(15)における「上(うえ)」は、(15a)の「技術」、(15b)の「能力」、(15c)の「品質」という抽象的な概念と共起している。(15)の「上(うえ)」は、トラジェクターがランドマークより物理的に低い所に位置しているということではなく、トラジェクターの技術、数学の能力、品物の品質が、ランドマークの方よりも優れているということを示している。また、

「この上ない」という慣用語の場合では、「上(うえ)」は「ない」という打ち消しを示す形容詞と連用して、より優れる状態はない、ほかに勝るものはない、という意味を表している。

3.3.2 「上(うえ)」: 高い地位

Lakoff & Johnson (2003: 14-21)によれば、上方や下方といった空間的な概念は、メタファーの意味拡張のプロセスを通して、人間社会の関係という抽象的な概念を言語化することができる。(16)の例から分かるように、日本語の「上(うえ)」は、他の多くの言語と同様に、高い地位の意味もある。

(16) a. これは上からの指示だ。

(『大辞林』)

b. 「上の考えをおもんばかり」検察の行き過ぎた態度は、国内業者を苦境に陥れ、海外業者だけを喜ばせている。

(『東亜日報・社説』)

c. 世間は、AさんがBさんより社会的な地位が上だとか、年収が高いとか、そういうことが大事で動いている。

(茂木健一郎著『脳が変わる生き方』)

経験基盤主義という認知言語学の言語観に基づき、上方という空間的な概念が高い地位という価値判断と結びつけられる理由は、上記のような個人、集団全体の社会的な経験にも深くかかわっているからである。例えば、地球には重力があり、普通では上に位置しているものが下の方にあるものに圧力を与えている。また、古代からは、権力をめぐって、格闘といった競争で争う際には、上にいる強者が下にある弱者を抑え、圧力を加える。このような個人、集団全体の基本的な経験に基づき、「上(うえ)」のような上方を表す空間的な概念は、高い地位という抽象的な意味項目として言語化できるようになった。

また、「上(うえ)」は昔の日本語では、天皇や将軍といった身分の高い人の代名詞として使用されていた。「上(うえ)」は親族の名詞に付いて、目上の人間に対する敬意を表し、「母上」や「父上」といった表現が現代日本語でも用いられている。このような接尾語として、敬意を示す「上(うえ)」の用法も、「高い地位」の一種として扱う方が妥当である。

3.3.3 「上(うえ)」: 数量が多い

「上(うえ)」は、数量が多いことを表す機能を持っている。つまり、参照物の数値や量が相対的に大きいという意味である。数量が相対的に多いもの、または、数値が高いもののほうが、メタファーを通して、上方のところに位置しているように捉えるということである。

- (17) a. 偏差値が上だ下だというのは非常に小さなレベルでの話であって…
(中谷巖著 『若きサムライたちへ』)
- b. 俺らが三点上だ。
(川坂俊一著 『コロンビア協力隊物語』)
- c. 学校の職員の中で、私が一番年が上です。
(木下雄生著 『考えることを忘れたスイカ』)

(17)に取り上げた事例で言えば、「偏差値が上だ」や「三点上」や「一番年が上です」といった用法から分かるように、トラジェクターがランドマークの上方にあるという空間的な意味に基づき、メタファーを介して、「上(うえ)」は、量の多いほう、または値の高いほうという非空間的な意味を表している。

3.3.4 「上(うえ)」: 表向き

「上(うえ)」の「優れる」、「高い地位」、「数量が多い」という3つの非空間的な意味の動機付けは、主に「位置的高所」という空間的な意味に由来するものであると考えられる。「物体の外側」という空間的な意味も「上(うえ)」の多義構造に影響を与えている。本章では「表向き」という非空間的な動機付けが「物体の外側」から由来したものであると分析する。

- (18) a. 立春は暦の上での春です。
(アジア学生文化協会留学生日本語コース編集 『完全マスター2級』)
- b. 戦時中、八年の義務教育制を法律の紙の上では定めたが、実際はできなかったのである。
(吉田茂著 『激動の百年史』)
- c. 理屈の上ではそうかもしれませんが、しかし実際となりますと、果たしてどうでしょうかねえ。
(松下幸之助著 『私の夢・日本の夢 21世紀の日本』)

例えば、「立春は暦の上での春です。」という文は、カレンダーのみを見れば、すでに立春の段階に入ったように見えるが、可能性として冬よりも寒く、実際には全然春らしくないという意味を表している。この文における「上」という表現の動機付けは高い位置を示すものではなく、英語に対応する表現で言えば、ostensibly あるいは superficially といった「表向き」の意味を表している。

「上(うえ)」のほかに、音韻および形態的に「上(うえ)」と緊密な関係にある「上(うわ)」という表現もこの「表向き」の意味を言語化できる。例えば、「上滑りな知識」という表現は、物事の外側、容易に見られる表面だけを見て、物事の内実と真相をあまり考慮しないという意味を示している。また、「うわべだけの友情」という例から分かるように、「上辺(う

わべ)」という表現も、上記の(18)の例文における「上(うえ)」と同様に、内実がなく、見せかけだけであるということと言語化している。

具体的に言えば、「立春は暦の上での春です。」という文では、「立春」ということを容器のように捉えている。寒さが頂点になるとか、氷が溶け始めるとかなどの気温に関わることが「立春」の最も核心的なものであり、「立春」の実体が「立春」という抽象的な容器の中に含まれている。

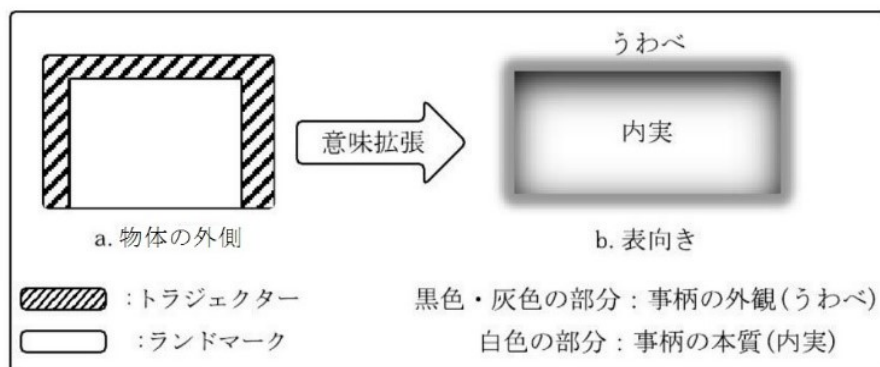


図 1-3 表向き

図 1-3 では、「物体の外側」と「表向き」という「上(うえ)」の2つの意味項目の関係を示すものである。徐 (2009: 7) では、「深浅」という2つの空間的な概念とそれらの抽象的な意味について、「本質度は物事が本質に達するかどうかを測るもので、本質に達することは〈深〉であり、表面的な領域に留まっていて、本質に達していないことは〈浅〉である。」という指摘がある。この解釈は、「上(うえ)」の「表向き」という意味解釈にも適用できる。

(18a)で言えば、2月4日という日付けは、「立春」という概念に内包された特徴の一部であるが、「立春」の本質を表徴するプロトタイプ的な特徴ではなく、すなわち、「立春」の本質に至っていない属性に過ぎない。つまり、「立春」という抽象的な実体のうわべにあるのは、日付けといった本質度が低く、非プロトタイプ的な特徴である。

3.4 「上(うえ)」の非空間的な用法：事柄の関係を示す機能拡張

3.4.1 物から事柄へ：メタファーによる拡張

「上(うえ)」は、「に」、「で」、「は」といった格助詞あるいは取り立て助詞と組み合わせることによって、空間的な意味のみならず、非空間的な意味を有するようになり、句と句、あるいは、文と文の関係を言語化できる。先行研究では、「うえに」、「うえで」、「うえは」における「上(うえ)」の機能と形態は、形式名詞の用法や接続助詞の用法として説明されている(田中 1999; 方 2008; 馬場 2005, 2006; 長谷部 2014)。形式名詞や接続助詞といった用語を用いて、「うえに」、「うえで」、「うえは」の用法を記述するには有効であるものの、「上(うえ)」の他の意味項目との関連性を説明するには必ずしも適切とは限らない。

馬場 (2005) は、「うえで」、「うえに」、「うえは」について「相互に不可欠な前件と後件

の累加」という共通の特徴を指摘している。前件と後件との緊密な関係、すなわち不可欠性が、一体どのように生じたのかについて、より詳しく分析する余地が残されている。本節では、先行研究の知見を踏まえるが、そのまま踏襲することはしないで、「上(うえ)」の本来の空間的な用法を重視する立場から、メタファーによる拡張という認知言語学の視点を加味して、「上(うえ)」の機能を分析する。

メタファーが言葉の意味と機能のあらゆる面に浸透していることは、すでに西村(2002)、菅井(2003)をはじめとする多くの研究で例証されている。つまり、言葉の機能拡張や文法化といった現象の背後に、「コト(出来事)をモノ(物体)として隠喩的に拡張する」(菅井2003:168)というメタファー的な写像が働いている。すなわち、物と物との空間的な関係から、出来事と出来事との抽象的な関係へとというメタファーによる拡張である。この際に、出来事を示す文法的な節や句は、物理的な実体のように捉えられる。

例えば、(19)は、日本語の二格を示す標識が従属節マーカーに拡張する際に、〈目的〉という新たな意味を示せるようになった事例である。(19a)における「本屋」が実際の空間的な概念であり、また、「本屋に行った」というのも空間における実際の移動である。これに対して、(19b)の「買いに行った」という表現における「に」は、「買い」という実体ではなく、動作の目的を示すものである。「本屋に行った」から「買いに行った」にかけて見られる「に」の機能の拡張という現象の背後には、空間的な概念出来事が抽象的な出来事へと拡張するというメタファー的な写像が認められる(菅井2003:168)。

- (19) a. 太郎は本屋に行った。
 b. 太郎は本を買いに行った。

(菅井 2003:169)

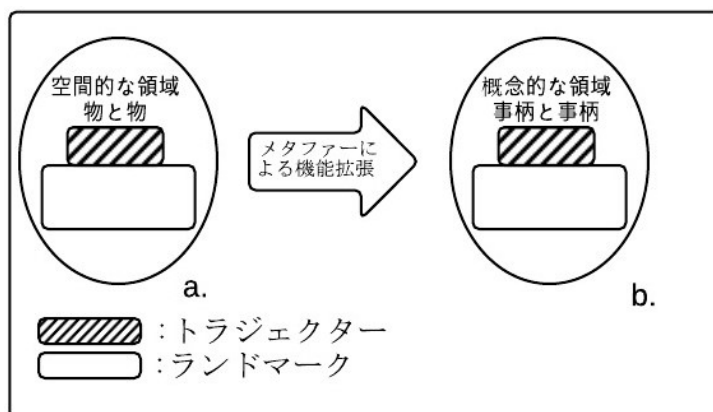


図 1-4 メタファーによる機能拡張

ここで指摘したいのは、「うえで」、「うえに」、「うえは」における「上(うえ)」の機能は、メタファーによる拡張の一種だということである。そして、結論的には、馬場(2005)によって取り上げられた「相互に不可欠な前件と後件の累加」という特徴は、「上(うえ)」の「接

触ありの高所」という本来の空間的な用法に基づいているということである。つまり、「うえで」、「うえに」、「うえは」という3つの表現は、それぞれの機能が異なっているものの、共通の空間的な動機付けを有するということである。

馬場 (2005)の「相互に不可欠な前件と後件の累加」という指摘と同様に、田中 (1999)では、「うえで」、「うえに」、「うえは」という3つの表現の共通の性質をめぐって、「必然的に積み重ねられる2つの事態の関係を表す」というように解釈している。ここで特に注意しておきたいのは、田中 (1999)の解釈における「積み重ね」という分析は、認知言語学の枠組みで説明すれば、まさに「上(うえ)」の「接触ありの高所」という空間的な用法と対応している、ということである。

図1-4におけるaの部分は、「上(うえ)」の本来の空間的な意味、すなわちトラジェクターがランドマークより高い所にあるという「接触ありの高所」の意味を示している。また、図1-4のbの部分は、前件と後件の間に「必然的に積み重ねられる」という抽象的な関係を示している。aの用法とbの用法は、異なる領域であるため、2つの楕円でそれぞれ囲まれている。つまり、図1-4に示されているように、「上(うえ)」と「で」・「に」・「は」によってつなげられた前件と後件という2つの事柄は、モノから関係へというメタファー的な写象を介して、それぞれランドマークとトラジェクターとが対応している。

3.4.2 「うえで」の機能

「うえで」の用法は、意味の観点から見れば、主に「前提・継起」と「領域・側面」という2つの用法がある。「うえで」と前から接している成分の種類から見れば、主に名詞と述語という2つの種類に分けることが出来る。3.4.2.1節では「うえで」の「前提・継起」の用法を、3.4.2.2節では、「うえで」の「領域・側面」の用法を見ることにする。

3.4.2.1 「うえで」①: 前提・継起

「うえで」の「前提・継起」という用法とは、ある出来事が終結した後に、完結したその出来事を踏まえて、次の出来事や動作を引き続いて行うということである。ここで強調しなければならないのは、この2つの出来事のあいだには、単なる時間軸における継起関係ではなく、前件の出来事があってはじめて、(20)のように後件の出来事の成立条件が整うという関係にある点である。

例えば、お風呂に入って寝るという2つの出来事が時間軸に沿って発生したことで、継起的な関係はあるものの、(21a)は不自然となる。一方、(21b)で示されているように、入浴という前件の行為は、薬を塗るという行為の条件あるいは前提であるため、「うえで」が使用できる。

- (20) a. 万々承知のうえで、登美子を捨てて康子と結婚しようとした。
 <CJBC> (石川達三著 『青春の蹉跎』)
- b. そういうリスクを全部承知したうえで、覚悟を固めなければいけないのだ。
 <BCCWJ> (三田誠広著 『団塊老人』)
- (21) a. ?入浴したうえで寝る。
 b. この塗り薬は、入浴したうえで、塗ってください。

「うえで」と接続する前件のタイプについては、すでに多くの先行研究で、動作を表す名詞である場合と、述語動詞のタ型との連用という二種類があると分析されている。このような「うえで」という表現の空間的な意味が次第に薄くなり、実物どうしの間の具象的な関係に基づき、出来事と出来事との抽象的な関係を示すようになる過程を、メタファーによる拡張という認知言語学の観点からも説明できると考えている。

ここで指摘したいのは、「うえで」①の「前提・継起」の用法は、「上(うえ)」の「接触ありの高所」という空間の意味と緊密な関係にあるということである。すなわち、空間における物体と物体の上下関係の捉え方が、出来事と出来事との関係にも使用されているということである。「太郎は机の上で寝ている」という空間的なシーンでは、トラジェクターの太郎は、ランドマークの机より高いところに位置している。このような位置関係が成立できるのは、ランドマークの机が支持力を与えて太郎を支えているからである。

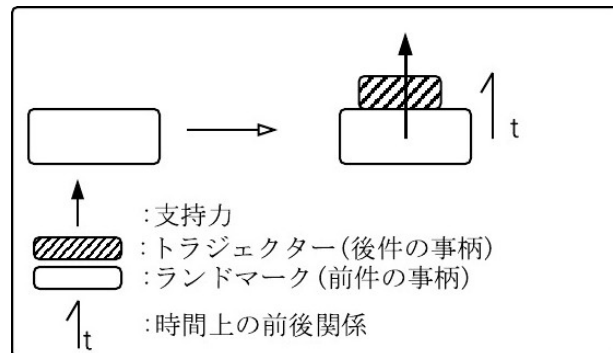


図 1-5 「前提・継起」

上記の空間的なシーンと類似して、前件と後件の出来事は、いわゆる前件にあつての後見という継起的な関係で、後件の出来事が前件の出来事の基礎でもあり、前件の成立の条件を支えている根幹である。前件と後件の出来事は、下の位置にある物体と上の位置にある物体とがそれぞれ対応しているということである。

「うえで」の「前提・継起」の意味項目は、図 1-5 で示されている。図 1-5 では、白い長方形が前件の事柄を意味し、斜線の長方形が後件の事柄を意味している。下方の長方形は、その上方にある長方形に支持力を与え、支持力の方向が「↑」で表記されている。「↑_t」と

いう標識は、時間上の前後関係を表し、前件の事柄が後件の事柄の時間より先に完成するという意味である。

3.4.2.2 「うえで」②：領域・側面

「うえで」②の「領域・側面」という用法は、話し手がある出来事の価値について、主観的な評価をするという用法である。田中 (1999: 155-156)は、この用法について、「関連する方面、場合『において』を表す言い方」であり、「ある局面に対する対処的、適合的な用法もあり、しばしば『する意味でも』の言い方とも置き換えられる」と指摘している。本節では、「うえで」②という非空間的な表現の動機付けについて調べ、空間的な意味とのつながりを分析する。

- (22) a. 木材の安定的な供給、地域振興などの国民経済及び国民生活のうえで重要な使命を担っている。

<BCCWJ> (日本林業協会編集 『林業白書』)

- b. 今日という日は二人の歴史のうえで本当に特別の日だった。

<BCCWJ> (田辺垂木訳 『ブレッシング』)

- c. このバリアフリーとは、「共生」の街づくりを進めるうえで大切なキーワードであり、私たちは最も重要なテーマとして、このバリアフリーに取り組んでいきたいと考えています。

<CJBC> (乙武洋匡著 『五体不満足』)

(22)で取り上げられた例から分かるように、「うえで」②が用いられる際に、「うえで」と前接するのは名詞あるいは動詞である。特に注意しなければならないのは、前接する成分が動詞の場合では、タ形で接続する「うえで」①と違って、「うえで」②の場合では、動詞が一般的にはル形だということである。また、「うえで」②は、通常「重要だ」や「役に立つ」や「不可欠である」といった態度を表す表現と後接して共起している。前件の事柄が後件の事柄の必要条件、あるいは実現のための重要な状況、条件であるという読みがある。「うえで」②に含まれ、前件が後件の重要な状況や条件であるというニュアンスは、「うえで」①の「前提」と類似している。

ただし、「うえで」①と比べ、「うえで」②は、時間上の前後関係がないという点で大きく相違している。つまり、「うえで」②の場合では、従属節の動作と主節の述語の間には、「うえで」①のような継起関係が見られない。例えば、「バリアフリーは共生の街づくりを進めるうえで重要である」という文では、従属の「街づくりを進める」という動作と、主文の「重要だ」という述語との関係は、時間上の前後関係はなく、評価あるいは描写的な記述であるというつながりを示している。

3.4.3 「うえに」の用法：添加

「うえに」の「添加」とは、ある事情について、前件の状況または事柄に加えて、さらに他の状況または事柄が添加されるという用法であり、英語の *in addition to* という表現に相似する。例えば、人間の不幸という事情についての「人間が何より苦しいのは貧乏の上に病気になることだ。」という文では、前件の「貧乏」というネガティブな事柄があり、さらに「病気になる」というネガティブな事柄が加えられる。「うえに」は、(23a)のようなネガティブな「添加」のみならず、(23b)といった例からわかるように、ポジティブな「添加」を示すこともできる。そして、前件の事柄と後件の事柄が必ずしも異なることとは限らない。(23c)と(23d)では、前件の事柄と後件の事柄が同じであり、それぞれ「罪の添加」と「努力の添加」という関係を示しており、この際に、「うえに」は同じ事柄の添加、すなわち、反復の意味である。

- (23) a. 貧乏のうえに病気が重なり、死を間近にひかえていた
(夫馬進著 『善会善堂史研究』)
- b. 花子は美人のうえに、成績も優秀だ。
(安藤栄里子著 『耳から覚える日本語能力試験 2 級文法トレーニング』)
- c. 罪のうえに罪を増す。
(中村健之介著 『宣教師ニコライと明治日本』)
- d. 努力のうえに努力を積み重ねる。
(PHP 研究所著 『松下幸之助日々のことば』)

「うえに」の用法は、図 1-6 で示されている。抽象的な概念や事柄の添加を表す「うえに」という表現の動機づけについては、「前提・継起」の用法として用いられている「うえに」の動機付けと同様に、「接触ありの高所」という空間的な用法に基づき、メタファー的に拡張されて生じたものであると解釈することができる。ランドマークである実物とその上部に位置しているトラジェクターの実物は、メタファーを通して、それぞれ後件の事柄と前件の事柄とが対応している。つまり、事柄と事柄の添加、累加という抽象的な関係は、実際の空間における物体の上下関係に対する認識と体験に依拠しているということである。

- (24) a. 今日の天気は曇っているうえに風が強いので、とても寒く感じられる。
(安藤栄里子著 『耳から覚える日本語能力試験 2 級文法トレーニング』)
- b. 家が貧しいうえに、父親が病気にかかってしまった。
(金谷俊一郎著 『日本人の美德を育てた「修身」の教科書』)
- c. 成績優秀なうえ、スポーツもよくできる。
(安藤栄里子著 『耳から覚える日本語能力試験 2 級文法トレーニング』)

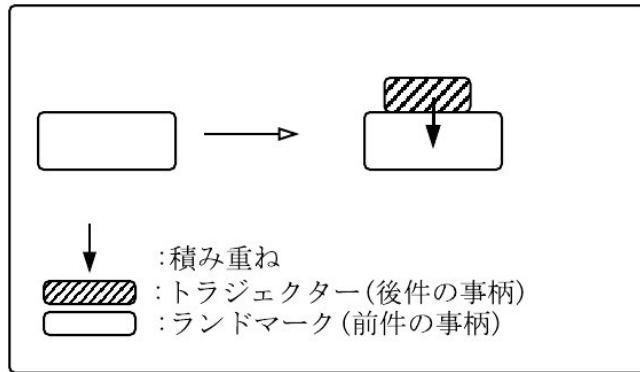


図 1-6 「添加」

ただし、前件が名詞か動詞のタ型かに限っている「うえで」と異なり、名詞、動詞のタ型のほかに、(24)に取り上げられた例から分かるように、動詞のル型、形容詞、形容動詞も「うえに」の前件の成分になれる。つまり、「うえで」①における前件の事柄が後件の事柄の発生的前提であり、前件があつての後件という関係が成り立つ。一方、「うえに」は時間上の前後関係があるが、「うえに」における前件と後件の関係は、前件あつての後件という因果関係のニュアンスが弱く、事柄どうしの累加関係を示している。例えば、「貧しいうえに病気にかかった」における前件と後件を「病気にかかったうえに貧しい」のように交換しても、自然な文である。

そして、「うえに」の添加という用法は、出来事と出来事との一般的な累加を意味するのではなく、同じカテゴリーの出来事の積み重ねという制限もある。例えば、「美人の上に成績も優秀だ」は自然な文である一方、「美人の上に成績が悪い」が容認しがたい文である。つまり、「うえに」に含意している「添加」は、ポジティブな概念とポジティブな概念との積み重ね、あるいは、ネガティブな概念とネガティブな概念との積み重ねの場合のみ使用できる、という制限である。「うえに」は、ランドマークとトラジェクターとの間に、概念上または感情上の類似性が要求されているということである。

3.4.4 「うえは」の用法：因果関係

「うえは」という表現は、前件の事柄が成立して、後件の事柄の発生が当然であるという因果関係を表している。ただし、この「因果関係」は、あくまでも常識に基づいて、発話者の主観的な態度であり、いわゆる通常の当然性という相関関係である。すなわち、前件の事柄の発生が必然的なものであり、この必然性のもとで、後件の事柄を遂行させるべきだという発話者の態度を反映している。通常 of 当然性を表明するため、「うえは」という表現における後件は、義務や強い断定といった成分が導かれる。この節では、文法化の2つの方向性を取り上げつつ、「うえで」及び「うえに」と比較しながら、「うえは」の用法を説明する。

- (25) a. 契約を結ぶうえは、条件を慎重に検討すべきである。
b. 政治家を目指すうえは、国民のために働くという強い信念が必要だ。
(安藤栄里子著 『耳から覚える日本語能力試験 2 級文法トレーニング』)

「うえは」という表現の動機付けについて、「前提・継起」を表す「うえで」①と同様に、前件と後件の関係が「最初の動作が下、次がその上」という空間による経験（本研究で「接触ありの高所」という「上(うえ)」の空間的な経験）に基づき捉えられている。ただし、前件が後件の前提という点に関して、「うえは」と「うえで」①の動機付けは共通しているが、前件を踏まえて後件の発生が当然であるという点で違っている。

Heine et al. (1991)では、本来、時間上の前後関係を示す表現が、より抽象的な因果関係を示すものになるという現象について、文法化の一種であると分析したうえで、人間の言語では非常に一般的で共通のことであると指摘している。そして、Heine et al. (1991:48)は、文法化という現象の背後におけるメタファー的な認知プロセスがあると論じたうえで、文法化の方向性に関しては、それが空間から時間へ、時間からさらに質 (quality) へのような方向性があると分析している。ここで指摘しておきたいのは、このような方向性は「うえは」にも見られるということである。「うえで」①の前件が動詞である場合に、タ型動詞に限られているのに対して、「うえは」の前件は動詞のタ型のみならず、ル型動詞も可能であると。つまり、「うえで」①における前件と後件の関係は、時間軸における前後関係があるのとは対照的に、「うえは」における前件と後件の関係は、時間軸における前後関係を超えて、より一般的な因果関係にあるということである。

もう1つの言語の文法化の方向性は、主観化である。主観化について、具体的に言えば、Traugott (1995) はある命題に対して発話者の態度が次第に文に取り入れられていく変化であると考えている。また、Langacker (2000) は、主観化は客体的な意味が減少しつつある一方、主体的な意味が上昇するという過程であると論じている。抽象化と主観化という2つの現象は「うえは」の文法化にも見られる。

「うえは」は、「添加」を示す「うえに」と比べ、意味上の相違のみならず、文の発話者の主体的な態度にも相違している。具体的に言えば、「うえは」の場合、上記に取りあげられた「契約を結ぶうえは、条件を慎重に検討すべきである。」という文に反映されているとおりに、文末には「すべきである」という発話者の主観的な態度を顕在化する表現が共起している。しかし、「うえに」の場合では、「すべきだ」や「必要だ」のような主体的な態度を示す文末のムードと共起するのは、容易なことではない。「うえは」と「うえに」とのこの違いについて、本論文では、「うえは」の文法化の度合いが「うえに」よりも進んでいると捉えている。この主張の1つの裏付けとして次の通時的な研究がある。

坂詰 (2007: 149-163)は、古代日本語における「うえ(へ)に」、「うえ(へ)は」の使用について、分析している。坂詰によれば、奈良時代以降から添加を示す「うえ(へ)に」の用例が広く見れるのに対して、「うえ(へ)は」の用法が鎌倉時代以降生じたものであると述べている。

そして、当時の「うえ(へ)は」は、打消し語が伴われたり、命令形や推量の助動詞が伴われたりしている。

4. 中国語の「上(shang)」の意味

本節では、「上(shang)」の辞書における解釈と漢字の由来を概観して、認知言語学の視点から「上(shang)」の空間的な意味を分析する。

4.1 語源・辞書における解釈

甲骨文字と金文では、「上(shang)」という漢字の形は、2つの線から構成され、「二」のような形となっている。「上(shang)」の「二」の字形が次第に変化し、「二」から「上」の形に変わりつつあった。そして、図1-7から分かるように、「上(shang)」の字形の整理がさらに進み、篆書体の「上」と現在の字形との類似度が明らかに上がった。

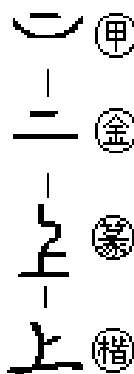


図 1-7 漢字「上」の変遷 (『漢字源』)

『説文解字』では、「上」の文字的な意味について、「二，高也，此古文上，指事也。」と解説している。この解説に関して、清の段玉裁の『説文解字注』では、「天地為形，天在上，地在下。」とさらに分析している。ここで注意しなければならないのは、「上」の本来の意義が「高」、「遠」という上古の人達の体験（例えば、天と地の分離）と直結しているということである。「上」の字源について認知言語学のアプローチから分析すると、ランドマークとトラジェクターがそれぞれ違う実体であり、また、トラジェクターがランドマークより高いところに位置しているだけでなく、両者の間には一定の境界線があり離れているという2つの特徴が読み取れる。第5節でまた論じるが、「上」の字源から読み取られるこの2つの特徴は、現代中国語の「上(shang)」と現代日本語の「上(うえ)」との相違点を対照する際に、重要な留意点である。

トラジェクター、ランドマークが異なる実体であるということは、両者がそれぞれの境界線が明晰であるということである。例えば、『詩経』における「明明上天，照臨下土」とい

う文があり、直訳すれば「明明たる上天が下土を照臨している」という意味となる。この文における「上天」は比喩的な読みとして天にいる神という意味も含まれているが、「上天」と「下土」とは、同質なモノではなく、それぞれの境界線が明らかなということが考えられる。

また、本論文では、「上」の「高也」という意味について、トラジェクターがランドマークより高いところに位置し、両者の間に一定の距離があると取り上げていて、これは英語の ABOVE という前置詞の意味と似ている。ただし、ABOVE の空間的なシーンは、トラジェクターがランドマークの真上に位置しているというイメージがあるのに対して、ランドマークの真上だけでなく、トラジェクターがその真上の周辺でも「上」で捉えられる。例えば、『詩経』の「河上乎翱翔」、そして、『論語』の「子在川上曰、逝者如斯夫、不舍昼夜」といった表現における「上」は、河川の表面から真上のところを示すモノではなく、河川の位置より地勢が高い周辺、そばの意味である。

4.2 「上(shang)」の空間的な意味：位置的な高所

「上(shang)」は、トラジェクターがランドマークの正面より高いところに位置するという「位置的な高所」という意味を持っている。そして両者が一定の距離を置き、接触しているかどうかによって、「接触なしの高所」と「接触ありの高所」という2つの用法がある。図1-8は、「接触なしの高所」という用法を示すものである。



図 1-8 「接触なしの高所」

- (26) a. 他們頭頂上那些掛著翠綠葉子的綿長柳條兒，在微風中搖擺，小蜜蜂在嗡嗡飛舞。
 b. ふたりの頭の上に緑したたる枝垂れ柳がそよ風に揺れ、蜜蜂がブンブン飛びかっていた。
- <CJBC> (浩然著《金光大道》)
- (27) a. 一隻孤零零的烏鴉,正在頭上飛。
 b. はぐれ鳥が一羽、ポツンと頭の上を飛んでいく。

<CJBC> (王蒙著《活動變人形》)

「上(shang)」の「接触なしの高所」の空間的な用法は、「高也」という「上」の漢字の本来の意味に近いが、現代中国語では見つけるのが容易ではない。この用法のランドマークは、(26)、(27)に示されている「頭頂」と「頭」のように、いずれも一定の高さと長さを有する立体的な実物である。現代中国語では、「接触なしの高所」の空間的なシーンを言語化する際に、「上(shang)」のかわりに、「上方」や「上空」といった言葉で表現するのがより一般的である。

- (28) a. 話還沒有說完，屋頂上又起了一個大響聲。眾人知道又是一個炮彈飛過去了。
b. 話が終らぬうちにまた屋根の上を異様な音を立てて砲弾が飛んで行った。

<CJBC> (巴金著《家》)

- (29) a. 老鷹在電線上盤旋，秋蟬在鳴叫，在國有公路旁的蓮花池里歡快地游着。
b. 電線の上を鳶が舞い、油蟬の声が聞え、国道のわきの蓮池にカイツブリが忙しそうに泳いでいた。

<CJBC> (井伏鱒二著『黒い雨』)

- (30) a. 这只鷓鴣，时常到孤峰庵的僧房和大殿上盤旋。
b. この鳶は、ときどき、孤峯庵の庫裡と本堂の上を旋回していた。

<CJBC> (水上勉著『雁の寺』)

- (31) a. 最远的山上浮着一抹白云，在那白云深处的天空里，看到有一个白色降落伞。
b. 一ばん遠い山の上に一抹の白雲が浮かび、その雲の遙か向うに白い落下傘が一つ見えた。

<CJBC> (井伏鱒二著『黒い雨』)

(26)、(27)では、中国語の「頭頂上」と「頭上」は、いずれも日本語の「頭の上」と対訳されているということから分かるように、「接触なしの高所」という空間的な用法について、「上(shang)」と「上(うえ)」の共通性が見られる。「頭」のみならず、本堂、家屋、山、電線のような物がランドマークになる時に、「上(うえ)」と「上(shang)」は多くの場合に対応している。つまり、「上(shang)」は、「上(うえ)」と同様に、トラジェクターがランドマークより高いところ、ランドマークの上方にある、という位置関係を言語化している。

「接触ありの高所」とは、トラジェクターがランドマークより、高いところに位置し、しかも、ランドマークの正面と直接的に接触している、という「上(shang)」の用法である。蔡

(2006) では、先秦時代から南北朝時代までの古代中国語における「上(shang)」の用法を分析し、トラジェクターがランドマークと接触せず、ランドマークより高いところにあるという用法が減少しつつあったという現象を取り上げている。このような変化は「上」という漢字の変化からも反映されている。「二」の形から「上」に変わりつつあったという現象から分かるように、「上(shang)」は、トラジェクターとランドマークの間の隔たり、あるいは空いたスペースが消えている。ランドマークの最上部、また、ランドマークの上部と接触している部分が「上(shang)」で言語化され、いわゆる ABOVE の用法だけでなく、ON の用法で使用されているということである。「上(shang)」の「接触ありの高所」の用法を図示すれば、次の図 1-9 のようになる。

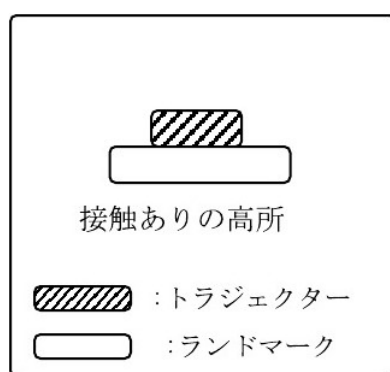


図 1-9 「接触ありの高所」

- (32) a. 吃罷早飯，曾根從背囊中取出襯衣、襪子、手帕、內衣內褲等物，包成一個包袱，放在房間角落的小桌上。
- b. 曾根は朝食をすますと、リュックサックから、ワイシャツ、靴下、ハンカチ、はだ着類などを取り出して、それを風呂敷に包んで部屋のすみの小さい机の上に置いた。
- <CJBC> (井上靖著 『あした来る人』)
- (33) a. 我问伙房的女工有无异常，她说只是放在架子上的九寸碟子打碎了几个。
- b. 異状の有無を炊事婦に訊ねると、棚の上に重ねてあった九寸皿が崩れ落ちて何枚か割れただけだと云った。
- <CJBC> (井伏鱒二著 『黒い雨』)
- (34) a. 每天晚上喝酒，把桌上全部的菜吃得精光。
- b. 每晚酒を飲みながら、食卓の上にあるものを全部たべてしまう。
- <CJBC> (石川達三著 『青春の蹉跌』)

例えば、(32)に取り上げられた例文における「上(shang)」は、トラジェクターの「包袱」(風呂敷)がランドマークの「小桌」(机)の上表面に置かれているという場面を示している。この場合では、風呂敷が小桌より高いところに位置し、さらに、両者が隙間なく接触している。(33)では、「架子」(棚)と「碟子」(皿)が、それぞれランドマークとトラジェクターに対応している。(33)における「上(shang)」は、「架子」という物の表面に、「碟子」が位置しているという位置関係を言語化している。また、(34)における「上(shang)」は、(32)、(33)の「上(shang)」と同様に、「接触ありの高所」の用法で用いられ、トラジェクターの「菜」(「あるもの」、料理)がランドマークの「餐桌」(食卓)の表面と接触しているというモノ同士の空間的な関係を表している。

また、上記の(32)～(34)に取り上げられた例文からわかるように、「接触ありの高所」の用法で用いられた「上(shang)」は、日本語の「上(うえ)」と対応している。つまり、「上(shang)」と「上(うえ)」のいずれも、トラジェクターとランドマークとが接触している場合で、トラジェクターがランドマークより高いところにあるという空間的なシーンを言語化している。この接触ありの高所の用法は、[+接触]、[+垂直]、「+基準面より高い」という3つの特徴でまとめることができる。

4.3 「上(shang)」の非空間的な用法：語彙的な意味拡張

4.3.1 「上(shang)」：優れる

3.3節でも論じられたように、Lakoff & Johnson (2003) は、GOOD IS UP (良好は上) や VIRTUE IS UP (美德は上) といった概念メタファーを取り上げ、上方という空間的な概念と他の抽象的な概念との構造的な写像関係を論じている。中国語でも、物の良質や望ましい状態といった抽象的な概念は、「上(shang)」という上方を示す空間辞で言語化されている。つまり、「上(shang)」は、上方という空間的な概念を示す言葉として、メタファーを介してより優れた状態、より望ましい状態を言語化できる。

(35) a. 服務上乘。

b. サービスが抜群である。

(『中日・日中辞典』)

(36) a. 这些文章即使在古文的名作中也属上品。

b. これらの文章は古文の名作中でも最も優れたものに属す。

(『白水社 中国語辞典』)

(37) a. 我總不能把它扔了吧，上好的蘑菇。

b. こんな上等なきのこなのに、まさか捨ててしまうわけにいかない。

<CJBC> (劉心武著《鐘鼓樓》)

「上(shang)」は、(35)～(37)に挙げられたように、高い品質を表している。このほかに、

現代中国語では、「吃上」、「用上」、といった用例から分かるように、「上(shang)」は動詞の後に接して、ある目標が予想通りに実現され、望ましい状態に変わったという状況を表すこともできる。

- (38) a. 大娘忙活了半天，終於坐下來正經吃上了菜，
b. 忙しげに立ち働いていたおばさんも、ようやく腰をおろして食べていた。
＜CJBC＞（劉心武著《鐘鼓樓》）

- (39) a. 我敢說，只要咱們大夥同心協力地幹，過不太久，咱們不光要使上牛馬，還要用上機器。
b. おれたちがみんな力を合わせりゃ、そのうち牛や馬どころか機械だって使うようになりますよ。
＜CJBC＞（浩然著《金光大道》）

具体的に言えば、(38)における「吃上」という表現は、「大娘」（おばさん）が忙しくてたまらず、食事をする暇さえもなかったが、いよいよ暇ができて食べるようにという望ましい状態になったという変化を表している。また、(39)も同様に、「使上牛馬」という表現は、人力のみで働く状態から、牛や馬を持ち、畜力も使うようになるという望ましい状態への変化を表している。そして、「用上機器」（機械を使うようになる）は、家畜を使うより機械を使って働くというもっと理想的な状態へ進歩するという過程を意味している。この「上(shang)」の「望ましい状態への変化」という意味項目の動機付けについては、GOOD IS UPというメタファーに基づき、つまり、トラジェクターがランドマークより高い所にあるという空間的な体験に好ましい価値を付与されたからである。

4.3.2 「上(shang)」：高い地位

Lakoff & Johnson (1980: 15-17) は、社会的な地位を、英語では HAVING CONTROL IS UP（権力を有するモノは上）、HAVING CONTROL IS UP（支配力を有するモノは上）といった上方に関わる表現で捉えると指摘している。中国語でも、「上(shang)」で高い社会的なところにあるという抽象的位置関係を表している事例はよく見られる。

- (40) a. 你沒聽見村長傳達上級的政策嗎？
b. 村長が上からの政策ば流したの聞いてねえですか。
＜CJBC＞（浩然著《金光大道》）

- (41) a. 上面的領導同志，要下去幫助承擔責任，這樣搞可以快一些。
b. 上の指導者は下へ行って、自らも責任をひきうけてこの仕事を手伝うべきであり、そうすれば仕事が速くできる。

<CJBC> (中央文獻編輯委員會編 《鄧小平文選》)

- (42) a. 以高高在上和極其嚴厲的口吻，對紅七軍的工作橫加批評。
b. 尊大な厳しい口ぶりで、七軍の行動に対して横暴な批判を加えた。

<CJBC> (鄧榕著 《我的父親鄧小平》)

上記に挙げられた例から分かるように、「上(shang)」という空間的な概念が社会的に高い位置と対応する現象は、中国語にも浸透している。他の人に指示したり、命令を下したりしている人は、権力を持ち、社会という抽象的な空間の高い層に位置している。(40)～(42)における「上(shang)」は、支配する側が支配される側より上方にあるという権力関係が、トラジェクターがランドマークより高い位置にあるという空間的な関係によって言語化されている。

4.3.3 「上(shang)」: 数量が多い

「上(shang)」は、数量が多いことを言語化できる。中国語でも、「上(shang)」が持つ上方の方向性に基づき、メタファーを介して、数値の尺度に関する概念を示すことができる。

- (43) a. 土地價格往上升。
b. 土地の価格が上昇する。

(《新華文摘》，日本語訳は筆者による)

- (44) a. 發行量向上攀升。
b. 發行部数が上がる。

(陳雅玫著 《新聞文化》，日本語訳は筆者による)

上に取り上げられた事例で言えば、「往上升」や「向上攀升」といった用法から分かるように、トラジェクターがランドマークの上方に位置しており、また、トラジェクターがランドマークより上のところへ移動するという空間的なシーンに基づき、メタファーを介して、「上(shang)」は、数値または数量が多いほうという意味を表している。

4.3.4 「上(shang)」: 順序

Yu (2014) によれば、Earlier・Later という時間概念をメタファーによって言語化する際に、ほかの言語と比べ、中国語では、空間の前後軸に依拠するもののみならず、上下軸に依拠するものもあると指摘している。「上(shang)」には、より早い、すなわち Earlier という時間的な意味がある。

- (45) a. 上回開會張村長說北京有一個火車站跟咱區裡要臨時小工，也分派咱莊任務了...
 b. 前の集まりんとき、張村長は、北京の駅がおれたちの区に臨時の人手を頼んできて、村にもその任務のわりふりがあったが…

<CJBC> (浩然著《金光大道》)

- (46) a. 陸文婷，我上次這只眼睛，就是你做的手術吧？
 b. 陸先生、この前の私のこの眼、手術をなさったのはあなたでしょう？

<CJBC> (謹容著《人到中年》)

- (47) a. 上一次失敗了，可是這一次順利地成功了。
 b. 前は失敗したが、このほどはうまく成功した。

(『中日・日中辞典』)

(45)～(47)では、「上回」、「上次」、「上一次」という表現における「上(shang)」は、日本語に直訳すれば「前回」となり、先に発生するという Earlier の時間的な概念を表す。トラジェクターがランドマークの上方にあるという「上(shang)」の空間用法が、時間メタファーによって、出来事の発生順序の記述に用いられている。「上(shang)」の時間メタファーにおいては、前回の経験、前回に発生したことのほうがランドマークと見なされ、次回の経験、次回に発生したことのほうがトラジェクターと見なされている。すなわち、より先に発生した出来事が、次に発生した出来事の上方にあるように捉えることを通して、Earlier という抽象的な時間概念が言語化されたということである。

現代中国語では、(48)～(49)に挙げられた用例のほかにも、「上(shang)」は、ある基準点より先であるという意味を示す語基として、「週」や「月」といった期間、時間帯の意味を含む成分と複合して、新たな時間的な語彙を生み出す働きを持っている。

- (48) a. 他上個月被革了職。
 b. 彼は先月首になった。

(『中日・日中辞典』)

- (49) a. 接著上週請翻到 123 頁。
 b. 先週の引き続きで 123 ページを開いてください。

(『中日・日中辞典』)

- (50) a. 上世紀的遺物。
 b. 前世紀の遺物。

(『中日・日中辞典』)

(50)に取り上げられた用例でも、時間メタファーの写像によって、上の方が Earlier に対応するようになっているということである。例えば、(50)における「上(shang)」は、今の時

代が基準としてランドマークの機能を果たし、この基準の上方にあるのが過ぎ去ってしまった百年間というトラジェクターであるという意味を表している。

4.4 「上(shang)」の非空間的用法：場所性を与える機能拡張

「上(shang)」の場所性を与えるという役割を論じるに当たって、次の3点を説明しなければならない。第一に、物と場所とはどのような違いがあるか、場所化がどういうことであるかという名詞の場所性に関する問題である。第二に、言葉の機能拡張の現象をメトニミーの観点からどのように捉えるかという問題である。第三に、「上(shang)」がどのようにメトニミーによる拡張プロセスを介して、場所性を与える役割を持つようになるのかという問題である。

この4.4節は、次のように構成されている。4.4.1では場所化という概念を、4.4.2ではメトニミーと文法的な機能の拡張の現象を、従来の研究を概観して、簡単に説明する。4.4.3節では、「上(shang)」の場所性を与える機能をメトニミーの拡張の視点から重点的に分析する。4.4.3.1～4.4.3.5節では、「上(shang)」の場所化の機能を具体的に記述して考察する。

4.4.1 場所化とは

場所化という概念を述べるには、物と場所との違いについて説明しなければならない。名詞であっても、物のように捉えられるか、それとも、場所のように捉えられるかによって、大きく異なっている。つまり、場所化の現象の背後にあるのは、モノとトコロとの対立である。

例えば、同じ「博物館」という名詞は、「太郎が博物館で見学する」では活動する場所であるが、「テロリストがイラクの博物館を破壊した」では壊された対象であり物として捉えられている。このような物と場所の言語化は言語によって異なっている。

池上 (2002: 74)は、移動の着点の場所化について、日本語と英語の相違点を指摘している。Go to John.という表現が英語では自然であるのに対して、日本語では「太郎に行く」という文が容認しがたく、「太郎のところに行く」で表現するのが一般的であるという事実がある。同様な現象は、次の(52)の例で示されている通り、中国語にも存在する。

- (51) a. John went to the park.
b. John went to Mary.

- (52) a. 太郎去了公園。
b. ?太郎去了花子。(?太郎は花子に行った。)
c. 太郎去了花子那里。(太郎は花子のところに行った。)

移動の着点について、中国語では、(52)のような着点が場所としての「公園」である場合では、(51)の英語の文と対応している。一方、(52)では、着点が「花子」、すなわち非場所

名詞になると、英語の(51)との対応が困難となる。「花子」という非場所名詞が移動の着点になれるには、場所性を示す成分を付加しなければならない。「花子」に「那里」(そのところ)といった場所を明示的に示す言葉が加えられると、(51)と対応できるようになる。(52)のように、場所性のない名詞に場所性を与えるプロセスが場所化と呼ばれている。

4.4.2 メトニミーと機能拡張

序章のところでも論じたように、認知言語学では、メトニミーという現象を人間の参照点能力の反映の1つとして考察している (Langacker 1999: 174)。ここでの参照点能力というのは、認知主体がある目標に注意を向けて捉えようとするとき、まずある参照点にアクセスして、参照点を通して最終的に目標を捉えるという間接的な認知のプロセスである。つまり、メトニミーは、ある対象をそれと緊密な関係にある別の対象を介して把握するという認知のプロセスである。

メトニミーという現象は、言葉の語彙的な意味が拡張する際のみならず、文法的な機能の拡張にも広く見られる。例えば、時間的な近さに基づくという種類のメトニミーがある。このような継起関係に依拠するメトニミーは、次の(53)のように、筆を箱からとるや、抜いた刀を元の鞘に収めるという文字通りの意味だけではなく、書き始めるや決闘が終わるといった文字通りの動作と同時に生じた別の状況も示している。(53)の時間的な近さに基づくメトニミーは、文法的な機能の拡張にも反映されているということである。嶋田(2009)は、(54)の例を取り上げ、図 1-10 に示されているように、日本語の「見る(see)」という動詞が「てみる(try)」に意味拡張する動機付けとして、メトニミーによる拡張があると主張している。

- (53) a. 筆をとる (筆記: 開始) 筆を置く (筆記: 終了)
b. 口を開く (会話: 開始) 口を閉じる (会話: 中断)
c. 刀を抜く (決闘: 開始) 刀を納める (決闘: 終了)

(仲本 2011: 310)

- (54) a. 花に近づいて、見る。(see)
b. 花に近づいてみる。(try)

(嶋田 2009: 132)

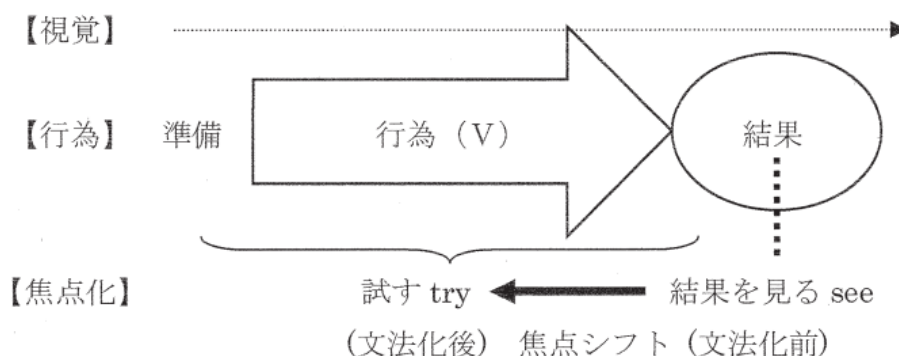


図 1-10 「みる(try)」の拡張の動機付け (嶋田 2009: 133)

嶋田 (2009)によれば、(54a)における本動詞の「見る」が、ある具体的な対象または結果を観察するということに焦点が与えられている。これに対して、(54b)の「みる」の場合では、焦点が与えられているのは、観察する対象、あるいは、生じた結果ではなく、その前の状況、すなわち、見るために、あるいは何らかの結果を生じさせるために、試しに行く準備の行為のところにある。この焦点シフトの過程は図 1-10 の黒い矢印が示している。

つまり、「見る」という動作の前に、「見る」ために何かの行為を試して行わなければならない。「見る」という動作と「見る」ために試しに行く準備行為との間に、時間上の近さがある。この時間的な隣接性のため、メトニミーを通して、一方の準備行為が含意している「試す」という意味合いが、もう一方の「見る」という動作によって言語化ができるようになったと考えられる。

- (55) a. 花瓶がテーブルに置いてある。
 b. 理事会は明日会議室において行われる。

(大橋 2013: 157)

さらに、嶋田 (2009)によれば、「見る」の事例と同様に、本動詞の「置く」から補助動詞の「おく」への機能拡張にもメトニミーを通して説明できる、と指摘している。具体的に言えば、(55a)から(55b)への拡張プロセスにおいて、どこがメトニミーの動機付けが反映されているかという点、それは、物のある位置に放置したという行為が、その物が一定の領域を占め、与えられた場所に存在しているという 2 つの出来事の間に関連性がある点にある。

この 4.4.2 節では、先行研究における「見る」及び「置く」の例を取り上げ、メトニミーと文法的な機能の拡張について簡単に説明した。次の 4.4.3 節からは、「上(shang)」の場所性を与える機能について、メトニミーの視点から説明していく。

4.4.3 場所性を与える機能とメトニミー

中国語では、(56)の例に示されているように、椅子や山や壁のような名詞は場所性を有していない名詞とされている。このような場所性を持たない名詞は、中国語ではモノとして捉えられており、文中の場所表現、すなわち、トコロとしての場合には、場所性を付与する機能を持つ「上(shang)」のような表現を加えなければならない。

- (56) a. 坐在椅子上。 / ?坐在椅子。
(椅子に座っている。)
- b. 山上住着人。 / ?山住着人。
(山に人が住んでいる。)
- c. 墙上有蜘蛛。 / ?墙有蜘蛛。
(壁にクモがいる。)

「上(shang)」が場所性を持たない名詞を場所化できるということについては、中国語学の分野でも研究されている。認知言語学の立場から、なぜ「上(shang)」がこのような機能を持っているのか、「上(shang)」が本来持つ語彙的で空間的な意味とこの場所化の機能との関係をどのように説明するのかといった問題については、まだ掘り下げる余地がある。

本論文では、本来は重力軸に従い、トラジェクターがランドマークより高いところに位置しているという空間的な位置関係を示す表現「上(shang)」が、いかに場所性を付与する機能を持つようになったのかという現象を、メトニミーを通して説明できると考えている。メトニミーにはいくつかの種類があり、「上(shang)」の場所化の機能を分析する際には、空間の隣接性に基づいて、部分を全体で示すメトニミーと、時間的な隣接性に基づいて、一方の状況がもう一方の状況を示すメトニミーとがある。

まず、部分を全体で示すメトニミーと「上(shang)」の場所化の機能との関係について説明する。本来あるモノの全体を意味する表現が、そのモノの一部分を指示する表現に転用されているという事例は、日常によく見られる現象である。「自転車をこいだ。」という文における「自転車」は、全体としての自転車ではなく、ペダルという自転車の一部分を指示している。このような全体で部分を指すメトニミーは、WHOLE THING FOR ACTIVE ZONE PARTとも呼ばれている (Barcelona 2011: 31)。例えば、The cigarette in her mouth was unlit. という文における cigarette は全体 (WHOLE THING)でありながら、人の口にくわえられている末端の部分という活性化領域 (ACTIVE ZONE)のことを意味し、タバコという全体でタバコの末端を指示している。

このような現象は、「上(shang)」が椅子、机と共起する場合にも見られる。「上(shang)」が椅子、机と共起する際に、それが椅子や机という参照物より高い空間領域全体ではなく、あくまでも椅子や机の上側の空間領域のみを意味している。つまり、「椅子上」という表現は、椅子の上部のすべての空間領域を指示するものではなく、椅子の表面の上側という部分的

な空間領域を指示する。このような「上(shang)」の用法は日本語の「上(うえ)」にもある。例えば、「机の上に本がある。」や「子猫が本の上にいる。」といった例における「上(うえ)」は、基準物の机や本より高い空間領域全体を指示するものではなく、あくまでも、机と本の上部のモノを乗せる部位を意味している。

しかし、特に注意しておきたいのは、日本語では、「この本の上には汚れがある」が言えず、「上(うえ)」の使用が制限されているのに対して、中国語では、「上(shang)」の使用が自然であり、「這本書上有弄髒的地方。」が自然な文である、ということである。このような非対応の現象について、この節以降で詳しく記述して論じる。

ここで指摘したいのは、「上(shang)」が本来持つ空間的な意味から、場所化という機能が生じた過程については、全体で部分を示すというメトニミーだけでなく、時間的な隣接性に基づき、一方の状況がもう一方の状況を示すというもう1つのメトニミーにも関与する、ということである。

Heine & Kuteva (2002: 200-204, 305-308)は、言語における文法的な機能の拡張の普遍現象について、存在 ([EXIST]) に関わる概念が、位置 ([LOCATIVE]) によって言語化できるという文法的な機能の拡張の方向性を指摘している。つまり、元々のモノどうしの位置関係を示す表現が、存在の関係を示す機能を持つようになるという過程である。「上(shang)」の機能拡張もこの方向性と一致している。「上(shang)」は、本来の空間的な意味で用いられる際に、言語化されるのはモノどうしの位置関係である。一方、場所化を与える機能で用いられる場合、「上(shang)」がモノどうしの位置関係ではなく、あるモノがある場所に位置するという存在の関係を示している。

ここで指摘したいのは、上記に取り上げられた現象と同様に、「上(shang)」が本来の空間的な用法から、非場所名詞に場所性を示す機能が発達してきた理由について、メトニミー的な動機づけが見られる、ということである。重要なのは、「接触ありの高所」という「上(shang)」の空間的な用法である。なぜこのような拡張現象が生じたのかという問題について、その一部が時間的な隣接性に基づくメトニミーによって解釈できると思われる。

具体的に言えば、「接触ありの高所」という空間的な場面は、物がある場所に位置している場面と、互いに緊密な関係がある。つまり、トラジェクターがランドマークより高いという空間的な関係（両者が接触している）は、多くの場合では、結果としてトラジェクターがそのランドマークの領域に存在するという状況となってしまう。すなわち、「高」から「在」へという変化である。特に注意しておきたいのは、「接触ありの高所」の「上(shang)」の場合では、ランドマークが物に捉えられているが、場所性を付与する「上(shang)」の場合では、ランドマークが場所に捉えられているという変化である。

「上(shang)」の機能拡張の過程は、図 1-11 で示されている。図 1-11 の左側の a の部分は、「上(shang)」の本来の「接触ありの高所」という空間的な用法を示すものであり、また、「上(shang)」の場所性を付与する機能が右側の b の部分で示されている。この2つの用法がいずれも空間的な領域に属するため、大きな楕円によって囲まれている。

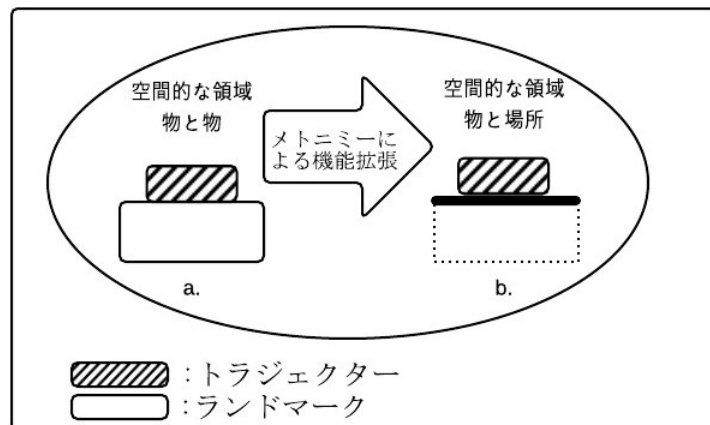


図 1-11 メトニミーによる機能拡張

本研究は、「上(shang)」の場所化の役割を、「水平面の場所化」、「垂直面の場所化」、「天井面の場所化」、「乗り物の場所化」、「行為の存在する所の場所化」という五つの下位カテゴリーに分けて、論じていくことにする。強調しなければならないのは、「上(shang)」の空間辞の用法と機能語としての用法とは、分断されたものでなく、有機的につながっているということである。

4.4.3.1 「上(shang)」：水平面の場所化

「上(shang)」の水平面の場所化は、通常空間の中に水平的に固定でき、平たい面を有するものに場所性を付与するプロセスである。ただし、「上(shang)」の「水平面の場所化」という機能は、本来の「接触ありの高所」との間に明確な境界線があるとは限らない。

例えば、(57)は、傘というトラジェクターが、ランドマークの「地板」(床)に位置しているという空間的な位置関係を示している。(57)の「上(shang)」は、「接触ありの高所」の用法と、「水平面の場所化」の両方と解釈できる。しかし、(58)および(59)における「上(shang)」の用法については、「水平面の場所化」として解釈するほうが妥当である。

(57) a. 他又回轉身走進房去拾起了傘，把它張開，小心地放在地板上。

b. 彼はちよつともどって行って傘を拾ってひろげると、ていねいに床においた。

<CJBC> (巴金著 《家》)

(58) a. “月光照在科羅拉多河上，我願回鄉和你在一起。當我獨自一人多麼想念你，記起我們往日的情意……”

b. 「月は輝くコロラド川に、故郷に帰っておまえといたい。ひとりの時はおまえがなつかしく、昔の愛を思い出す……」

<CJBC> (史鐵生著 《插隊的故事》)

(59) a. 那是沒錯兒的，書上清清楚楚地印著大名哪。

b. 本にもちゃんと名前が載っているのだからまちがいない。

<CJBC> (陳建功著 《轆轤把胡同九号》)

具体的に言えば、(58a)におけるトラジェクターの「月光」は、ランドマークの「科羅拉多河」(コロラド川)の表面に当たるという空間的なシーンを表している。「月光」(月の輝き)は三次元の実物ではなく、川の上の層に存在するように捉えられている。また、(59a)も同様に、トラジェクターの「大名」(尊名)は、印刷された活字も高さもないモノである。「尊名」を表す活字が、ランドマークの「本」の「上(shang)」にあり、すなわち、存在する場所であるということである。

中国語では、本が場所性のない名詞であり、物のようにとらえられているが、「上(shang)」を加えることによって、活字の存在する場所となる。すなわち、本は表紙やカーパーや紙面といった要素によって構成されたものであるが、1つの水平的な面で表すようになり、活字の存在する場所を示す機能を持つようになった。

4.4.3.2 「上(shang)」：垂直面の場所化

図1-12に示されているように、壁、ドア、碑といった物は、地面に直立する広い面、すなわち垂直面を持っているが、中国語では場所性を持たない名詞だとされている。これらの場所性を持たない名詞は、「上(shang)」を加えることによって、場所性を持ちうるようになり、その垂直面が場所として捉えられるようになる。

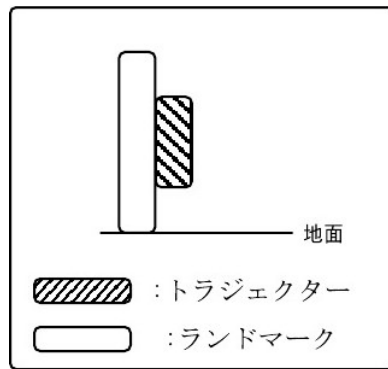


図 1-12 「垂直面の場所化」

(60)では、トラジェクターの「布票」(綿布配給券)は、地面・水平面に直立している「墻」(壁)というランドマークの垂直面に位置している。この場合では、ランドマークの「上(shang)」は、壁の上部ではなく、すなわち地面から最も高いところではなく、トラジェクターの配給券との接触の面を示している。つまり、(60)の「上(shang)」は、トラジェクターが地面に垂直するランドマークに接触しているという空間的な関係を言語化している。

また、(61)における「木門」(木のドア)と「墨迹」(墨の跡)との関係、(62)における「碑」と詩碑に刻まれた文字との関係は、(60)における配給券と壁との位置関係と同様に、トラジェクターが地面に直立しているのランドマークに接触し、その垂直面に位置しているということである。

- (60) a. 牆上貼了很多布票，仔細看，有過期的也有當年的。
b. 壁には綿布配給券がたくさん貼られていたが、よく見ると期限切れのものもその年のものもある。

<CJBC> (史鐵生著《插隊的故事》)

- (61) a. 木門上隱約辨出當年的墨迹：是七尺男兒生能舍己，作千秋雄鬼死不還家。
b. 木の扉に書かれた「七尺の男兒能己れを捨て、千秋雄鬼となりて死しても家に帰らず」という当時の墨の跡がかすかに判別できる。

<CJBC> (史鐵生著《插隊的故事》)

- (62) a. 面對此景，周恩來賦詩抒懷，碑上刻的就是這一首。
b. そんな光景と、自らの思いを込めながら、周氏は詩を詠んだ。碑に刻まれた詩は、この時のもので(後略)

<CJBC> (五十川倫義著《中日飛鴻・櫻花》)

また、トラジェクターは、立体的なタイプ、平面のタイプ、ランドマークの一部に属するタイプ、という3つの種類がある。(63)のトラジェクターは、ナメクジという長さ、広さ、高さを有する実物であり、ランドマークの壁との分離が可能である。

- (63) a. 蛞蝓在牆上爬行。
b. ナメクジが壁をはっている。
(64) a. 用漆在牆上亂寫。
b. ペンキで塀に落書きをする。
(65) a. 這面牆上有一个孔。
b. この壁に穴が1つあいている。

(『中日・日中辞典』)

一方、(64)の塀に塗られたペンキは、面のように捉えられて、そして、ランドマークの塀との分離が難しい。そして、(65)の穴、(62)の碑に刻まれた文字のいずれもトラジェクターとして、ランドマークと接触しているだけでなく、ランドマークの一部に属している。いずれの場合でも、「上(shang)」の場所化によって、垂直面のランドマークは、トラジェクターの存在する場所を示すことができる。

4.4.3.3 「上(shang)」：天井面の場所化

図 1-13 は、地面と離れているランドマークの下の方にトラジェクターが位置しているという空間的なシーンを表している。(66)～(68)は図 1-13 で示されているとおり、トラジェクターのクモ、油絵、小作人のいずれも、ランドマークの天井、梁の下方にあるが、「上(shang)」が用いられている。中国語の学習者にとって、なぜトラジェクターがランドマークの下方にあるにもかかわらず、「上(shang)」が使用されているのかを理解するのは容易なことではない。この現象を説明するには、空間辞としての「上(shang)」の用法と天井面を場所化する機能語の「上(shang)」とを分けて考えなければならない。

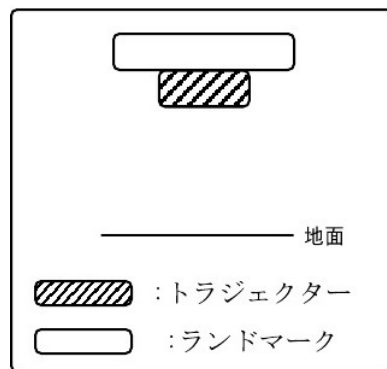


図 1-13 天井面の場所化

- (66) a. 屋頂的天花板上住著一只小蜘蛛。
 b. 天井のすみにクモが一匹住んでいる。
 <CJBC> (張海迪著 《輪椅上的夢》)
- (67) a. 另一塊天花板上繪有迦陵頻伽，口銜白牡丹花枝，展翅飛翔。
 b. 別の天井には白い牡丹を捧げ持つ迦陵頻伽が羽搏いていた。
 <CJBC> (三島由紀夫著 『金閣寺』)
- (68) a. 徐鳳英跟林伯唐常常把不交租的佃戶吊到房梁上用皮鞭子抽。
 b. 徐鳳英と林伯唐は、いつも、年貢を払えない小作人を、天井の梁につるして、皮の鞭でたたいた。
 <CJBC> (楊沫著 《青春之歌》)

「上(shang)」は、機能語として、川の表面や壁の表面を場所化する役割を持っているのみならず、天井といった非場所名詞を場所名詞に転換できる。(66)～(68)における「上(shang)」は、上下の位置関係を示すものではなく、ランドマークを、トラジェクターの存在する場所

に変える機能語である。天井は、本や壁のように場所性を持たない表現であり、機能語の「上(shang)」と共起することによって、他の物の存在する場所となれる。これが、「上(shang)」の本来の空間的な意味と正反対で、トラジェクターの位置はランドマークより低くても、「上(shang)」が使用される理由である。

4.4.3.4 「上(shang)」：乗り物の場所化

(69)と(70)の例に示されるように、「上(shang)」は「汽車」、「飛行機」、「船」といった乗り物を表す名詞と共起する際に、乗り物の頂部ではなく、乗り物を場所化して、貨物や乗客の存在するところを意味する。

(69) a. 留神！火车上有小偷，可把钱收好了。

b. 気をつけてね。汽車の中にはすりがあるから、だいじにしまっ。

<CJBC> (楊沫著 《青春之歌》)

(70) a. 这一架飞机上乘坐的，全都是中国共产党各区的 frontline 最高指挥官。

b. この飛行機に搭乗したのはすべて中国共産党の各区の前線最高指揮官だったからである。

<CJBC> (鄧榕著 《我的父親鄧小平》)

例えば、「車上有入」という表現は、「人が車の外部の屋根にいる」という意味ではなく、「車の内部に人がいる」という意味である。つまり、トラジェクターの人は、自動車というランドマークの一番上部の所に位置しているのではなく、ランドマークの内部にいるということである。

4.4.3.5 「上(shang)」：行為の存在する場所

池上(2002: 73)によれば、場所という概念は、さらに物の存在する場所と、行為の存在する場所とに分けられる。4.4.3.1 節から 4.4.3.4 節までで分析した「上(shang)」の場所化の機能は、物の存在する場所に関わる用法である。本節では、「上(shang)」が行為の存在する場所を言語化できるという機能を指摘する。

(71) a. “我只有七個銅板。” 餘占鰲摳出七個銅板，摔在八仙桌上。

b. 「銅錢七枚しかねえ」余占鰲は銅錢を七枚とり出して、テーブルの上にほうった。

<CJBC> (莫言著 《紅高粱》)

(72) a. 大家在晚飯的飯桌上會面的時刻也來到了。

b. やがて晩食の食卓でみんなが顔を合せる時刻が来ました。

<CJBC> (夏目漱石著 『こころ』)

(71)、(72)では、共に「桌上」という中国語の表現が含まれているが、「テーブルの上に」、「食卓で」という2つの日本語の表現とそれぞれに対応している。(71)では、「桌上」と「テーブルの上」は、卓の最上部の物を置く面のところを意味し、「存在のトコロ」であり、トラジェクターの「銅銭」がランドマークの「桌」(テーブル)に存在するという具体的な実物どうしの空間的な位置関係を示している。一方、(72)には「桌上」という表現が含まれているが、この「桌上」という表現は、(71)のような実物の存在する場所ではなく、「行為のトコロ」、あるいは、行為の存在する場所である。つまり、(72)では、「食卓」(食卓)というランドマークが、行為を行う空間であり、そして、トラジェクターが具象的な実物ではなく、「顔を合わせる」という行為または動作だということである。

5. 「上(うえ)」と「上(shang)」の相違点

5.1 語源に見られる相違点

現代日本語の「上(うえ)」と現代中国語の「上(shang)」は、多くの場合では共通であるとされているが、語源の面から分析するといくつかの相違点が浮き彫りになる。従来の研究においては、「上(うえ)」と「上(shang)」の語源についてそれぞれに記述しているが、語源に関する比較分析が比較的少ない。

「上(うえ)」の語源は、『岩波古語辞典』をはじめとする辞典が記述しているように、物体の表面、物体のオモテに近いところの意である。そして、『日本国語大辞典』の「語誌」に取り上げられているとおり、上代から中世までの日本語では、「上(うえ)」の昔の用法としての「うへ」は「うら」と対立していた。しかし、「上(shang)」の語源は、「上」という文字の由来、及び『説文解字』における説明から分かるように、モノの表面と関わりなく、2つのモノ同士の高低関係を表す空間的な概念である。

言語化された空間的なシーンにおけるランドマークとトラジェクターとの関係に重点を置き、「上(うえ)」と「上(shang)」の語源の相違点を、認知言語学の視点から見れば、次の2点を指摘することができる。

第一に、ランドマークとトラジェクターとの接触の有無に関しては、「上(うえ)」の語源と「上(shang)」の語源は相違している。「上(うえ)」の場合では、トラジェクターは、ランドマークの表面の部分であるため、必ずランドマークとつながっている。言い換えれば、トラジェクターはランドマークの一番上部の領域または一番上部に近い領域にあるので、当然ランドマークと密着しなければならないということである。しかし、「上(shang)」の場合では、ランドマークとトラジェクターは接触がなく、物体と物体との関係はあくまでも高低の関係で把握されている。

(73) 明明上天，照臨下土

(『詩經』)

(74) 「うへに、『忌みなどはてなんに御覧ぜさすべし』と書いて」

(『蜻蛉日記』)

上記の「上(うえ)」と「上(shang)」との語源の相違は、「水」がランドマークである場合の用例を対照すると、より明らかになる。(75)における「水のうへ」という表現は、水の表面の層であり、すなわち川水や湖水の最上部に近いところを示している。これに対して、(76)における「彭水之上」という表現は、「彭水」と呼ばれる川の表面や最上部ではなく、岸という「彭水」より高いところを示している。

(75) a. 水のうへに遊びつつ魚(いを)を食ふ。(再掲)

b. (白い鳥が)水の表面で自由に泳ぎ回りながら魚を食べる。

(『万葉集』)

(76) a. 與北宮喜盟于彭水之上。

b. 北宮喜と彭水の上に盟う。

(『左伝』)

第二に、「上(うえ)」の語源は、ランドマークがトラジェクターによって覆われ、あるいは、被せられているという意味合いもあり、このような意味合いが「上(shang)」の語源には含まれていない。この相違が生じた理由も、古代日本語では、「上(うえ)」は、物体の内部を示す裏と対立的な関係にあったからであると考えられる。しかし、中国語の「上(shang)」の語源には、トラジェクターがランドマークを覆うという捉え方が見られない。

空間関係については、物的な捉え方と場所的な捉え方の違いを区別しなければならない。物と場所との違いから、「上(うえ)」の語源と「上(shang)」の語源に関して、第三の相違点が見られる。久島(2002: 3-10)は、物と場所との違いが、言葉に体系的に反映されていると指摘している。物には、普通の場合、人間より小さく、手に取って各角度から観察することができ、人間に何らかの機能を提供し、身近な存在であり、一個一個が独立して対象化しやすいといった特徴がある。これに対して、場所には、人間や物より大きく、人間や物の存在するための空間という特徴がある。例えば、物の面積は「大きい」、「小さい」で修飾され、また、場所の面積は「広い」、「狭い」で修飾される。地図、板、葉、花びらといった物の面積の量について、「大きい」、「小さい」で言語化され、「広い地図」、「板が狭い」とは言い難い。野原、畑といった物の面積の量は、「狭い」、「広い」で言語化されるため、「大きい野原」が容認し難い表現となる。

上記の物と場所との違いを踏まえると、「上(うえ)」の語源「うへ」は、物の表面に関わり、ランドマークとトラジェクターとの関係が物的に捉えられる。しかし、「上(shang)」の「高

也」という語源に関しては、位置の高低関係に注目し、ランドマークとトラジェクターとの関係を場所的な捉え方で言語化する傾向が強い。つまり、「上(うえ)」と「上(shang)」との語源の相違について、「上(うえ)」の語源はあるモノの表面であり、そのモノの内部と外部との対立が見られるのに対して、「上(shang)」の語源は、位置の高いモノと位置の低いモノとの対立にある。

5.2 「上(shang)」にならない「上(うえ)」

5.2.1 「上(うえ)」が持たない用法①: 順序

Yu (2014)、左 (2007)によれば、中国語には、出来事どうしの順序について2つの捉え方がある。1つは、日本語のように、水平軸で、すなわち順序を前後の軸に沿って捉えるものである。もう1つの捉え方は、中国語の特徴であり、順序を「縦」の軸で、つまり順序を上下の方向性を通して把握する、という捉え方である。このように順序に対する2つのタイプの捉え方はともに中国語でよく使用されている。一方、上下の軸による順序の捉え方は日本語での使用は比較的に制限されている。

- (77) a. 上半夜 (夜12時前)
b. 上一代 (前世代)
c. 上个月 (先月)
d. 上个星期 (先週)
e. 上个礼拜 (先週)

(左 2007: 58-59)

上記の例を見れば分かるように、中国語の「上(shang)」が他の時間と関連する概念と共起し、順番として先だということを言語化できるのに対して、日本語の場合では、「上(うえ)」の使用が大きく制限されている。もちろん、これは、日本語では、上下軸を通して順序を示すことができないということではない。日本語でも、「以降」や「上旬」といった用法がある。要するに、「上(うえ)」は、「上(shang)」と異なり、順序として先だという用法での使用が比較的に困難である。

5.2.2 「上(うえ)」が持たない用法②: 垂直面の場所化

「上(shang)」は、垂直面を場所化する役割を持っているが、「上(うえ)」はこの機能を持っていない。すなわち、トラジェクターは、壁やドアといった地面に垂直するランドマークの表面にあるという空間関係を「上(うえ)」で言語化するのが、困難である。

- (78) a. 門上掛著黑色的短幔，這就是我吃了團子受到攻擊的地方。
b. 門の並びに黒い暖簾をかけた、小さな格子窓の平屋はおれが団子を食べ、しくじった所だ。

<CJBC> (夏目漱石著 『坊ちゃん』)

- (79) a. 第二天，俺毫無所謂地去上課，不料黑板上寫上了整個黑板那麼大的五個大字：“對蝦面先生”。
- b. 翌日何の気もなく教場へ這入ると、黑板一杯位の大きな字で、天麩羅先生とかいてある。

<CJBC> (夏目漱石著 『坊ちゃん』)

- (80) a. 窓戶之間的墙上挂着十四幅表現基督受難的油畫。
- b. 窓の間の壁には、キリストの受難を表わした十四面の油絵がかけてあった。

<CJBC> (大岡昇平著 『野火』)

(78)の「門」、(79)の「黒板」、(80)の「壁」は、日常的には地面に垂直しているものである。いずれも文中で参照物、すなわちランドマークの役割を果たしており、久島(2001)は、「机」や「台」といった実物が「物」でありながら、他の実物の存在するところでもあるという特徴があると分析している。ここで指摘したいのは、久島が主張するように、(78)の「門」、(79)の「黒板」、(80)の「壁」は、道具または建築の一部であり、どれも実物という特徴を持つ物であるが、広い表面を持っているため、他の物の存在する場所でもあり、いわゆる「物的な場所」である。

- (78) c. ドアクローザーとは、ドアの上につけて、開閉が緩やかになるようにする装置である。

<BCCWJ> (碓井民朗著 『一流建築家の知恵袋マンションの価値』)

- (79) c. 黒板の上に、窓わくの外側と、平素児童の手の届かない個所の雑巾がけを始めた。

<BCCWJ> (御木徳近著 『今を生きる』)

- (80) c. マクベスの首は、城壁の上に高々と掲げられるまで、ことの成り行きを「見て」いる。

<BCCWJ> (東郷公德著 『シェイクスピアは楽しい』)

勿論、日本語でも、「ドアの上」、「黒板の上」、「城壁の上」という用法があり、いずれも自然な表現である。しかし、これらの用法は、ランドマークの最上部、あるいは、ランドマークの頂部を示している。(78c)、(79c)、(80c)における「ドアの上」、「黒板の上」、「城壁の上」は、ランドマークの表面では、頂部である。例えば、(80c)における「城壁の上」という表現は、後接する「高々と」という表現から分かるように、「城壁」の最も高いところを意味する。また、同様に、「黒板の上」、「ドアの上」は、ランドマークの頂部を意味している。

つまり、「門」や「黒板」や「壁」をはじめとする地面に垂直する物体は、ランドマークとして、「上(うえ)」という空間辞と共起する際に、普通の場合ではトラジェクターがこれら

の実物の最上部と認識される。しかし、中国語では、「門」や「黒板」や「壁」といった地面に直立する実物は、ランドマークとして、機能語の「上(shang)」と共起する際に、トラジェクターがこれらのランドマークの最上部または頂部ではなく、ランドマークの面積の広い面にあると普通認識される。

5.2.3 「上(うえ)」が持たない用法③: 天井面の場所化

「上(shang)」は、一般的にはトラジェクターがランドマークより高い所に位置しているという空間的な位置関係を表すが、トラジェクターがランドマークより低い所に位置しているという逆方向接触の用法もある。しかし、「上(shang)」と違って、「上(うえ)」には、上記のような逆方向接触の用法が見当たらない。

(81) a. 華麗的枝形吊燈從高高的天花板上吊下來。

b. 華麗なシャンデリヤが高い天井から下がっている。

<CJBC> (石川達三著 『青春の蹉跎』)

(82) a. 一盞煤油燈吊在大樑上，燈火歡樂地跳躍。

b. 石油ランプが太い梁からぶらさがり、明りがチラチラゆれている。

<CJBC> (浩然著 《金光大道》)

例えば、(81a)では、シャンデリヤが天井よりも低い位置にあり、そして、(82a)では石油ランプも梁より下方の所にある。つまり、「上(shang)」は、トラジェクターの位置がランドマークよりも低く、すなわち、本来の「接触ありの高所」と「接触なしの高所」という空間的な意味と正反対であっても、非場所的な名詞に場所性を与えるという機能を果たしている。一方、(81)、(82)のような空間的なシーンにおいて、「上(うえ)」を使用することは困難である。

5.2.4 「上(うえ)」が持たない用法④: 乗り物の内部の場所化

中国語では、「上(shang)」と「車」、「汽車」、「飛行機」、「船」といった乗り物を表す名詞と共起する際に、乗り物の頂部ではなく、多くの場合では乗り物の内部を意味する。しかし、日本語の「上(うえ)」は、トラジェクターがランドマークの内部に位置する空間的な関係を言語化するのが難しい。

(83) a. 留神！火車上有小偷，可把錢收好了。

b. 気をつけてね。汽車の中にはすりがあるから、だいじにしまつて。

<CJBC> (楊沫著 《青春之歌》、再掲)

- (84) a. 這一架飛機上乘坐的，全都是中國共產黨各區的前線最高指揮官。
b. この飛行機に搭乗したのはすべて中国共産党の各区の前線最高指揮官だったからである。

<CJBC> (鄧榕著 《我的父親鄧小平》、再掲)

なぜ、このような相違が見られるのかというと、ランドマークである乗り物を、物的な存在と見なすか、それとも場所的な存在と見るかという点で、「上(shang)」と「上(うえ)」とは異なっているからである。乗り物は、貨物や乗客を運ぶ機能を有する物であるが、貨物や乗客の存在する場所でもあり、つまり、物的な場所ということである。「上(うえ)」は乗り物と共起する際に、乗り物が物体のみに見なされているのに対して、「上(shang)」は乗り物と共起する際に、乗り物が物であると同時に、一種の場所でもある。

- (85) 装甲車の上に立っている将校の中佐の肩章が眼を射るように光った。

<BCCWJ> (榎本捨三著 『満洲崩壊』)

「汽車の上」や「装甲車の上」のような「上(うえ)」は乗り物と共起する表現は、自然な日本語であるが、いずれも、乗り物を1つの物体を認識し、その上部の所を意味している。ただし、強調しなければならないのは、「上(うえ)」が乗り物と共起する際には、ランドマークが専ら物体に見なされるとは限らないということである。つまり、「上(うえ)」は、一定の状況では、乗り物を場所に変える場合もある。

- (86) a. ヨーロッパの都市は小さいヨーロッパを訪れると、だれしも感じることであろうが、都市の規模はじつに小さく、飛行機の上からは、まさに大海原に浮かぶ小島にしか見えない。

<BCCWJ> (木村尚三郎著 『西欧文明の原像』)

- b. 最初の夜を飛行機の上で過ごしたくないからね。

<BCCWJ> (新井ひろみ著 『プリンセスにお手上げ』)

(86)の「飛行機の上」における「上(うえ)」は、乗り物の上部ではなく、乗り物を場所のように捉えた事例である。つまり、「の中」で置き換えられることから分かるように、(86)の「上(うえ)」は、乗り物を人や物の存在するところを示している、しかし、(86)の「上(うえ)」は、「上(shang)」の乗り物の内部の用法と比べ、やはりやや異なっているところがある。

(86)の飛行機が空中で飛んでいるが、一種の地面が遥かに離れているランドマークである。(86)における「上(うえ)」の場所を示す機能は、ランドマークの飛行機が空中にある場合のみに生じるということである。すなわち、「上(うえ)」で示す場所は、高い場所のみであ

る。飛ばずに、地面に留まる場合には、ランドマークの飛行機はやはり物のようになされる。

- (87) a. 起飛前，下面送行的人看到，飛機上的人每人背著一個降落傘，飛機的門也不知道為什麼沒有了。
b. 離陸前、見送る人々は搭乗者がみな落下傘を背負い、なぜか飛行機のドアがないことに気が付いた。

<CJBC> (鄧榕著 《我的父親鄧小平》)

しかし、中国語では、「上(shang)」は、高い場所のみならず、あるいは、飛行機が離陸していない場合でも、飛行機がトラジェクターの存在する場所として認識されている。(87)では、飛行機はまだ地面に止まっているにもかかわらず、搭乗者の存在する場所に見なされている。

要するに、「上(うえ)」は、「上(shang)」とは異なり、乗り物を物体の存在する場所と見なし、ランドマークを場所として捉え、トラジェクターが乗り物の内部に存在するという空間関係を示すことができない、ということである。

5.2.5 「上(うえ)」が持たない用法⑤：行為の存在する所の場所化

「上(うえ)」にはこの機能がなく、日本語では行為の存在する場所を言語化するには、格助詞の「で」がよく使用される。

- (88) a. 高中的時候，在最後的畢業典禮上，我代表畢業生發言。
b. 高校の卒業式で、卒業生代表でスピーチをした。

<CJBC> (乙武洋匡著 『五体不満足』)

- (89) a. 雖然不是一個系的，但在週末舞會上一起跳過舞，頗為熟識。
b. 同じ学部ではなかったが、週末のダンスパーティーと一緒に踊ったこともあり、かなりよく知っている。

<CJBC> (劉心武著 《鐘鼓樓》)

- (90) a. 在廟會上姥姥給外孫女買過桂花茶湯，牛骨髓油茶，黑色的杏幹糖和結成奇妙的塊狀物的棕 黃色酸棗面。
b. 縁日で婆ちゃまは色々な食べ物を買ってくれた。金木犀クズ湯や牛骨髓油茶、黒い杏飴、奇妙な形をした薄茶色のナツメの粉……

<CJBC> (王蒙著 《活動變人形》)

「上(shang)」は、「桌」(テーブル・食卓)という広い面を有する実物だけでなく、(88)～(90)に取り上げられた例文における「畢業典禮」(卒業式)、「舞會」(ダンスパーティー)、

「廟會」(縁日、祭り)といった実物ではなく、活動を表す名詞と共起し、場所を表す機能も持っている。「卒業典禮」、「舞會」、「廟會」といった活動を表す名詞は、机や台といった物を載せる空間を有していないが、抽象的な空間と見なされる。言い換えれば、「卒業典禮」をはじめとする名詞は、実物性が低いものの、「上(shang)」と共起することによって、一種の抽象的な「場」に場所化され、行為の存在する場所を言語化することができる。日本語では、活動のトコロに関しては、「卒業式で」、「ダンスパーティーで」、「縁日で」のように、格助詞の「で」で言語化するのが一般的である。

5.3 「上(うえ)」にならない「上(shang)」

「上(うえ)」は、物の表面という語源に基づき、トラジェクターがランドマークの外側であり、または外側にあるという空間的な関係を示すことができる。「上(shang)」は、外側や外の表面といった空間的な概念を言語化するのが困難である。この「上(うえ)」と「上(shang)」の相違点については、5.3.1で考察する。

また、「上(うえ)」は、格助詞の「で」と「に」、及び取り立て助詞の「は」と共起し、「前提・継起」、「添加関係」、「因果関係」といった事態どうしの抽象的な関係を表す機能を持っている。このような事態どうしの関係、すなわち、単文を越えて、文と句、文と文の関係を表す機能は、語用論及び談話分析の視点から、談話機能とも呼ばれる(大谷 2012: 113)。一方、「上(shang)」は、「上(うえ)」とは異なり、単文を越えて、文と句、文と文の関係を表す機能を持っていない。「うえで」、「うえに」、「うえは」といった表現は、「上(shang)」との対応が困難であり、普通の場合には他の中国語の表現で表される。

5.3.1節からは、「物体の外側」、「前提・継起」、「添加関係」、「因果関係」という4つの「上(うえ)」が含まれる表現が、中国語ではどのように訳されているのかを分析しながら、「上(shang)」と「上(うえ)」との相違点を分析する。

5.3.1 「上(shang)」が持たない用法①：物体の外側

5.1節でも論じたように、「上(うえ)」の語源は物体のオモテ、表面であり、ウラとの対立関係があり、すなわち外側、外側という用法を持っている。そして、注意しておきたいのは、「上(うえ)」には単なる物体の外側を表すだけでなく、外側によって覆われるという意味合いもある。この用法は、他の意味項目に比べると比較的少ないが、「上(shang)」にはこうした外側、外側の用法がない。

(91) a. 白いブラウスのえりを軍服の上に出して、とてもかつこうがよかった。

b. 把白襯衣的領子翻在軍裝外面，顯得很有精神。

<CJBC> (張海迪著 《輪椅上的夢》)

- (92) a. 浴衣の上に丹前を着て、部屋にすわると、どっと疲れが押しよせてくる。
 b. 她在浴衣外面套一件棉的便袍，到屋裡一坐下，頓時感到十分疲勞。

<CJBC> (水上勉著 『越前竹人形』)

具体的に言えば、(91)は、ブラウスの襟が、トラジェクターとして軍服というランドマークの外側にあり、軍服の一部を覆うという空間的なシーンを表している。(92)も同様に、トラジェクターとしての丹前は、ランドマークの浴衣の外側にあり、ランドマークの浴衣を覆っている空間的な位置関係を言語化している。(91)と(92)における「上(うえ)」が、中国語に訳される場合にはいずれも「外面」となり、「上(shang)」と訳されれば不自然な文となる。

5.3.2 「上(shang)」が持たない用法②：前提・継起

(93)における「上(うえ)」は、本来の形は「うえで」であり、「で」が省略されている。(93)の「上(うえ)」は、主催先を確認するという前件の動作が完結した後に、それを踏まえて出席するという後件の行為、動作を行う、という前提・継起の関係を表している。このような「上(うえ)」の用法は、「上(shang)」には還元できず、他の表現が用いられる。

例えば、『坊ちゃん』で取り上げられた(94)の原文は、3つの中国語の訳し方に対応する。「上(shang)」は、(93)や(94)のような事態どうしの前提・継起の関係を言語化する機能をもっておらず、(94)の「うえで」という表現は、いずれも中国語の「之後」(のあとで)を用いて訳されている。

- (93) a. 開催先をお確かめたうえ、ご出席ください。
 b. 請在確定會址後，出席會議。

(『白水社 中国語辞典』)

- (94) それから校長は、もう大抵御意見もない様でありますから、よく考えた上で処分しましょうと云った。
 a 訳: 校長接著說：“看來大家沒有別的什麼意見了，仔細考慮之後再給予處分。”
 b 訳: 隨後，校長說：“大體上諸位已經沒有什麼意見了，我要充分加以考慮之後，再進行處分。”
 c 訳: 這時，校長說：“看起來，意見大致發表完了。待我好好考慮之後，再作出處分吧！”

<CJBC> (夏目漱石著 『坊ちゃん』)

- (95) a. 新たに市街化される地域では、土地利用計画を明確にしたうえで、市街地として必要な道路率、空地率を決め、道路、上下水道などの基幹的な施設を先行的に整備する。
- b. 對那些已經市區化的郊區，在確定土地利用計畫的基礎上，劃分出市區必要的街道比率、空地比率，並首先著手整修道路和上下水道的基本設施。

<CJBC> (田中角栄著 『日本列島改造論』)

ただし、「上(shang)」は、「上(うえ)」と異なり、まったく前提・継起を示すことができないわけではない。(95)のように、「基礎」という物であるが、場所性も有する言葉を加えることを通して、「上(shang)」と「上(うえ)」との対応関係（厳密に言えば、「基礎上」と「うえ」での対応関係）はある程度見られるからである。要するに、中国語では、「上(shang)」は、単独で「上(うえ)」のようなコトとコトの間にある前提・継起を示すのが困難である、ということである。

5.3.3 「上(shang)」が持たない用法③：添加関係

(96)、(97)における「うえ」は、前件の事柄に加えて、さらに別の事柄が添加されているという添加関係を示すものであり、本来の形が「うえに」であるが、「に」が省略されている。このようなコトとコトとの添加関係は、中国語では「上(shang)」ではなく、「不但……，而且……」，「不僅……，還……」といった相関接続詞で示するのが一般的である。

- (96) a. 压榨方法を「玉じめ」と呼んでいました。この方法だと手間がかかるうえ、ゴマに含まれている油の二十五%くらいしかしぼれないそうです。
- b. 這種壓榨方法被稱為“球榨”。要是採用這種方法，不但耗費人力體力，而且至多只能從芝麻中榨出 25%左右的油量。

<BCCWJ> (魚柄仁之助著 『うおつか流清貧の食卓』、中国語は筆者による)

- (97) a. ごちそうになったうえ、素敵なおプレゼントまでいただきました。
- b. 不僅請吃了飯，還收到了漂亮的禮物。

(アジア学生文化協会留学生日本語コース編集 『完全マスター2級』)

具体的に言えば、(96)は、前件の「手間がかかる」に、さらに後件の「二十五%くらいしかしぼれない」が加わってしまったというマイナス方向の添加を示す事例である。また、(97)における「上(うえ)」は、前件の「ごちそうになった」という事柄に、「プレゼントまでいただきました」の後件が添加されたというプラス方向への追加の事例を示している。一方、中国語では、マイナス方向の添加にせよ、プラス方向の添加にせよ、「上(shang)」ではなく、別の表現で言語化される。

5.3.4 「上(shang)」が持たない用法④：因果関係

「上(うえ)」は、取り立て詞の「は」と共起することによって、因果関係を表すことができる。例えば、「態度を観察したうえで決めた」という「うえで」を含んだ文では、前件の「態度を観察した」という行為を継いで、後件の「決めた」が発生している。「うえは」も同様に、(98)で言えば、「お志を拝見しました」という前件が整えば、「協力いたします」という後件も自然に発生することを示している。

(98) a. 宮さまのお志を拝見しました上は、私も身を捨ててご協力いたしますわ。

b. 既然已经看到陛下的雄心壮志，我一定舍生鼎力相助。

<BCCWJ> (田辺聖子著 『霧ふかき宇治の恋』、中国語訳は筆者による)

(99) a. 正直、誠実、努力が甲斐ないこととわかったうえは、こんなふうにグレてみるのもいいだろう。

b. 好吧，老实，规矩，要强，既然都没用，就变成这样的无赖也不错。

<CJBC> (夏目漱石著 『坊ちゃん』)

一方、「上(shang)」は、このような抽象的な空間におけるコトとコトとの積み重ねを示す機能を持っていない。(98)、(99)の訳文から分かるように、中国語では、「うえは」と対応し、因果関係を示す言葉は、「上(shang)」ではなく、「既然……，就……」という表現である。

6. まとめ

「上(うえ)」と「上(shang)」は、ランドマークよりもトラジェクターのほうが高いという空間的なシーン、すなわち「接触ありの高所」と「接触なしの高所」を示す点に関して共通している。そして、メタファーを通して、「上(うえ)」と「上(shang)」は、いずれも、「優れる」、「高い地位」、「数量が多い」という語彙的な意味拡張が生じている。しかし、「上(うえ)」と「上(shang)」には、異なっているところもある。すなわち、「上(うえ)」は、「上(shang)」と異なり、順序を言語化する能力が大きく制限されている。

語源の面から言えば、「上(うえ)」の語源は、物体の表面という概念から由来したものであり、ウラとの対立が見られる。一方、「上(shang)」の語源は、物の位置にかかわり、高低の対立が見られる。このような相違があるため、現代中国語では、「上(shang)」は、「上(うえ)」と異なり、「物の外側」を言語化することができない。

機能拡張の点から分析すると、「上(うえ)」と「上(shang)」とは大きく異なっている。「上(うえ)」は、メタファーによる文法化を通して、機能語として、主に前件の事柄と後件の事柄との関係を言語化する役割を果たしている。これに対して、「上(shang)」は、メトニミーによる文法化を通して、物を場所に変えるという場所化の機能を果たしている。

第2章 日本語の「下(した)」と中国語の「下(xia)」との比較

1. はじめに

1.1 研究の背景

「上(shang)」と「上(うえ)」に関する研究は多数存在しているが、日本語の「下(した)」と中国語の「下(xia)」に関する研究は、非常に少ない。特に、認知言語学の視座から、「下(した)」と「下(xia)」の意味及び機能についての比較研究は、管見する限りでは極めて少ない。

日本語の「下(した)」に関する研究を概観すると次のようになる。方 (2009: 31-40)は、日本語学の枠組みに基づき、日本語の「下(した)」と「下(もと)」を対象に、両者の相違点を対比して、「下(した)」が(1a)のように主に具体的な空間概念を表しているのに対して、「下(もと)」が(1b)のように主に抽象的な空間概念や状況を表している、と指摘している。

- (1) a. ロクさんの店は、南武線の線路を載せた土手の下にあった。
- b. 社長のもとへ赴いた。

(方 2009: 32-33)

安 (2014a: 336-347)は、可視性の強弱という視点を加味して「重力軸に基づく階層構造からの意味拡張」の現象を取り上げて、日本語では、重力軸に沿う下方という空間的な概念が裏・深層・内部を示す機能もあると論じている。具体的に言えば、物体が下に位置している場合と、物体が裏に位置している場合では、いずれも比較的的可視性が弱く、あるいは、地下のように可視性を持たないという点で共通している。したがって、「服の下に下着を着る」における「下(した)」は、重力軸と関わりのない服の内部という解釈がなり得る (安 2014a: 340)。

中国語の「下(xia)」についての研究は、それほど多くないが、陳 (2000)が代表的なものとして、ここで取り上げることにする。陳 (2000)によれば、「下(xia)」が空間的な意味を「下位の用法」、「底部の用法」、「遮断の用法」という三種類に分けて、説明している。こうすることによって、「下(xia)」に対する分析が一步進んだが、この分け方に関してさらに吟味すべきところが少なくない。例えば、「下位の用法」と「遮断の用法」という2つのタイプの間には重なっている部分が多い。

- (2) a. 莫天良竟張惶地抽出枕下手槍。
(莫天良は不安にかられながら、枕の下から拳銃を取り出した。)
- b. 遺址因為埋藏在地底下。
(遺跡が地の下に埋まっているからだ。)

c. 昏暗的燭光下。

(暗い蠟燭の光りのもと)

(陳 2000: 32-46, 日本語訳は筆者による)

具体的な例で言えば、(2a)における「枕下」が「下位の用法」であるのに対して、(2b)における「地底下」が「遮断の用法」であると主張している。しかし、この2つの表現は、必ずしも異なる種類の用法ではなく、いずれもトラジェクター(拳銃・遺跡)がランドマーク(枕・地)によって覆われ、ランドマークの下方にある。また、(2c)における「燭光下(ろうそくの光りのもと)」という表現は、陳(2000)では「下位の用法」に分類している。しかし、蠟燭の真下ではなく、蠟燭の光りで照らした下部の領域であり、「燭光下」における「下(xia)」を「下位の用法」で説明するのは、必ずしも妥当とは言えない。

1.2 本章の目的

本章は、日本語の「下(した)」と中国語の「下(xia)」という2つの下方を言語化する空間辞を対象にして、認知言語学の枠組を踏まえ、以下の4つの点の解明を目的とする。第一に、いかに認知言語学の理論に照らし、「下(した)」と「下(xia)」との空間的な意味をより詳しく述べるか、という問題である。例えば、「下に落ちる」、「山の下」、「コートの下にシャツを着る」といった表現では、いずれも「下(した)」が含まれているが、それぞれの「下(した)」の用法をどのように記述して説明するかという問題が挙げられる。

第二に、「下(した)」と「下(xia)」によって言語化されたモノ同士の位置関係にはどのような相違点が見られるか、という比較の問題である。例えば、「下(した)」と「下(xia)」とは互いに対応するケースが多いが、「コートの下にシャツを着る」という日本語の表現における「下(した)」と「脚下」という中国語の表現における「下(xia)」といった場合では、「下(した)」と「下(xia)」を対応づけるのが困難である。以上、空間辞の意味の詳述と比較の問題については第2節で取り上げる。

第三に、「下(した)」と「下(xia)」は、どのような非空間的意味及び機能を持っているか、という意味拡張の問題である。こうした語彙的な意味拡張については第3節で考察する。第四に、「下(した)」と「下(xia)」が本来持っている空間的な意味の違いが、両者の非空間的意味及び機能の拡張に、どのような影響を与えるかという、意味拡張の面と比較の面とも関連する問題である。すなわち、「下(した)」と「下(xia)」の本来の空間的な相違点を踏まえて、「下調べ」における「下(した)」が、「下(xia)」とは対応できず、また、「監視下」における「下(xia)」が「下(した)」とは対応できないといった現象を、どのように説明するかという問題である。この機能拡張の問題については第4節で扱うことにする。

2. 「下(した)」と「下(xia)」の空間的な意味

この第2節では、日本語の「下(した)」と中国語の「下(xia)」が持っている空間的な意味を詳述したうえで、両者の相違点を中心に考察する。

2.1 「下(した)」の空間的な意味

この2.1節では、「下(した)」の各種類の空間的な意味について、認知言語学の視点に立ち、ランドマークとトラジェクターとの相互関係を重視する立場から、「下(した)」の各意味項目を考察する。「下に落ちる」、「本棚の下の段に本を入れる」、「背広の下にセーターを着る」という3つの文では、いずれも「下(した)」という表現が含まれているが、それぞれの「下(した)」が示す空間的な関係は、必ずしも同様ではない。

「下に落ちる」は、参照物のベランダより低い位置を示している。「本棚の下の段に本を入れる」の「下(した)」は、参照物の棚の下の所、すなわち底の部分を示している。「背広の下にセーターを着る」における「下(した)」は、参照物と対象物との高低の関係を示すものではなく、参照物のセーターの内部を意味している。

2.1節では、上記にまとめられたように、現代日本語における空間的な意味を、「下方の用法」、「下部の用法」、「内側の用法」という3つの種類に分けて、それぞれ論じていくことにする。

2.1.1 「下(した)」：下方の用法

参照物の下方を示す「下(した)」の用法は、英語の前置詞の **under** と非常に似ている。Gärdenfors (2007: 57-76)では、**under** のスキーマを次の図 2-1 のようにまとめている。図 2-1 では、Up の矢印が上方を示しており、その逆の方向が下方である。**under** で言語化されているのは、細い線の円形のランドマークの真下に、太い線の円形のトラジェクターがあるという空間的なシーンである。本論文は、「下(した)」の参照物の下方を示す用法も図 2-1 で説明できると考えている。そして、図 2-2 のように、「下(した)」の「下方の用法」はさらに4つの種類に分けることができる。

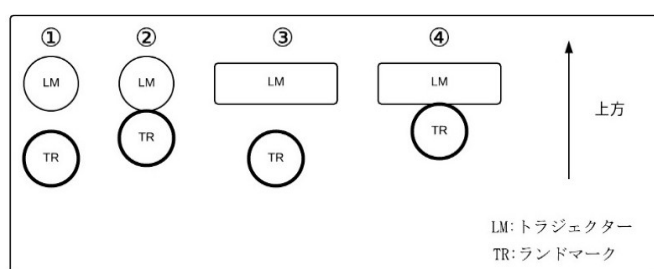
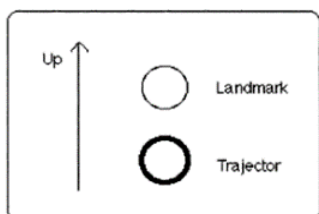


図 2-1 **under** の意味 (Gärdenfors 2007: 62)

図 2-2 「下(した)」の「下方の用法」

「下方の用法」の場合、図 2-2 において「下(した)」は、一般にトラジェクターがランドマークより低いところに位置しているという空間的な場面を言語化している。より詳細に言えば、トラジェクターが、それと幅の違いが顕著ではないランドマークの直下(図 2-2 の①と②のように)に、あるいは、ランドマークの領域内に覆われているような下方(図 2-2

の③と④のように)に存在するということである。さらに、トラジェクターとランドマークは離れている場合(図 2-2 の①と③のように)と、接触している場合(図 2-2 の②と④のように)がある。

(3) 高速道路の下を抜け坂道を登っていく。

(金子正彦著 『四国お遍路旅物語』)

(4) 立っている足の下地面が、グラグラとくずれていくような名状しがたい不安があった。

<BCCWJ> (江戸川乱歩著 『大暗室』)

例えば、(3)における「下(した)」は、トラジェクターの発話者が、ランドマークの高速道路より低い下方をくぐったという空間的な位置関係を示している。この場面では、ランドマークの高速鉄道とトラジェクターの発話者とは、直接的に接触していない。これに対して、(4)では、「足の下地面」という表現では、ランドマークの足とトラジェクターの地面(足に踏まれている所)が接触している。

(5) a. カケスが、ミズナラなどのドングリを草や落ち葉の下に隠すのは、食べ物の少ない冬に備えて貯蔵するためです。

<BCCWJ> (杉森文夫編 『とり』)

b. 机の下に隠れたり、家具の少ない部屋へ移動したりして身を守りましょう。

<BCCWJ> (福井市役所編 『市政広報ふくい』)

また、トラジェクターは、ランドマークの下方にある際に、上方のランドマークによって覆われている場面がよくある。例えば、(5a)の「ドングリ」が「葉」によって覆われ、「葉」の下方に隠れている。(5b)では、地震などの災害が発生したときに、人が机の下方に隠れて机の表面によって覆われ、身を隠すという空間的な関係を示している。(5)における「葉」と「机」は、ランドマークとして、比較的に「大きい」面(トラジェクターと比べると)を持っているので、一種のカバーのように下方のランドマークを被ったり、覆ったりしている。

2.1.2 「下(した)」：下部の用法

「下(した)」の「下部の用法」は、トラジェクターがランドマークという実体の低いところに位置している場面である。具体的に言えば、「下部の用法」のランドマークは、山のような高い物である場合もあり、そして、ビルのような高い建築物もある。このため、本論文は、「下(した)」の「下部の用法」を、さらにランドマークの種類によって、「高い物の下部」と「容器・建物の下部」という2つのタイプに分けて考察していく。

第一に、「下(した)」の「高い物の下部」の用法の場合では、トラジェクターは、垂直にそびえ立つように高い実体としてのランドマークの下側の底面や裾の所にある。注意しなければならないのは、「高い物」という概念について、Taylor (2003: 136)では、山が高いのような *extensional high* (そびえ立つように高い)と、天井が高いのような *positional high* (位置的に高い)を区別している。*extensional high* (そびえ立つように高い)とは、ある実体の垂直方向の長さが、他の実体より高いということである。*positional high* (位置的に高い)とは、ある実体が普段垂直方向において位置している高度のことである (cf. Taylor 2003: 136)。例えば、「太郎は花子より背が高い」と「鳶は高く飛ぶ」という2つの文における「高い」は、それぞれ *extensional high* と *positional high* に対応している。

「高い物の下部」という用法における「高い物」は、星や太陽のような地面を高く離れている位置的に高いものではなく、垂直軸に一定の長さを持ち、一般の物(例えば、人間)より高い実体のことである(*greater than average vertical extent of an entity*)。

(6) a. 彼女はあの夜、フランス山の下にあるホテルで誰かと会ったようです。
<BCCWJ> (山崎洋子著 『柘榴館』)

b. ついこの間まで御夫婦であの山の下の畑を汗水たらして耕していなすった。
<BCCWJ> (志村有弘編 『怪奇・伝奇時代小説選集』)

(7) a. 逢坂の下には、堀兼の井があり、遠方から茶の湯の水を汲みにくるくらい、水がいい。
(群ようこ著 『浮世道場』)

b. 坂の下の駐車場で観光バスを降りて、坂を上って行きました。
<BCCWJ> (森清範著 『清水寺』)

例えば、(6)における「山の下」という表現は、ランドマークの山の底面の部分を意味している。トラジェクターの「ホテル」、「畑」は、「山」の底面、すなわち、麓あるいは山裾のところに位置しているという空間的な位置関係である。(7)における「坂」は、「山」という地面に直立するランドマークとやや異なり、片方が高く、もう一方が低く傾斜しているが、そびえ立つように高い物の一種で捉えられる。トラジェクターの「井」、「駐車場」が坂の下にあるとは、坂の上り口の周辺、すなわち坂の底のところに位置しているということである。

第二に、「下(した)」の「容器・建物の下部」の用法を示せば、次のようになる。「容器の底」の場合では、トラジェクターは、棚や冷蔵庫のようなランドマークの底部の所に、すなわち下方の所に位置している。例えば、(8)における「棚」は、一定の容積を持つ三次元的な物である。「棚の下」における「下(した)」、その空間の底の部分の意味している。

(8) ジニーは衣裳戸棚の下にもぐりこんだ。

<BCCWJ> (矢部真理著 『魔女とプレイボーイ』)

「建物の下」の「下(した)」の場合では、予め強調しなければならないのは、トラジェクターがランドマークのすそにあるという「高い物の下部」の「下(した)」とは異なり、トラジェクターがランドマークの中に位置する場合もあるという点である。人間にとって、オフィスビルのような建物は、山のようにそびえ立つように高いものであると同時に、人や物などを納めるものでもある。

(9) ビルの下の階で火災が起きると、有毒ガスが煙突を昇るようにたちまち上へ流れていく。

<BCCWJ> (寺垣武著 『知恵』)

具体的に言えば、「建物の底」の「下(した)」という用法の場合では、トラジェクターは、そびえ立つように高い建物というランドマークの下の部分であることもあるし、ランドマークの中の底に位置していることもある。例えば、(9)における「ビルの下の階」というのは、ランドマークのビルという全体の下を意味する。すなわち、トラジェクターの「下の階」は、ランドマークの「ビル」の下の部分を示している。

2.1.3 「下(した)」：内部の用法

「下(した)」の「内部の用法」とは、トラジェクターがランドマークによって包まれて、ランドマークの裏側あるいは内部にあるという用法である。「下方の用法」と「下部の用法」の場合には、ランドマークとトラジェクターとの位置関係は、重力の軸に沿って位置の高低によって捉えられる。これに対して、「内部の用法」で用いられる場合には、「下(した)」におけるランドマークとトラジェクターとの位置関係は、重力の軸の方向で捉えられなくなり、内外軸で捉えられなければならない。

(10) インクがよく乾かないうちに何度も重ねてしまうと、下に塗ったインクがはがれてしまう可能性がある。焦らず、よく乾かしてから重ね塗りしよう。

<BCCWJ> (大越友恵著 『ホビージャパン』)

例えば、(10)では、インクが水平面に塗られた場合でも、柱や壁や仏像のような地面に直立する物体に塗られた場合でも、インクとインクとは、内側と外側の対立にある。すなわち、表層のインクと内層のインクは、それぞれランドマークとトラジェクターに対応し、内層のインクが表層のインクによって覆われている、という空間的な位置関係にある。

- (11) a. 靴下: 靴を履くときなどに、足にはく内ばきの総称。日本では、7~8世紀、束帯のおり、沓(履)(くつ)の下に襪(しとうず)という布製の沓下(くつした)が用いられたことが、正倉院の宝物によって知られている。
(『日本大百科全書』)
- b. 下着: 表に着的る衣服によって他人の目から隠される、あるいは大部分が隠されてしまう衣服の総称。
(『日本大百科全書』)

ここで指摘したいのは、「下(した)」の「内部の用法」には、トラジェクターがランドマークによって遮られたり、隠されたりして、表側に出ず、可視性が比較的に低いという特徴がある、ということである。また、内部の意味で使用されている「下(した)」は、文のみならず、(11)で示されている「靴下」や「下着」といった例から分かるように、一種の造語成分として使用されている。

2.2 「下(xia)」の空間的な意味

本節では、「下(xia)」の空間的な意味を考察する。(12)の3つの文では、いずれも「下(xia)」が含まれているが、それぞれの意味が同様ではない。(12a)の「下(xia)」は、蚊取線香がテーブルより最も低いところに、すなわちテーブルの真下にあるという空間的なシーンを示している。(12b)の「下(xia)」は、坂の最も低い部分を意味する。また、(12c)における「下(xia)」は、参照物と対象物との高低の関係を示すものではなく、参照物の周辺、または「基(もと)」の部分の意味している。本節では、現代中国語における「下(xia)」の空間的な意味を、「下方の用法」、「下部の用法」、「基部の用法」という3つの種類に分けて、それぞれに論じていくことにする。

- (12) a. 一盘蚊烟香放在方桌下。
蚊取り線香をテーブルの下に置いた。
<CJBC> (茅盾著 《霜葉紅似二月花》)
- b. 汽车在通往大根家门口的缓坡下停住, 杏子一人走上前去。
自動車を大根家へのはいり口のだらだら坂の下で停めて、杏子は自分だけその家へは行って行った。
<CJBC> (井上靖著 『あした来る人』)
- c. 右面是白雪覆盖的菜地, 在邻家的墙下, 栽下一排柿子树。
右手は雪をかぶった畑で、左には柿の木が隣家の壁沿いに立ち並んでいた。
<CJBC> (川端康成著 『雪国』)

2.2.1 「下(xia)」：下方の用法

「下(xia)」は「下(した)」と同様に、「下方の用法」を持っている。つまり、「下(xia)」は、トラジェクターがランドマークの真下の領域に位置するか、あるいは、トラジェクターがランドマークの領域内に覆われているという空間的なシーンを言語化することができる。

そして、「下方の用法」の場合、「下(xia)」は「下(した)」と同様に、ランドマークとトラジェクターとの接触の有無と、ランドマークが覆うものであるかどうかによって、さらに4つのタイプに分けられる。

- (13) a. 題著“雅集園高等茶社”七個字的玻璃燈匾下。
 b. 「雅集園高等茶社」の七字をいれた長方形の小さなガラス製の看板の下。
 <CJBC> (茅盾著 《霜葉紅似二月花》)
- (14) a. 杯子下放著書。
 b. コップの下に本がある。
 <CJBC> (謹容著 《人到中年》)
- (15) a. 大家全都把要洗的东西塞到床下。
 b. みんな洗濯物をどんどんベッドの下に放りこんでおく。
 <CJBC> (村上春樹著 『ノルウェイの森』)
- (16) a. 她把那本日記壓在枕下，頭一次體驗到失眠的滋味。
 b. 彼女はその日記を枕の下に入れ、生まれてはじめて眠れぬ夜を知った。
 <CJBC> (劉心武著 《鐘鼓樓》)

具体的に言えば、(13)の「匾下」(看板の下)という表現における「下(xia)」は、トラジェクターがランドマークの下方の空間を示している。すなわち、(13)の場合では、トラジェクターは、ランドマークと離れている下方にあるということである。一方、(14)における「下(xia)」は、トラジェクターの本がランドマークのコップの真下に位置しているだけでなく、本とコップが接触しているという空間的なシーンを言語化している。

また、(15)の「床」(ベット)と(16)の「枕」はランドマークとして、(13)、(14)とは異なり、トラジェクターを覆っている。(15)の「下(xia)」の場合では、トラジェクターの洗濯物がランドマークのベットによって覆われているが、両者が直接には接触していない。しかし、(16)の「下(xia)」の場合では、ランドマークの枕とトラジェクターの日記とが直接接触している。

2.2.2 「下(xia)」：下部の用法

「下(xia)」は、「下(した)」と同様に、対象物が高くそびえる参照物の底の所にあるという空間的なシーンを言語化する機能を持っている。本節では、2.1.2節に照らし、「下(xia)」の下部の用法も、ランドマークの種類によって、「高い物の下部」と「容器・建物の下部」と

いう2つのタイプに分けて考察していく。

- (17) a. 南窗和秀子走出大殿后，不一会儿来到衣笠山下的孤峰庵的墓地。

本堂を出た南窓と秀子はやがて衣笠山の下にある孤峯庵の墓地にまいった。

<CJBC> (水上勉著 『雁の寺』)

- b. 鸡在斜坡下的远处漫步，对射击者满不在乎。

鶏は斜面の下の遠いところを、射撃者を無視した足取りで歩いていた。

<CJBC> (大岡昇平著 『野火』)

(17)では、トラジェクターの位置は、ランドマークより低い地点にあるのみならず、その地点がランドマークの底部である。具体的に言えば、(17a)における「衣笠山」、(17b)における「斜坡」は参照物として、いずれもそびえ立つように高い物であり、それらの高さが対象物の「墓地」、「鶏」と較べ、顕著に高いという特徴を持っている。

「匾下有人」(看板の下に人がいる)という「下方の用法」の場合では、トラジェクターは、ランドマークより低いところにあるが、トラジェクターがランドマークに位置しているわけではない。これに対して、「高い物の下部」の場合では、(17)で取り上げた「下(xia)」の事例から分かるように、トラジェクターの墓地、鶏の位置が、いずれもランドマークの下に、すなわち底部にある。

- (18) 滑雪场里有个小卖部吧，雪崩把它冲塌了，楼下的人还不知道。

スキー場に売店があるでしょう、あの二階を雪崩が突き抜けて、下にいた人はそんなことを知らなくて…

<CJBC> (川端康成著 『雪国』)

また、「下(xia)」は、「下(した)」と同様に、トラジェクターが、容器、建物であるランドマークの下部に位置しているという空間的なシーンを言語化することができる。例えば(18)における「下(xia)」は、トラジェクターの人が、二階建ての小売店というランドマークの下部にいるという空間的なシーンであることを意味している。

2.2.3 「下(xia)」：基部の用法

「下(xia)」の「基部の用法」とは、トラジェクターがランドマークの下方の周りにあるということである。具体的に言えば、「下(xia)」の「基部の用法」の特徴は、一般的には、ランドマークがトラジェクターより高い、そして両者の間に接触がないが、ランドマークが何らかの形でトラジェクターに影響を与えている、という点である。

2.1.2 節でも論じたように、Taylor (2003: 136)では、高い (HIGH)という概念をさらに、そびえ立つように高いもの (extensional high)と、位置的に高い物 (positional high)を区別して

いる。ここで指摘したいのは、「下部の用法」のランドマークが山やオフィスビルのようなそびえ立つように高い物であるのに対して、「基部の用法」のランドマークが、そびえ立つように高い物のみならず、位置的に高い物も関与している、ということである。本節では、「下(xia)」の「基部の用法」を、ランドマークの違いによって、「そびえ立つように高い物の基部」と「位置的に高い物の基部」という2つの下位タイプに分けて論じることにする。(19)は「そびえ立つように高い物の基部」を示す例文であり、また(20)は「位置的に高い物の基部」を示す例文である。

- (19) a. 在鄰家的牆下, 栽下一排柿子樹。

柿の木が隣家の壁沿いに立ち並んでいた。

<CJBC> (川端康成著 『雪国』)

- b. 中野學校把收錄機放在升旗台下。

中野学校がテープレコーダーを掲揚台のもとに置く。

<CJBC> (村上春樹著 『ノルウェイの森』)

- c. 曾根把背囊放在腳下。

曾根はリュックを降ろすと足許に置いた。

<CJBC> (井上靖著 『あした来る人』)

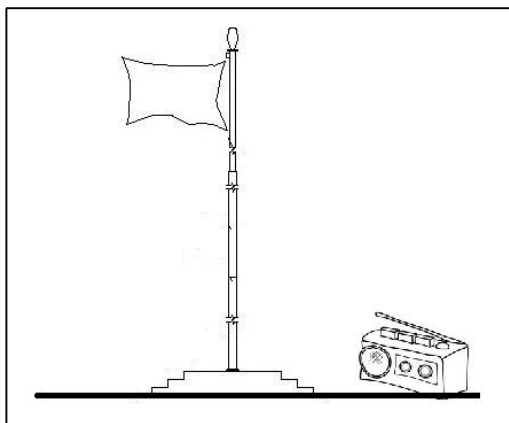


図 2-3 「升旗台下(掲揚台のもと)」

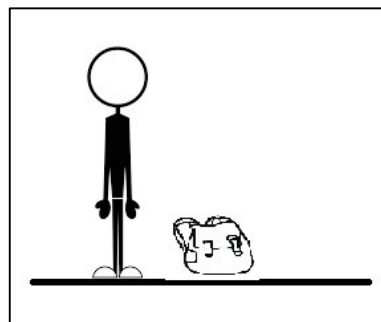


図 2-4 「腳下(足元・足許)」

まず、(19)の「下(xia)」の「そびえ立つように高い物の基部」という用法について分析する。現代中国語では、「牆」(かべ)や「柱子」(柱)などのそびえ立つように高い物は、ランドマークとして、「下(xia)」と共起する場合には、ランドマーク自体の下部、または、ランドマークの真下の空間を示すものではない。「牆下」、「柱子下」といった表現における「下(xia)」は、ランドマークを中心にして、その周辺を意味している。

具体的に言えば、(19a)では、トラジェクターの「柿子樹」(柿の木)がランドマークの「牆」(壁)の「下(xia)」にあるとは、「柿子樹」が「牆」と離れている周辺、すなわち壁沿いのところに位置しているということである。(19b)も同様に、「升旗台」(掲揚台)の「下(xia)」という位置は、ランドマークの「升旗台」の真下ではなく、掲揚台を取り囲むように周辺のことを意味している。つまり、トラジェクターの「収録機」(テープレコーダー)は、「升旗台」というそびえ立つように高い物の周囲にあるということである。さらに、(19c)における「脚」(足)も、ランドマークとして「下(xia)」と共起する際に、足を中心にして、足より低く近い空間を意味している。

「下(xia)」の「位置的に高い物の基部」という用法では、ランドマークは、高い所に位置している太陽や月のような実物である。「そびえ立つように高い物の基部」の場合では、ランドマークは壁や掲揚台のように、重力の方向に長いという特徴を有する。その一方で、太陽や月のような「位置的に高い物の基部」のランドマークは、重力の方向に長いという特徴を持っておらず、トラジェクターより高い所に位置しているものである。

(20) a. 在炎熱的太陽下，他正滿神氣的走在東四大街上。

焼きつくような太陽のもとを、さっそうと東四大街を歩いていた。

<CJBC> (楊沫著 《青春之歌》)

b. 枯枝帶著餘香驕傲地立在冷月下。

余香を帯びた枯枝が傲慢な姿で冷たい月のもとに立ち (略)

<CJBC> (巴金著 《家》)

例えば、(20a)と(20b)における「太陽」と「月」というランドマークは、「下(xia)」と共起する場合、太陽、月の真下ではなく、太陽、月を中心に、それらの光りが地面に投射され覆われている場所、いわゆる一種の間接的な基部の範囲を示している。このような場合では、(20a)のトラジェクターの「他」(主人公)が、ランドマークの「太陽」そのものにいるわけではなく、「太陽」の間接的な基部に位置している。同様に、(20b)のトラジェクターの「枯枝」も、ランドマークの「月」の光に覆われている地面の領域にある。つまり、「太陽下」と「月下」といった表現は、ランドマークの影響が及ぶ範囲を意味し、トラジェクターがこの範囲に存在したり、この範囲で行動したりしているということである。

(21) 一日夜深，孤坐燈下，想到遠離祖國、親人，不覺有些淒清。

一日が終わり、夜が深まり、一人、明かりのもとで、遠く離れた祖国、親しい人を思うと、思わずかなり寂しさを覚えた。

<CJBC> (羅興典編 『日本戦後名詩百家集』)

「太陽」や「月」といった自然物は、常に人間の存在する場所より遥かに遠くて高い所にあり、いわゆる典型的な位置的に高い物であるが、「燈」(明かり)のような実物も間接的な基部を持っている。例えば、(21)の「燈下」という表現における「下(xia)」は、「燈」の光が及ぶ範囲を言語化している。

2.3 空間的な意味の対照

この2.3節では、日本語の「下(した)」と中国語の「下(xia)」との空間的な意味の異同について、両者が相違している点を中心に分析する。

2.3.1 「下(した)」と「下(xia)」との共通点

2.2節では、日本語の「下(した)」と中国語の「下(xia)」の空間的な用法を分析した。これらの分析に基づき、日本語の「下(した)」と中国語の「下(xia)」との共通点をまとめれば、主に次の二点となる。第一に、「下(した)」と「下(xia)」はいずれも、トラジェクターがランドマークの下方に位置しているという「下方の用法」を持っている。(13)～(16)の文における「下(した)」と「下(xia)」は、基本的に対応している。

また、「下(した)」の「下方の用法」は、ランドマークとトラジェクターと接しているかどうか、トラジェクターがランドマークによって覆われているかどうかによって、さらに4つの下位カテゴリーに分けられる。「下(xia)」は、ほぼ「下(した)」と同様に、この4つの下位範疇的な「下方の用法」を持っている。

第二に、「下(した)」と「下(xia)」は、いずれも「下部の用法」を持っている。「下部の用法」の参照物は、山や坂のような裾野にあるまたは延長線上にある高い自然物と、棚や箱のような重力の方向に長いという特徴を持つ容器という2つの種類がある。この2種類のランドマークの共通点は、両方ともそびえ立つように高いものだということである。「下(した)」と「下(xia)」は、山のようなそびえ立つように高いランドマークと共起する場合は、これらの参照物の下部を言語化できる。

2.3.2 「下(した)」と「下(xia)」との相違点

「下(した)」と「下(xia)」との相違点については、結論から言えば、主たる次の2つの点が見られる。第一に、「下(した)」は、ランドマークの裏、内部を言語化する用法を持っているが、「下(xia)」は裏、内部を言語化するのが困難である。第二に、「下(xia)」は、「基部の用法」を持ち、トラジェクターがランドマークの周辺に位置しているという空間的なシーンを言語化することができるのに対して、日本語では同じ漢字で綴られる場合もあるが、「下(した)」ではなく、「下(もと)」または「基(もと)」で言語化する。本節では、こうした「下(した)」と「下(xia)」との相違点を、詳しく分析していく。

- (22) a. 彼女は男もののくしゃっとした白いステン・カラー・コートの下に黄色い薄いセーターを着て、ブルージーンズをはいていた。
 b. 她穿一件男人穿的那種皺皺巴巴的白色直領外套，裡面是薄薄黃毛衣，下著藍色牛仔褲。

<CJBC> (村上春樹著 『ノルウェイの森』)

- (23) a. 下着を付ける。
 b. 穿內衣。

(『デイリーコンサイス中日辞典』)

2.3.1 節でも論じたように、日本語では、「下(した)」という空間辞が、主に重力軸に基づいて形成された上下軸で、ランドマークとトラジェクターとの位置関係を言語化する。そして、内外軸で言語化する場合もある。例えば、(22a)及び(23a)における「下(した)」は、トラジェクターがランドマークの裏側、奥の方、内部の方にあるという意味である。しかし、この場合には、中国語の「下(xia)」と日本語の「下(した)」との対応が困難である。(22a)の「下(した)」は、(22b)では「裡面」で、直訳すれば「裏の面」という表現となる。また、(23a)の「下着」という表現も、中国語では「內衣」となっている。

- (24) a. I was wearing two sweaters under the green army jacket.
 b. He had no shirt on under his thin jumper.

(Collins COBUILD Advanced Learner's Dictionary)

重力軸の方向に基づいて生じた上下軸に関する空間的な概念が、重力軸の方向とは関係のない軸に移るという現象は、「下(した)」のみならず、他の言語でも見られる。例えば、(24)における英語の *under* という参照部の下方を表す前置詞も、参照物の内部の意味がある。

ここで指摘したいのは、「下(した)」や *under* のように、下部と内部との変化という現象の背後には、<上/下>と<裏/表>との間に緊密な関係がある、ということである。すなわち、重力軸に基づく空間的な概念が他の空間的な概念を示すようになる、という現象である。対照的なのは、中国語の「下(xia)」である。中国語の「下(xia)」の場合には、重力軸の方向性を捨象して、下方から内部への変換という現象が容易に生じない。

具体的に言えば、安 (2014a: 336-348) によると、日本語では、<上/下>と<裏/表>という2つの概念領域の間に、重力軸の方向性を捨象することによって、緊密に関与するようになる。例えば、日本語では、「服の下に下着を着る」という文も容認できるのは、日本語話者が重力軸から上下の方向性を見出す能力を持っており、その上下の方向性を、重力軸の方向と一致しない場面(本来内や外といった空間概念で捉える場面)に投影することによって認識できるからである(安 2014a: 343-345)。しかし、中国語の「下(xia)」は、重力軸の方向

性を捨象できず、内外といった他の空間的な概念を言語化するのが困難である。つまり、「下(した)」と異なり、「下(xia)」は、参照部と対象物との関係が常に重力軸の方向性の影響を受けているということである。

以上、トラジェクターがランドマークの内部にあるという空間的なシーンを言語化する能力について、「下(した)」と「下(xia)」の相違を比較した。次に、「下(xia)」の「基部の用法」を中心に、「下(xia)」と「下(した)」との相違点を論じていく。

「下(した)」と「下(xia)」の差異を分析するにあたって、「基部の用法」の特徴を改めて強調しなければならない。2.2.3節でも論じたように、「基部の用法」に関して次の2つの特徴がある。第一に、トラジェクターの位置は、ランドマークの位置より低い。第二に、トラジェクターの位置は、ランドマークそのものにあるわけではなく、ランドマークの周辺に、すなわちランドマークを中心とする範囲内にある。第一の特徴に関しては、「下方の用法」と「基部の用法」とは共通しているが、第二の特徴に関して相違している。

- (25) a. 中野學校把收録機放在升旗台下。
 - b. 中野學校がテープレコーダーを掲揚台の足もとに置く。
＜CJBC＞（村上春樹著 『ノルウェイの森』、再掲）
 - (26) a. 曾根把背囊放在腳下。
 - b. 曾根はリュックを降ろすと足許に置いた。
＜CJBC＞（井上靖著 『あした来る人』、再掲）
- (25) c. ?中野學校がテープレコーダーを掲揚台の下(した)に置く。
(26) c. ?曾根はリュックを降ろすと足の下(した)に置いた。

例えば、(25)と(26)に取り上げられた例文では、中国語の「下(xia)」が日本語の「もと」に対訳されていることから分かるように、掲揚台、足といった高くそびえる実物がランドマークとして、「下(xia)」と共起する際に示される空間はランドマークを中心とする周辺の低い領域である。「足の下(した)」や「掲揚台の下(した)」といった表現自体は、完全に非文ではなく、可能な日本語の文であるが、これらの表現における「した」を「もと」と同じ意味で使うことは困難である。

要するに、中国語の「下(xia)」は、そびえ立つように高い実物が参照物になった場合、参照物を巡る低い周辺を言語化する能力を持っているということである。これに対して、「下(した)」はこのような能力を持っていない。

以上、ランドマークがそびえ立つように高いものである場合をめぐって、「下(した)」と「下(xia)」との相違点を分析した。次に、太陽や月といった位置的に高い典型例を対象に、「下(した)」と「下(xia)」を対照する。

日本語の「太陽の下(した)」と中国語の「太陽下(xia)」という2つの表現は、同じ空間的なシーンを言語化していると考えている人が少なくないかもしれない。しかしながら、日中対訳コーパスで検証した結果、「太陽下(xia)」という表現が日本語に訳される際に、「太陽の下(した)」と翻訳された事例は一件も見つからなかった。

例えば、(25)と(26)から見られる「下(xia)」と「モト」との対訳関係と同様に、(27)では、中国語の「太陽下(xia)」と「太陽のもと」が対応している。また、(28a)と(29a)の「太陽下(xia)」は、(28b)と(29b)では日光が当たっている場所という意味の「日なた」に訳されている。そして、(30a)の「太陽下(xia)」と対応するのは、(30b)では太陽が強く照るところを意味する「日の照りつける砂浜」という表現である。

つまり、(27)~(30)の「太陽下(xia)」という表現における「下(xia)」は、太陽の真下ではなく、太陽の影響する範囲、すなわち太陽の光りが地上を照らす領域を表しており、この場合では、日本語の「下(した)」との対応が難しくなる。

(27) a. 在炎熱的太陽下…

b. 焼きつくような太陽のもと…

<CJBC> (楊沫著 《青春之歌》)

(28) a. 爺爺把槍放在太陽下曬著…

b. 祖父は鉄砲を日なたにおいて…

<CJBC> (莫言著 《紅高粱》)

(29) a. 坐在太陽下抓石子玩…

b. 日向に座って石ころをいじりはじめた…

<CJBC> (王安憶著 《小鮑莊》)

(30) a. 抬頭一看：沙灘上，躺在太陽下…

b. 顔をあげると、日の照りつける砂浜に…

<CJBC> (楊沫著 《青春之歌》)

(31) a. 楓葉剛剛開始泛紅，月下望去黑影幢幢。

b. 色づきかけた紅葉は、月の光りに黒ずんで見えた。

<CJBC> (三島由紀夫著 『金閣寺』)

太陽のみならず、(31)で取り上げた月のような位置的な高いものは、ランドマークとして「下(xia)」と共起することによって、ランドマークの影響範囲が言語化される。下方を示す言葉として、日本語の「下(した)」と中国語の「下(xia)」と英語の **under** は、多くの場合では共通しているが、「下(した)」が「位置的に高い物の基部」という用法を持たないという点で異なっている。英語では、**under the sun** という表現は、すでに慣用語化され、「ありとあらゆる」や「この世界での、この世での」の意味となるが、本来の意味も太陽の真下や太陽の下部ではなく、中国語の「下(xia)」と同様に、太陽の影響する範囲を意味している。例えば、

sit under the sun は、「日向に座る」または「日向ぼっこをする」の意味である。

ここで注意しておきたいのは、2.2.3 節でも詳しく論じたように、「基部の用法」という空間的なシーンを言語化する機能の有無によって、「下(xia)」と「下(した)」の非空間的な意味への拡張の可能性が異なっているということである。

ただし、強調しなければならないのは、日本語の「下(した)」が、まったく「基部の用法」を持っていないとは限らない。「下(した)」は、傘やあるいは傘のようなランドマークと共に起す場合には、ランドマークの基部を言語化する機能もある。例えば、次の(32)と(33)における「下(した)」と「下(xia)」との対応関係が確認できる。

(32) a. 好太郎さんのうちの銀杏の木の下にはよく遊びに行った。

b. 經常到好太郎家的銀杏樹下去玩。

<CJBC> (井伏鱒二著 『黒い雨』)

(33) a. 女が支えている傘の下で、男もせかされるように、あとは無言で食べおえる。

b. 女人撐著的傘下，男人象受人催促似地，不作聲地草草地扒完了飯。

<CJBC> (安部公房著 『砂の女』)

具体的に言えば、(32)と(33)では、ランドマークの「木」と「傘」は、いずれも柱や壁のように、そびえ立つように高いものである。また、この2つの文では、(32)の「好太郎」、(33)の「男」はトラジェクターとして、ランドマークより低い領域に位置している。すなわち、(32)と(33)の「下(した)」は、「そびえ立つように高い物の基部」の用法であり、ランドマークとトラジェクターとの空間的な位置関係を表している。

なぜこのような現象が生じたのかということ、ランドマークが傘のようなものである場合に、参照部の「下(した)」と「モト」がかなり重なっているからである。すなわち、「下(した)」は、トラジェクターがランドマークの基部にあるという空間的なシーンを言語化する役割をもともと持っているのではなく、傘状のランドマークという参照物を特定することによって、そびえ立つように高い物の基部の用法を示すようになったのである。

3. 「下(した)」と「下(xia)」の非空間的な意味 (語彙的な意味拡張)

下方を示す空間辞は、本来の空間的な意味のほかに、種々の他の概念領域を言語化できる。この第3節では、英語の下方という空間的な意味を含意する表現の多義現象を概観したうえで、日本語の「下(した)」と中国語の「下(xia)」の非空間的語彙的な意味について考察する。

3.1 DOWN に関わる方向性のメタファー

Lakoff and Johnson (1980)、Lakoff (1990) は、認知メタファー理論によれば、DOWN という方向性を示す概念が、メタファーとスキーマを通して、様々な抽象的な領域の概念と構造

的に対応している、と指摘している。Lakoff and Johnson (1980) では、DOWN に関わる方向性のメタファーとして、次のような例を挙げている。すなわち、DOWN は、悲しみ(SAD IS DOWN)、無意識 (UNCONSCIOUS IS DOWN)、低い地位 (LOW STATUS IS DOWN)、悪・悪徳 (BAD IS DOWN)、病気・死 (SICKNESS AND DEATH ARE DOWN)、感情 (EMOTION IS DOWN)といった抽象的な概念と対応している。

(34) DOWN に関わる方向性のメタファー(一部抜粋)

i. SAD IS DOWN

- a. I'm feeling *down*.
- b. He's really *low* these days.

ii. UNCONSCIOUS IS DOWN

- a. He *fell* asleep.
- b. He *dropped* off to sleep.

iii. LOW STATUS IS DOWN

- a. She *fell* in status.
- b. He's at the *bottom* of the social hierarchy.

iv. BAD IS DOWN

- a. We hit a peak last year, but it's been *downhill* ever since.
- b. Things are at an all-time *low*.

(Lakoff and Johnson 1980: 14-21)

ここで強調したいのは、上記の DOWN は、*down* という前置詞だけでなく、*fall*、*sink*、*depression*、*downhill*、*under*、*below* といった下方に関する言葉も含まれ、いわゆる、下方という概念領域の全体を示している。本節では、スキーマをもとに、方向メタファーによる拡張の視点から、「下(した)」と「下(xia)」の非空間的で、語彙的な意味を分析していく。特にコーパスから収集してきた文例に照らし、「下(した)」と「下(xia)」の非空間的な意味を、主に「数量が少ない」、「劣る」、「低い位置」という3つの意味領域に分けて考察する。また、「下(xia)」の「順序」という意味についても考察する。

すでに第2節でも論じたとおりに、「下(した)」と「下(xia)」は、いずれもトラジェクターがランドマークより低い所に位置しているという「下方の用法」、及びトラジェクターがランドマークの底の所にあるという「下部の用法」を持っている。以下の3.2節から3.4節までは、この2つの空間的な意味が、どのようなイメージ・スキーマに基づき、メタファーを経由して拡張しているのかについて考察する。

3.2 「下(した)」と「下(xia)」：数量が少ない

英語の *below* という空間辞は Taylor and Evans (2003) で論じられたように、方向性のメタファーとして、「数量が少ない」(Less Sense)と「劣る」(Inferior Sense)という2つの語彙的な意味が組み込まれている。本節では、まず、「数量が少ない」について分析する。

日本語の「下(した)」と中国語の「下(xia)」には、(35)と(36)に取り上げた事例から分かるように、英語の *below* と同様に、「数量が少ない」という非空間的な用法がある。すなわち、「下(した)」と「下(xia)」には、トラジェクターがランドマークより低い所にあるという空間的なシーンに基づき、いずれもトラジェクターがランドマークより量・値が低く少ないという意味項目が織り込まれている。つまり、「下(した)」と「下(xia)」の非空間的な意味について、空間的な使用から量という非空間的な領域へと拡張している現象が見られる。

- (35) a. このとき有意差がついた容量を「最小影響量(LOAEL)」、最小影響量より下の投与量を NOAEL とします。

(畝山智香子著 『ほんとうの「食の安全」を考える』)

- b. 高官の寄付は 50 円より下は稀である。

(小泉八雲著 『日本瞥見記(上)』)

- c. もっと気温がひくくなり、石や植物の温度が 0 度より下になると、水蒸気は水にならないで、いきなり氷になって石や植物につきます。

(長谷川康男編 『毎日が楽しくなる季節のお話』)

例えば、(35)における「下(した)」は、「量」、「円」、「度」という量または値を示す語彙と共起している。この場合では、対象物の位置が参照物の位置より低いという空間における物どうしの関係が、参照物の値が対象物の値より低いという非空間的な意味に写像されている。つまり、「下(した)」は、英語の前置詞の *BELOW* のように、より少ないという非空間的な意味を持っている。具体的に言えば、(35a)の「最小影響量」、(35b)の「50 円」、(35c)の「0 度」という数値は基準であり、このような基準が参照物、すなわち、一種のランドマークと見なされている。基準より低く、あるいは基準に満たないという数値的な関係は、トラジェクターがランドマークより低いところに位置しているというように、メタファーを介して「下(した)」で言語化されている。

- (36) a. 紐約市場原油期貨價格 21 日回落到每桶 40 美元之下。

21 日に、ニューヨーク取引所の原油先物の価格は、バレル当たり 40 ドルより下になっていた。

<CCL> (『新華社ニュース (2004 年)』、日本語訳は筆者による)

b. 農民人均收入也在全省平均數之下。

農民の平均収入は、省の一人当たりの平均収入より下である。

<CCL> (『新華社ニュース (1994年)』、日本語訳は筆者による)

c. 住房面積和家庭收入在當地政府規定標準之下。

居住面積と家庭の年収は、当地の政府が制定した基準より下である。

<CCL> (『2004年中国政府白書』、日本語訳は筆者による)

中国語でも、基準の量より少ない、あるいは、基準を満たさないという非空間的な領域の概念は、「下(xia)」で言語化する。例えば、(36a)の「40 美元」、(36b)の「人均収入」(1人当たりの平均収入)、(36c)の「規定標準」といった空間と直接的に関わらない概念は、ランドマークとして、メタファーを通して、空間では位置がより高いものと対応している。「40 美元之下」、「平均數之下」、「標準之下」のような基準の数量より少ないということは、ランドマークより低く、すなわちランドマークの下方にあるということになる。

Below は垂直方向の概念を示す前置詞として、量のような垂直方向以外の概念領域に写像する動機付けが与えられると、Lakoff and Turner (1989: 99-100)、高尾 (2003: 209-212)でも論じているように、空間的な<上/下>のスキーマが<量>のスキーマに構造的に写像される、ということである。

「下(した)」と「下(xia)」の場合も同様に、「数量が少ない」という意味を持つようになった動機付けは、概念的な面から見ると、<上/下>のスキーマから数量のスキーマへの写像であると考えられる。さらに、実際の語彙の意味拡張の面から考えれば、「下方の用法」に基づき、「下(した)」と「下(xia)」が空間メタファーに依拠し、「数量が少ない」という意味項目を持つようになっている。

3.3 「下(した)」と「下(xia)」：劣る

「下位の用法」が、「数量が少ない」という「下(した)」と「下(xia)」の共通の意味項目の動機付けを持つだけでなく、「劣る」という非空間的な意味の動機付けとなる場合もある。

Taylor and Evans (2003)では、below の「劣る」という意味項目について、トラジェクターがランドマークより低い位置にあることの帰結の一つとして、トラジェクターが不利な位置にある、あるいは、劣った状況にあると指摘している。山梨 (2012: 63) は、垂直軸における下という空間的な概念は、日本語でも「製品の質が下がっている」という「下がる」を含む用例から分かるように、「質の悪さ」と対応している。「下(した)」と「下(xia)」も、below や「下がる」のように、物の品質、機能または人の能力、人柄といった抽象的な概念を比べる際には、比較の対象より劣り、あるいは望ましくないという用法を有している。

- (37) a. 成績は彼より下だが、指導力はまさっている。
b. 技術は彼の方が下だ。
c. これより下の品物では使いものにならない。

(『大辞林』)

例えば、「下(した)」という表現は、(37a)の「指導力」、(37b)の「技術」という抽象的な概念と共起している。また、直接的に出現していないが、文脈を通して、(37c)で、「より下」と共起しているのは、品物の「品質」が「より下」と推測できる。(37)における「下(した)」は、トラジェクターがランドマークより物理的に低い所に位置しているということではなく、トラジェクターの指導力、技術(力)、品物の品質が、ランドマークのより劣っているということである。また、「下にも置かないもてなしを受けた」における「下にも置かない」という慣用語からも分かるように、「下(した)」は「ない」という打ち消しを示す形容詞と連用する際に、他より劣るものがないという用法がある。

- (38) a. 子貢之在孔門，其德行在冉閔之下。

孔子の門人として、子貢の德行は冉有、閔子騫より下だ。

(《朱子語類》、日本語訳は筆者による)

- b. 要説治理清河的責任感和使命感，我敢說我決不在你之下。

河川の整備と言えば、私の責任感と使命感は、君より下なんてあるわけがないと思う。

(諶容著 《夢中的河》、日本語訳は筆者による)

- c. 同組的實力均在國足之下。

同じグループにおける他のチームの實力は、中国チームの下だ。

(《中国新聞週刊》、日本語訳は筆者による)

また、「下(xia)」の「劣る」という用法は、(38)のような事実によって裏付けられる。(38)の例文に含まれている「下(xia)」は、(37)における「下(した)」と同様に、空間的なシーンについて言及するものではなく、トラジェクターがランドマークより空間的というよりも、概念的に低い下方のところに位置しているということである。具体的には、「下(xia)」は、質を比較するとき、具体的には、(38a)の「德行」、(38b)の「責任感和使命感」、(38c)の「實力」を比較する際に、トラジェクターがランドマークより劣っているという抽象的な概念を、言語化できるということである。

3.4 「下(した)」と「下(xia)」：低い地位

人間同士の間には存在する社会的な身分関係は、多くの場合、上下という重力軸に関する体験によって言語化される。日本語と中国語においても、下方という空間的な概念は、Lakoff and Johnson (1980: 14-17)で取り上げられた LOW STATUS IS DOWN と同様に、社会的に低い位置という抽象的な概念を比喩的に特徴づけている。低い社会位置を「下(した)」または「下(xia)」で言語化する事例は、次の(39a)と(39b)の例文によって裏づけられる。

- (39) a. 封建時代にあつては、身分が下の者は使用人として自分の意のままに使おうとする風潮が一般的であつた。

<CJBC> (山崎武也著 『気品の法則』)

- b. 社会的地位に価値を置く権威主義者のことが多く、地位が自分より下の人間の言うことに、素直に耳を傾けようとしません。

(渋谷昌三著 『不機嫌な人間関係を変える心理学』)

例えば、江戸時代には、将軍、大名などの行列のときに、先払いが一般の人に土下座をせよと命令する際に、「下に下に」と告げ知らせる慣習があつた。「下に下に」という表現における「下(した)」は、下にひざまずくという空間的な意味を示すものであるが、権力の弱い、あるいは権力のない人間が下の方にいるという読みもなされている。

「下(した)」という空間的な概念が社会的に低い位置と対応する現象は、現在の日本語にも浸透している。(39a)の「身分」と(39b)の「地位」は、社会における権力関係を表す概念である。このような人間社会における地位や権力が比べられる際に、地位が低く、権力が弱い方は、メタファーを介して、「下(した)」と共起することによって言語化されることになる。

- (40) a. 這小D，是一個窮小子，又瘦又乏，在阿Q的眼睛裡，位置是在王胡之下的，誰料這小子竟謀了他的飯碗去。

この小Dというのは、やせてひよろひよろしている貧相な小僧で、阿Qの目からは、ヒゲの王よりもう一段下の地位におかれていた。

<CJBC> (魯迅著 《阿Q正傳》)

- b. 要不，我何至於在奚流這種人之下呢？

でなけりや、なんで奚流なんかの下にいるものか!

<CJBC> (載厚英著 《人啊，人!》)

(40)の例から分かるように、中国語における「下(xia)」は、社会的な位置が低いという意味である。例えば、(40a)では、「阿Q」という人物は、「王胡」の社会的な身分を参照して、この「小D」の身分が参照点あるいは参照物より低い位置にあると捉えている。すなわち、「王胡之下」という表現は、トラジェクターの「小D」が「王胡」というランドマークよりも物理的に低い位置にいるのではなく、社会的に低い位置にいるということである。また、(40b)における「下(xia)」も、話者の社会または組織における地位が、「溪流」という人物よりも低い下方にある、という抽象的な位置関係を言語化している。

要するに、「低い地位」の用法は、3.2節と3.3節でそれぞれ論じた「数量が少ない」、「劣る」という2つの用法と同様に、「下(した)」、「下(xia)」の「下方の用法」からメタファー的に拡張された事例である。

3.5 「下(xia)」：順序

3.2節から3.4節までは、「数量が少ない」、「劣る」、「低い地位」という3つの「下(xia)」と「下(した)」とが共有する語彙的な意味項目について分析した。本節では、「下(xia)」の「順序」という意味項目について述べたうえで、「下(した)」との相違を分析する。

第1章でも取り上げたとおり、中国語は他の多くの言語と同様に、前後軸に依拠して順序という抽象的な概念を言語化できるが、こうした前後軸のみならず、垂直軸に依拠した順序を言語化する場合も比較的多いという特徴を有している (Yu 1998: 110-113)。ここで指摘したいのは、中国語の「下(xia)」が順序に関する非空間的な概念を言語化できるのに対して、日本語の「下(した)」による言語化が容易ではない、ということである。

中国語の「下(xia)」は、ある期間、期日より後の時間帯、またはある出来事の発生がもう一方の出来事の発生より後であるという意味を言語化できる。例えば次の(41)～(43)では、「上(shang)」は、「週」、「月」、「世紀」、「星期三 (水曜日)」といった言葉と共に、これらの期間・期日より後だということを言語化できる。この場合には、日本語の「下(xia)」の使用が難しい。

- (41) a. 這個電影下週上映。
b. この映画は来週上映する。

(『中日・日中辞典』)

- (42) a. 能湊合？都是薛家自私，光顧他們方便！今兒個他們也不知用了幾噸水，下月咱們還得為他們掏水錢！
b. 今日だって水を何トン使ったかわかったもんじゃないわ。来月になるとその分だけみんなにツケがまわってくるんだから。

<CJBC> (劉心武著《鐘鼓樓》)

- (43) a. 下个世紀 下下个星期三
b. 次の世紀 再来週の水曜日

(『白水社 中国語辞典』)

日本語も中国語も、トラジェクターがランドマークの下方に位置しているという空間的なシーンに基づき、順序という概念を把握できる(例えば、日本語でも「下半期」、「下旬」といった表現がある)。しかし、日本語の「下(した)」の場合には、トラジェクターの位置がランドマークより下方にあるという空間的な位置関係に基づき、トラジェクターの順序がランドマークより後であるということを示す能力が大きく制限されている。つまり、「下(した)」は、「下(した)の時代」や「下(した)の世紀」や「下(した)の水曜日」がいずれも容認しがたい表現であることから分かるように、順序に関する概念を言語化するのが困難である。

4. 「下(した)」と「下(xia)」の他の機能拡張

第3節の分析でわかったように、「順序」の用法を除き、日本語の「下(した)」と中国語の「下(xia)」との非空間的で語彙的な意味拡張は基本的には共通している。しかし、「下(した)」と「下(xia)」との非空間的な用法は、大きく異なっているところもある。この第4節では、「下(した)」と「下(xia)」の造語成分や文における機能について考察し、両者の非空間的な機能拡張の相違点を浮き彫りにする。

4.1 「下(した)」にならない「下(xia)」: 予備行動

日本語の「下(した)」は、「非・未・無・不」と同様に、一種の接頭辞のような造語成分として、他の単語の前に付けられることによって、その単語の意味を変えることができるという機能を有している。日本語の「下味」、「下調べ」、「下打ち合わせ」といった用例から分かるとおりに、「下(した)」は、あらかじめ何かをするという意を表わす働きを持っている。しかし、中国語の「下(xia)」は、「下味」、「下調べ」、「下打ち合わせ」における「下(した)」との対応が極めて困難である。例えば、(44a)と(44b)における「下(した)」は、中国語の「預先」という副詞に対応している。(44c)の「授業の下調べ」という表現は、中国語の「備課」という授業内容の準備をする意味の動詞と対応している。

- (44) a. 下味をつける。
 預先調味。
b. 舞台照明の下検分をする。
 預先検査舞臺燈光佈景。
c. 先生は今授業の下調べをしているところである
 老師正在備課。

(『白水社 中国語辞典』)

本節では、「下(した)」が、どのように「予め何かをする」という造語成分としての意味を持つようになったのかという問題について、「下(した)」の「内部用法」と「裏(うら)」との関連性を踏まえ、〈上/下〉と〈裏/表〉とのスキーマ変換という現象を重視する視座から、分析していく。

2.1.3 節で論じられたように、「下(した)」は、本来は重力軸の方向性に基づく空間的な概念であるが、「コートの下にセーターを着る」や「靴下」や「下着」といった重力軸と関わらない空間的な用法もある。安 (2014a: 342)は、物の表面が上方、物の深層・内部が下方という現象について、共通性の視点から説明している。つまり、〈上/下〉と〈裏/表〉の間に、スキーマ変換の現象が生じる重要な原因の一つは、上方・表面が高い可視性を持っているのに対して、下方・深層が比較的に可視性が低いからである。

ここで指摘したいのは、「下(した)」の物の内部を言語化するという空間的な用法は、〈裏/表〉のスキーマの影響を受けて、さらに拡張しているということである。「下調べ」や「下打ち合わせ」といった表現における「下(した)」の用法を説明するにあたって、まず、〈裏/表〉のスキーマに関わるメタファーを概観する。



図 2-5 <裏/表>のスキーマ (山梨 2012: 28)

山梨 (2012: 27-30)は、空間領域に何らかの境界が存在し、すなわち、空間領域を二分する境界領域があるという〈裏/表〉のスキーマの特徴を取り上げている。例えば、日本語では〈裏/表〉のスキーマに基づき、(45)のように、心理的な世界をメタファー的に叙述されることが多数ある (山梨 2012: 28-29)。「裏(うら)」という空間辞には、目に見えない、または見えにくい領域という空間的な意味から、心理的な世界のみならず、隠された実態、公開がはばかれるような状況、といった否定的な価値が付与される場合が多い。

- (45) a. この子は喜びが表に出ている。
b. あの人の心は表の顔からは理解できない。
c. 彼は笑顔の裏に深い悲しみを潜めている。
d. 彼女の裏の面を想像するのは難しい。

(山梨 2012: 29)

ここで強調したいのは、「裏(うら)」の否定的な価値という特徴を考慮に入れなければ、「下(した)」と「裏(うら)」との間に本質的に共通するところがある、ということである。「下調べ」や「下調査」や「下打ち合わせ」といった「下(した)」の用法は、「裏(うら)」と異なり、ネガティブなニュアンスが含まれていない。言い換えれば、隠された事態や公開のはばかれる状況といったネガティブなニュアンスを、中立的な視点から、私的な環境、非正式な状況、公表されていない状態というふうに捉え直しているということもできる。「下(した)」の「下調べ」や「下調査」や「下打ち合わせ」といった表現における「下(した)」は、「予め」と解釈される場合が多いが、公に出る前に、正式な行為を開始する前に、本格的な段階に入る前というように解釈することもできる。

(46) a. 相当の下調べをして、発表を臨んだのであろう。

(柳川明彦著 『夫はつらい』)

b. 萩元と私は、夏頃から非正式に、電電公社の仕事の下打ち合わせを始めた。

(今野勉著 『テレビの青春』)

c. 芝居上演や音楽演奏会などの本番に先立って、行う下稽古をリハーサルという。

(廣田勇著 『気象のことば科学のこころ』)

(46a)で言えば、みんなの前で発表するという行動と、発表に先立つ調査という2つの行為の間に、公的な場での行為と、当事者の個人的な領域での行動という対立がある。そして、このような抽象的な対立が<裏/表>のスキーマで捉えられ、すなわち、<裏/表>という空間的な体験に基づき、裏が当事者の個人的な領域に、表が公的な場面に比喩的に対応すると解釈される。「下調べ」という行動については、もちろん、動作と動作の関係を「予め」や「先に」で解釈できるが、公的な場面での行動を達成させるために、当事者の個人的な領域でそれなりの行動や計画を実施するという、<裏/表>の対立が反映される解釈もできるだろう。

また、(46b)の「下打ち合わせ」も、(46c)の「下稽古」も、(46a)の「下調べ」と同様に、本格的な場面、あるいは正式的な場面での行動を成功させるために、公衆や観衆の目から離れた裏という領域、すなわち当事者の個人的な領域で、必要な物や態度や環境を整えるという意味を表している。

また、改めて強調しなければならないのは、「裏(うら)」とは異なり、「下(した)」には物の内部や奥の意味があるが、否定的な価値が付与されていない、ということである。むしろ、「下調べ」や「下打ち合わせ」や「下稽古」といった表現を含む文を全体的に捉えると、肯定的なニュアンスが読み取ることができる。

要するに、「下調べ」や「下打ち合わせ」や「下稽古」といった事例から見て「下(した)」の「当事者の領域での予備行動」という用法は、「下(した)」の「内部の用法」という空間的な意味に基づき、<裏/表>のスキーマを介して、メタファーにより拡張されたものである。

一方、中国語の「下(xia)」は、「セーターの下にシャツを着る」という空間的な関係を言語化できず、すなわち、「下(した)」と異なり、「内部の用法」を持っていない。したがって、「下(xia)」は、「内部の用法」を土台にして拡張される「当事者の領域での予備行動」という機能が生じることが困難である。このため、「下調べ」や「下打ち合わせ」や「下稽古」といった表現における「下(した)」は、中国語では「下(xia)」の代わりに、ほかの表現で対応しなければならないことになる。

4.2 「下(xia)」にならない「下(した)」

3.5 節では、「順序」という非空間的な意味を言語化する際に、「下(xia)」と「下(した)」との違いを分析した。この 4.2 節では、「メトニミーからのメタファー」という拡張プロセスを踏まえ、「下(xia)」の「基部の用法」という空間的な用法の拡張を分析し、「影響」、「支配」、「情動による行為」という 3 つの日本語の「下(した)」とは対応しがたい用法について考察する。

4.2.1 「基部の用法」からの拡張：支配のシーンについて

「下(xia)」と「下(した)」は、トラジェクターがランドマークより低い所に位置しているという DOWN の概念を言語化できる。また、「数量が少ない」、「劣る」、「低い地位」という語彙的な意味項目を持っている。「下(xia)」と「下(した)」は、空間的な意味でも、非空間的で語彙的な意味でも、多くの共通点を持っているが、**under** という英語の前置詞と比較すると、両者の機能の相違が浮き彫りになる。

(47) a. **under the eagle eye of their supervisor...**

b. 管理者の厳しい監視の下で...

c. 在上司的厳密監視下...

(『NHK ラジオ英会話』、中国語は筆者による)

(48) a. **Under the reign of tyranny, innocent people were deprived of their citizenship.**

b. 専制政治による支配のもとで、罪のない人々が市民権を剥奪された。

c. 在専制制度的統治下...

(『プログレッシブ英和中辞典』、中国語は筆者による)

(49) a. **under these circumstances...**

b. このような状況のもとで...

c. 在這樣的情況下...

(『プログレッシブ英和中辞典』、中国語は筆者による)

上記の例文における **under** は、日本語の「下(した)」の代わりに、「下(もと)」と訳されているが、中国語の「下(xia)」と対応している。Taylor and Evans (2003: 124-128)では、(47)～(49)のような **under** の機能語としての用法を、「支配のシーン」(Control Scene)と解釈したうえで、この支配の用法の空間的な動機付けについて、次の2点を指摘している。第一に、トラジェクターは、ランドマークより低い所に位置している。第二に、トラジェクターは、ランドマークの影響の領域にあり、いわゆる一種の潜在的に接触する範囲 (within potential contact)にある。本節では、**under** の「支配のシーン」に関する研究を踏まえ、「下(もと)」との比較も視野に入れ、なぜ「下(した)」がこのような意味を持っていないのかに対して、なぜ「下(xia)」が **under** のような「支配のシーン」を示す意味を持っているのか、という対比について分析する。

2.3.2節では「下(した)」と「下(xia)」との空間的な意味の違いについて、「下(xia)」が、トラジェクターがランドマークの下方を中心とする周りにあるという「基部の用法」を持っているのとは対照的に、「下(した)」はこのような空間的シーンを言語化するのが困難であるという相違点を取り上げた。

「下(xia)」の「基部の用法」は、上記の **under** と同様に、①トラジェクターがランドマークより低い位置にあり、しかも、②トラジェクターがランドマーク自体の下方の空間に限らず、ランドマークに影響されている周辺にある、という2つの空間的な特徴を持っている。一方、「下(した)」の場合には、トラジェクターがランドマークの影響の及ぶ範囲にあるという **under** の特徴が含まれていない。

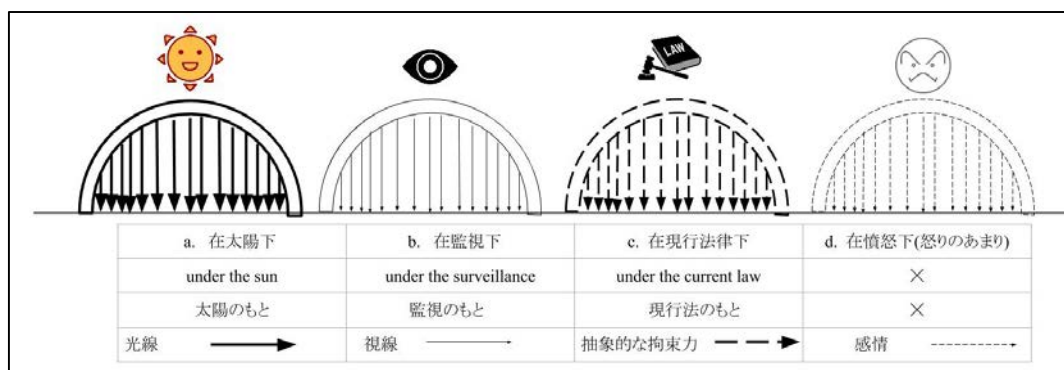


図 2-6 「支配のシーン」

つまり、ここで指摘したいのは、「基部の用法」という空間的な意味の有無によって、「下(した)」と「下(xia)」の機能は、大きく異なっているということである。Taylor and Evans (2003)では、(47)～(49)における **under** の機能を合わせ、「支配のシーン」の用法を一つで説明するが、本論文では、「下(xia)」の「基部の用法」から生じた機能を、さらに、現実性の差によって「影響」と「支配」に分けて論じる。

「影響」と「支配」という2つの「下(xia)」の用法は、「下(した)」と対応しがたいが、形式名詞の「下(もと)」と対応している。注意すべきことは、under や「下(もと)」とは対応しない、「下(xia)」のみしか持たない「情動による行為」という用法もある。

次の4.2.2節では、Goossens (1995)、笠貫 (2002, 2013)によって提唱された「メトニミーからのメタファー」という分析を導入し、「下(xia)」の「影響」と「支配」と「情動による行為」という3つの機能を考察する。

4.2.2 「下(した)」が持たない用法：「影響」と「支配」

前述したように、メタファーは、捉えにくく抽象的な目標領域を、具体的な起点領域からの写像によって概念化に関わるアプローチである。メタファーの成立する基盤は、人間の身体的な経験から生じた「類似性」と「共起性」という2つの動機付けにある。一方、メトニミーは、「類似性」と「共起性」を動機付けとするメタファーと異なり、「近接性」と「隣接性」に依拠する概念化に関わるアプローチである。メタファーとメトニミーは動機付けが異なるが、両者の間に緊密な関係がある。Goossens (1995)、笠貫 (2002, 2013)は、「メトニミーからのメタファー」という現象を提起し、慣用語の多義性について考察した。次では、「舵を取る」という笠貫(2003)によって取り上げられた慣用語の意味拡張の例を概観したうえで、「下(xia)」の機能を論じる。

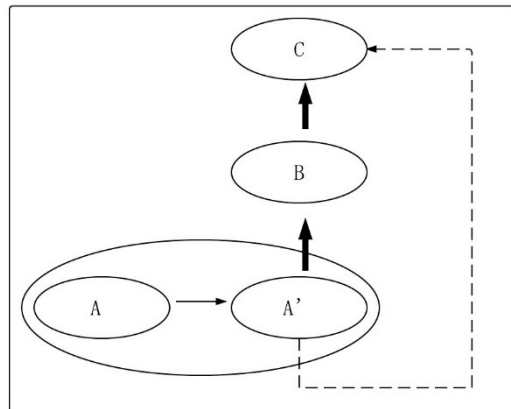


図 2-7 メトニミーからのメタファー (笠貫 2013 :68) (一部修正)

(50) 「舵を取る」の意味の拡張

- a. 舵を取る：文字通りの意味（実際に船に乗り、手で舵を握ること：楢円 A）
- b. 舵を取る：舵を手で操作して、船を前進させる（楢円 A'）
- c. 舵を取る：舵を手にとらずに、船を前進させる（楢円 B）
- d. 舵を取る：物事をうまく進める（楢円 C）

(笠貫 2013: 72-73)

「舵を取る」という慣用語の意味の拡張ルートは、図 2-7 で表されている。楕円 A と楕円 A' の間の矢印は、メトニミーによる拡張を意味する。また、メトニミーの認知領域は、一つの全体として、楕円 A と楕円 A' を囲むより大きな楕円で示されている。A' から B へ、さらに、B から C への上向きに伸びている黒い太線の矢印は抽象化を意味している。そして、楕円 A' から楕円 C へへの間の点線の矢印は、メタファーによる拡張を表している。

具体的に言えば、まずより大きな楕円の中で、メトニミーによって、A で示された船の操作室における舵を手で握るという具体的な動作が、A' の舵を操作して船を前進させるという変化を表すようになる。また、A' の舵を握って、船を進めるという行為は、さらに抽象化されて、B の舵に取らずに船を前進させるという現象をメタファーにより繋げている。そして、B の船を前進させるということは、またメタファーを通して、プロジェクトのような何か特定の事業をうまく進めるという C の意味を持つようになる。全体から見ると、実際の操縦席で舵を取るという動作は、一種のメトニミーを媒介とするメタファーに基づき、物事がうまく進行するように導くという慣用語の意味を持つようになっている。

ここで指摘したいのは、「下(xia)」が持つ「支配」という機能も、「舵を取る」と同様に、メトニミーを介したメタファーによる拡張で説明できる、ということである。(51)の「下(xia)」が示す「基部の用法」の意味拡張では、4種類の語義が取り上げられており、(52a)と(52b)の表現は、いずれも「下(xia)」、および日本語の「下(もと)」と共起できる。一方、(52c)のような表現は、「下(xia)」と共起できるが、「下(もと)」との共起が困難であり、この類はここで提起するだけに留め、4.2.3 節でまた詳しく論じる。(52)に挙げられた言葉と共起する際の「下(xia)」の意味変化は、笠貫 (2002, 2013)によって取り上げられた図 2-7 を踏まえて、図 2-8 のように解釈できる。

(51) 「下(xia)」の「基部の用法」の意味拡張

- A の「下(xia)」: トラジェクターがランドマークを中心とするより低い領域にあるという空間的な用法。例えば、「太陽下」、「月下」、「燭光下」などがある。支配する領域が光線で反映されている。空間性が最も強い。
- A' の「下(xia)」: 何らかの手段により、ランドマークがトラジェクターに影響を与える。例えば、「監視下」が挙げられる。監視者は、視線などの手段で、監視されている相手の動向を把握し、影響を与える。一定の空間性を有する。
- B の「下(xia)」: 抽象的な約束力による支配である。例えば、「原則下」が挙げられる。空間性の低い表現である。
- C の「下(xia)」: 感情による支配である。例えば、「悲憤下」が挙げられる。空間性が最も低い表現である。

- (52) a. 注視 監視 監督 指導 指揮
 b. 憲法 法律 原則 方針 大義名分 信念
 c. 無奈 憤怒 驚奇 慌亂 失望 絕望

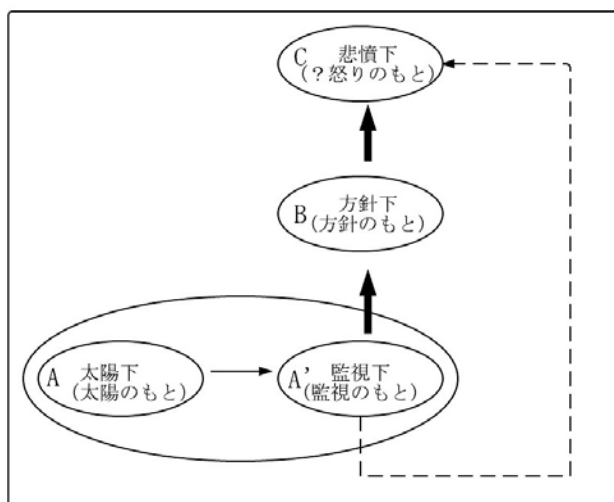


図 2-8 「下(xia)」の拡張

具体的に言えば、「太陽下」のような表現における「下(xia)」は、図 2-8 において楕円 A で示されている。「太陽下」という表現は、ランドマークの太陽から発した光が地面に当たる範囲を意味し、基部の用法という「下(xia)」の典型的な空間的用法である。「監視下」における「下(xia)」は、楕円 A' で示されている。「監視下」は、監視員が試験場を回りながら、受験者の行動を見つめている状況を意味し、すなわち「影響」という用法である。

ここで注意しなければならないのは、楕円 A と楕円 A' の間の矢印で示されるように、「太陽下」における「下(xia)」と、「監視下」における「下(xia)」とはメトニミーの関係にある、ということである。楕円 A と楕円 A' を覆う、より大きな楕円は、「影響」と「基部の用法」がいずれも空間的な領域の概念だということを示している。「太陽下」という表現で示されるランドマークの領域は、太陽の光りを身体を通じて捉えることができる。「監視下」で示されるランドマークの影響範囲は、視線で捉えることができる。「在政府的監視下」(政府の監視の下で)や「在媒体的注視下」(マスコミの注視の下で)といった用例における「下(xia)」は、「太陽下」と比べ、確かに抽象度が上がっているが、「監視下」や「注視下」が成立する場面は日常的に見られる現実性が高く、空間的な場面である。つまり、「下(xia)」の「影響」という役割は、「基部の用法」に基づき、メトニミーを媒介して生じた用法である。

そして、「下(xia)」は、さらに抽象化されて、「法律」、「原則」、「方針」、「大義名分」、「信念」といった空間性を有しない抽象名詞と共起し、「支配」という用法を有するようになる。「法律下」や「原則下」や「方針下」といった表現は、「太陽下」、「監視下」と異なり、ラ

ンドマークの現実性及び空間性が低い。「法律」、「原則」、「方針」、「大義名分」、「信念」という抽象的な名詞が、「下(xia)」と共起できるという現象は、Goossens (1995)、笠貫 (2002,2013) によって取り上げられた「メトニミーからのメタファー」というプロセスにより解釈できる。

具体的に言えば、「太陽下」の領域が光線によって決められ、「監視下」の影響範囲が視線によって決められ、「方針下」の支配領域が一種の仮想的な拘束力によって、決められている。

「憲法」、「原則」、「方針」、「大義名分」、「信念」といった類の抽象名詞に共通している点は、人の行動や思想を一定の手段で制限したり、強制したりする効力を持っているということである。「下(xia)」の「基部の用法」は、「メトニミーからのメタファー」というプロセスを通して、「支配」を示す機能を持つようになったと捉えられる。

4.2.3 「下(した)」が持たない用法：「情動による行為」

「下(xia)」は、「影響」と「支配」という2つの機能を持つほかに、(52c)に取り上げられた「無奈」(やむをえない)、「憤怒」(憤怒する)、「驚奇」(驚く)、「慌亂」(慌ただしい)などのような引き起こされた感情を示す語と共起し、感情のままになにかの行為をした、という「情動による行為」の用法もある。ここで注意しておきたいのは、日本語の「下(もと)」及び英語の *under* は、「下(xia)」と同様に、「影響」、「支配」の用法を有するが、「情動による行為」との対応は困難だ、ということである。

(53) a. 惱怒之下，國民黨宣佈解散為進行和平調停而成立的軍事三人小組……

怒りのあまり国民党は平和調停を進めるために成立させた軍事三人グループを解散すると宣言し……

<CJBC> (鄧榕著 《我的父親鄧小平》)

b. 父親教導說：“不管處境如何艱難，碰到什麼樣的人，都絕對不能說出來，如果一旦在憤怒悲傷之下忘掉了這一戒律，那時就會被社會拋棄。”

「たとえいかなる目を見ようと、いかなる人に邂逅おうと、決してそれとは自白するな、一旦の憤怒悲哀にこの戒を忘れたら、その時こそ社会から捨てられたものと思え」こう父は教えたのであった。

<CJBC> (島崎藤村著 『破戒』)

c. 島村一驚之下，決意非盡快離開這裏不可了。

島村は驚いて、最早ここを去らねばならぬと心立った。

<CJBC> (川端康成著 『雪国』)

例えば、(53a)では、「下(xia)」は「惱怒」(怒り)と連用されて、「怒りのあまり」に訳されているが、あまりにも怒っていて、ついに何かをしたという意味である。(53b)の「下(xia)」は、「憤怒悲哀」と共起し、感情の作用を受けた結果、戒を忘れてしまい自白することを表している。また、(53a)及び(53b)と同様に、(53c)における「下(xia)」は、主人公の島村が驚き、一気に離れることを決心したという2つの行為の関係を表している。

なぜ「下(xia)」が「情動による行為」という用法を有するかという問題に対して、「支配」の用法による拡張として解釈できる。すなわち、「情動による行為」の「下(xia)」は、「影響」と「支配」の用法の特徴を兼ねるが、この2つの用法よりさらに抽象的で、より文法的な用法だ、ということである。例えば、(53c)の「惱怒下」における「下(xia)」は、「法律下」や「方針下」や「原則下」における「支配」の「下(xia)」と同様に、怒りの影響を受けて、怒りという情動に支配されて、すなわち感情のままに行動してしまう。ただし、「情動による行為」の「下(xia)」に含まれている支配の意味は、あくまでも個人の心理世界に限られ、いわゆる、主観的で、より抽象的な支配である。

5. まとめ

本章では、日本語の「下(した)」と中国語の「下(xia)」という2つの空間辞を対象にして、それぞれの空間的な意味、非空間的意味及び機能を、認知言語学の枠組みに基づき記述したうえで、互いの共通点と相違点を分析した。

第一に、空間的な意味についての分析の結果は次のとおりである。日本語の「下(した)」の用法は、主に「下方の用法」、「下部の用法」、「内部の用法」という3つのタイプに分けられる。これに対して、中国語の「下(xia)」は、主に「下方の用法」、「下部の用法」、「基部の用法」という3つの用法を持っている。

「下方の用法」とは、トラジェクターがランドマークの直下、まっすぐ下の低い所に位置している、という空間的な用法である。例えば、「机の下にある」における「下(した)」の使用がこの「下方の用法」の用法に当たり、中国語の「下(xia)」もこの用法を有する。

「下部の用法」とは、ランドマークが山のようにそびえ立つものであり、トラジェクターがランドマークの低い部分に位置している、というような空間的な用法である。例えば、「山の下」における「下(した)」は「下部の用法」に当たる。この「下部の用法」について、本章では、中国語の「下(xia)」と日本語の「下(した)」と基本的には対応する、と分析した。

一方、日本語の「下(した)」と中国語の「下(xia)」との相違点も見られる。「下(した)」は「内部の用法」という用法を持ち、トラジェクターがランドマークの内部、内側に位置している場面を言語化できる。このような空間的な位置関係を「下(xia)」により言語化するのには容易なことではない。例えば、「コートの下にシャツを着る」のような「下(した)」の「内部の用法」は、中国語の「下(xia)」と対応させるのが比較的困難である。

また、中国語の「下(xia)」は、「基部の用法」を有し、トラジェクターがランドマークの下方の周りに位置しているという位置関係を指示できる。これに対して、日本語ではこのよ

うなモノどうしの位置関係を、「下(した)」による言語化が大きく制限されている。例えば、「脚下(jiao xia)」という中国語の表現における「下(xia)」は、足の真下の領域のみならず、足の周辺の領域も意味し、日本語の場合では、「下(した)」の代わりに、「下(もと)」によって示すのが一般的である。

第二に、非空間の語彙的な意味について、日本語の「下(した)」と中国語の「下(xia)」とは、基本的には同様な意味を持っていることを示した。具体的に言えば、「下(した)」と「下(xia)」は、いずれも、「数量が少ない」、「劣る」、「低い地位」という3つの非空間的で語彙的な意味を有する。ただし、「順序」という非空間的な概念は、中国語の「下(xia)」によって示すことができるが、「下(した)」による言語化は困難である。

第三に、他の機能について、日本語の「下(した)」と中国語の「下(xia)」は大きく異なっていることも指摘した。日本語の「下(した)」は、「下調べ」や「下稽古」のように、「予備行動」という用法を持っているのに対して、中国語の「下(xia)」はこのような用法を持っていない。

本章では、このような「予備行動」を示す「下(した)」の用法が、その「内部の用法」から拡張したものであると分析した。「予備行動」の拡張の動機付けについて、〈上/下〉と〈裏/表〉の変換という視座から、可視性が低いまたは不可視という「下(した)」と「裏(うら)」との共有の特徴に基づいて説明した。例えば、「下打ち合わせ」における「下(した)」も、「事件の裏に隠されたもの」における「裏(うら)」も、私的な環境、公表されていない状況を意味する点で共通している。

そして、中国語の「下(xia)」の非空間的な意味を「影響」、「支配」、「情動による行為」という3つの種類に分けて分析した。例えば、「監視下(xia)」、「方針下(xia)」、「悲憤下(xia)」といった表現における「下(xia)」は、いずれの用法も「下(した)」による言語化が困難である。これらの「下(xia)」の機能の由来について、本章では、「下(xia)」の「基部の用法」という空間的な意味から拡張したものと説明した。

第3章 日本語の「前(まえ)」・「先(さき)」と中国語の「前(qian)」との比較

1. はじめに

1.1 問題の提起

人間が、自らの身体による経験に基づき、外部の世界を言語化するという事は、認知言語学の基本的な考え方の1つとされている。Clark (1973)、檜和 (2005: 111) によって指摘されたとおり、空間を概念化する際に、人間の空間に対する様々な体験の中で、上下軸を中心とする地面に直立して垂直に立つ経験、また、前後軸を中心とする外部の物または生物と向かい合う経験、という2種類が特に重要である。第1章と第2章では、日本語と中国語における上下軸関連の空間辞を分析した。本章と次章では、日中両言語における前後軸関連の空間辞を分析する。

前方の意味を有する空間辞の分析に先立ち、概念としての前方と言語表現としての前方を区別しなければならない。前方という概念は、種々の具体的な表現によって言語化されているということである。例えば、英語では、前方という空間的な概念は、前置詞の *before*、副詞の *ahead*、*forward*、動詞の *advance* などといった表現で言語化されている。つまり、概念としての前方は、英語では種々の形態によって反映されているということである。英語と同様に、日本語と中国語においても前方を言語化する手段が多数あるが、本章では、空間辞のレベルに絞り、「前(まえ)」・「先(さき)」と「前(qian)」という3つの前方を示す表現を分析する。

1.2 本章の目的

本章の目的は、拡張の観点から、前方という空間的な概念が日本語の「前(まえ)」・「先(さき)」、及び中国語の「前(qian)」によってどのように表現されているのかを検討することである。すなわち、前方という概念を言語化する際に、「前(まえ)」・「先(さき)」と「前(qian)」の間に、どのような共通点と相違点が見られるかということである。そして、もう1つの目的は、本来空間的な概念を表す「前(まえ)」・「先(さき)」と「前(qian)」が、時間という別の概念領域に写像されて、どのような時間的な意味を持つようになったか、またどのように使用されているのかを考察する。

本章では、この2つの目的に沿って、まず第2節で「前(まえ)」・「先(さき)」と「前(qian)」の空間的な意味を記述し、第3節で「前(まえ)」と「前(qian)」、「先(さき)」と「前(qian)」の相違点について考察する。そのあと時間的な意味を対象を移し、第4節で「前(まえ)」・「先(さき)」と「前(qian)」の時間的な意味を記述し、第5節で「前(まえ)」と「前(qian)」、「先(さき)」と「前(qian)」がそれぞれ持つ時間的な意味を比較する。

2. 日本語の「前(まえ)」・「先(さき)」と中国語「前(qian)」の空間的な意味

本節では、空間的参照枠と方向付け方略を概観したうえで、日本語の「前(まえ)」と中国語の「前(qian)」との空間的な意味を、「身体・生物の形状に依存する場合」、「物の機能に依

存する場合」、「視点の位置に依存する場合」という3つの用法に分けて分析する。また、スキーマの複合と変換という2つの概念を取り上げ、「先(さき)」が示す前方の特徴を説明し、その意味構造を分析する。

2.1 研究の背景

2.1.1 空間的参照枠

認知言語学では、「前(まえ)」と「前(qian)」をはじめとする各種の空間配置関係を他の人に指示したり、あるいは、他の人が言った空間配置関係を聞き手として理解したりする場合、一定の認識と行動の基準が必要であり、このような基準は空間的参照枠 (spatial reference frame) と呼ばれる。Levinson (2003) によって、参照枠はさらに物体の内在的参照枠、相対的参照枠、絶対的参照枠に分けられているが、1つの参照枠には、少なくとも観察者 (viewer)、対象物 (figure)、参照物 (ground) という3つの要素が関与している。

内在的参照枠とは、観察者が、参照物自体に内在的な方向性に基づき、対象物との位置関係を捉えるものである。内在的な方向性とは、その物体の形状や機能によって決められる特性のことである。相対的参照枠とは、篠原・松中 (2005: 471) では「認知主体の視点がつま方向軸を参照物に投影することによって参照枠を決めるもの」と解釈している。すなわち、相対的参照枠は、空間の観察者がどこに位置し、どの視座から空間を捉えているかということにも関わり、対象物と参照物の関係を相対的に描写する。内在的参照枠に比べ、相対的参照枠の場合は、観察者の向き方が異なれば違った読み取りがなされる。

- (1) a. テレビの前に座る。
- b. 木の前にネコがいる。

(1a)におけるテレビは内在的な方向性を持っているため、観察者の位置に頼らず、内在的参照枠によって位置関係を定めることができる。これに対して、(1b)における「木」には内在的な前後軸及び左右軸が存在しておらず、観察者の位置が確定されてはじめて、相対的に「木の前」や「木の後ろ」が意味をなすようになる。

2.1.2 方向付け方略

空間における前後の関係を定める方法として、対峙的方略 (Ego-opposed strategy) と同方向的方略 (Ego-aligned strategy) という2種類の異なる捉え方があるとされている (Moore 2000: 105-163, 篠原 2002: 243-244)。対峙的方略の場合では、観察者は、参照物が自分と対面しているように認識し、両者の間にある領域が参照物の前方と見なされる。一方、同方向的方略の場合では、観察者は、参照物が自分と同じ向き方で並んでいるように認識し、両者の間にある領域が参照物の後方と捉えられる。対峙的方略と同方向的方略の違いを Shinohara (1997) で取り上げられた実例を示せば、次のようになる。

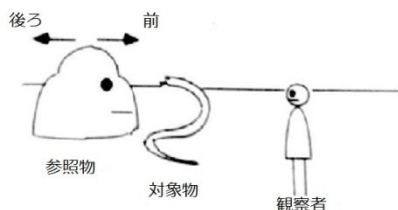


図 3-1 対時的方略
(Shinohara 1997: 125, 一部修正)

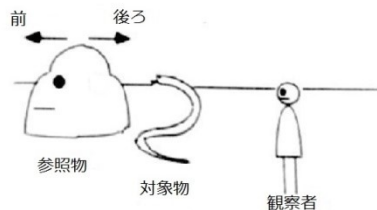


図 3-2 同方向的方略
(Shinohara 1997: 126, 一部修正)

- (2) a. The snake is in front of the rock. (English and Japanese)
b. The snake is behind the rock. (Hausa)

(Shinohara 1997: 125-126)

図 3-1 と図 3-2 は、観察者が石を参照物として、蛇との位置関係を捉える場面を反映している。対時的方略を適用する場合は、参照物の石が観察者に向いているように捉える。言い換えれば、両者がフェイス・トゥ・フェイスの関係であるように認識する。この場合、観察者と参照物の間にある領域は対象物の前面と見なされる。したがって、観察者が英語や日本語の母語話者である場合、(2a)のように蛇が石の前にいると把握する。このような対時的方略は *mirror perspective* とも呼ばれている。一方、同方向的方略を適用する場合は、例えば、アフリカの Hausa 語が母語である観察者は、対象物があたかも「背中」を見せる姿勢で認識するので、石の間との領域が石の後ろ側にあると捉え、(2b)のように蛇が石の後方にあると見なす。

2.2 日本語の「前(まえ)」と中国語の「前(qian)」の空間的な意味

2.2.1 身体・生物の形状に依存する場合

認知言語学の視点によれば、われわれ人間は、身体上の特徴を基軸にして、外部の空間を捉えており、前方の言語化もその一環である。例えば、英語の *in front of* という複合前置詞における *front* の語源については、檜和によれば、それがラテン語の *frons*、*frontis* という本来的には人間、あるいは動物の頭の部位を示す言葉から、借用されたものである。英語のみならず、Heine (1989, 2010)は、125 種類のアフリカ言語と 104 種のアオセアニアの言語における空間表現を調査し、前方という空間的概念に関連する表現の多くは、言語の種類を問わず、人間の身体の部位と緊密に関わっていると指摘している。

日本語の「前(まえ)」も同様に、最初に人間の身体から派生してきた概念である。「前(まえ)」という語は、『日本国語大辞典』に記述されているとおり、「ま」と「へ」という 2 つの要素から構成された表現である。「ま」は古代日本語では目の語幹であり、この語幹が現代日本語でも、「瞼・目蓋・眼蓋(まぶ)」、「睫・睫毛(まつげ)」といった例から分かるように、

眼・目と関わる言葉に存在している。また、「方・辺(へ)」という語幹は、「そのあたり」、「近所」、「周囲」、「移動先」などといった方向あるいは場所を示す意味を担っている。例えば、「ゆくへ(行方)」、「うみべ(海辺)」などの現代日本語によって受け継がれている用例を通して、「方・辺(へ)」の本来の意が覗える。また、中国語の場合では、甲骨文字としての「前」という漢字は、人の足を意味する「止」の下に「舟」が加えられ、「𠂔」という形で書かれていた。舟に立つ人が川の流りに従い、先に進んでいくという意味である。

檜和 (2005: 112)は、front という英語の名詞の用法について、人間が自らの身体の前方を概念化して、他の生物にも投影すると指摘している。ここで指摘したいのは、日本語と中国語の場合でも同様に、前後軸という人間の身体の前方向性が外部のものに付与する場合も多くある。つまり、人間の身体の前後軸は、他の生物、または、人間の形に似た物体にも付与、投影され、「前(まえ)」、「前(qian)」で言語化されるということである。

- (3) a. パンダの前に魚を置きました。
(鹿内信善著 『やる気をひきだす看図作文の授業』)
- b. 和市長站在熊貓前照相。
(市長と一緒にパンダの前で写真を撮った。)
(人民日報社編 《大地月刊》、日本語訳は筆者による)
- (4) a. 例えばゾウの前で、こんな話をする。
(岩波書店編 『世界』)
- b. 立刻跑到皇室大象前下跪行禮。
(すぐ王室のゾウの前に行き、ひざまずいて礼をした。)
(蕭秀青編 《玫瑰盛宴》、日本語訳は筆者による)
- (5) a. 俺は、枯れてしまった向日葵の前に車椅子を止め、待つことにした。
b. 我在枯萎的向日葵前停下輪椅，開始了等待。
<CJBC> (張海迪著 《輪椅上的夢》)
- (6) a. 雪だるまの前で記念写真を撮る。
(大門良子著 『ニコニコクリーニング店の話』)
- b. 雪人前站著一個女孩兒。
(雪だるまの前に一人の女の子が立っている。)
(鮑爾吉著 《雪地賀卡》、日本語訳は筆者による)
- (7) a. 彼ら是一堂に籠って仏像の前で念仏を唱和するのである。
(川添昭二著 『北条時宗』)

b. 在佛像前頂禮膜拜。

(仏像の前にひれ伏す。)

(菩提法門著 《禪修與健康》、日本語訳は筆者による)

具体的に言えば、(3)と(4)に取り上げられた例から分かるように、パンダとゾウのような動物が、「前(まえ)」と「前(qian)」という本来人間の身体から生じた概念と共起している。すなわち、本来人間の身体の前対称による前後軸が動物に投影されて、「前(まえ)」と「前(qian)」が、動物の目や視線が向いている方向または領域を意味することになった、ということである。

そして、動物のみならず、(5)の例から分かるように、一部の植物も、形態上の特徴によって、人間にとって人体のように捉えられる。例えば、ひまわりには、人間のような目や足のようものが存在しないにもかかわらず、形から見れば、多数の花びらによって構成された円盤が人間の顔のように捉えることもできる。このため、ひまわりという植物にも、前後軸が付与されて、内在的な方向性を持つようになる。つまり、ひまわりは、「木の前」といった観察者の位置を明記しないと、「前(まえ)」・「前(qian)」で示す方向が分からない場合と異なり、ひまわりの「前(まえ)」・「前(qian)」がその固有的な方向軸によって規定され、特に観察者の位置を指定しなくても、想起できる。

さらに、(6)と(7)の例から分かるように、雪だるま、仏像といった物体には、人間のような頭部や顔面の部分が分別することができ、形の特徴に基づき、前後の方向軸を付与することも可能である。このような形が人間の身体と似たモノは、「前(まえ)」・「前(qian)」と共起する際に、内在的参照枠の捉え方によって、観察者の存在する場所を特に指定しなくても、「仏像の前(佛像前)」や「雪だるまの前(雪人前)」で示す前方という概念が想起できる。

2.2.2 物の機能に依存する場合

2.2.1 節では、空間の観察者の位置を明記しなくても、人間の身体、生物の形態上の構造に依存し、認識される「前(まえ)」と「前(qian)」について説明した。この2.2.2 節では、物の機能に依存する場合の「前(まえ)」の用法を考察する。このような「前(まえ)」の意味ついて、『日本国語大辞典』をはじめとする辞書においては、「物体の正面」というように記述されている。「正面」という概念をさらに改めて調べてみると、各辞書では概ね、「物の前の面」というように記述されている。そもそも、物体の前の面、あるいは正面が両言語の話者にどのように認識されているのかが疑問として生じる。

認知言語学の視点から見れば、人間の外部の物体に対する知覚には、通常の状態では外部の物体が人間との関わり方も含まれている(Talpor and Evans 2003: 132-135, Talmy 2000a: 175-254)。つまり、人間は、外部の物体を見るとき、その物体が単なる「高さ」や「広さ」や「長さ」といった物理的な属性に注目するのではなく、その物体が普段人間にどのような機能を提供するか、どのように使用されているかにも目を向けている、ということである。

ここで注意しておきたいのは、物体が人間によってどこでどのように道具として使用されているか、という認知言語学の分析の視点から、日本語の「前(まえ)」と中国語の「前(qian)」の意味をより明確に把握できるということである。物の機能に依存する「前(まえ)」の用法は、対峙的方略による場合もあり、同方向の方略による場合もある。

第一に、ノートパソコンの使用を実例として、日本語と中国語において、物体の機能に基づく対峙的方略により、いかにその物体の前方を決めるかについて分析する。

普段人間がパソコンを使用するときの様態は図 3-3 の a に描かれており、破線が身体の前後軸を示すものであり、黒い矢の先と白い矢の先がそれぞれ身体の前方向と後方向を表している。ノートパソコンを使用する際の身体の姿勢に基づき、身体の前後軸が反転されてパソコンに投影している。つまり、図 3-3 の b で実線の矢印で表示されているように、モニターが付けられている部位の方向がノートパソコンの「前(まえ)」・「前(qian)」と規定されるということである。

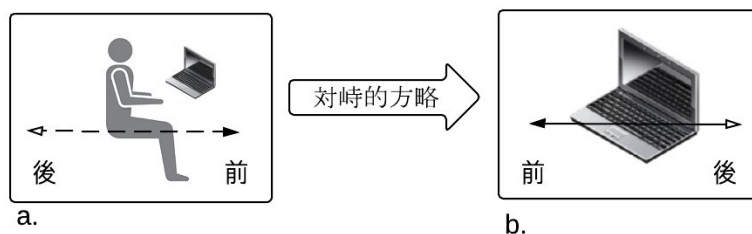


図 3-3 ノートパソコンの前後軸の形成 (筆者作成)

- (8) a. 1 日 12 時間以上もノートパソコンの前に座り続けた男性が、この症状に陥ったという報告もあります。

(長野茂著 『忙しいあなたの運動不足を解消！』)

- b. 李誠銘坐在筆記本電腦前,神情嚴峻地看著計算機屏幕。

(李誠銘がノートパソコンの前に座り、厳しい表情でモニターを見つめている。)

(張軼驍著 《保送生活》、日本語訳は筆者による)

- (9) a. これから鏡の前で笑顔の練習でもしようか。

<BCCWJ> (平賀元気著 『キリスト屋』)

- b. 在鏡子前梳頭,一梳就是一兩個鐘頭。

(鏡の前で髪を梳かすのに、1、2 時間もかかった。)

(茅捷著 《七月冰八月雪》、日本語訳は筆者による)

- (10) a. 利用者が大勢いるならば ATM の前に行列ができることになる。

(鈴木衛著 『コンピュータシステムの基礎』)

b. 走到 ATM 前要提款。

(ATM の前に行き、預金を引き出す。)

(蔡駿著 《人間》、日本語訳は筆者による)

ノートパソコンのみならず、鏡台や ATM といった物体に関しても、(9)と(10)から分かるように、日中両言語ではそれぞれの内在的な「前(まえ)」と「前(qian)」が対峙的方略の仕組みを通して、決められている。これらの物体に共通しているのは、人間とインタラクションを行う際に、人間の視線を阻んで、文字や画像を提供する部分があるということである。ノートパソコンや ATM は、モニターという部分によって、また、鏡台は鏡面の部分によって、人間の視線を集中させ、文字や像を画面に映し出すことができる。つまり、ノートパソコンや鏡のような物体の正面は、その物体が人間に使用されるとき、人に情報を直接的にアウトプットできるところになるということである。

第二に、物体の機能に基づき、同方向的方略を通して物体の内在的な方向性または物体の正面が決められる事例は、日本語でも中国語でも多く見られる。まず、衣服を例として取り上げて分析する。図 3-4 の a においては、人が服を着ている様子が描かれている。そして、破線の矢印が身体の前後軸を示すものであり、黒い矢の先と白い矢の先がそれぞれ人間の前方と後方を指している。人間は同方向的参照の捉え方により自分の身体をベースとした前後軸の指向を変えることなく服に付着させることができる。結果として、図 3-4 の b の部分における実線の矢印で示されるように、服の内在的な「前(まえ)」と「前(qian)」が決められる。両言語の具体的として(11)が挙げられる。

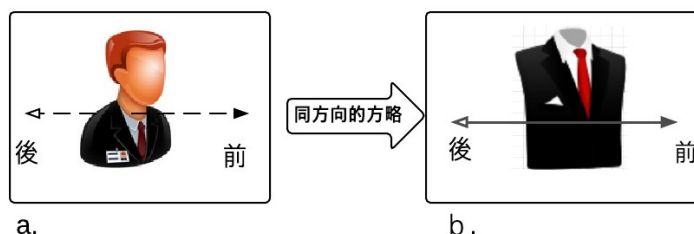


図 3-4 服の前後軸の形成 (筆者作成)

(11) a. 口内に溜まっていた血が一度に流れ出て服の前を真っ赤に染めた。

<BCCWJ> (別所誼二著 『昭和物語』)

b. 衣服前的紐扣。

(服の前のボタン。)

(莫斯著 《宙斯的女兒》、日本語訳は筆者による)

同方向的方略で物体に内在する方向軸を決める事例については、椅子が代表的な例である。「椅子」というものは、人間にとって腰をかける道具であり、すなわち「座る」という機能を提供している。人間が椅子を使用する状況に基づいて、身体の前後軸を椅子に合わせ、

人間の前方が椅子の前方と見なされる。

- (12) a. デイヴは長椅子の前を通りすぎ、壁に耳を当てた。
 <BCCWJ> (大久保寛著 『ブルー・ムービー』)
- b. 走到椅子前站立。
 (椅子の前に行き、立ち留まる。)
 (郭英麗著《MBA 面試指導》、日本語訳は筆者による)
- (13) a. ソファの前には小さなテーブルがある。
 <BCCWJ> (ねじめ正一著 『昼間のパパと夜明けの息子』)
- b. 沙發前有個玻璃茶几。
 (ソファの前にはガラス製の机がある)
 (顔俊傑著 《不死器官》、日本語訳は筆者による)

「前(まえ)」と「前(qian)」の語義を解釈するときに、辞書を含め、従来では「物の正面」という言い方は、物体の方向性とその機能との関連性を重視するという観点から言えば、より明確に解釈することができるということである。「物の正面」における「面」は、その物体が道具として人間に使用され、機能を果たすときに、または、直接的に人間と関わる時に重要となる部位である。すなわち、「物の正面」における「正」という方向性は、普段人間がどのようにその物体を使用しているかによって決められるものである。そして、その決め方としては、ノートパソコンのように、対峙的方略を通して、人間の身体の前後軸を反転し、道具としての物体に付着させる類と、衣服のように、同方向的方略に依拠し、身体の前後軸を反転することなく、直接的に道具としての物体に付着させる類がある。

2.2.3 視点の位置に依存する場合

2.2.1 節と 2.2.2 節では、参照物となるものが内在的な前後軸を有し、身体、物体の形及び機能に依存する際に、すなわち、内在的参照枠の場合に、前方という空間的な概念は、どのように日本語の「前(まえ)」と中国語の「前(qian)」によって言語化されるのかについて分析した。本節では、参照物に内在するとみなされる前後軸がなく、観察者の位置や視点を明記しないと位置関係を捉えられない場合、すなわち、相対的参照枠の場合の「前(まえ)」と「前(qian)」の意味について分析していく。

ボールや木や立方体の積み木は、雪だるまのような形によって固有の方向性を持つものと異なり、また、テレビやソファのような機能によって固有の前後方向性が付与されているものとも異なり、常に前方とみなされる特定の部位を持っていない。このような相違は、英語の *in the front of* と *in front of* という 2 つの表現の差に明確に反映されている。*in the front of a car* が言えるのに対して、*in the front of a ball* が言いにくく、*in front of a ball* の方が自然

である。なぜなら、in the front of が可能なのは、内在的な前後軸が含まれた名詞に限られるからである。日本語と中国語においても同様に、「ボールの前(面)にいる」のような表現は、視点の位置が分からない限り、ランドマークとトラジェクターとの位置関係を特定できない。

- (14) a. 彼は一本の薔薇の木の前に立ち止った。
<BCCWJ> (堀辰雄著 『プルウストの文体について』)
- b. 樹前放著石頭。
(木の前に石を置いておく。)
(李近春著 《納西学論集》、日本語訳は筆者による)
- (15) a. まばゆ老婆は水晶玉の前に坐り、目を閉じ、手を合わせて集中した。
(音羽広士著 『ルナティック』)
- b. 站到水晶球前, 出神地町著它看。
(水晶玉の前に立つ。水晶玉をうっとり見つめる。)
(朱曉翔著 《盗墓玄機》、日本語訳は筆者による)
- (16) a. 来場者に白い高さ2メートルの立方体の前に立ってもらった。
(『清泉女学院大学記事』)
- b. 拖到立方體前。
(立方体の前に引きずる)
(鐘嵐著 《Maya 6.0 實用培訓教程》、日本語訳は筆者による)

ただし、(14)～(16)では、「木」、「水晶玉」、「立方体」が内在的な方向性を持たないにもかかわらず、空間の観察者(文の発話者)の視点の位置に依存し、これらのものも前方と認識される部位、領域を持つようになり、「前(まえ)」・「前(qian)」と共起している。ただし、ここで注意しなければならないのは、空間の観察者(文の発話者)の視点から、前方という方向の捉え方が、言語によって異なっているということである。

Hill (1982: 13-42)では、英語とアフリカの Hausa 語が、それぞれ異なる方向付けの方略に基づき、前後を捉えているということを指摘している。具体的に言えば、Hausa 語を母語とする人は、図 3-5 におけるスプーンと容器の位置関係を捉える際に(いずれも静止の状態にある)、トラジェクターのスプーンがランドマークの容器の前方ではなく、後方にあると認識するのが一般的である。

一方、英語を母語とする人は、通常スプーンが容器の前方にあると捉えている。つまり、観察者の視点の位置に依拠し、前後関係を捉える際に、Hausa 語では一般的に同方向の方略で捉えられるのに対して、英語では通常に対峙の方略に依拠しているということである (Hill 1983: 24-29, Levinson 2003: 86-88)。

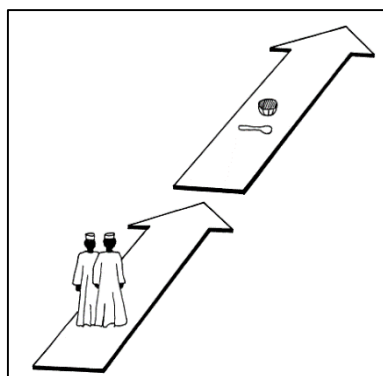


図 3-5 Hausa 語の前方 (Hill 1982: 21)

注目に値するのは、認知言語学および文化人類学の調査を通して分かったことであるが、静止した状況で、相対的参照枠で参照物と対象物との位置関係を把握する際には、対峙の方略で把握する言語が多く、Hausa 語のようなとらえ方をする言語は比較的少ないということである。

視点の位置に依存する場合には、日本語と中国語ではどのような方向付け方略に基づき、トラジェクターとランドマークの位置関係を捉えているのかという問題について、すでに日本語学と中国語学の分野で、それぞれに分析されている。Shinohara and Matsunaka (2010) では、日本語の「前(まえ)」が基本的には対峙の方略で、トラジェクターとランドマークの位置関係を言語化すると指摘している。林 (1993) は、英語との比較を加味し、中国語の「前(qian)」も対峙の方略に依拠して、モノどうしの位置関係を捉えると主張している。

ここで指摘したいのは、日本語の「前(まえ)」と中国語の「前(qian)」は、トラジェクターとランドマークとの前後の位置関係を認識する際に、基本的には対峙の方略に基づいているということである。例えば、(14)～(16)における「前(まえ)」と「前(qian)」で示された前方は、いずれも、英語の front と同様に、対峙の方略によって決められた前方である。すなわち、観察者は、ランドマークが自分に向いているように認識し、自分の身体の枠を回転して、ランドマークに投影したうえで、トラジェクターとの位置関係を把握しているということである。

ただし、ここで注意しておきたいのは、上記に取り上げられている(14)～(16)のような事例におけるトラジェクターとランドマークが、いずれも静止している状態、厳密に言えば、移動する傾向のない状態にある、ということである。移動及び主観的な移動といった要因が加わると、「前(まえ)」と「前(qian)」との用法が一致しなくなり、この現象については 3.1 節でまた詳しく分析していく。

2.3 日本語の「先(さき)」の空間的な意味

日本語には「前(まえ)」のほかに、前方という空間的な概念を示す際に「先(さき)」という空間辞がある。「先(さき)」の空間的な意味に関して、国広 (1997)、碓井 (2001)、寺崎 (2011) などがある。この 2.3 節の構成については、具体的に言えば、次のようになる。まず、2.3.1 節で「先(さき)」に関する先行研究を整理し、また、2.3.2 節では、スキーマの複合及び交換というプロセスを概観する。2.3.3 節では、先行研究の問題点を踏まえ、「先(さき)」の空間的な意味構造を提案する。2.3.4 節では、「先(さき)」によって言語化される前方の特徴を考察する。

2.3.1 「先(さき)」の「方向性」と「移動性」

「先(さき)」の空間的な用法を巡っては、これまでに研究がすでに多数ある。国広 (1997: 250-256) では、現象素という概念を提起し、図 3-6 のように、「先(さき)」の多義構造を「方向性を持ったタテ長の物の B の部分である」と解釈したうえで、「先(さき)」の意味を、形態的意味(指のさき)、位置の意味(行くさき)、未来(それはずっとさきのことだ)、順序・過去(私が先に来ました)に分類している。

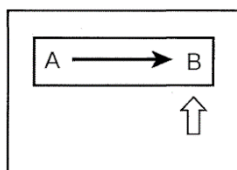


図 3-6 「先(さき)」の現象素 (国広 1997:250)

碓井 (2001: 54) は「さき」の多義構造を決める要因について、細長い物のスキーマ、メンタルパスの方向性、モノの形状、モノの移動性を取り上げている。

寺崎 (2010) によれば、「先(さき)」の空間的な用法は、物の本来の尖っている状態や何らかの形の性質における「内在的サキ」という主にモノに関わる用法と、「内在的さき」を踏まえ、さらに外部の空間に伸ばす「外在的さき」という前方に関わる用法があるということである。「内在的サキ」は、「尖っている」などの形態を捉える際に、「心的に起こる視線の移動を含めた移動の知覚」(寺崎 2010: 19) を踏まえ、物体の「収束」という体験によって生じた概念である。「ペンの先」や「ヤリ先」といった細く長いものの先端といった事例は、「内在的サキ」の類に当たる。また、「外在的サキ」というのは、意識の方向性を対象物の内部にそのまま依存して、外部に拡張していく場合の「先(さき)」のことである。例えば、「鼻のさきをハエが飛び回っている。」や「この先立ち入り禁止」といった事例における「先(さき)」は、「外在的サキ」である。

そして、寺崎 (2010) は、碓井 (2001) の分析について、「先(さき)」の意味構造の決定要因をさらに「方向性」と「移動性」に整理して、この 2 つの決定要因が表裏一体の関係にあるとも指摘している。

上記の 3 つの研究の中で、認知言語学の新たな動向も加味して、「先(さき)」の意味を詳しく考察しているのが、寺崎 (2010)である。しかし、この研究においては、次のような問題が残っている。寺崎 (2010)によって挙げられた「移動性」と「方向性」という 2 つの要素が、さらにどのように認知言語学の枠組みに基づき説明されるのか、という課題である。

この問題に関しては、本論文は、スキーマの複合と変換の視点から、そして、山梨(2000)によって提案されているスキーマのリストに照らして、「先(さき)」の「移動性」と「方向性」という 2 つの動機付けについて考察する。

2.3.2 スキーマの複合と変換

前方を言語化する概念であるが、「先(さき)」は、「前(まえ)」と異なり、前後という方向性のみならず、移動とも関連するという特徴がある。すなわち、「先(さき)」の意味構造には、〈前-後〉のスキーマに限らず、移動に関連するスキーマも関与し、複数のスキーマの複合によって構成されているということである。2.3.2 節では、まずスキーマの複合と変換という 2 つのプロセスについて、山梨 (2000)の分析を概観する。

山梨 (2000: 149-152)では、スキーマどうしの関係を重視する立場から、日本語における言語事実に基づき、認知主体の経験領域を反映する抽象度の高いスキーマのリストを提案している。山梨 (2000)によって提唱されているリストでは、〈前/後〉、〈起点-経路-到達点〉、〈軌道〉、〈容器〉、〈中心-周辺〉などのスキーマが取り上げられている。各種類のスキーマが認知のレベルではそれぞれ独立しているが、互いに緊密に関係にしている。スキーマどうしの重ね合わせ、すなわちスキーマの複合を通して、新たな経験構造が生じることもある (伊藤 2013: 119)。

- (17) a.モグラが穴から出て繁みに入っていった。
- b.水が溜め池から川に流れ込んだ。
- c.彼は町を出て田舎に移り住んだ。

(山梨 2012: 30)

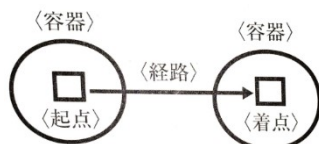


図 3-7 〈容器〉と〈起点-経路-着点〉との複合

(山梨 2012: 30)

例えば、(17)は、一見したら、移動者がある地点を出発点にして、一定の経路を辿り、到達点に着くという事象を示している。すなわち、〈起点-経路-着点〉のスキーマによって定

められた表現のように見える。しかし、(17)における出発点と到達点は、一定の容積のある空間領域であり、〈容器〉のようにも捉えられる。つまり、(17)は、図 3-7 に示されているように、〈起点-経路-着点〉と〈容器〉の 2 つのスキーマの複合を通して規定される事例である (山梨 2012: 31, 伊藤 2013: 119)。

スキーマどうしの複合のほかに、スキーマの間に変換の現象もよく見られる。この拡張プロセスについて、山梨 (2000: 164) は、「スキーマの構造自体に対する認知プロセスのシフトがある」と指摘している。よく取り上げられているスキーマ変換の例として、〈複数個体〉から〈軌道〉への変換などの具体例がある。

(18) a. There is a fence along the road.

b. There are guards posted along the road.

(Lakoff 1987: 441)

例えば、(18) では、道路に沿ってフェンスが文字通りに継続的に連続している状況を表現している。これに対して、(18) の警備員たちは、複数の個体として、間隔を置いて並んでおり、連結されていないものの、連続体のように捉えられている。とぎれとぎれの個体の集合体を隙間のない連続体のように認識することができる理由は、〈複数個体〉が〈軌道〉に変換したからであるというプロセスによって説明できる。

2.3.3 前方を示す「先(さき)」の意味構造

2.3.1 節でも触れたように、寺崎 (2010: 15) は「方向性」と「移動性」こそが「先(さき)」の意味の構造を決める要因と論じている。しかし、「方向性」と「移動性」という 2 つの動機付けが、既存の事態認知のネットワークにおいては、どこに位置しているかについて、寺崎 (2010) では詳しく論じていない。結論から言えば、本論文では、この 2 つの動機付けを、スキーマの複合と変換という 2 つのプロセスによって説明できると考えている。

具体的に言えば、山梨 (2000) によって提唱されているスキーマのリストに照らして、前方を示す「先(さき)」の構造を決める動機づけである「方向性」が〈前/後〉への、また「移動性」が〈起点-経路-終点〉と〈軌道〉への還元を通して解釈できる。言い換えれば、「先(さき)」のスキーマは、〈前/後〉と〈起点-経路-終点〉と〈軌道〉の複合及び変換を通して、「方向性」と「移動性」という 2 つの動機付けを説明できるということである。

山梨は (2000: 151) では、図 3-8 に示されているように、〈起点-経路-終点〉における〈経路〉の部分の一定の視点から見れば、〈軌道〉のスキーマが立ち現れ、また、〈経路〉におけるある目標に向かって進行していくと見る際に、進んでいく方向が〈前〉となり、反対の方向を〈後〉と位置づけることができると指摘している。

山梨は (2000: 151) に照らして、ここで指摘したいのは、〈前/後〉、〈起点-経路-終点〉、〈軌道〉が緊密に関わり、この 3 つのスキーマの関連性が、「先(さき)」の多義構造の土台

ともなる、ということである。「先(さき)」のスキーマを示せば、図 3-9 における d の部分のようになる。

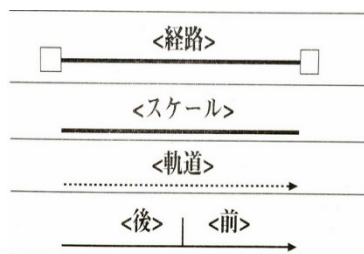


図 3-8 各種のスキーマ (2000: 151)

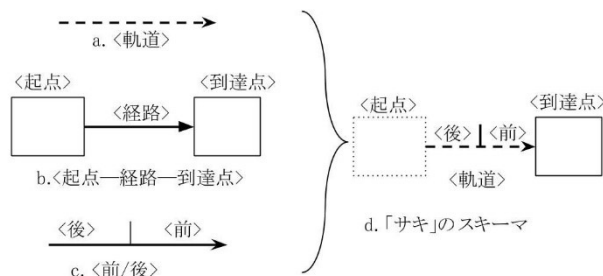


図 3-9 「先(さき)」のスキーマ

前方を示す「先(さき)」の構造には、<経路>から<軌道>へというスキーマ変換の現象も伴っているということである。<経路>と<軌道>の違いについて、具体的に言えば、Tyler and Evans (2005: 314)では、<軌道>が移動の動き(仮想的な移動も含む)を必要としており、いわゆる「動く過程の抽象的な表示」であるのに対して、<経路>が動きを必要としないと分析している。Clausner and Croft (1999: 23-25) は、<経路>と<軌道>という2つのスキーマを論じる際に、両者の相違について、前者の<軌道>が動きを必ず伴っていて、ダイナミックな存在 (trajector moving along a path)であるのと対照的に、後者の<経路>は一次元のような物的な存在(one-dimensional trajector)であると指摘している。

<経路>から<軌道>へのスキーマ変更という現象は、人間の言語においてよく見られる現象である。Lakoff(1987: 104-106)では、なぜ(19a)と(19b)のいずれも into が、そして(20a)と(20b)のいずれも through が使用できるのかについて、移動の痕跡と空間的な広がりの間には緊密な関係があり、<軌道>から<経路>へというスキーマの変換が伴っているからであると述べている。

- (19) a. The man ran into the woods.
b. The road ran into the woods.

(Lakoff 1987: 106)

- (20) a. Sam ran through the forest.
b. There is a road through the forest.

(Lakoff 1987: 106)

「先(さき)」の空間的な意味の構造を示している図 3-9 の d では、「先(さき)」の前方という方向性が主に図 3-9 の c の<前/後>のスキーマに由来しているため、短い垂直線を付した矢印で「方向性」が示されている。特に注意しておきたいのは、図 3-9 の d について、従

来の〈起点-経路-到達点〉のスキーマでは、真ん中の線が、〈経路〉を意味する実線で示されているが、図 3-9 における d の部分、すなわち「先(さき)」の意味構造には、〈軌道〉を示す破線で表記されている、ということである。〈起点-経路-到達点〉における〈経路〉が、〈軌道〉によって変えられたのは、〈軌道〉のほうが移動とより直接的に関与しているからである。

2.3.4 「先(さき)」で示された前方の特徴: 心的な移動

2.2 節では、「前(まえ)」と「前(qian)」で示された前方を分析した。「前(まえ)」と「前(qian)」は、静止の状態では、対時的な方略でトラジェクターとランドマークとの位置関係を言語化している。しかし、「先(さき)」で示された前方は、動静を問わず、通常同方向的方略に依拠して、前方を概念化している。

- (21) a. 飛んでいくボールの先には、フェンスがある。
b. 飛んでいくボールの前には、フェンスがある。

(篠原 2008: 191)

- (22) a. 郵便局の先に、太郎がいる。
b. ?郵便局の前に、太郎がいる。

(篠原 2008: 191)

具体的に言えば、(21)の「先(さき)」は、移動体のボールが一定のルートに従って前方へ進んでいく場面を表現している。この場面では「先(さき)」と「前(まえ)」とは置き換えられる。これに対して、(22)における「先(さき)」の用法について、(篠原 2008: 191) では主観的な移動の有無の点から、「太郎の位置を認知している主体が郵便局の方向に向かって移動するという想定のもとで、『郵便局の参照点として主体が移動していく方向にある空間』が『郵便局の先』と論じているが、なぜ変えられないかについて詳しく説明していない。

ここで指摘したいのは、(22)における「先(さき)」は、一種の主観的な移動を示しており、このような場面の前方が「前(まえ)」で言語化するのは困難である、ということである。Talmy (1996: 212-213)では、*There is a church across the street from here* のように、ある実体の位置を特定するためのルートを心的に辿る主観的な移動を *Access Path Expression* と呼んでいる。この定義から分かるように、*Access Path Expression* という種類の主観的な移動の表現は、真の移動と緊密に関わっている。

なぜ(22)の「先(さき)」が「前(まえ)」に変えられないかという点、それが「先(さき)」の動機付けには移動が含意されているのに対して、「前」の動機付けには移動が含まれていないからである。すなわち、日本語では、「先(さき)」と「前(まえ)」のいずれも前方という概念を表現することができ、そして、両者を置き換えることができる場合も少なくないが、〈

軌道>というスキーマとの関与の有無という相違で、上記のような状況では、仮想的な移動の方向を言語化できるのが「先(さき)」のみということになる。

3. 空間的な意味の対照

この第3節では、「前(まえ)」と「前(qian)」との相違点を、「移動を伴う場合」と「移動の傾向がある場合」という2種類の状況に分けて分析する。そして、スキーマの背景化という現象を提起し、「先(さき)」の目的地を示す用法を考察し、「前(qian)」との比較を行う。

3.1 「前(qian)」とは対応しない「前(まえ)」：移動を伴う場合

2.2.3 節では、相対的参照枠で空間における静止しているモノ同士との関係を把握する際に、Hausa 語に見られるような同方向的策略に比べると、対峙的策略のほうが様々な言語に多くに見られるという現象を述べた。しかし、Hill (1978: 527)は移動という要因が加わると、英語をはじめとする多くの言語も Hausa 語と同様に、同方向的策略で前方を認識することもあると指摘している。図 3-10 で言えば、観察者が静止している場合は、**There is a white ball in front of the black ball.** という文が意味する対象物としてのボールはAのほうである。しかし、同じ文ではあるが、観察者が、ボールに向かって移動していく場合は、Hausa 語と同様に同方向的策略が適用されて、対象物としてのボールはBのほうを意味することになる。

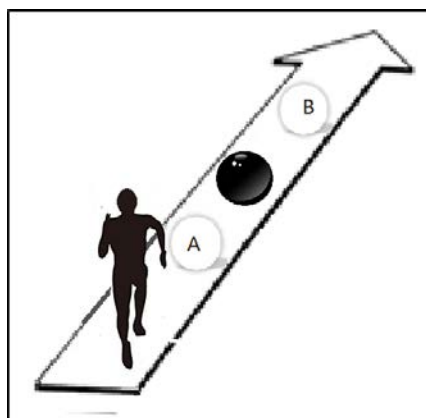


図 3-10 移動を伴う場合(筆者作成)

図 3-10 をめぐる前後関係について、観察者が参照物と対象物に向けて移動を行うという要因が関与すると、中国語も日本語も同方向的策略で、対象物を捉えることが可能である。これに対して、両言語とも観察者の位置が固定されている場合は、対峙的策略を通して、黒いボールの前方にある物体が必ずボールAのほうであると捉える。

また、観察者が前方に3つ縦に並んでいるボールに向かって動き始めるような場合は、両言語とも同方向の方略に依拠し、黒いボールの前方にある対象物がボールBのほうになる。ここで興味深いのは、この同方向の方略によって決められる前方という概念を、中国語では「前(qian)」で言語化することができるのに対して、日本語では「前(まえ)」で言語化することが難しいということである。

(23) 図3-10のように、観察者が3つ縦に並んでいるボールに向かって移動する場合

- a. 球B在黑色球的前面。
- b. ?ボールBは黒いボールの前にある。
- c. ボールBは黒いボールの先にある。

すなわち、中国語の(23a)では、前方という概念を「前(qian)」(厳密に言えば、「前面(qián miàn)」)で表すことができるが、日本語の(23b)では「前(まえ)」で表すと不自然になり、(23c)のように「先(さき)」で言語化するのが自然である。この言語事実から、観察者が移動しているという要因が加わると、「前(qian)」と「前(まえ)」の間には使用範囲に相違が見られる。

(24) 花子:能把車停在那兒嗎?

そこに止めてくれませんか。

太郎:那兒不太好停車,再往前一點吧。

ちょっと止めにくいので、少し先にします。

(24)のような車の運転に関する日常会話の例でも同様のことが言える。中国語の場合では、「前(qian)」は、太郎が同方向の方略によって、車を止めるところが花子の降りたい地点の前方にあるという空間関係を言語化することができる。これに対して、日本語の場合では、助手席に座っている花子が車を運転している太郎に「そこに止めてくれませんか」と言うと、太郎は「ちょっと止めにくいので、少し先にします。」と答えている。この場面では、太郎は移動している観察者として「そこ」という地点を参照点とし、同方向の方略に依拠して、車を止める位置が「そこ」の前方にあると認識し、この前方を「先(さき)」で言語化している。すなわち、「少し前にします」というような文が文法的には可能であるにもかかわらず、この(24)のような場面では「前(まえ)」の使用が制限されているということである。

3.2 「前(qian)」とは対応しない「前(まえ)」: 移動の傾向がある場合

観察者は実際の移動が行われなくても、参照物と対象物に向かって移動していく傾向がある場合、「前(qian)」と「前(まえ)」とが対応しない(25)のような事例も見られる。中国語

では、花子の「郵局在哪兒？」という問いに対して、太郎は「就在這前面。」と「前(qian)」を用いて答えることができる。しかし、日本語では、郵便局を探している花子に「郵便局はどこですか」と呼び止められた場合、太郎は、これから郵便局の向かって歩いていく花子に、「すぐこの先です。」というように「先(さき)」を使って答えるのであって、「すぐこの前で」というように「前(まえ)」を使って答えると不自然になる。

(25) 花子:郵便局在哪兒？

郵便局はどこですか。

太郎:就在這前面面。

すぐこの先です。

また、(25)は、観察者が工事現場に阻まれ動けなくなっているが、前方の目的地に向かって移動しようとする意向がある状況を示した文である。

(26) a. 前面正在修路, 過不去。

b. この先は道路工事で通り抜けできない。

(『中日・日中辞典』)

この状況では、観察者は同方向の方略で、工事現場を参照点にして、目的地がその前方にあると捉え、「先(さき)」で前方を表現している。

さらに、観察者だけでなく、参照物が移動する傾向にある状況でも、同方向の方略で決められる前方は「前(qian)」で表現できるが、「前(まえ)」で表現できない事例もある。図 3-11 は、観察者が静止したボールを打ち、ボールをカップ(穴)に入れようとしたが、ボールが途中で止まってしまう場面を反映した事例である。

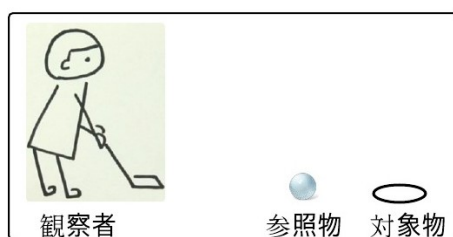


図 3-11 参照物に移動の傾向がある状況 (筆者作成)

(27) ゴルフボールがホール(穴)に入らず、途中で止まった状況

a. 球洞在球的前面。

b. ホールがボールの先にある。

c. *ホールがボールの前にある。

図 3-11 の状況では、ボールが動いていないにも関わらず、両言語とも観察者はまだ動いているように捉え、元の経路の延長線にホール(穴)があるように認識している。観察者は止まったボールを参照物にして、対象物であるカップとの位置関係を把握する際に、同方向の方略に依拠し、ボールの前方にカップがあるように把握しているということである。こうした場面でも、「前(qian)」と「前(まえ)」が対応しにくくなっている。

3.3 「前(qian)」とは対応しない「先(さき)」：位置を示す役割

日本語の「先(さき)」には、「勤め先」や「行先」といった表現から分かるように、前方という空間的な概念を示すほかに、位置を表す機能がある。一方、中国語の「前(qian)」は、空間的な用法として基本的には前方を言語化する機能のみであり、位置を示す機能をもつのが困難である。

本節では、本論文が提案した「先(さき)」の多義構造に基づき、「先(さき)」の位置的な意味の動機付けを分析したうえで、「前(qian)」と「先(さき)」との相違点を考察する。

「先(さき)」との位置を示す機能を分析するのに先立って、スキーマの背景化というプロセスを概観する。スキーマの背景化という現象は、人間の言語においてはよく存在しており、山梨 (2000: 142)では、<容器>のスキーマの背景化という事例を取り上げ、この現象を次のように説明している。

スキーマの背景化とは、それがスキーマの実在性が薄れていくプロセスのことである。例えば、(28a)における「穴から」という表現が示しているとおり、蛇の出所である穴という容器が前景化されている。しかし、(28b)は、(28a)と類似して「出てきた」を含む構文であるが、(28b)における出所が相対的に背景化されているため色がどこから出てくるのかというふうに、容器の想起はそれほど簡単ではない。さらに、(28b)から(28c)にいくと、月や霧の出所を意識するのがさらに難しくなり、出所がさらに背景化されている。このような現象を、山梨(2000)ではスキーマのブリーチングとも呼び、図 3-12 のように示すことができる。

- (28) a. 穴から蛇が出てきた。
b. (X から)いい色が出てきた。
c. {月が/霧が} 出てきた。

(山梨 2000:142)



図 3-12 スキーマの背景化/ブリーチング

「先(さき)」がどのように位置を示す機能を持つようになったかについては、上記に取り

上げられているスキーマの背景化によって説明できる。つまり、「先(さき)」の本来のスキーマでは、方向性と移動の軌道という 2 つの要素が含まれているが、この 2 つの要素が次第にブリーチングされて、すなわち、背景化というプロセスを通して、「先(さき)」が位置を示す機能を持つようになった、ということである。

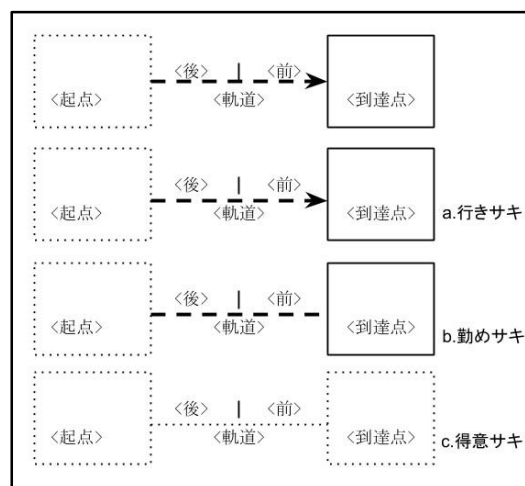


図 3-13 位置を示す「先(さき)」

図 3-13 の位置を示す「先(さき)」において、a. の「行先」という表現では、到達点に向かう移動の経路を細長いものと見なし、「軌道」と「到達点」の部分がプロファイル化されている。一方、b. の「勤め先」の場合では、「到達点」の部分のみがプロファイル化され、「移動の経路」の部分が背景化されている。それは、移動動詞の「行く」と比べ、「勤める」という動詞が動作を表すものとして、移動の意味合いが低く、移動の「軌道」を連想させる能力が比較的限られているからである。また、図 3-13 における c. の「得意先」や「取引先」は移動の目的地や動作を行う場所を表すものではなく、抽象的な位置、または人間や団体を意味する。この理由は、「移動の経路」のみならず「到達点」もさらに背景化されているからである。ただし、ここで強調したいのは、スキーマの背景化という過程は、決してスキーマの存在が完全に消えてしまったのではなく、相対的に薄れていくプロセスだということである (趙 2015: 220-231)。

(29) a. 行先をうたがうわけにゆかない。

b. 従来不打聽他所去的地方。

<CJBC> (井上靖著 『雁の寺』)

(30) a. こんど勤め先が変わった。

b. 今回工作地點改了。

(『中日・日中辞典』)

(31) a. 喜助が福井の得意先から帰ってきたのは、夕刻になってからである。

b. 喜助由福井の主顧那兒回到家中、已經過了黃昏時刻。

<CJBC> (水上勉著 『越前竹人形』)

上記における分析から分かるように、「先(さき)」は、スキーマの背景化を通して、位置を言語化できる。しかし、中国語の「前(qian)」は、位置を言語化するのが困難である。例えば、(29)における「行先」という表現は、行く所というように翻訳されている。この「去的地方」という訳語は、日本語の「行くところ」にあたる。また、(30)における「勤め先」は、「工作地点」に対応し、「地點」は日本語の「地点」と訳せ、「ところ」に相当する。(31)における「先(さき)」は、「那兒」と直訳でき、日本語の「そのところ」に当たる表現として訳されている。

(29)～(31)における「先(さき)」は、それぞれ、「地方」、「地點」、「那兒」と訳され、いずれも位置、場所に関連する概念である。これらの中国語の表現は、中国語の「前(qian)」との置き換えが基本的には困難である。

4. 日本語の「前(まえ)」・「先(さき)」と中国語の「前(qian)」の時間的な意味

本節では、Lakoff & Johson の時間メタファー理論と Moore の時間メタファー理論を概観したうえで、主体性という認知言語学の概念を取り入れ、A、B シリーズ時間概念が共起できるタイプの時間メタファーを提案する。この新たに提案した時間メタファーに対する分類法を踏まえて、空間的な意味からの拡張という観点から、「前(まえ)」、「先(さき)」、「前(qian)」の時間的な意味を分析する。

4.1 時間メタファー理論

空間と時間との緊密な関係は、すでに哲学、物理学、心理学といった分野で論じられている。認知言語学の分野においては、時間と空間との関係について、時間メタファーで説明するのが一般的である。時間メタファーというのは、時間の経過や順序などの概念を、空間的な移動に依拠して説明するという理論の枠組である。

この4.1節では、日本語の「前(まえ)」・「先(さき)」と中国語の「前(qian)」を対象にして、それぞれの時間的な意味分析を行う。特に、注意しておきたいのは、本節の分析は、基本的にこれまでの時間メタファー理論の枠組を踏まえているが、そのまま踏襲するものではなく、従来の理論の問題点を指摘したうえで、視点や主体性といった概念を導入して、従来の時間メタファーの分類について再検討するところにある。

4.1.1 Lakoff & Johson (1980, 1999)の時間メタファー理論 (2分類)

本来空間的な意味を示す言語表現が、時間を指示する表現として使用される現象は、世界

中の多くの言語に報告されている。Lakoff & Johnson (1980) では、このような現象に対して、時間メタファーを通して解釈している。Lakoff & Johnson (1999) は、空間から時間への写像が成立するのは、移動に関わる身体的な体験があるからだと主張している。

すなわち、時間の認知主体の時間軸上に立っているところが現在と見なされていて、また、認知主体の目の前の区域及び向いている方向は未来であり、そして、認知主体の背後の区域、方向が過去と認識されている、という身体的な経験である。

(32) a. We are approaching the Christmas.

b. The Christmas is approaching.

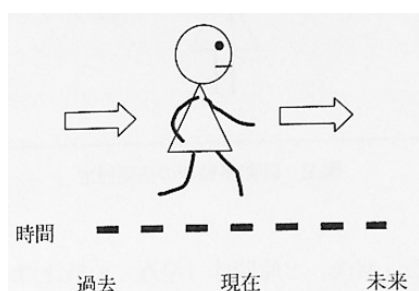


図 3-14 Moving Experiencer Metaphor
(篠原 2008: 182)

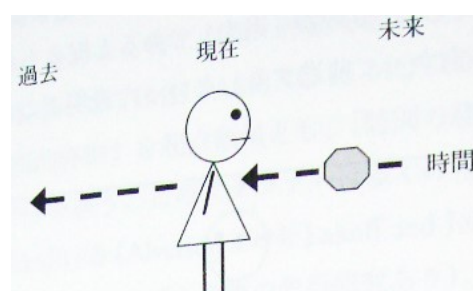


図 3-15 Moving Time Metaphor
(篠原 2008: 183)

さらに、Lakoff & Johnson (1980)は、上記のように時間的な経過が空間的な移動を通して理解され、言語化されている現象を、移動者の違いによって二分している。すなわち、図 3-14 に示される主体移動型メタファー (Moving Experiencer Metaphor、以下 ME と略)と、図 3-15 に示される時間移動型メタファー(Moving Time Metaphor、以下 MT と略)という2つのモデルである。

ME モデルについては、時間が移動することなく、時間を体験する主体、すなわち観察者が前方へ移動すると捉えられる。一方、MT モデルの場合では、時間を認識する主体は動かずに、時間が主体に向かって来て、さらに主体を通過して遠ざかっていくというふうに、時間を把握する。We are approaching the Christmas.は前者の例であり、The Christmas is approaching.は後者の例である。空間上の前後の概念がどのように時間的な概念と対応するかについては、具体的に言えば次のようになる。

Lakoff & Johnson によって提唱された時間メタファー理論は、確立してからすでに 30 年経つが、現在でも、認知言語学の分野で強い影響を与えているとされている。しかし、Lakoff & Johnson 流の時間メタファー理論に関しては、次に取り上げられている点に注意しなければならない。

Lakoff & Johnson の時間メタファー理論では、主に過去・現在・未来という3つの時間概

念のみ論じている点である。しかし、時間的な概念には、過去、現在、未来のほかに、ある時点を参照点にして、それより前か (Earlier)、あるいは、それより後 (Later)かという類の時間的な概念も存在している。つまり、Lakoff & Johson 流の時間メタファーでは、2種類の異なる時間的な概念を混在させて、1つの枠組で論じられているということである。この論点に対して異を唱えているのが、次節で概観する Moore (2001, 2014)の時間メタファーの三分法である。

4.1.2 Moore (2001, 2014) の時間メタファー理論 (3分類)

近年では、時間メタファー理論をめぐって、1つの大きな変化が生じている。それは、分析哲学における時間認知の考え方が時間メタファーの分析に織り込まれたということである。McTaggart や Russell をはじめとする哲学者は、時間に対する人間の捉え方について、過去・現在・未来で把握する方法と、出来事の発生順序を線形的なモノに見なして記述する方法がある、と述べている (碓井 2002b: 2-3)。この二種類の方法によって把握される時間概念をそれぞれ、A シリーズ時間概念(過去・現在・未来)と B シリーズの時間概念(Earlier・Later)と呼んでいる。

Lakoff & Johson では、時間の種類について特に見分けることなく、(33)の例文においては、時間が移動しているので、いずれも MT に当たる。しかし、Moore (2001, 2014)では、(33a)と(33b) は同種の時間メタファーではないと指摘している。

(33) a. Summer is behind us.

b. Summer follows spring.

(Moore 2001: 156)

結論から言えば、Moore (2001)は、Lakoff & Johson によって分類されている移動メタファー、すなわち MT を「自己中心的な時間移動型メタファー」(The Ego-centered Moving Time Metaphor、以下 E-MT と略)と「前後時間移動型メタファー」(FORNT/BACK Moving Time Metaphor、以下 FB-MT と略)に分けている。

注意しなければならないのは、Moore の時間メタファー分類は、MT を E-MT と FB-MT というさらに下位の類に細分したものではないということである。前者の E-MT が A シリーズの時間概念を示すもの (例えば、Summer is behind us.)であるのに対して、後者の FB-MT が B シリーズの時間概念を言語化するもの (例えば、Summer follows spring.)である。つまり、同種のメタファーに帰してはいけないというのが Moore (2001)の主張である。

Moore は FB-MT の特徴、及び FB-MT と E-MT がそれぞれ異なるモデルで捉えなければならない理由について、次の3点を指摘している。

(34) a. E-MT は、時間の経過を観察する主体の位置を参照点とするもので、直示性

をもつが、FB-MT は直示性を持たない。

- b. E-MT と FB-MT では、その概念対応の背景にある経験的基盤が異なると考えられる。
- c. E-MT は1つの移動物(時間)と主体との関係を概念化するが、FB-MT は2つの移動物(時間と時間)の間の関係を概念化する。

(訳文は篠原 (2006)を参照)

具体的に言えば、Moore は、(33)では、確かに時間認知者の視点が参照点となり、前の領域が未来で、背後にある領域が過去である。夏という時間概念は、遠方にある未来から背後の過去へ去っていく。つまり、(33a)では、過去という A シリーズの時間概念を言語化するものである。

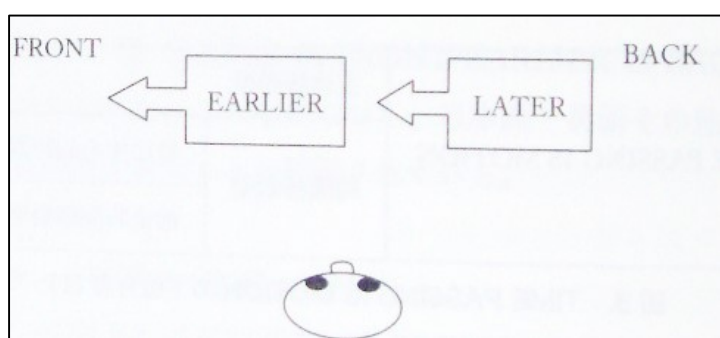


図 3-16 FORNT/BACK Moving Time (篠原 2008: 182)

一方、(33b)には、異質なところがあり、図 3-16 のように、B シリーズの時間的な概念を表している。(33b)においては、**follow** という移動の意味を示す動詞がある。しかし、この **follow** の意味は、時間が時間の認知主体がいる場所に接近してくるのでもないし、そこから遠ざかっていくのでもなく、夏と春の転換順序を表すだけである。つまり、(33b)と(33a)との顕著な相違点は、夏と春という2つの時間セグメントがあり、その前後関係はこの両者自体によって定められていて、時間の認知主体の視点と関わっていないというところにある。

本研究は、A シリーズの時間概念と B シリーズの時間概念を区別したうえで、時間メタファーを分類するという Moore の考えに対して、基本的には賛成する立場にある。しかし、Moore の時間メタファーを三分するというやり方に対して、少なくとも中国語及び日本語における空間辞の時間的な意味を説明する時に、さらなる検討をしなければならないところがあると考えている。時間メタファーに対する新たな分類は次の 4.1.3 節で論じることにする。

4.1.3 主体性と時間メタファー

前節では、Moore (2001, 2014)は、時間的な概念を「過去・現在・未来」という3項からなる A シリーズと、Earlier・Later という2項からなる B シリーズを区別するという McTaggart

(1908)の時間論に基づいて、時間メタファーを三分するという新たな理論の枠組を概観した。

ここまでを見る限り、Lakoff & Johson (1980, 1999)と比べ、時間概念の種類の違いを重視する Moore (2000, 2014)のほうが妥当であるかのように見える。しかしながら、A、B シリーズの時間概念が根本的に異なるものと見なし、直示性の有無によって時間メタファーを分類するという Moore の想定については、さらなる検討が必要である。

A、B シリーズの時間概念を明確に分ける Moore の理論の枠組は、次の点を改めて精査しなければならない。つまり、A シリーズの時間概念と B シリーズの時間概念とがどのような関係にあるのか、共起できるのかどうかという「関連性」及び「共起性」に関わる問題点である。

A、B シリーズの時間概念の「関連性」と「共起性」を論じるには、McTaggart に戻らなければならない¹。McTaggart は時間概念を2つのパターンに分けたが、時間の源が A シリーズ時間概念であると論じている。言い換えれば、A シリーズの時間概念こそがより本質的なもので、それを介して B シリーズの時間概念が生じてきものだということである。その一方、この McTaggart の A シリーズが B シリーズより時間の本質に近いという考え方に対して、Russell が疑問を持ち、B シリーズが A シリーズより本質的だと主張している。どのパターンの時間的な概念がより本質的なものであるかという哲学的な問題は、McTaggart と Russell がそれぞれの代弁者を通して、現在に至っても論争が続いている (本多 2011c: 33-56, 確井 2002b: 1-26)。

Moore の時間メタファー理論では、Earlier・Later を示す FB-MT は、「過去・現在・未来」を示す E-MT とは独立に存在するとされている。つまり、この2種類の時間概念の関連性については、論外にされ、断片的に分析されている。

ここで指摘したいのは、A から B へ (McTaggart の主張)、あるいは B から A へ (Russell の主張)といった過程を通して互いに変化する、ということから分かるように、「過去・現在・未来」と Earlier・Later とは決して無関係ではなく、むしろ緊密な関係がある、ということである。

Langacker (1985)をはじめとする研究では、主体性および主体性の変化という概念を提起している。本論文は、この主体性という概念を導入することを通して、主体性 A、B シリーズ時間概念がどのように共起しているかを説明して、Lakoff & Johson、Moore の時間メタファー理論を踏まえながら、時間メタファーを改めて分類する。

結論から言えば、A、B シリーズの時間概念が根本的に異なるものでなく、互いに緊密に

¹ We may sum up the relations of the three series to time as follows: The A and B series are equally essential to time, which must be distinguished as past, present and future, and must likewise be distinguished as earlier and later. But the two series are not equally fundamental. The distinctions of the A series are ultimate. We cannot explain what is meant by past, present and future. We can, to some extent, describe them, but they cannot be defined. We can only show their meaning by examples. “Your breakfast this morning” we can say to an inquirer, “is past; this conversation is present; your dinner this evening is future.” We can do no more.

関わっていて、時間メタファーの分類が直示性の有無によって判断するものではなく、直示性の変化によって判断するべきものだ、ということである。

Langacker (1985:182)によれば、主体性というのは、言語主体と概念化されたものとの関与する度合いのことである。具体的に言えば、認知文法の視点から、認知主体は外部の世界を概念化する際に、たとえ同じ場面、事態であっても、認知主体の視点や解釈、すなわち言語主体が概念化されたものとの関与する度合いによって異なってくる。

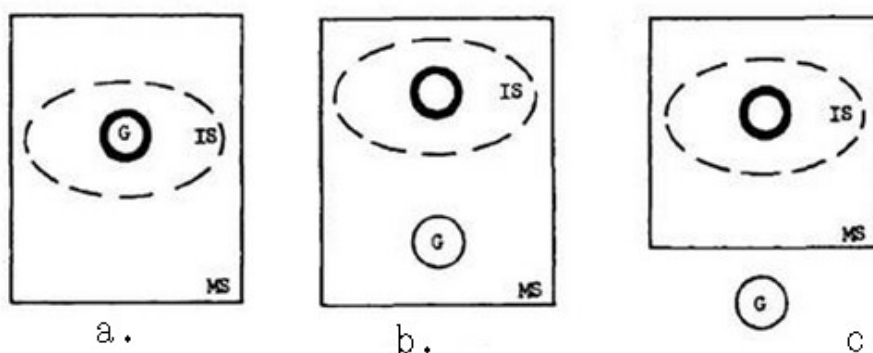


図 3-17 主体性の変化 (Langacker 2010: 319, 並び順は筆者による)

図 3-17 における MS と IS はそれぞれ、Maximal Scope (最大領域)と Immediate Scope (直接領域)を示している。前者は、ある表現によって喚起できる内容のすべてを表しているが、後者は、表現では最も直接的に関わっている部分、すなわち直接的にプロファイルされている部分である。また、G はグラントを意味し、発話者に当たる。

- (35) a. 言語学が好きだ。
- b. 僕は言語学が好きだ。
- c. 太郎は言語学が好きだ。

(町田 2012: 3)

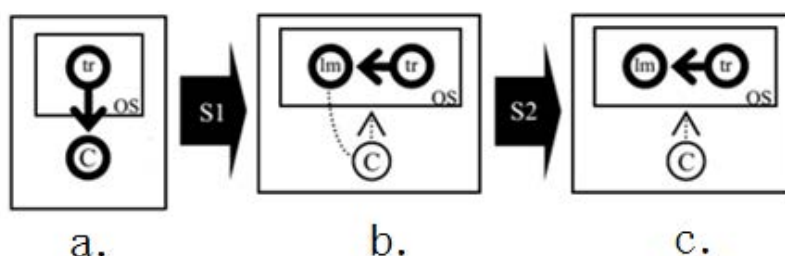


図 3-18 主体性の減少の現象 (町田 2012: 3, 一部修正)

また、Langacker を踏まえ、町田 (2013: 661-666)は、主体性の高いモデルから、主体性の低いモデルへと変化するプロセスを次のように説明している(町田はこのような主観から客

観への現象を「脱主観化」とも呼んでいる)。例えば、(35)における3つの例文では、主体性が a から c へ行くに従って、主体(図 3-18 では、C で示されている)との関与する度合い、すなわち主体性が低くなる。具体的に言えば、a のような主体性が高い段階では、認知主体は、事態を概念化する者であると同時に、事態に参加する者でもある。b の段階に入ると、認知主体は、a の段階と同じく事態の参加者であるが、傍観的な立場から事態を捉えている。そして、さらに c の段階に入ると、認知主体の主体性がさらに減少し、もはや事態の参加者ではなくなり、ほとんど中立で傍観者の視点から、事態を言語化している。

4.1.4 時間メタファーの新分類：A、B シリーズの時間概念が共存できるタイプ

Moore (2014)では、A、B シリーズの時間概念は共起できず、それぞれ異なる時間メタファーと対応していると論じている。これに対して、本論文では、A、B シリーズの時間概念の繋がりを重視し、二種類の時間概念が共起できる時間メタファーを提案する。

本論文は、Moore の見方に反論するものではないが、(36)について、やや異なる方法で捉える。Moore は、(36a)と(36b)のいずれも FORNT/BACK Moving Time Metaphor に分けており、Earlier という B シリーズの時間概念に当たると論じている。(36a)における春と冬との関係は、認知主体の視点と関わりなく、客観性を持つ真理のようなものとして、純粋な B シリーズの時間概念を意味している。

しかし、本論文は、(36b)における reception と talks との時間的な関係については、B シリーズの時間概念のみならず、現在という A シリーズの時間概念とも関わっている、という立場をとる。

- (36) a. Spring follows winter. (E.g. every year.)
b. A reception is following the talks. (E.g. this is a temporary setup.)
(Moore 2014: 66, 73)

具体的に言えば、(36)に取り上げられている spring と winter、reception と talks は、ランドマークの事態 (winter, the talks)の後にトラジェクターの事態 (spring, a reception)が続いているという順序の関係にある。冬と春との順序関係は、発話者の主体性と関わりのない常識、真理のようなものであり、純粋な B シリーズ時間概念である。これに対して、歓迎会 (reception)と演説 (talks)との順序関係は、発話者の主体性とも関わり、現在といった A シリーズ時間概念にも関与しており、純粋の B シリーズの時間概念ではなく、A、B のシリーズ時間概念が共存している。

Fillmore (1997: 50) は、ある言語文化共同体の全員に共有され、時間的な意味を示す名詞を、positional terms と呼んでいる。positional terms というのは、「周期的に繰り返される時間的事象として暦の単位の構成部分を成す一連の語彙」(篠原訳)のことである。例えば、1 日を成す「朝、夜」、1 週を成す「月曜日…日曜日」、1 年を成す「春、夏、秋、冬」と「1 月…

12 月」といった時間的な名詞である。この場合では、事態と事態との関係は、共同体の全員に共有されている知識として、直示性と関与しなくても、成立している。

篠原 (2008: 188-189)は、positional terms という用語を「時間配列語」と訳したうえで、クリスマスや年号のような年中行事及び歴史事件といった共同体により共有される知識も、時間配列語のカテゴリーに属すと指摘している。ここで指摘したいのは、本論文では、篠原に従って時間配列語をこの拡大された意味で用いることにする。

(36a) における冬と春は時間配列語であり、冬の次が春だという順序が内在的に規定されているというところまでは Fillmore と篠原に同調するが、本論文では(36a)のみが、純粹の B シリーズ時間概念であると主張する。一方、(36b)における歓迎会と演説は時間配列語ではなく、互いの順序を示す際に、発話の状況に依存して、A、B シリーズの時間概念にも関与していると主張したい。

本論文は、A、B シリーズの時間概念ともに共起している時間メタファーについて、本来の時間メタファー理論を踏まえ、主体性の変化という視点を加味して、さらに次の二種類を提案することにする。すなわち、事態外視点の時間移動メタファーと事態外視点の主体移動メタファーという 2 つの分類である。新たに提案した二種類の時間メタファーの構成を示せば、以下の図 3-19 と図 3-20 のようになる。

第一種類の A、B シリーズの時間概念が共存するメタファーの構成については、図 3-19 のように示すことができる。この場合では、Front (前方)は Earlier に対応し、Back (後方)は Later に対応する。Langacker (2010)にならい、図 3-19 における点線の IS という四角形は、直接的にプロファイルされた領域を示すものであり、また、MS という四角形は、文に直接的に言語化されていないが、喚起できる内容を示すものである。点線の IS の四角形に位置しているのは、文に直接的に出現した LM (前件の事態)と TR (後件の事態)である。また、事態と事態の間における矢印は、事態と事態との順序、すなわち Earlier・Later という B シリーズの時間概念である。また、認知主体 (C)が IS の外、MS の中に位置しているのは、発話時または現在といった A シリーズの時間概念も部分的に反映されている、ということを示している。

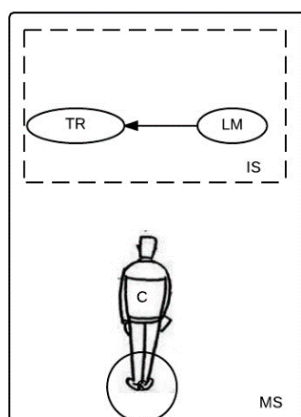


図 3-19 直示性に関与する Front-Back Moving Time Metaphor (その 1)

示すものである。

A reception is following the talks.における時間関係がまさに図 3-19 に当たる。日本語の例で言えば、「会議の前に話したように」のような文は、前件の「話す」という動作が、後件の「会議」より Earlier であると同時に、いずれも現在より過去の時間帯で発生したという認知主体の直示性も反映されている。

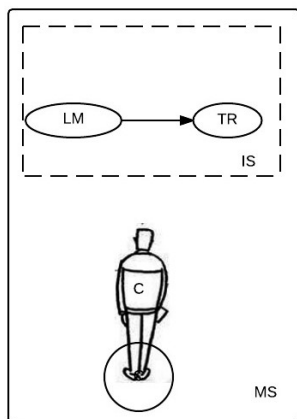
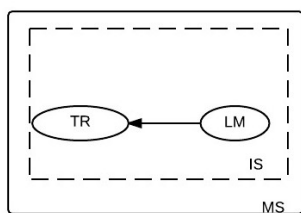


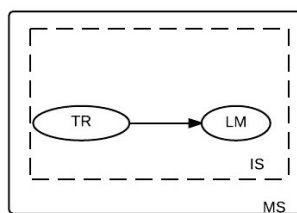
図 3-20 直示性に関与する Front-Back Moving Time Metaphor (その 2)

第二種類の A、B シリーズの時間概念が共存する時間メタファーの構成を図で示せば、図 3-20 のようになる。この場合では、Front(前方)が Later、また Back(後方)が Earlier に対応している。すなわち、「修論諮問は修論提出のまだ先だよ」という文に反映されているように、「諮問」という事態は、もう 1つの「提出」という事態の前方にあるということで、「諮問」が「提出」より Later だ、ということである。この場合は、図 3-19 と同様に、認知主体の直示性が部分的に反映されているので、点線の IS の四角形の外であるが、認知主体は実線の MS の四角形の中に位置している。



例・奈良時代(LM)より前の

図 3-21 Front-Back Moving Time Metaphor (Front=Earlier)



例：応仁の乱(LM)の先に
池田時忠(TR)が住んでいて、ア

図 3-22 Front-Back Moving Time Metaphor (Front=Later)

また、時間配列語どうしの時間関係を示す時間メタファー、つまり純粋な B シリーズ時間概念を示す時間メタファーの構成は、上の図 3-21 と図 3-22 が表している。この 2 つの図では、時間の認知主体の位置は、IS の外側のみならず、MS の外部に位置している。それは、時間配列語と時間配列語との Earlier・Later の関係を捉える際に、時間認知主体の直示性（現在・発話時）と関わらないからである。

本論文の時間メタファーの分類と Moore、Lakoff & Johson の分類法の特徴について、それぞれ示すと、次の表 3-1 のようになる。次節の 4.2 節から 4.4 節では、本論文に提唱されている新たな時間メタファーの分類に基づき、「前(まえ)」、「先(さき)」、「前(qian)」の時間的な意味を詳しく論じることにする。

時間概念の種類	例文	本論文	Moore (2001, 2014)	Lakoff & Johson (1980, 1999)
Aシリーズの時間概念	我々は新世紀に入りました。	Moving Observer Metaphor	Moving Ego Metaphor	Moving Observer Metaphor
	クリスマスが近づいてくる。	Moving Time Metaphor	The Ego-centered Moving Time Metaphor	
Aシリーズの時間概念+ Bシリーズの時間概念	修論諮問は修論提出のまだ先だよ。	直示性に関与する Front-Back Moving Time Metaphor (その1)	Front-Back Moving Time Metaphor	Moving Time Metaphor
	懇親会の前に説明したように、明日 会議があります。	直示性に関与する Front-Back Moving Time Metaphor (その2)		
Bシリーズの時間概念	Spring follows winter.	Front-Back Moving Time Metaphor		

表 3-1 時間メタファーの分類

4.2 日本語の「前(まえ)」の時間的な意味

4.2.1 「前(まえ)」: 過去

4.1 節では時間メタファー理論について概観したうえで、本論文の時間メタファーに対する分類法を考案した。4.2 節では、過去という「前(まえ)」の時間的な意味を分析する。

(37) a. 前に共演したことがあるのを知ってる？。

<CJBC> (成田陽子著 『銀座』)

b. 前に訪ねたことがある。

<CJBC> (千野隆司著 『駆け出し同心』)

c. 前にどこかで会ったことがある。

<CJBC> (篠田真由美著 『桜闇』)

(37) に取り上げられた例文における「前(まえ)」は、過去という A シリーズの時間概念を表している。認知主体は目の前の方向に向き、静止の状態では時間軸に存在している。時間の連続は、認知主体の前方から後方へと通過して、過ぎ去っていく。この場面では、時間の認知主体は時間の観察者でもあり、すなわち、Moving Time Metaphor という種類のメタファーが関与している。つまり、時間が認知主体を追い越していく方向は、認知主体の背後の方向と同じ方向となり、「前(まえ)」は過去の意味を示すことになる。

具体的に言えば、(37a) における「共演したこと」、(37b) における「訪ねたこと」、そして(37c) の「会ったこと」という出来事は、すでに時間の認知主体の位置、すなわち現在を通過してしまっており、時間が認知主体の位置から遠ざかっていく方向が、「前(まえ)」となり、過去を意味している。

4.2.2 「前(まえ)」: 未来

「前(まえ)」は、未来という時間的な意味を示す機能も有している。時間の認知主体が、時間軸に従って、過去を後にして未来に向かって行くというのは、未来を示す「前(まえ)」の動機付けとなる。

(38) a. 失敗を恐れずに協調して、前に進めます。

<BCCWJ> (三須啓仙著 『十二支運勢宝鑑』)

b. 時間の関係もありますから前へ進ませてもらいたいです。

<BCCWJ> (『国会議事録』)

c. 俺の前に困難が待ち受けている。

(『中日・日中辞典』)

例えば、(38) における「前(まえ)」は、いずれも未来を意味している。(38a) の「前(まえ)」は、未来という概念が、認知主体が起点から出発して、前方の終点に進めるという空間的な

体験に基づき、言語化されている。つまり、時間の認知主体は、「失敗」という過去のことを離れ、前方に向けて進めていくように、未来を捉えている。このような未来を言語化する仕方が、(38b)にも同様に反映されている。また、(38c)における認知主体は、自分の前方に固定された「困難」という位置に近づいていくという捉え方を介して、未来を言語化している。

4.2.3 「前(まえ)」: EARLIER

4.2.1 と 4.2.2 節では、「前(まえ)」の時間的な意味について、過去を表す用法と、未来を表す用法、すなわち、A シリーズの時間概念に関わる用法について分析した。本節では、Earlier を示す「前(まえ)」の用法について概観する。

「前(まえ)」の Earlier の用法については、本論文の表 3-1 に示されている分類法に基づいて、「直示性に関与する Front-Back Moving Time Metaphor(その 1)」と、Front-Back Moving Time Metaphor という 2 つの時間メタファーによって説明できる。前者の「前(まえ)」は、Earlier という B シリーズ時間概念のみならず、時間の認知主体の主体性も反映され、A シリーズ時間概念とも関わっている。一方、後者の「前(まえ)」は、出来事の間のみであり、時間の認知主体が言語化されていない。この二種類の「前(まえ)」が示す Earlier は、それぞれ、次の(39)と(40)に対応している。

(39) a. 懇親会の前に説明したように、明日会議があります。

b. 食事の前に手を洗った。

(片岡国好著 『ことば・空間・身体』)

c. 時間にすれば、僅か三時間足らずの前に経験したばかりのことだったのに。

(宮本百合子著 『長崎の印象』)

具体的に言えば、(39a)における「前(まえ)」は、前件の説明することが、後件の懇親会に参加することより先行しているという関係を言語化している。同様に、(39b)では、手を洗うという動作が、食事をするという動作より早い段階で発生したという時間的な関係が「前(まえ)」によって言語化されている。

(39c)で言えば、「三時間足らずの前」という表現は、時間の認知主体が時間軸にいるところ、すなわち現在より、3 時間くらい Earlier の過去で発生したという時間的な関係を表している。つまり、(39)における「前(まえ)」は、過去で前件の事が後件の事より先行しているという、A、B シリーズの時間概念の両方に関わる時間的な概念を言語化している。

- (40) a. 奈良時代より前の古墳時代や飛鳥時代の段階で用いられた越後の織物製品…
(赤澤計眞著 『越後織物史の研究』)
- b. 少なくとも唐の前の隋時代以前は存在していない。
(鈴木峻著 『海のシルクロードの要』)
- c. 唐の前の隋も、漢も、秦も、さらには周も、すべて中国王朝の姓は変化している。
(渡部昇一著 『不平等主義のすすめ』)
- d. 乙が甲と同時またはそれより前に死亡したときは、乙の相続人が遺贈を受けることにはならないという趣旨である。
(高梨公之著 『口語六法全書』)

(39)と同様に、(40)における「前(まえ)」は、Earlier という時間的な概念を言語化している。しかし、(39)と異なり、(40)では、認知主体の主体性が反映されておらず、言い換えれば、時間の認知主体は、オフ・ステージ、すなわち、出来事と出来事とに関わりなく、傍観するという状態にあるということである。例えば、(40a)の「奈良時代より前」、(40b)及び(40c)の「唐の前」、(40d)で示されている甲と乙の死亡する順序は、いずれも認知主体の直示性から独立した純粋に B シリーズに属す時間的な概念である。

4.3 日本語の「先(さき)」の時間的な意味

4.3.1 「先(さき)」: 過去

「先(さき)」は、前方という空間的な概念を言語化する言葉として、「前(まえ)」と同様に、過去を言語化する機能がある。ただし、「先(さき)」は、認知主体の時間軸における現在という時点を参照点として、過去を言語化する際に、近い過去を表しているという点で、「前(まえ)」とは相違している。

- (41) a. 先に分析した各課題についての原因それぞれの重みを付けていき、トータルでスコアリングを行う。
(日本ネットワークセキュリティ協会編 『アイデンティティ管理ガイドライン』)
- b. 高杉晋作と先ごろ会ったときに贈られたもので、六連発のリボルバ(回転式連発拳銃)だった。
(山村竜也著 『史伝坂本龍馬』)
- c. さっき行った店は、俺は半年くらい前から行き始めたんだ。
(塩崎逸雄著 『パチンコ貧乏からの脱出』)

例えば、(41a)における「先に分析した」という表現に関しては、数分もしくは数十分の時間の範囲、すなわち近い過去を表し、これを数時間前、または数日前、数か月前と解釈するのは困難である。(41b)における「先ごろ」であれば、どれくらいの過去を言語化できる

かについて、勿論多かれ少なかれ個人差があるが、せいぜい数時間前、数日前の時間範囲であり、数箇月前や数年前のような遠い過去といった解釈はできない。また、(41c)のような事例からわかるように、過去を示す「先(さき)」は、多くの場合では、促音便が伴い「さっき」に転じて使用されている。過去のみならず、様々な他の時間的な意味を有する「先(さき)」とは異なり、「さっき」は、近い過去しか言語化することができない。

過去を示す「先(さき)」は、時間の認知主体の主体性が反映され、Moving Time Metaphor という種類の時間メタファーに該当する。具体的に言えば、時間の認知主体が時間軸で静止しており、時間が遠方から主体に向けて移動してくる。動かぬ時間認知主体のいるところが、「いま」あるいは「現在」という時点にある。言い換えれば、過去を示す「先(さき)」の場合では、既に実現した過去が、今または現在から遠ざかっていき、背後の過去となるということである。

4.3.2 「先(さき)」: 未来

「先(さき)」は、未来という時間的な概念を言語化する機能も持っている。未来を示す「先(さき)」の特徴は、Moving Observer Metaphor という時間メタファーを通して説明できる。

(42) a. 観光市場の先行きは明るい。

(『中日・日中辞典』)

b. 五十年先が頼もしい気がする。

<BCCWJ> (小原国芳著 『小原国芳全集』)

c. 先のことはだれも知らんのや。

(松下幸之助著 『リーダーになる人に知っておいてほしいこと』)

具体的に言えば、未来を示す「先(さき)」は、認知主体が時間軸に位置している自分を参照点として未来を言語化する。ここで強調しておきたいのは、時間の認知主体、すなわち、時間を概念化する者が、自ら直接的に時間軸に位置し、時間を捉えているということである。

未来を示す「前(まえ)」と同様に、「先(さき)」は、出発点を離れ、終点に向かって歩いていくという身体的な体験に基づいて、現在から未来に向かって移動していくというように未来を言語化している。

4.3.3 「先(さき)」: EARLIER

「先(さき)」は、ある時点より Earlier という時間的な意味も持っている。Earlier を示す「先(さき)」は、本論文の時間メタファーに対する分類に基づいて説明すると、次の二種類がある。第一類は、現在という A シリーズの時間的な概念とも関わる Earlier、すなわち認知主体の主体性も反映している Earlier である。第二類は、認知主体の主体性と関わりなく、いわゆる純粋に Earlier という B シリーズの時間概念である。

まず、第一類の Earlier を示す「先(さき)」については、物事と物事の順序が客体的に捉え

られていると同時に、現在といった認知主体に関わる直示性の特徴も反映している。例えば、(43)にける「先(さき)」は、まず「私」が現在という時点で発言し、その後「皆さん」が発言するという2つの物事の順序を表している。つまり、時間の認知主体は、現在を参照点として、物事と物事の順序を捉えているということである。

(43) 皆さんから発言がないので、私から先に言わせてもらおう。

<BCCWJ> (遠山長太郎著 『ある団塊世代家族の再生』)

ここで強調しなければならないのは、「先(さき)」のみで表される **Earlier** が通常現在という時点を参照点にしている、ということである。例えば、「食事の先に話したように」や「入学の先に健康診断を受けた」といった表現は自然な表現とは言いにくい。このような過去と関連する **Earlier** は、「先(さき)」のかわりに、「前(まえ)」で言語化するのが一般的である。すなわち、「食事の前に話したように」や「入学の前に健康診断を受けた」が容認度の高い文である。

(44) a. 実物より先に本で知った虫

<BCCWJ> (河合雅雄編 『ふしぎの博物誌』)

b. 日本も実力は出し切った試合だったが、相手より先に力尽きてしまった。

<BCCWJ> (読売新聞社 『読売新聞』)

(45) a. 大晦日より先に天皇の誕生日がある。

(篠原 2008: 194)

b. 日本国内での投票方法について(不在者投票) 投票の当日、仕事、旅行などの事情で投票所へ行けないと見込まれる人のために、国内の滞在地で投票日より先に投票を済ますことができる「不在者投票制度」があります。

(「よくある質問 Q&A:生駒市公式ホームページ」)

ただし、「先(さき)」は「より」と共起するときに、過去の **Earlier** という時間的な意味を示す機能を持つようになる。例えば(44)における「先(さき)」は、「より」を加えたことによって、過去の時間の領域では、「虫を本で知る」という行為が「虫を実物で知る」という動作より先行している、という時間的な意味を言語化することができるようになっている。

さらに、「先(さき)」は「より」と共起することを通して、認知主体の主体性と関わりなく、すなわち、**Front-Back Moving Time Metaphor** という時間メタファーを通して、純粹の **Earlier** を示す場合もある。

具体的に言えば、(45a)における「より先」は、12月23日の「天皇の誕生日」が12月31日の「大晦日」より **Earlier** という時間的な意味を示している。このような「より先」は、認知主体の主体性から独立した時間関係、いわゆる純粋に **Earlier** という B シリーズの時間概念を言語化している。また、(45b)における「先(さき)」も同様な機能である。「国内の滞在地で投票日より先に投票を済ます」という表現における「より先」は、「投票を済ます」という出来事が、「投票日が至る」ということより先行していることを意味している。

4.3.4 「先(さき)」: **LATER**

「先(さき)」は、**Later** という時間的な意味を示す機能を有している。**Later** を示す「先(さき)」は、次の2種類がある。第一類の **Later** を示す「先(さき)」は、認知主体の直示性に関わり、ある出来事を参照点にして、参照点よりさらに未来の出来事を言語化している。

具体的に言えば、(46a)における「先(さき)」は、現在という時点を踏まえて、「期末テストを実施する」ということが参照点と見なされ、その次に「夏休みが始まる」という事態が発生することを **Later** として言語化している。(46b)と(46c)における「先(さき)」は、(46a)と同様に、「修論諮問」が「修論提出」より後、すなわち、より **Later** の時点で発生するという時間的な意味を表している。

- (46) a. 夏休みが始まるのは期末テストのまだその先だよ。
- b. 修論諮問は、修論提出のまだその先だよ。
- c. 退院は予定より先になりそうです。

(碓井 2002b: 155)

第二類の「先(さき)」によって示される **Later** は、認知主体の直示性と関わりなく、ある出来事を参照点にして、もう1つの出来事がそれより遅い段階で発生するという純粋な B シリーズの時間概念を言語化している。

- (47) 応仁の乱の先に戦国時代が待っていることを予言したものはいなかった。

(渡辺 1995: 24)

例えば、(47)における「先(さき)」は、「応仁の乱」が発生したあとに、「戦国時代」に入るといふ出来事の順序を示している。認知主体は、自らの直示性と関わりなく、傍観者で中立的な立場から、「応仁の乱」と「戦国時代」という2つの出来事の順序を述べている。

4.4 中国語の「前(qian)」の時間的な意味

4.4.1 「前(qian)」: 過去

中国語の「前(qian)」は、日本語の「先(さき)」、「前(まえ)」と同様に、前方という空間的

な概念を示す言葉として、時間メタファーを通して、過去を言語化する機能を有している。

「前(qian)」は、時間の認知主体の主体性が反映され、Moving Time Metaphor という種類の時間メタファーを介して、過去という A シリーズ時間概念を言語化できるようになっている。

(48) a. 之前曾經玩过。

b. 前に遊んだことがある。

(『中日・日中辞典』)

(49) a. 不久前，曾經他曾經來看過我。

b. しばらく前、彼は私を訪ねてきたことがある。

(『中日・日中辞典』)

例えば、(48)における「前(qian)」は、過去という A シリーズの時間概念を意味している。過去を示す「前(qian)」の身体基盤を、時間メタファー理論の枠組で説明すると次のようになる。認知主体は、時間軸における現在というところに位置し、未来に向かっており、また、過去が認知主体の後方にある。時間は矢のようにその認知主体に向って飛んでくる。こうすることにより、「前(qian)」は認知主体の後方にある過去の事と対応している。

(50) a. 前些日子看見他的時候還很健康。

b. 先ごろ会ったときはまだ非常に元気だった。

(『中日・日中辞典』)

(51) a. 前些時候，為了去挖松樹根，扭傷了腳，躺在床上不能動。

b. さきごろ供出の松根掘りに出て足を挫いて寝たきり…

<CJBC> (謹容著《人到中年》)

(48)と(49)の例から分かるように、過去を示す「前(qian)」は、「前(まえ)」と対応できる。そのほかに、(50)と(51)の文で示されているように、過去を示す「前(qian)」には「先(さき)」との対応関係も見られる。(50)と(51)の場面と同様に、時間は移動体として、認知主体を追い越していき、認知主体の背後の方向が過去の意味を示している。

4.4.2 「前(qian)」：未来

Moving Observer Metaphor という種類の時間メタファーの場合では、時間の認知主体は、時間軸に沿い、過去から遠ざかって、現在という時点から、前方の未来へと移動していく。このようなメタファーに依拠して、中国語の「前(qian)」は、未来を示す機能を持つようになっている。

(52) a. 明亮的未來在前面。

b. 輝かしい未来が待ち受けている。

(『中日・日中辞典』)

(53) a. 旅遊市場的前途看好。

b. 観光市場の先行きは明るい。

(『中日・日中辞典』)

(54) a. 前途有望

b. 生い先が頼もしい。

(『中日・日中辞典』)

例えば、(52)～(54)における「前(qian)」は、いずれも未来を意味している。(52)の「明亮的未来在前面。」という表現の中で、「明亮的未来」という時間的な概念は、空間的な体験に基づき、メタファーを通して、認知主体が起点から出発して、前方に進んでいく途中に位置している場所として言語化されている。つまり、時間の認知主体は、「失敗」という過去のことを離れ、前方に向かって進んでいくように、未来を捉えている。このような未来を言語化する方法は、(53)と(54)にも同様に反映されている。

4.4.3 「前(qian)」: EARLIER

「前(qian)」によって言語化される Earlier は、「前(まえ)」と「先(さき)」で示される Earlier と同様に、A シリーズ時間概念との関わりの有無に基づき、本論文の時間メタファー理論に照らして時間の認知主体の主体性の相違により、さらに2種類に分けることができる。

(55) a. 隨你怎麼說都行，開送別會之前，請到我的住處來一趟，有話跟你說。

b. 何でもいい、送別会へ行く前に一寸おれのうちへ御寄り、話があるから。

<CJBC> (夏目漱石著 『坊ちゃん』)

(56) a. 在上飛機之前，匆匆的給他們寫一封短信，謝謝他們的招待，報告了我的行蹤(去重慶)。

b. 飛行機に乗る前に、急いで感謝の意と重慶行きを記した手紙を送った。

<CJBC> (冰心著 《關於女人》)

例えば、上記の(55)と(56)の「前(qian)」は、第一類の Earlier を示すものである。具体的に言えば、(55)における「前(qian)」は、「到我的住处来一趟(うちへ御寄り)」という出来事が、「開送別会(送別会へ行く)」という出来事より早い段階で発生する2つの出来事の順序を意味している。この場合では、前件と後件の関係が客観的に反映されていると同時に、発話時、すなわち現在という時点にも反映されている。また、(56)も同様に、「前(qian)」は、現在という時点を参照し、「問田中(田中さんに聞く)」の次に「开始质询(質問に入る)」が生

じるという2つ出来事の順序を表し、いわゆるA、Bシリーズの時間概念が同時に関与するEarlierである。

- (57) a. 日本的失業率一直很低，在1991年之前人們甚至擔心勞動力不足，建議企業是否延長退休年齡、充分利用老年人。
b. 1991年ごろまでは労働力不足が心配され、企業の定年延長、高齢者の活用が説かれていた。

<CJBC> (伊藤正則著 《日本經濟的飛躍發展》)

- (58) a. 在宋朝之前，城市的居民區和商業區分離。
b. 宋の前に、市民が住む場所と市場とはそれぞれに分けられている。
(《人民日報》日本語訳は筆者訳による)

「前(qian)」によって示される第二類のEarlierは、認知主体の直示性と関わりなく、純粋なBシリーズの時間概念である。例えば、(57)における「1991年之前」、そして、(58)における「宋朝之前」は、それぞれ「1991年」、「宋朝」を参照点にして、その時点よりも早い時期を意味している。このような場合、認知主体は、自らの直示性と関わりなく、傍観者として中立的な立場から時間を言語化している。

5. 「前(まえ)」と「前(qian)」および「先(さき)」と「前(qian)」の時間的な意味の比較

本節では、「前(まえ)」と「前(qian)」、「先(さき)」と「前(qian)」との時間的な意味について、相違点に関する分析を重点的に考察する。

5.1 「前(まえ)」と「前(qian)」との共通点

第4節では、従来の時間メタファー理論を再検討するうえで、「前(まえ)」と「前(qian)」の時間的な意味をそれぞれ分析した。第4節の分析を踏まえ、「前(まえ)」と「前(qian)」の時間的な意味は、言語化された時間の種類から見れば、次のような共通点が見られる。結論から言えば、「前(まえ)」と「前(qian)」は、いずれも、未来、過去、主体性が反映されているEarlier、主体性が反映されていないEarlierという4つの時間的な意味を持っている。

- (59) a. こんな経緯がありながら、私が結局大谷大学へ進んだことは前にも述べた。
b. 如前所述，儘管有些波折，我最終還是進了大穀大學。

<CJBC> (三島由紀夫著 『金閣寺』)

具体的に言えば、(59)の対訳例文から分かるように、「前(まえ)」と「前(qian)」は、いずれも過去という時間概念を言語化することができる点で共通している。これらの例文における「前(まえ)」と「前(qian)」が過去を言語化できるのは、日本語と中国語では前方という空間的な概念が、Moving Time Metaphorを介して、時間的な意味も持つようになったから

である。すなわち、「前(まえ)」と「前(qian)」とは、鳥やボールが遠方から飛んでくるように、未来が遠方から接近してきて、静止している時間の認知主体の目の前を通過し、過去へと遠ざかっていくというシーンに基づき、過去を言語化している。

- (60) a. もっと前へ進めば、私の予期するあるものが、何時か眼の前に満足に現われるだろうと思った。
b. 如果再向前跨一步，也许我所期待的東西總會圓滿地呈現在我眼前吧。

<CJBC> (夏目漱石著 『こころ』)

上記の(60)における例文では、「前(まえ)」と「前(qian)」は、いずれも、Moving Observer Metaphor を介して、未来を言語化している。この場合では、日本語でも中国語でも、時間の認知主体自身が未来へ突き進んでいくというシーンに依拠して、主体の進む向き、すなわち、「前(まえ)」と「前(qian)」が未来という時間的な概念と対応するようになっている。

- (61) a. 僕はそれをまるで5分前のできごとのようにはっきり思い出すことができた。
b. 這一切就像5分鐘前剛剛發生過一樣。

<CJBC> (村上春樹著 『ノルウェイの森』)

- (62) a. 甲府が空襲される前に、B29が立派なアート紙のパンフレットのような伝単を落して行った。
b. 甲府市被空襲之前，B29撒下了用最好的印刷紙印的象小冊子一樣的傳單。

<CJBC> (井伏鱒二著 『黒い雨』)

「前(まえ)」と「前(qian)」は、過去、未来のほかに、Earlier という時間的な意味を言語化できるという点で共通している。本論文では、Earlier という時間的な概念を、(61)のように直示性に関わるタイプ、すなわち、発話時という時間の認知主体の主体性が反映されているタイプと、(62)のように直示性に関わりなく、出来事と出来事間の順序を示すタイプに分けることにする。(61)と(62)の例から分かるように、「前(まえ)」と「前(qian)」は、この二種類の Earlier を示す機能を持っている。

5.2 「前(まえ)」と「前(qian)」との時間的な意味の相違点

5.2.1 「前(まえ)」にならない「前(qian)」: 「上(shang)」との対応

5.1 節では、日本語の「前(まえ)」と中国語の「前(qian)」がともに、過去、Earlier という直示的な時間概念を言語化できるという共通性について分析した。確かに、中国語の「前(qian)」は、過去、Earlier を示す機能を有するが、日本語の「前(まえ)」が使用できる範囲と

は必ずしも一致しているとは限らない。日中対訳コーパスで調査した結果、過去を示す際に、「前(まえ)」は、「前(qian)」の代わりに、「上(shang)」で表現する事例も少なくない。

- (63) a. 我々は前と同じように街を歩き、どこかの店に入ってコーヒーを飲み、また歩き、夕方に食事をしてさよならと言って別れた。
b. 我們一如上次那樣在街上走，隨便進一間店裡喝咖啡，然後再走，傍晚吃罷飯，道聲再見分手。

<CJBC> (村上春樹著 『ノルウェイの森』)

- (64) a. 二階の部屋も窓の障子も新しく張替えて、前に見たよりはずっと心地が好い。
b. 樓上的房間和窗戶都重新裱糊了一遍，比上次來看房時顯得舒適多了。

<CJBC> (島崎藤村著 『破戒』)

例えば、(63)と(64)における「前(まえ)」は、中国語に翻訳される際に、そのまま「前(qian)」に訳されることはなく、「上次」で訳されている。「上次」という言葉は、直訳すると、日本語の「前回」に当たる。また、中国語では、「上次」のほかに「上回」という表現もある。ただし、(63)と(64)における「前(まえ)」は、まったく「前(qian)」と対応できないとも言えない。

(63') 我們一如之前那樣在街上走. . .

(64') …比之前來看房時顯得舒適多了。

上記の例では、「上次」が「之前」によって置き換えられている。この場合には、「前(qian)」は「前(まえ)」と対応している。しかし、「この」と共起する場合には、「前(まえ)」は、基本的には「上次」または「上回」のみと対応し、「前(qian)」のみと対応するのが困難だ、ということである。

- (65) a. ねえ、レイコさん、この前停電のときつかったロウソクまだ残っていたかしら？
b. 噯、玲子姐，上次停電時用的蠟燭好像還有？

<CJBC> (村上春樹著 『ノルウェイの森』)

- (66) a. この前の冬休みに国で医者と会見した時に、私はそんな術語をまるで聞かなかった。
b. 上回寒假中我在鄉下會見醫生的時候，一次都沒有聽到這樣的術語。

<CJBC> (夏目漱石著 『こころ』)

(65)と(66)の日本語の文では、「前(まえ)」は、(63)と(64)と同様に、いずれも過去という

意味を示している。ただし、(65)と(66)における「前(まえ)」は、「この」と共起しているため、単に過去という A シリーズ時間概念のみならず、以前の事態と事態との順番という B シリーズ時間概念にも関わっている。強いて英語の表現で言えば、(63)と(64)における「前(まえ)」は、I have met him before. や the same rules as before における過去を示す before に当たる。この際に、日本語の「前(まえ)」は、通常中国語の「上(shang)」に対応しているが、「前(qian)」との対応もできないわけではない。

(65') 噯，玲子姐，{*前次/*之前} 停電時用的蠟燭好像還有？

(66') {*前回/*之前} 寒假中我在鄉下會見醫生的時候，一次都沒有聽到這樣的術語。

一方、(65)と(66)における「前(まえ)」(厳密に言えば「この前」)は、before の意味合いもあるが、「1 つ前の」または「直前の」といった順序の意味合いを含んでいる previous や preceding 及び last time の方に近い。このような場面では、日本語の「前(まえ)」は、(65')と(66')が示すとおり中国語の「前(qian)」との対応が困難であり、基本的には「上次」、「上回」という「上(shang)」に関わる表現と対応している。

5.2.2 「前(qian)」にならない「前(まえ)」:「までに」との対応

「30分前に駅に着きました」と「30分鐘前到了車站」、「死ぬ3年ほど前には、彼は認知症になっていた」と「臨死前3年的時候，他得了認知障礙症」といった対応事例から分かるように、日本語の「前(まえ)」と中国語の「前(qian)」によって言語化される時間的な概念は対応している。

しかし、次の例では、「前(qian)」は、「前(まえ)」ではなく、「までに」と対応している。本節では、本論文の時間メタファーに対する新たな分類法に基づき、このような「前(まえ)」が「前(qian)」にならない現象を詳しく説明していく。

(67) a. 春までにスペイン語を完全にマスターする。

b. 在春天前完全掌握西班牙語。

<CJBC> (村上春樹著 『ノルウェイの森』)

(68) a. 玉枝が来るまでに、どうしても完成させねばならない。

b. 無論如何得趕在玉枝到來之前完成。

<CJBC> (水上勉著 『越前竹人形』)

「前(まえ)」と「前(qian)」の相違を説明するに当たって、ここで強調したいのは、Lakoff and Johson (1980,1999)の2分法であれ、Moore (2014)の3分法であれ、従来の時間メタファー理論に照らして、上記の2つの例文をどのように分類するかが曖昧である、ということだ

ある。

Lakoff and Johson (1980,1999)の2分法によれば、(67)と(68)における時間メタファーは、静止する時間の認知主体に向かって、未来における「春」と「玉枝が来る」という2つの出来事が、次から次へと現在へ移動してくるため、Moving Time Metaphorに当たる。

これに対して、Moore (2014)の二分法によれば、(67)における前件と後件との関係は、時間の認知主体の直示性に関わらず、Front-Back Moving Time Metaphorに当たる、ことになる。(68)で言えば、「完成する」という出来事の次に「玉枝が来る」というもう1つの事柄が続くと見なしており、時間の認知主体が中立的で傍観者の立場から、時間概念を捉えていることになる。

ここで指摘したいのは、(67)と(68)のような例文に示されているような、「前(まえ)」と「前(qian)」とが対応できず、かわりに「までに」が「前(qian)」に対応している現象を、より正確に記述したうえで比較するには、従来の時間メタファーを一部修正しなければならない、ということである。つまり、本論文で提案したAシリーズの時間概念とBシリーズの時間概念とが共存できるタイプ、すなわち、「直示性に関与する Front-Back Moving Time Metaphor(その1)」というメタファーによって説明するのが妥当である。

結論から言えば、未来におけるある時点までの時間的な量を述べる場合、前件と後件との関係を、中国語では「前(qian)」で言語化できるのに対して、日本語では「前(まえ)」の代わりに通常「までに」といった表現で言語化する。

要するに、「前(qian)」は「未来における期間」という時間的な概念を言語化できるが、「前(まえ)」はできない、ということである。この「未来における期間」という場面の時間を図で示せば、次のようになる。この図3-23では、現在というAシリーズの時間概念と、EarlierというBシリーズの時間概念とが共存しており、また、前件の事態が後件の事態(期限・締め切り)の内部に位置している。時間の認知主体は、現在を参照しながら、傍観者的に前件と後件との関係を捉えている。

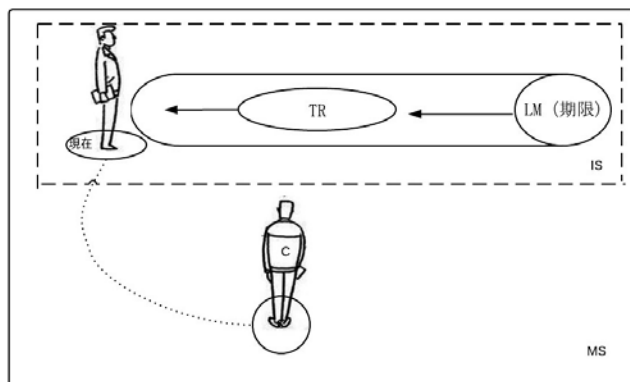


図 3-23 「前(qian)」にならない「前(まえ)」:「未来の期限」の場合

図 3-23 では、トラジェクターとなるのは、「完成する」や「帰る」のような一回で終わり、

点的な時間概念である。一方、ランドマークとなるのは、点的な存在ではなく、期間または締め切りという一定の広がりを持つ時間概念である。また、この図における点線及び IS 領域における「人」は、時間の認知主体の現在という主体性を示すものである。

図 3-23 のような場面では、「前(qian)」は、「前(まえ)」ではなく、「までに」と対応している。また、「未来における期限」という状況については、主に次の 2 種類がある。第一の種類は、(67)～(69)のように、後件の事態が、前件の事態が成立するのに必要な期間を示す状況にある。

(69) a. 放心吧, 25 日前肯定回去。

b. 心配しないで, 25 日までに必ず帰ります。

(張 2010: 210)

例えば、(69)では、前件の事態は「帰る」であり、後件の事態が「25 日になる」ということである。(69)における 25 日になるという後件は、「食べる前に手を洗う」のような表現における「食べる」という後件とは異なり、期限または締め切りのようなものである。同様に、(67)における「春になる」と「スペイン語を完全にマスターする」という 2 つの出来事は、それぞれ後件と前件の事態が対応しており、「春になる」という後件が、前件の事態の実現する期限である。この場合には、日本語の「前(まえ)」と中国語の「前(qian)」とは対応していない。

(70) 切符を手にするまでなんとなく落ち着かない。

在票到手之前心神不定。

<CJBC> (浩然著《金光大道》)

(71) 当たるまで、宝くじを買い続ける。

中獎前, 一直買彩票。

(『現代日本語文法』、日本語記述文法研究会編、中国語訳は筆者による)

第二の種類は、(70)と(71)のように、後件の事態が成立する直前に至るまで、前件の事態が継続している状況である。例えば、(70)では、「切符を手にする」という後件は、(67)の「春になる」と(69)の「25 日になる」という類の後件とはやや異なり、季節や月日のような時間的な概念ではないが、一種の期限を表している。「切符を手にする」という期限までに、前件の「落ち着かない」という状態が継続しているということである。同様に、(71)における「前(qian)」は、「当たる」という期限までの間に、前件の「宝くじを買う」という動作がずっと繰り返されているという時間的な関係を言語化している。しかし、このような場合でも、中国語の「前(qian)」は、日本語の「前(まえ)」との対応が困難である。

5.3 「先(さき)」と「前(qian)」との時間的な意味の共通点

本章の第4節では、日本語の「先(さき)」及び中国語の「前(qian)」の時間的な意味について、それぞれの分析を行った。これを踏まえ、この5.3節では、「先(さき)」と「前(qian)」との時間的な意味の共通点について考察する。結論から言えば、「先(さき)」と「前(まえ)」は、本来 Front という空間的な概念を言語化する言葉であるが、時間メタファーを介して、いずれも未来、過去のみならず、時間の認知主体の主体性に関わる *Ealier*、時間の認知主体の主体性に関わらない *Earlier* という4つの時間的な意味を持っていると考える。

- (72) a. 不久前才調到我們這個地區工作。
 b. しばらく前にこの地区の仕事にまわされてきたのだ。
 <CJBC> (謹容著《人到中年》)

例えば、(72)のような文における過去という概念は、Moving Time Metaphor の時間メタファーを通して、前方という空間的な概念によって表されている。この「過去=前方」という関係は、それぞれ日本語で「先(さき)」、中国語で「前(qian)」によって言語化されている。つまり、「先(さき)」と「前(qian)」は、Moving Time Metaphor を介して、過去を言語化する点で共通するということである。

- (73) a. 先の楽しみな青年
 b. 前途有望的青年
 (『中日・日中辞典』)

また、(73)は、「先(さき)」と「前(qian)」とがいずれも未来を言語化している例である。この場合では、未来は、時間の認知主体が時間軸における未来に向かって前方へ進めていくことであり、これを Moving Observer Metaphor という時間メタファーに基づいて、捉えている。(73)のような「未来=前方」という関係は、日本語と中国語では、それぞれ「先(さき)」と「前(qian)」によって言語化されている。

- (74) a. 警察への連絡より先に、けが人を助けなさい。
 b. 請在與警方聯繫前，救助傷患。
 (篠原 2000: 199、中国語例文は筆者訳による)

- (75) a. 大晦日より先に、天皇誕生日がある
 b. 天皇的生日在大年夜前。
 (篠原 2000: 199、中国語例文は筆者訳による)

そして、過去、未来のほかに、「先(さき)」と「前(qian)」は、Earlier という時間的な意味を言語化できるという点で共通している。本論文における Earlier という時間的な概念については、第4節でも論じられたように、現在といった直示の状況を参照する Earlier、及び直示の状況と関わらない Earlier、という2つの類に分けている。例えば、(74)では、「人を助ける」が「警察に連絡する」より早い時点で発生し、また、(75)も同様に「天皇の誕生日」(12月23日)が「大晦日」(12月31日)より早い、という順序関係を意味している。しかし、(74)における「人を助ける」と「警察に連絡する」という2つの行為は、いずれも現在の時点から未来の時点で行うことである。すなわち、時間の認知主体の主体性が関与する Earlier である。一方、(75)では、「天皇の誕生日」と「大晦日」との時間軸に前後関係は、認知主体の主体性が関与せず、未来でも過去でも成立する。

要するに、ここで指摘したいのは、日本語の「先(さき)」と中国語の「前(qian)」は、上記の2種類の Earlier を言語化する機能を持っているという共通点である。

5.4 「先(さき)」と「前(qian)」との時間的な意味の相違点

5.3節では、空間的な概念に依拠して、時間的な概念を言語化する「前(qian)」と「先(さき)」の共通しているところを論じた。この5.4節では「前(qian)」と「先(さき)」との相違点をめぐって分析することにする。

5.4.1 「前(qian)」にならない「先(さき)」

本論文の時間メタファーに関する分類の最も大きな特徴は、A シリーズの時間概念と B シリーズの時間概念とが共存できるメタファーを提起したことである。こうすることによって空間辞の時間的な意味をより詳細に分析できるようになり、「前(qian)」と「先(さき)」の時間的な意味の相違点がまさにこの提起により説明できる。

5.3節で論じたように、「先(さき)」と「前(qian)」は、2種類の Earlier を言語化する機能を持っているが、次の(76)のような Earlier の場合には、「前(qian)」が使用できるのに対して、「先(さき)」の使用が困難である。

(76) a. 就像吃飯前說的那樣，明天開派對。

b. ?食事の先に話したように、明日パーティーを開きます。

(76)における「前(qian)」で示されている時間的な関係を示せば、次のようになる。「説(話す)」という行為は、「吃飯(食事する)」という行為よりも早い時点で起こり、「説(話す)」と「吃飯(食事する)」という2つの行為は、発話時、すなわち、現在という直示的な時間概念にも関与している。「説(話す)」(トラジェクター)と「食事する」(ランドマーク)は、いずれも発話時の現在を参照点にしてみると、過去の出来事である。

この「過去の Earlier」という用法を図で示せば、図 3-24 のようになる。図 3-24 では、ランドマーク、トラジェクターという 2つの事態との関係を捉えるときに、時間の認知主体 (C) の主体性が部分的に反映され、そのため、認知主体の位置が MS の領域に位置づけられている。トラジェクターの事態とランドマークの事態は、いずれも現在・発話時という時点より過去のところにある。

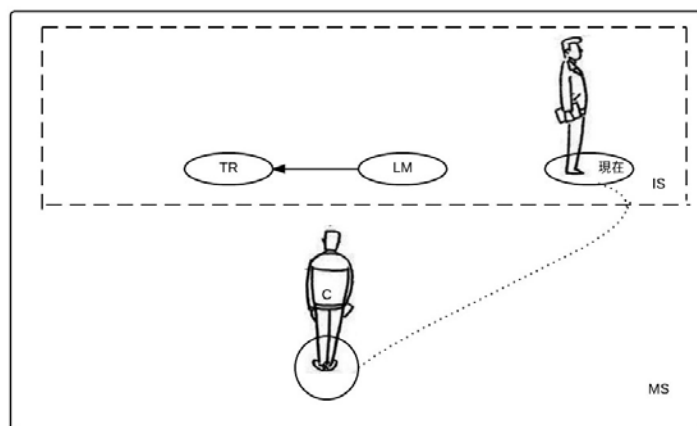


図 3-24 「過去の Earlier」

つまり、(76)では、過去において、前件の「説(話す)」が後件の「吃飯(食事する)」より早い時点で行ったという時間的な関係を示している。すなわち、A シリーズの時間と B シリーズの時間概念が共存する「過去の Earlier」という時間的な関係にある。

ここで指摘したいのは、(76)のように、「前(qian)」が「過去の Earlier」という時間的な関係を言語化できるのに対して、「先(saki)」のみではこのような時間的な関係を言語化できない、ということである。

日中対訳コーパスに基づき、「過去の Earlier」を示す「前(qian)」が、日本語に訳されているかについて調べた結果、日本語では「先(saki)」ではなく、基本的には「前(mae)」によって表現される。

(77) 我工作之前，到英國學習了兩年。

勤める前に、イギリスで二年ほど勉強していたんだ。

<CJBC> (劉心武著《鐘鼓樓》)

(78) 你们登记之前，检查过身体吗？

結婚届けを出す前に、身体検査をしないんですか。

<CJBC> (劉心武著《鐘鼓樓》)

(77') ?勤める先に、イギリスで二年ほど勉強していたんだ。

(78') ?結婚届けを出す先に、身体検査をしてないんですか。

例えば、(77)における時間的な関係について、前件の「到英國學習(イギリスで勉強する)」が、後件の「工作(勤める)」より早い時点で生じており、この2つの事態が **Earlier** という B シリーズの時間的な関係にある。そして、同時に、「到英國學習(イギリスで勉強する)」と「工作(勤める)」という2つの事態は、いずれも発話時より過去のことであり、過去という A シリーズの時間概念とも関わっている。(78)も同様に、前件の「検査身體(身体検査をする)」が、後件の「登記(結婚届けを出す)」より **Earlier** であり、いずれも過去のことである。

(79) a. 実物より先に本で知った虫

<BCCW> (河合雅雄編『ふしぎの博物誌』)

b. 日本も実力は出し切った試合だったが、相手より先に力尽きてしまった。

<BCCWJ> (読売新聞社『読売新聞』)

要するに、(77)や(78)のような過去の時間帯で、ある事態がもう1つの事態より **Earlier** という時点で生じたという時間的な関係は、「先(さき)」によるの言語化が困難だ、ということである。ただし、(77') や (78') が示すように「先(さき)」が、「より」と共起することによって、(79)のように、過去の **Earlier** という時間的な意味を示す機能を持つようになる。

以上、「過去の **Earlier**」を示す「前(qian)」とはならない「先(さき)」の現象を考察した。このように「前(qian)」と「先(さき)」とが対応しないという現象は、過去を言語化する際にも反映されている。

5.3 節では「先(さき)」と「前(qian)」が、時間メタファーを通して、いずれも過去の意味を示すことができることを論じたが、次の(80)と(81)のような事例においては、「先(さき)」と「前(qian)」との対応関係がない。

(80) 很久前有个叫郇珠的美丽姑娘，

おおむかし、郇珠という名の綺麗な娘がいた。

<CCL> (姜彬編《中国民間文学大辞典》、日本語訳は筆者による)

(81) 往前的事不要再提了。

昔の事はもう言わないでください。

(『白水社 中国語辞典』)

(80)と(81)における「前(qian)」で表されている過去は、直前の過去ではなく、発話する時点よりもかなり昔の時点、すなわち「遠過去」のことである。このような過去は、日本語

では(80)と(81)に示されているように、「おおむかし」や「昔」といった言葉で表現され、しばしば「だいぶ前」といった言い方で置き換えられることもある。しかし、(80)と(81)における「遠過去」という時間的な概念は、「先(さき)」で言語化するのが、通常困難である。

「先(さき)」で言語化できるのは、「したばかり」や「したところ」といった直前の過去、すなわち「近過去」という時間的な概念の場合である。

「前(qian)」とは異なり、「先(さき)」が「近過去」しか言語化できないという特徴は、「だいぶ」や「ずっと」といった時間的な距離が遠い状態を示す副詞との共起によって確認できる。「だいぶさき」と「ずっとさき」という表現は、日本語では決して間違った表現ではないが、いずれも遠い過去の意味ではなく、未来の意味として使用される。

- (82) だいぶ先の話ですが、現在の貯蓄ペースではマイホームは持てなさそうな気がします。

<BCCWJ> (三好礼子著 『砂の子』)

- (83) 君の人生には、ずっと先がある。

<BCCWJ> (黒武洋著 『パンドラの火花』)

例えば、(82)と(83)における「だいぶ先」と「ずっと先」という表現は、時間的に非常に遠い未来について言及するものであり、かなり前の過去という読みはなされない。

- (84) a. 先にも述べたように…
b. 前にも述べたように…
c. 就像之前說的……

- (85) a. 「だいぶ前のものだから、もう風味が損なわれてるよね」と元枝に訊いた。
<BCCWJ> (藤田宜永著 『恋しい女』)
b. ? 「だいぶ先のものだから、もう風味が損なわれてるよね」と元枝に訊いた。
c. 我向元枝問道：這是很久之前的東西了。味道多半不好了吧。

- (86) a. 私はずっと前に人生の航路を決めていた。
<BCCWJ> (松村和紀子著 『真夜中のヒーロー』)

- b. ?私はずっと先に人生の航路を決めていた。
c. 我在很早之前就已經決定了自己的人生的航路。

そして、「先(さき)」が「近過去」しか表現できないという現象に対するもう1つの裏付けは、「遠過去」を示す「前(まえ)」との置き換えができないということである。「先(さき)」と「前(まえ)」とは、いずれも過去を言語化する機能を有しており、「前にも述べたように」や「先にも述べたように」といった例では、互いに置き換えることができる場合が少なくない。しかし、「たいぶ」や「ずっと」といった副詞と共起する時には、両者の置き換えが困難となる。例えば、(85)と(86)における「先(さき)」は、「前(qian)」に置き換えられると、文の容認度が下がり、このような場合には「前(qian)」と「先(さき)」とが対応しなくなる。

5.4.2 「先(さき)」にならない「前(qian)」

「先(さき)」は、4.3 節で分析したとおり、「節分から先は春ですね」のような場合には、Later という時間的な意味を示す機能を持っている。すなわち、ランドマークとしての事態が、もう一方のトラジェクターとしての事態より「先(さき)」にあるとは、トラジェクターの事態がランドマークの事態より遅い時点で発生することを意味する。つまり、Shinohara (2011)によって取り上げられている *the more in front, the later* という現象である。

Bender & Beller (2014: 347-348)は、前方で Later を言語化する現象が、Hausa 語、Marathi 語及び日本語しか報告されていないと指摘している。本論文では、中国語においても、Later という概念を「前(qian)」という前方の意味の空間辞で言語化するのが困難であると指摘したい。言い換えれば、同じ前方を示す表現ではあるが、「前(qian)」は Later を言語化している場合の「先(さき)」と対応するのが難しいということである。

(87) a. 今は手術のことで頭が一杯で手術の先の治療のことを考えられない状態で
す。

b.*現在腦袋裡全是手術的事兒，沒有功夫考慮手術之後治療的事兒。

c. 現在腦袋裡全是手術的事兒，沒有功夫考慮手術之前治療的事兒。

(篠原 2008: 193、中国語訳は筆者による)

(88) a. 応仁の乱の先に戦国時代が待っていることを予言したものはいなかった。

b.*沒有人能預言應仁之亂前是戰國時代。

c. 沒有人能預言應仁之亂後是戰國時代。

(渡辺 1995: 24、中国語訳は筆者による)

例えば、(87)における「先(さき)」は、発話時点と関わる Later の事例である。具体的に言えば、「手術の先の治療」において、ランドマークの「手術」という事態が、トラジェクターの「治療」という事態の「先(さき)」にあるというのは、「治療」が「手術」より遅い時点で行われるという意味である。このような場合における中国語の「前(qian)」は、「先(さき)」との対応が極めて困難となる。

(88)における「先(さき)」も、Laterを言語化している例であるが、発話時点と関わりがない点で(87)と相違している。「応仁の乱」が終わったあと「戦国時代」に入るという時間的な順序を言語化する際に、日本語では、「先(さき)」も使用できるのに対して、中国語の「前(qian)」はこのような機能を持っていない。(87)と(88)の「先(さき)」は、通常「後(hou)」によって言語化される。

要するに、「先(さき)」と「前(qian)」はいずれも本来前方という空間的な概念を示す言葉であるが、Laterを言語化する際に、日本語では「先(さき)」が容認される一方で、中国語では「前(qian)」の使用が困難であるということである。

6. まとめ

本章では、日本語の「前(まえ)」・「先(さき)」と中国語の「前(qian)」という3つの前方を示す空間辞を対象にして、それぞれの空間的な意味と時間的な意味を比較してきた。「前(まえ)」と「前(qian)」、「先(さき)」と「前(qian)」との主な共通点と相違点をまとめると、次のようになる。

「前(まえ)」と「前(qian)」は、いずれも前方を言語化する空間辞として、多くの場合で対応している。例えば、日本語における「パンダの前」・「椅子の前」・「パソコンの前」などの表現は、それぞれ中国語の「熊貓前」・「椅子前」・「電腦前」に対応している。

しかし、移動及び移動の傾向を伴う状況では、両者の対応が困難となる。中国語の「前(qian)」は、「再往前一點吧(少し先にします)」、「往前走不了了(この先通り抜けできません)」といった例から分かるように、観察者が前方に向けて移動する際に、あるいは移動しようとする際には、日本語の「前(qian)」のかわりに、通常「先(さき)」と対応することになる。

また、時間的な意味の相違に関しては、「前(まえ)」と「前(qian)」は、いずれも、未来、過去、二種類の Earlier という四つの時間的な概念を言語化できる。しかし、「前(まえ)」が「この」と共起する際には、すなわち「直前」の意味を表す場合には、「前(まえ)」は、「前(qian)」の代わりに、通常垂直軸の「上(shang)」を含む「上次」・「上回」といった表現と対応することになる。そして、本論文では、「前(qian)」の「未来の期限」という用法を提起し、この用法の「前(qian)」が「前(まえ)」のかわりに、「までに」と対応することを示した。例えば、「放心吧，25日前肯定回去。」という文における「前(qian)」は、「前(まえ)」のかわりに、「心配しないで、25日までに必ず帰ります。」と訳すのが妥当である。

「先(さき)」と「前(qian)」との空間的な意味については、「先(さき)」が「旅先」「出張先」「得意先」のように位置を示す機能も含んでいるが、「前(qian)」には基本的にはこのような機能がない。

そして、本章は、「先(さき)」と「前(qian)」との時間的な意味を分析した。両者の相違点については、主に次の三点がある。第一に、「食事の先に話したように」が容認し難い表現であることからわかるように、「先(さき)」が「過去の Earlier」という時間的な概念を言語化できないのに対して、中国語の「前(qian)」にはこのような機能がある。

第二に、「先(さき)」と「前(qian)」とは、いずれも過去の意味を有しているが、「先(さき)」で示される過去は近過去であり、だいぶ前や、ずっと以前のような遠過去を示すのが困難である。一方、中国語の場合には、遠・近過去のいずれも言語化できる。例えば、「だいぶ先のこと」と「ずっと先のこと」という2つの表現が遠過去のことではなく、現在から非常に離れた未来を示している。これに対して、中国語の「前(まえ)」は「很久之前(だいぶ前に)」遠過去の場合でも使用できる。

第三に、「先(さき)」は、**Later** という時間的な概念を言語化できるのに対して、中国語の「前(qian)」による **Later** の言語化は通常難しい。例えば、「手術のことで頭が一杯で、手術の先のことを考えられない状態です」という文における「先(さき)」は、発話時と関わる **Later** という時間的な概念を言語化しているが、「前(qian)」の使用が制限されている。この場面では、「手術の先のこと」が中国語では「手術後の事」という表現で示される。すなわち、「前(qian)」のかわりに「後(hou)」による言語化が通常である。

第4章 日本語の「後(あと)」と中国語の「後(hou)」との比較

1. はじめに

1.1 研究の背景

日本語の「後(あと)」と中国語の「後(hou)」は、後方という概念を言語化する空間辞として、多くの場合では互いに対応しているとされているが、相違するところもある。本章は、「後(あと)」と「後(hou)」の空間的な意味と時間的な意味を、認知言語学の枠組みに基づき、分析したうえで、両者の相違点を明らかにする。「後(あと)」と「後(hou)」との比較研究については、管見する限りでは未だないが、「後(あと)」に関する先行研究と「後(hou)」に関する先行研究をそれぞれ概観すると、次のようになる。

日本語の「後(あと)」という語の意味を分析する際に、「跡(あと)」との関連性についても語らなければならない。「跡(あと)」の語源については、『岩波国語辞典』をはじめとする辞書によると、「あと」における「あ」が「足(あ)」、「と」が「所(と)」に由来したものである。このような見解に基づき、国広 (1997: 190-195)は、「後(あと)」と「跡(あと)」との関連性を認め、両者を「あと」にまとめて考察することにして、「あと」の意味を、「視覚的なあと」、「時間的なあと」、「空間的なあと」という3つの種類に分類している。「視覚的なあと」というのは、通過の形跡、過去の出来事の痕跡、建物の存在の痕跡といった目に見える形の「あと」である。

また、国広 (1997: 190)は、『足跡』は目に見える形であるが、観点を変えれば、人が歩いた時間的なあとに作り出されるものであるから、形としての『足跡』は時間的な『あと』の世界に属するものであることになる」と論じ、「時間的なあと」が「視覚的なあと」という用法から拡張してきたものである、と主張している。さらに、「空間的なあと」については、国広 (1997: 191)は、それが前進するものと、それが作りだした跡という2つのものの視覚的かつ時間的な特徴に依拠して生じたものである、と主張している。

- (1) I II III
 <足跡>→<あと>→<あと>
 視覚的 時間的 空間的

(国広 1997: 190)

- (2) a. 廊下にネコが歩いた跡がついている。
 b. あとが怖い。
 c. 南国土佐をあとにした。

(国広 1997: 192)

要するに、国広 (1997)では、「跡(あと)」から「後(あと)」へという意味拡張のプロセスについて、上記の(1)のように、視覚的なものから時間的なものへ、さらに空間的なものへと把握しているのである。しかし、碓井 (2003)は、認知言語学の理論を導入し、「後(あと)」

の多義性を改めて考察して、国広による「あと」の意味拡張のプロセスの方向性に異を唱えている。

これに対して、碓井 (2003)は、従来の先行研究では「跡(あと)」を空間的な表現、そして「後(あと)」を時間的な表現であると分析する傾向を批判したうえで、「空間と時間の共起現象」という概念を取り入れ、プロトタイプ理論も加味しながら「あと」の意味の拡張プロセスを分析している。

- (3) a. 彼の後について行く (Space)
- b. 先頭から遅れて少し後になった (Space & Time)
- c. 彼は後から来ます (Time)

(碓井 2003: 67)

具体的に言えば、碓井 (2003)では、「後(あと)」という表現も空間的な意味があると強調し、(3)のような空間性が低くなり時間性が上がっている現象を取り上げている。例えば、(3a)における「彼の後」という表現は、「彼」の後方を意味する空間的な意味である。これに対して、(3b)における「少し後になった」という表現は、行列の後方という空間的な順序の意味を含意しているのみならず、順番が遅い方という時間的な順序の意味もある。さらに、(3c)では、空間的な意味がさらに減少し時間的な用法となっている。

中国語の「後(hou)」についての研究は、研究の視座が主に次の3つの種類に分けられる。「後(hou)」の用法の記述について、朴 (2005)を代表的なものとしてここで取り上げることにする。朴 (2005)は、「後(hou)」という空間辞が中国語では、具体的にどのように使用されているのかについて、部位を示す用法と方向を示す用法に大別したうえで、詳しく記述している。邱 (2007)では、通時的な視点から各時代の「後(hou)」の用法について考察している。そして、「後(hou)」と他の言語における後方を表す表現を比較する研究も増えている。グエン (2011)では、中国語の「後(hou)」とベトナム語の sau の相違点を分析している。また、金 (2013)では、中国語の「後(hou)」によって示される空間的な関係と、英語の after と behind によって言語化される空間的な関係を比較している。

「後(hou)」に関する研究は近年では確実に増えつつあるが、管見する限り日本語の「後(あと)」と中国語の「後(hou)」との比較がいまだに見当たらない。

1.2 本章の目的

本章は、日本語の「後(あと)」と中国語の「後(hou)」という2つの後方を言語化する空間辞を対象にして、認知言語学の枠組みに基づき以下の4つの問題について考察することを目的とする。第一に、日本語の「後(あと)」と中国語の「後(hou)」によって言語化される空間的な位置関係をどのように分類して説明するか、という問題である。第二に、「後(あと)」と「後(hou)」によって言語化されたモノ同士の位置関係には、どのような相違点が見られるか、そしてどのように説明するか、という比較の面の問題である。第三に、「後(あと)」と

「後(hou)」は、本来の空間的な意味の他に、時間的な意味も有しており、それぞれの時間的な意味をどのように分類して説明するか、という意味拡張に関する問題である。第四に、「後(あと)」と「後(hou)」との時間的な意味がどのように相違しているか、そして、空間的な意味の相違が時間的な意味の相違を、空間辞の機能拡張という視点を加味しながら、どのように説明するか、という問題である。第一と第二の問題については第2節で、第三と第四の問題については第3節でそれぞれ取り上げる。以上4つの問題を明らかにすることを本章の目的としたい。

2. 日本語の「後(あと)」と中国語の「後(hou)」の空間的な意味

この第2節は3つの部分から構成されている。まず2.1節では日本語の「後(あと)」の空間的な意味を分析する。次に2.2節では、中国語の「後(hou)」の空間的な意味を考察する。最後に2.3節では、「後(あと)」と「後(hou)」との空間的な意味を比較し、相違点を明らかにする。

2.1 日本語の「後(あと)」の空間的な意味

本節では、「跡(あと)」とのつながりを重視する視座から、「後(あと)」の空間的な意味を考察する。人や動物などが歩いて行った結果、残された足の形という「あと」の語源に照らして、国広(1997)と碓井(2003)は、モノの痕跡を意味する「跡(あと)」のほうが、「後(あと)」より「あと」の本来の意味に近く、「後(あと)」が「跡(あと)」の延長線上にあるものであると主張している。つまり、「後(あと)」は「跡(あと)」の意味に基づき、さらに拡張した結果から生じた用法だ、ということである。本論文では、先行研究における「跡(あと)」から「後(あと)」へという拡張の方向性について基本的に国広(1997)と碓井(2003)に同調するが、「後(あと)」が「跡(あと)」から具体的にどのような性質を継承しているのかに関して、さらに詳しく掘り下げる余地があると考えている。

まず、「跡(あと)」に含意している残存と移動という2つの特徴を提起し、「後(あと)」の空間的な意味を調べることから始める。

2.1.1 「跡(あと)」の特徴：残存と移動

「船の通った跡」のような表現における「跡(あと)」は、痕跡を意味している。ここで注意しておきたいのは、「跡(あと)」によって言語化されている痕跡が、残存(あるいは余剰と言ってもよい)と移動という2つの概念にも関与している、ということである。つまり、「跡(あと)」は、残存と移動という2つの概念によって共同に構成された表現である。この説明は当たり前のように思われるかもしれないが、「跡(あと)」という語が他の言語ではどのように訳されているのかを見れば、「跡(あと)」の特徴が明確になる。

例えば、「跡(あと)」という表現は英語の場合では、様々な訳に対応しており、ただ1つの英語表現での対応は困難である。移動するモノが残した痕跡と、モノが取り残した状態の痕

跡は、それぞれ異なる言葉で表現されている。前者の痕跡は *track*、*trail* などによって後者の痕跡は *remains*、*ruins* などによって言語化されている。例えば、「牛が通った跡」は *tracks of a cow* と翻訳されるが、「城の跡を保存する」は *preserve the remains of a castle* と翻訳される。すなわち、*cow* が移動を通して残した「跡(あと)」が *tracks* であり、また、*castle* が残した「跡(あと)」が *remains* である。要するに、*track(s) of a castle* や *preserve the tracks of a castle* のような表現が通常容認しがたいということから分かるように、日本語の「跡(あと)」という 1 つの表現で言語化できる痕跡は、英語では複数の表現に分けて言語化しなければならない、ということである。

ここで特に注意しておきたいのは、痕跡を言語化する際に、残存と移動という「跡(あと)」を含意している特徴が、「後(あと)」の空間的な意味にも反映されている、ということである。次の 2.1.2 節では、「後(あと)」の「後方」という用法を論じる。要するに、「跡(あと)」という語が残存と移動の概念その両方に関係があることは、「後(あと)」の空間的な意味においても関係がある、という点である。

2.1.2 「後(あと)」: 移動する主体の「後方」

「後(あと)」という空間辞の意味について、『三省堂国語辞典』をはじめとする辞書においては、おおむね人間やモノの背中が向いている方向というように説明している。本論文では、参照物の移動、すなわち、ランドマークの移動という視点を加味して、「後(あと)」によって言語化されている後方の意味を考察する。「後(あと)」の後方の意味について分析するにあたって、Tyler & Evans (2003) での *behind* と *after* という 2 つの後方を示す前置詞の相違点に関する分析を概観する。

- (4) a. みんなの後ろにくっついて先生の家に入って行きました。
<BCCWJ> (松山善三著 『ああ人間山脈』)
- b. 僕は無言のままトボトボと親父の後ろを歩き、家に帰りました。
<BCCWJ> (片岡鶴太郎著 『夢画夢中』)
- c. 味方が現れ、私たちはその案内のゲリラの後ろを追う。
<BCCWJ> (恵谷治著 『アフガン山岳戦従軍記』)

Tyler & Evans (2003: 173-176) は、*after* と *behind* の空間的な意味は共通する 경우가少なくないが、次の *pursuit* という跡追いや追跡の場面では、*after* の使用のみが許される、と指摘している。追跡の場面というのは、トラジェクターがランドマークの背後にあるのみならず、両者のいずれも移動しており、トラジェクターがランドマークを追いかけている場面である。例えば、*The police chased/came after the robbers.* という文における *after* は、ランドマークの *robbers* の背後にトラジェクターの *police* が追いかけている、という後方の関係を言語化している。このような場合における *after* は、*behind* に置き換えられると違和感が生

じてくる (Tyler & Evans 2003: 157)。

Tyler & Evans の分析を踏まえて、本書では日本語の「後(あと)」という空間辞によって言語化されている空間的な位置関係は、after で示されている追跡の場面の後方に非常に類似している、と指摘する。

具体例を使って言えば、(4) の「みんなの後」「親父の後」「案内のゲリラの後」という3つの表現における「後(あと)」は、移動しているランドマークとなる人の背中や後部を言語化している。すなわち、(4) における「みんな」「親父」「案内のゲリラ」という3つのランドマークは、それぞれの文の全体の意味から分かるように、決して静止しているのではなく、一定の方向に移動しているという状態にある。

2.1.1 節では、「跡(あと)」という表現に含意されている移動性について説明する際に、「船の通った跡」という例を取り上げた。注意すべきことは、(4) における空間辞の「後(あと)」が、「跡(あと)」の移動性を継承している、ということである。

具体的に言えば、「船の通った跡」という表現における「跡(あと)」は、ランドマークの船が前方へ移動していき、船の後方に引かれた波の痕跡を示している。同様に、(4) における「後(あと)」も、前方へ移動していくランドマーク、すなわち、「みんな」「親父」「案内のゲリラ」の後方における空間領域を意味している。「船の通った跡」における「跡(あと)」が痕跡を、「案内のゲリラの後を追う」における「後(あと)」が空間領域を、それぞれ示しており異なっているが、ランドマークの移動と緊密に関連している点では、一貫性が見られる。

要するに、「後(あと)」で示されている後方は移動と、さらに厳密に言えば、ランドマークの移動と緊密に関わっているということである。

2.1.3 「後(あと)」: 余地・残留の用法

2.1.2 節では、「跡(あと)」の移動性を加味しながら、移動しているランドマークの後方という「後(あと)」の空間的な用法を分析した。この2.1.3 節では、先行研究ではあまり取り上げられていない「後(あと)」の余地・残存という用法を分析する。

- (5) a. 後3人が座れる。
- b. 作るべき書類が後3つある。

(『大辞林』)

上記の(5)における「後(あと)」には、(5a)のような余地を示すものがあり、(5b)のような残留を示す場合もある。「3人が座れる」という容積についての表現と比べ、「後3人が座れる」という表現は、収容できる能力を示すものではなく、残された容量を意味している。同様に、「作るべき書類が後3つある」という表現は、「作るべき書類が3つある」とは異なり、書くべき書類が3つより多いという前提がある。

ここで指摘したいのは、例えば「城の跡を保存する」や「古寺の跡」における「跡(あと)」が示す残留という意味合いが、(5a) と (5b) における「後(あと)」にも反映されている、という点である。「古寺の跡」という表現では、トラジェクターの「跡」は、「古寺」の各部分が次から次へと消えてしまい、最後に取り残された部分である。(5)では、ランドマークとなるものが作らなければならない全書類の件数であり、「後 3 つ(の書類)」というトラジェクターがその取り残された部分である。つまり、トラジェクターの「後 3 つ(の書類)」は、全部の書類のうち、1 つずつ完成することによって最後に残された部分を示している。

2.2 中国語の「後(hou)」の空間的な意味

この2.2節では、中国語の「後(hou)」の「後方」の用法と「後部」の用法という2つの空間的な意味を分析する。

2.2.1 「後(hou)」:「後方」の用法

中国語の「後(hou)」がもつ「後方」の空間的な用法は、トラジェクターがランドマークの背後及び背が向いている方向に位置しているというものである。「後(hou)」が「後方」の用法として用いられる場合、ランドマークは主に次の二種類がある。

第一類の場合にランドマークとなるのは、人間や動物のように形が非対称的で、正面と背面との区別を有するものである。このような場合の「後(hou)」の用法を次の(6)と(7)で説明する。

- (6) a. 小孩子畏縮地躲在母親身後。
- b. 子供はおずおずと母親の後ろに隠れている。

(『白水社 中国語辞典』)

- (7) a. 老虎往後拉屁股，是為了向前猛撲。
- b. トラが後ろに腰を引くのは、前に向かって激しく飛びかかるためである。

(『白水社 中国語辞典』)

(6)の文での「母親」というランドマークは人の身体の非対称性によって、前後軸を内在的に有する参照物であり、「母親」の背の向いている方向または領域が「後(hou)」となる。すなわち、トラジェクターの「小孩子(子供)」がランドマークの「母親」の「後(hou)」に位置しているということは、「ランドマーク」である「母親」の背後という後方の領域にいる、ということである。

また、(6)は主にランドマークの後方の領域を示す例であるが、(7)における「後(hou)」は、後方という方向そのものを示している。「虎」も人間のように形態上の非対称性によって、前後軸を内在的に有している。すなわち、(7)における「後(hou)」によって言語化されているのは、ランドマークの「背」が向いている方向である。ここの虎の「背」は、人間の

ような胸や腹と反対する背中ではなく、hind quarter という四足獣の臀部である。つまり、ランドマークの虎の「後(hou)」というのは、この臀部が向いている方向である。

- (8) a. 喜左衛門の墳墓不安置在菩提寺裡，而是落置在喜助家屋後長有竹叢的山丘上，村民們在那裡開闢出一塊尚能照得到太陽光的平坦土地。
b. 喜左衛門の墓は、菩提寺に置かずに、喜助の家のうしろにある竹藪の丘の、わずかに陽のあたる平坦地の一郭を敷地にして設置されることになった。

<CJBC> (水上勉著 『越前竹人形』)

次に、第二類の場合にランドマークとなるのは、無生物であり、その機能によって、前後軸が人為的かつ習慣的に付与されているモノである。例えば、(8)の「屋後 (家の後ろ)」という表現では、「屋 (家)」という無生物のランドマークには、人間の身体に由来する前後の方向性がない。「屋 (家)」は、人間や虎といった生物のような形状ではないが、その機能によって前後の方向性が決められている。具体的に言えば、「屋 (家)」には門があり、普段最も使用されている門、すなわち、Langacker (1987)によって提起されている第一の入口 (primary access)が設置されている側が通常前方と見なされ、その反対側が後方と解釈される。つまり、「喜助家屋後長有竹叢的山丘 (喜助の家のうしろにある竹藪の丘)」という表現における「後(hou)」は、トラジェクターの「長有竹叢的山丘 (竹藪の丘)」が、ランドマークの「屋(家)」の正門、あるいは表玄関と反対する側の近辺に、すなわち「屋(家)」の後方に位置している、という空間的な関係を言語化している。

2.2.2 「後(hou)」:「後部」の用法

「後(hou)」の「後部」の用法とは、トラジェクターがランドマークの後ろ側にある部位である、ということである。2.2.1 節で論じられた「後方」の用法と比べ、「後(hou)」の「後部」という空間的な用法の特徴は、トラジェクターがランドマークという全体の一部分であり、トラジェクターが通常ランドマークに付着しているか、またはランドマークと接触している、というところにある。この「後部」の用法における、ランドマークとトラジェクターとの包摂関係及び位置関係を示すと次のようになる。

- (9) a. “著鏢！”一個紙鏢從空中穿過，射到一位同學後腦兒上了。
b. 「手裏劍、命中！」と紙の手裏劍が飛んで、一人の子の頭の後ろにあたった。

<CJBC> (王蒙著 《活動變人形》)

- (10) a. 他騎了一輛嶄新的自行車，婆姨坐在車後，漸行漸遠。
b. 彼は真新しい自転車に跨がり、うしろに妻を乗せてほしいに遠ざかっていった。

<CJBC> (史鐵生著 《插隊的故事》)

例えば、(9)における「脳(頭)」は、人間の身体の1つの器官であり、ランドマークとして「後(hou)」と共起している。この場合の「後脳(頭の後ろ)」という表現は、「脳(頭)」という全体の後ろ側の部位、すなわちトラジェクターを示している。

(9)のランドマークの「脳(頭)」は、人間の身体の非対称性によって、内在的な前後軸を有するものである。(10)における「車(自転車の後ろ)」は機能によって、すなわち人間を運搬して前方へ移動させるという役割を通して、前後軸が付与されているランドマークである。(10)のような場合では、「車(自転車)」と「後(hou)」との共起は、「後脳(頭の後ろ)」と同様に、自転車という全体の後ろ側の一部を示している。

2.3 「後(あと)」と「後(hou)」との空間的な意味の相違点

この2.3節では、日本語の「後(あと)」と中国語の「後(hou)」を比較し、両者の空間的な意味の相違点を明らかにする。

2.3.1 「後(hou)」にならない「後(あと)」: 参照物が静止している場合と「後部」

2.2節の分析で分かったように、日本語の「後(あと)」と中国語の「後(hou)」は、いずれも「後方」という空間的な用法を持っている。すなわち、「後(あと)」と「後(hou)」は、(11)のような例に示されているとおり、トラジェクターがランドマークの背後または背が向いている方向にある、という空間的な位置関係を言語化する機能を有し、互いに対応している。しかし、「後(あと)」と「後(hou)」は対応していない場合も少なくなく、「後(hou)」の使用は容認できるが、「後(あと)」の使用は容認できない例がある。主なものとして次の二種類がある。

- (11) a. 隊長が前で先導し、人々がその後についている。
b. 隊長在前面開路，人們跟在其後。

(『白水社 中国語辞典』)

まず、「後(あと)」と「後(hou)」との第一の相違点を(12)で説明する。(12a)の「屋後(屋の後ろ)有(有)條河(家の後ろに川がある)」という表現における「後(hou)」によって言語化されている空間的な位置を、日本語の「後(あと)」で直訳すると、文の容認度が落ちると思われる。本論文は、このような「後(あと)」と「後(hou)」とが対応しない現象がどのように生じているのかという問題について、ランドマークの移動性の有無という点から考察する。

- (12) a. 屋後(屋の後ろ)有(有)條河。
b. ?家の後(あと)に川がある。

(徐月清著《活躍在香港》)

- (12') 家の後ろに川がある。

具体的に言えば、2.1.1 節と 2.1.2 節で分析したとおり、「後(あと)」という空間辞は、物の移動による消失といったことにも関わり、参照物となるモノが常に移動を伴っているという特徴を有する。つまり、「後(あと)」によって言語化された「後方」は、単にトラジェクターがランドマークの後方に位置しているという意味での「後方」ではなく、トラジェクターがランドマークを追跡しているという設定もあり、いわゆる一種のダイナミックな意味での「後方」である。

(12)のランドマークである「屋(家)」は移動できず、常に一定の場所に位置している。すなわち、(12)の例に代表されるように、移動を伴わず、追跡の設定もない場合では、換言すると「後方」を言語化する際には、日本語の「後(あと)」の使用が比較的制限されている、ということである。これに対して、静的な「後方」は、中国語の「後(hou)」によって言語化できる。

日本語の「後(あと)」が示す後方の用法と中国語の「後(hou)」が示す後方の用法は、それぞれに図 4-1 と図 4-2 で示される。2つの図のいずれも、黒い矢印が示しているようにトラジェクターはランドマークの後方に位置している。ただし、図 4-1 のランドマークにはさらに白抜き矢印が付けられており、これはランドマークの移動を示すものである。

要するに、日本語ではランドマークが移動しない、または、移動の傾向がない場合には、「後(あと)」の使用が制限されるが、「後(hou)」の使用は自然である。このような相違を図で示すと次のようになる。

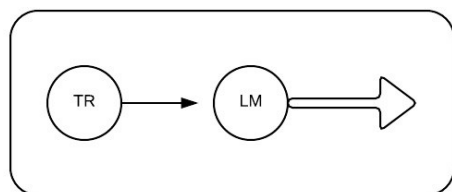


図 4-1 「後(あと)」の後方の用法

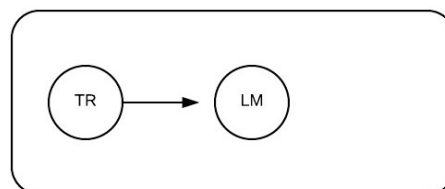


図 4-2 「後(hou)」の後方の用法

第二の相違点は、トラジェクターがランドマークの一部として、その後部に位置している場面において、中国語の「後(hou)」と日本語の「後(あと)」は使用が異なっている、という点である。「後(hou)」の後部の用法は図 4-3 で示されるように容認可能である。これに対して、「後(あと)」は、図 4-3 におけるトラジェクターとランドマークのような関係を示すのが困難である。

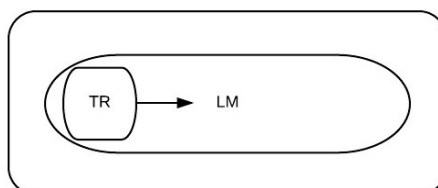


図 4-3 「後(hou)」の後部の用法

例えば、(13a)で、ランドマークの「教室」が「後(hou)」と共起する場合には、教室の後部というトラジェクターを意味している。(13a)における「後(hou)」で示されている後部は、日本語で(13b)のように「後(あと)」で言語化すると、文の容認度に違和感を覚えることになる。(13b)における「後(あと)」は、(13b')のように「後ろ」に変えると文の容認度が上がることになる。

- (13) a. 教室後設有儲物櫃。
b. ?ロッカーが教室の後に設置されている。

(13) b'. ロッカーが教室の後ろに設置されている。

英語における後部を示す表現を加味して考えれば、この中国語の「後(hou)」と日本語の「後(あと)」との相違が更に明らかになる。具体的に言えば、英語での後部を示す表現は、*behind* や *after* という前置詞の代わりに、*at the back of* という前置詞を含む複合的な表現によって言語化されている。

- (14) a. the door at the back of the room.
b. その部屋の後ろにあるドア。

(一杉武史著 『キクタン英検準2級』)

- (15) a. We sat at the back of the theater.
b. 私たちは、その劇場の後ろに座った。

(一杉武史著 『キクタン英検準2級』)

- (14) b'. その部屋の後(あと)にあるドア。
(15) b'. 私たちは、その劇場の後(あと)に座った。

例えば、(14a)と(15a)では、*at the back of*が、それぞれ *the room*、*the theater* を補部として取り、部屋の後部、劇場の後部を示している。このような空間的な位置関係は、「後(あと)」ではなく、「部屋の後ろ」「劇場の後ろ」の訳から分かるように、通常「後ろ」と訳されている。(14b')や(15b')のように「後ろ」の代わりに「後(あと)」を用いると容認可能性が低くなる。一方、中国語では、「後(hou)」は、*at the back of* という表現にも対応しており、モノの後部を言語化できる。

2.3.2 「後(あと)」にならない「後(hou)」:「余地・残留」の用法

2.1.3 節では、国広(1997)と碓井(2003)に照らして、痕跡を示す「跡(あと)」からの継承という視点より、日本語の「後(あと)」が持つ「余地・残留」という用法について分析した。これに対して、中国語では、空間辞の「後(hou)」は、直接的に「余地・残留」を言語化

するのが困難であり、「後(あと)」と対応関係がない。つまり、中国語の「後(hou)」は、日本語の「後(あと)」、または、英語の *remains* とは異なり、「余る」と「残る」という2つの事態を同一の言葉で示すのが容易ではない。この「後(hou)」と「後(あと)」が対応しない現象について、(16)と(17)を例にしてそれぞれ説明する。

- (16) a. 後2キロは歩くことができます。
b. 還能再走兩公里。

(『中国語会話例文集』)

- (17) a. 大体、もう今日までに予定の数量を採りましたから、後は逃げて構いませんがね。
b. 預定數量到今天已經完成，剩下的嚇跑也不礙事。

<CJBC> (井上靖著 『あした来る人』)

具体的に言えば、(16a)の「後(あと)」は、文末にくる「ことができます」という表現と共起していることから分かるように、「後(あと)」が余地の意味として使用されている。すなわち、(16a)における「後(あと)」は、歩ける総距離というランドマークを参照物にして、残されている距離というトラジェクターを示している。この「後(あと)」によって言語化されている残りの距離は、中国語の場合では、「もう少し」、「また」などの日本語に当たる「還」という表現で言語化されている。

また、「後(hou)」と「後(あと)」とが対応しない事例は、(17)にも反映されている。(17a)における「後(あと)」は、残されているものを示し、採られていない部分を意味する。すなわち、残留したモノという用法として用いられている。この場合、「後(あと)」は、通常中国語の「剩下」といった表現に訳され、「後(hou)」との対応が困難である。

3. 日本語の「後(あと)」と中国語の「後(hou)」の時間的な意味

前後軸の空間辞は、多くの場合、時間的な意味を示す機能を持っている。第3章では、認知言語学における従来の時間メタファー理論を見直したうえで、新たな分類方法を取り上げ、日本語の「前(まえ)・先(サキ)」と中国語の「前(qian)」との時間的な意味を分析した。この第3節では、第3章で提案した時間メタファーの分類方法に基づき、「後(あと)」と「後(hou)」の時間的な意味を空間的な用法からの拡張という視点も入れながら考察し、両者の相違点を明らかにする。

3.1 日本語の「後(あと)」の時間的な意味

3.1.1 「後(あと)」: Later の用法(現在・発話時を参照する場合)

「後(あと)」は、2つの事態における Later という時間的な意味、すなわち、1つの事態がもう1つの事態の次に発生するという時間的な関係を、言語化する機能を持っている。すで

に第3章でも論じられたように、本論文は、Bシリーズ時間概念が、現在または発話時と共起するタイプと、共起しないタイプという2つの種類に分けている。同様に、「後(あと)」の Later という B シリーズ時間概念を示す用法も、2種類ある。この3.1.1節では、現在または発話する時点の状況も反映された Later を説明する。

- (18) a. 期末試験は数学が先で、英語が後です。
- b. ゲームを先にして、食事は後にしよう。

例えば、(18)における「後(あと)」は、時間軸における2つの事態の相対的な順序関係を示しており、文における2つの事態のいずれも発話する時点と関わり、未来で行うことを示している。具体的に言えば(18a)の「後(あと)」は、数学の試験を受けるという前件と、英語の試験を受ける後件という2つの事態の順序関係を示している。また、(18b)における「後(あと)」も、食事とゲームという2つのこれから始まる事態の順序について、食事のほうが Later だ、という時間的な意味を言語化している。

3.1.2 「後(あと)」: Later の用法(現在・発話時を参照しない場合)

発話する状況や発話者の現在を特定せず、事態と事態との順序を示す Later についての典型的な例を挙げれば、(19)のようなものがある。

- (19) a. 第二次大戦の後、マーシャル・プランを通じて、アメリカは西側世界の復興に努めた。
(今井隆吉著 『科学と外交』)

- b. 明治維新の後、明治5年の廃藩置県を経て、横浜開港場は神奈川県の下に置かれた。
(柳沢道生編 『旅たび倶楽部』)

(19a)における「第二次世界大戦」、(19b)における「明治維新」という2つの事態は、歴史の出来事を示す名詞である。「第二次世界大戦」と「明治維新」といった歴史的な事件は、第3章でも論じられたとおり、「春、夏、秋、冬」や「1月…12月」と同じく、時間配列語である。このような時間配列語は、その語自体は、時間軸における事件の位置が決められている。つまり、前件の事態と後件の事態との順序は、発話者の状況、あるいは現在と関与することなく、決められている。

具体的に言えば、(19a)における「後(あと)」は、ランドマークの「第二次世界大戦」の次にトラジェクターの「西側世界の復興」が続き、復興の時点が終戦の時点より Later だという時間的な概念を言語化している。

3.1.3 「後(あと)」:「残りの時間」の用法

「後(あと)」の空間的な用法にも見られる「後2キロは歩ける」や「後3人が座れる」といった例は、時間的な領域にも拡張される。「後(あと)」の「残りの時間」とは、決められた期間や締め切りの一部が発話時以降も残っているという用法である。「後(あと)」の「残りの時間」という用法は、3.1.1節で論じられた *Later* の用法と似ており、いずれも発話時以降の時間帯、または未来の状況を示している。しかし、「後(あと)」の「残りの時間」は、*Later* の用法とは異なり、期限までまだどのくらいの時間的な余裕が残されているかにも言及するという点が特徴的である。

- (20) a. 後1年任期が残る。
b. 後3分で終了する。

(『中国語会話例文集』)

例えば、「後2キロは歩ける」という表現では、ランドマークとなるものは、直接的に文に出現していないが、歩ける総距離である。「後2キロ」はその総距離のうち残されている部分を意味している。この例にある「後(あと)」の空間的な用法と同様に、(20a)における「後1年」と(20b)における「後3分」では、文中に直接的に現れていないが、文脈全体を通して、任期および期限の全体がランドマークとして機能している。

具体的に言えば、発話者が、「後1年任期が残る」を言う際に、その発話のコンテキストには、任期全体が背景的な参照物として存在している、ということである。例えば、任期を10年間にしてみると、「後1年」という表現は、ランドマークの役割を果たしている10年間という任期全体の中で、トラジェクターの最後の「1年」が残っている、という「残りの時間」を意味している。

3.2 中国語の「後(hou)」の時間的な意味

3.2.1 「後(hou)」: *Later* の用法(現在・発話時の状況と関連する場合)

中国語の「後(hou)」は、日本語の「後(あと)」と同様に、ある事態がもう一方の事態の次に起こるとしての *Later* としての時間的な意味を言語化することができる。

- (21) a. 晩飯後咱們聊聊。
b. 食事の後で雑談しよう。

(『中日・日中辞典』)

例えば、(21a)の「後(hou)」は、「晩飯(晩の食事)」と「聊聊(雑談する)」という2つの事態の相対的な順序関係、すなわち *Later* という時間的な概念を表している。また、(21)における2つの事態は、いずれも発話者の行動であり、発話する時点以降で生じ、いわゆる発話

時・現在と関わる未来の Later という関係にある。

- (22) a. 工作結束後，去了惠比壽的啤酒節。
b. 仕事の後、恵比寿にあるビールフェスタに行った。

(『中国語会話例文集』)

また、(22a)における2つの事態の順序は、(21a)とやや異なり過去の Later の関係にある。具体的に言えば、(22a)における「後(hou)」は、仕事が終了するとビールフェスタに行くという2つの事態の順序について、ビールフェスタへの参加という事態のほうが Later だ、という時間的な意味を言語化している。そして、この2つの事態のいずれも過去のことであり、発話する時点より過去の方に位置しているという関係にある。

3.2.2 「後(hou)」: Later の用法(現在・発話時を参照しない場合)

「後(hou)」には、発話する状況、現在という発話者の直示性の影響を受けず、一方の事態がもう一方の事態の次に生じるといった時間的な意味を示す場合がある。典型的な例として、次の(23)と(24)がある。

- (23) a. 法國大革命後的1794年，英國大使馬卡托尼參見了乾隆帝。清朝的皇帝將這位喬治三世的使臣作為朝貢使節來接待。
b. フランス革命の直後の一七九四年に英国の大使マカートニーは乾隆帝と会見しているが、清の皇帝はジョージ三世の使臣を朝貢使節として遇している。

<CJBC> (平川祐弘著 『マッテオ・リッチ伝』)

- (24) a. 明治政府在維新四年之後即一八七一年，廢藩置縣，並由中央政府委任縣知事實行統治。
b. 明治政府は維新の四年後の一八七一年には藩を廃止して県を置き、中央政府が任命した知事によってこれを統治させた。

<CJBC> (吉田茂著 『激動の百年史』)

例えば、(23a)における「法國大革命(フランス革命)」、(24a)における「維新」という2つの事態は、歴史の出来事を示す名詞であり、いわゆる時間配列語である。このような時間配列語は、ランドマークとして「後(hou)」と共起する際に、もう一方の事態、すなわちトラジェクターとの順序関係が発話者の直示性の影響を受けずに成立している。

3.3 日本語の「後(あと)」と中国語の「後(hou)」の時間的な意味の相違点

3.3.1 「後(あと)」と「後(hou)」の相違点

Moore(2000: 163-165)では、人間の言語において、ごく少数の例外を除き、Later という時間的な概念は、後方を示す空間的な表現によって言語化されるのが一般的だと指摘している。日本語の「後(あと)」と中国語の「後(hou)」の時間的な意味について、3.1節と3.2節の

分析を通して分かったように、いずれも、二種類の Later を言語化できるという点で共通している。しかし、次の (25)~(27) のような「残りの時間」という用法で使用されている「後(あと)」は、「後(hou)」との対応が困難である。

- (25) a. 修学旅行まで後 2 週間。
b. 離修學旅行還有兩周。

(『中国語会話例文集』)

- (26) a. 私は後 3 ヶ月しか日本にいません。
b. 我在日本的時間只剩 3 個月。
(西隈俊哉著 『日本語能力試験 3 級徹底ドリル』、中国語訳は著者による)

- (27) a. ローンが後数年で終わる。
b. 貸款再過幾年就能還完。
(カルチャーランド著 『老後資金 0 円からの快適セカンドライフ』、
中国語訳は著者による)

具体的に言えば、(25)~(27)における「後(あと)」は、期間が予め設けられているという状況下で、期間満了まで時間がまだ余っていることを示している。しかし、このような「残りの時間」を表す際に、中国語では「後(hou)」の代わりに、通常他の表現によって言語化される。例えば、(25a)の「後 2 週間」という表現は、(25b)で「還有兩周」と訳されている。すなわち、「後(あと)」で示されている「残りの時間」は、「還」と「有」というそれぞれ日本語の「まだ」、「ある」に相当する表現によって表されている。この場合、中国語の「後(hou)」の使用は基本的に制限されていることになる。

また、(26a)における「後 3 ヶ月」という表現に含まれている「残り」の意味合いは、中国語の「剩」という動詞で示されている。つまり、日本での滞在期間が切れる前にまだ余っている在留できる期間という概念を、日本語では「後(あと)」という空間辞によって言語化できるのに対して、中国語では「後(hou)」の代わりに「剩」という「残る」に当たる動詞で示している。(27a)の「後数年」における「後(あと)」も同様に、中国語の「後(hou)」ではなく、動詞の「再」によって言語化されている。

要するに、「後(あと)」はある期限や締め切りをランドマークにして、この予め決められた終了の期日までにまだ残っている時間の「残量」をトラジェクターとして言語化できる。しかし、中国語の「後(hou)」は、このような機能を持っておらず、残されている時間という概念を示す際に、通常ほかの表現で言語化する。「後(あと)」と「後(hou)」は、空間的な意味でも、時間的な意味でも多くの共通点が見られるにもかかわらず、なぜ時間の残量という用法で相違しているのかという疑問が生じるが、これについては次の 3.3.2 節で分析することにする。

3.3.2 「後(あと)」と「後(hou)」と対応できない理由

なぜ中国語の「後(hou)」が「残りの時間」という用法を持っていないのかという問題については、結論から言えば次のようになる。すなわち、「後(hou)」の本来の空間的な意味には、「後(あと)」のような「余地・残留」という空間的な意味がないからである。つまり、日本語の「後(あと)」が持つ「残りの時間」という用法の背後には、「後方」と「余地・残留」という2つの空間的な動機付けが同時に機能しているのであるが、中国語の「後(hou)」には「後方」の動機付けしかないからである。

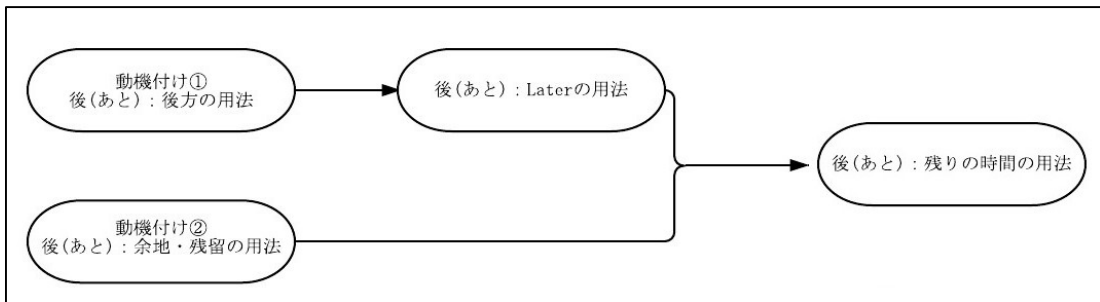


図 4-4 「後(あと)」の「残りの時間」の用法

図 4-4 が示しているのは、日本語の「後(あと)」が表す「残りの時間」という用法と、「後方」及び「余地・残留」という2つの空間的な用法との関係である。この図から分かるように、「後(あと)」の「残りの時間」の用法は、トラジェクターがランドマークより次の段階で生じるという Later の意味と、トラジェクターがランドマークに取り残されている部分であるという余地・残留の意味との複合によって拡張してきたものである。特に、注意しておきたいのは、この2種類のランドマークが異なっている点である。つまり、「残りの時間」という用法には Later と「余地・残留」に関わる2つのランドマークが存在し、同時に機能している、ということである。

具体的に言えば、「後3ヶ月しか日本にいません」という表現では、発話時点に基づくランドマークがあるほかに、日本での滞在期間全体というもう1つのランドマークがある。この二種類のランドマークを、ここではそれぞれに「順序のランドマーク」と「余地・残留のランドマーク」と呼ぶことにする。順序のランドマークは、Later という時間的な意味を示す際に、参照点となっている。期間のランドマークは、余地・残留を示す際の参照点である。

「後3ヶ月しか日本にいません」における「残りの時間」を示す「後(あと)」は、「また、後で話しましょう」における Later を示す「後(あと)」と同様に、トラジェクターが示す事態（今後の3ヶ月間、話すという行為）が発話時というランドマークより以降にある、ということを示している。

また、「後3ヶ月しか日本にいません」における「残りの時間」を示す「後(あと)」は、「後3人が座れる」における余地・残留を示す「後(あと)」と同様に、トラジェクターがラ

ランドマークの余っている部分を言語化している。つまり、日本に滞在できるすべての時間が、座れる人数全員と同様にランドマークと見なされて、「3人」という収容できる余地と同様に、トラジェクターの「3ヶ月」という期間が、このランドマークにおいて余っている部分を示している。

中国語の「後(hou)」は、空間的な意味として、トラジェクターがランドマークの後方に位置しているという点に関しては、日本語の「後(あと)」と共通している。しかし、中国語の「後(hou)」は日本語の「後(あと)」とは異なり、トラジェクターがランドマークにおいて余っている部分、あるいは取り残されている部分という空間的な意味を有していない。つまり、「後(hou)」は、「後(あと)」と比べると、「余地・残留」という空間的な意味が欠如しているということである。その結果として、「後(hou)」は、「残りの時間」を言語化できず、「後3ヶ月しか日本にいません」や「修学旅行まで後2週間」における「後(あと)」は、中国語では他の表現で示さなければならないということになる。

4. まとめ

本章では、日本語の「後(あと)」と中国語の「後(hou)」という2つの空間辞を対象にして、それぞれの空間的な意味と時間的な意味を整理したうえで、両者の相違点を分析した。本章の分析結果をまとめると以下のようなことになる。

日本語の「後(あと)」の空間的な意味を分析する際に、特に留意しなければならないのは、「跡(あと)」との関係である。本章は、まず「跡(あと)」という表現に含意している残存と移動という2つの意味合いを分析した。興味深いことに、このような意味合いは、英語の場合では通常 track・trail 及び remain・ruin という2種類の言葉でそれぞれに表現するが、日本語の場合ではただ1つの語に対応する。そして、本論文は先行研究を整理しながら、「跡(あと)」の残存と移動という2つの意味合いが、「後(あと)」によって継承されていると分析した。本章では、日本語の「後(あと)」の空間的な用法を、移動する主体の後方(例えば、「親の後を歩き、家に帰った」と)と余地・残留の用法(例えば、「後3人が座れる」と)という2つの種類に分けることとした。

「後(あと)」が示す移動する主体の後方とは、トラジェクターが移動している、または移動したランドマークの後方に位置するという空間的な用法と見なされる。すなわち「後(あと)」が言語化できる後方は、主体の移動に伴い、一種のダイナミックな後方ということになる。また、「後(あと)」は、余地・残留というもう1つの空間的な意味を有する。「後(あと)」は、物事が終わってから残された部分、あるいはまだ余地のある状態を指示する場合にも使用される。

本章は、中国語の「後(hou)」の空間的な意味を後方と後部という2つの種類に分けて分析した。すなわち、「後(hou)」は、トラジェクターがランドマークの後方に位置するか、トラジェクターがランドマークの1つの部位としてその後ろ側にある、という2つの場面の空間的な位置関係を言語化できる、ということである。

日本語の「後(あと)」と中国語の「後(hou)」との空間的な意味の相違点については、主に次の3点が見られる。第一に、ランドマークが静止している場合では、「後(hou)」が使用できるのに対して、「後(あと)」の使用は制限されている。例えば、「屋后有條河」という中国語の表現における「後(hou)」は、「家の後(あと)に川がある」のように、そのまま日本語の「後(あと)」と訳すと不自然になる。

第二に、トラジェクターがランドマークの後部の一部にある場合、「後(あと)」の使用が制限される。例えば、「婆姨坐在車後, 漸行漸遠 (うしろに妻を乗せてしだいに遠ざかっていった)」という表現における「後(hou)」は、日本語の「後(あと)」ではなく「うしろ」と対応するのが一般的である。

第三に、「後(あと)」の「余地・残留」という用法は、「後(hou)」との対応が困難である。例えば、「後(あと)3キロ」における「後(あと)」は、「後(hou)」との対応が難しい。

そして、本章では、日本語の「後(あと)」と中国語の「後(hou)」の時間的な意味についても考察した。「後(あと)」と「後(hou)」とは、両者のいずれも二種類の Later、すなわち現在・発話時に関与する Later と関与しない Later として言語化する機能を持っている。しかし、次のような相違点も見られ、日本語の「後(あと)」は、「残りの時間」という用法を持っているのに対して、「後(hou)」の使用は制限されている。例えば、「後数年で終わる」における「後(あと)」は、「後(hou)」による対応が比較的困難だ、ということである。中国語の場合では、「後(あと)」の「残りの時間」の意味合いが、日本語の「まだ」に当たる「還(hai)」や「残る」に当たる「剩(sheng)」といった表現を通して言語化されている。このような非対応の現象がなぜ日中両言語で生じたのかについて、本章では、「後(hou)」が「後(あと)」のような余地・残留という空間的な用法を持たないためと分析した。

終章

本論文では、序章を踏まえ、第1章から第4章まででは、「上(うえ)」と「上(shang)」、「下(した)」と「下(xia)」、「前(まえ)」・「先(さき)」と「前(qian)」、「後(あと)」と「後(hou)」という日中両言語における上下軸および前後軸の空間辞の意味と機能について、認知言語学の理論の枠組みに基づいて論じてきた。

本論文の終わりに、各章の内容をまとめたうえで、この論文によって明らかになったことと今後の課題について述べることにする。

1. 本論文で明らかになったこと

本論文で明らかになったことを章ごとにまとめると以下の1.1節～1.4節のようになる。

1.1 「上(うえ)」と「上(shang)」について

第1章では、日本語の「上(うえ)」と中国語の「上(shang)」という2つの上下軸における空間辞の意味と機能を記述したうえで比較を行った。以下では、この第1章の内容を①空間的な意味に関する考察、②語彙的な意味拡張に関する考察、③機能拡張に関する考察という3つの部分に分けて概観する。

第一に、「上(うえ)」と「上(shang)」との空間的な意味の異同を次のようにまとめることができる。具体的に言えば、現代日本語における「上(うえ)」と現代中国語における「上(shang)」は、トラジェクターがランドマークより高い所に位置している。すなわち高所という空間的な意味を有している。「上(うえ)」と「上(shang)」の空間的な意味を、本論文では、さらに「接触ありの高所」と「接触なしの高所」という2つの用法に分けて詳しく記述した。

しかし、「上(うえ)」と「上(shang)」の空間的な意味は、決してすべてが同様であるとは言えない。「上(うえ)」と「上(shang)」との相違点は語源からも反映され、異なっている。「上(うえ)」の語源は、『岩波古語辞典』でも記述されているように、本来モノの外側の表面という空間的な位置関係を示す表現であり、ウラと対義的な関係にあった。ただし、この用法は、『日本国語大辞典』の記載によると、中世頃から「上(うえ)」とウラとの対義関係が衰退しはじめた。これに対して、中国語の「上(shang)」は、甲骨文字では「二」のように書かれていたことからわかるとおり、トラジェクターがランドマークより高いところに位置し、そしてトラジェクターとランドマークとが接触していない、という空間的な位置関係を示す表現である。

現代日本語でも用例は多くないが、「下着の上に着る」といった例からわかるように、「上(うえ)」がウラと対義的な関係にあり、オモテの意味で用いられる場合もある。このようなモノの外側を示す「上(うえ)」は、本論文では、「物体の外側」と呼ぶことにした。一方、本論文の分析によると、トラジェクターがランドマークの外側に位置しているという空間的な関係は、中国語では、「上(shang)」による言語化が困難である。

第二に、「上(うえ)」と「上(shang)」との語彙的な意味拡張の分析結果を示せば、次の表 5-1 のようになる。Lakoff and Johnson (1980)では、英語では上方を示す表現が、メタファーを介して、多くの場合に好ましい状態、社会におけるより優勢の地位、順番が先のほうといった非空間的な意味を示すことができると指摘している。英語と同様に、日本語の「上(うえ)」と中国語の「上(shang)」も、上方という空間的な概念を示す空間辞として、「優れる」、「高い地位」、「数量が多い」という3つの意味を有しており、共通している。

意味項目	「上(うえ)」	「上(shang)」	拡張プロセス
①優れる	技術は彼の方が上だ。	他的技術水平在我之上。	メタファー(トラジェクターがランドマークより高いという空間的なシーンからの拡張)
②高い地位	上に立つ者	居人之上者	
③数量が多い	彼の収入は私より上だ。	他的收入在我之上。	
④表向き	立春は暦の上での春です。	—	メタファー(「上(うえ)」の「物体の外側」という空間的なシーンからの拡張)
⑤順序	—	「上回」、「上次」、「上世紀」、「上週」	メタファー(垂直軸の位置関係から時間的な尺度への拡張)

表 5-1 「上(うえ)」と「上(shang)」の非空間的な意味の拡張

しかし、「上(うえ)」と「上(shang)」との非空間的な意味について、次の2つのところで相違している。「上(うえ)」には「物体の外側」という空間的な意味に基づき、「表向き」という拡張的な意味もある。例えば、「立春は暦の上での春です」という文における「上(うえ)」は、「表向き」という意味で用いられ、英語の *ostensibly* または *superficially* に当たる。しかし、中国語の「上(shang)」は、外観のみあり内実なしという「表向き」の意味を示すことができない。これは、そもそも「上(shang)」が、「上(うえ)」のようにモノの外側を言語化するのが容易ではないからである。

また、「上(shang)」は、「順序」という非空間的な意味も有している。「上回」、「上次」、「上世紀」、「上週」のような表現における「上(shang)」は、いずれも順序として早いという意味を示している。しかし、「上(うえ)」は、このような順序の意味を言語化するのが困難である。日本語では「回」、「次」、「世紀」、「週」といった言葉もあるが、「上(うえ)」と共起する場合、いずれも容認しがたい表現となる。

第三に、「上(うえ)」と「上(shang)」との機能拡張について分析した。「上(うえ)」と「上(shang)」は、「接触ありの高所」という空間的なシーンから、他の機能を持つようになったということである。

ただし、両言語とも「接触ありの高所」からの拡張とは言え、拡張のプロセス及び拡張の結果は大きく異なっている。「上(うえ)」の機能は、次の表 5-2 が示すようにメタファーによる拡張である。これに対して、「上(shang)」の機能は、表 5-3 が示すとおり主にメトニミーによる拡張である。

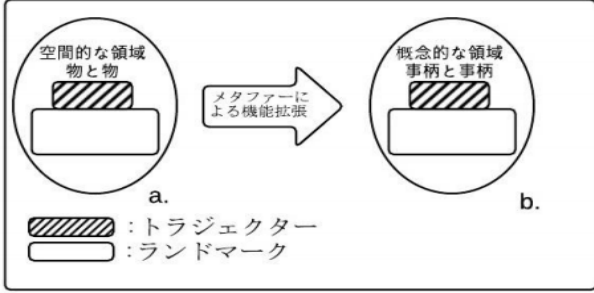
 <p>「上(うえ)」の機能拡張：物体と物体との関係から、出来事と出来事との関係へ拡張する。</p>	①前提・継起	危険を承知のうえで、けが人の救助を行った。
	②領域・側面	詩精神の位相を再検討するうえでも重要な文献である。
	③添加関係	花子は美人のうえに、成績も優秀だ。
	④因果関係	契約を結ぶうえは、条件を慎重に検討すべきである。

表 5-2 「上(うえ)」の機能拡張

具体的に言えば、日本語の「上(うえ)」の場合では、「接触ありの高所」というモノとモノとの空間的な位置関係が、メタファーによる拡張で、事態と事態との関係を示すようになっている。つまり、メタファーによって、出来事を物体として捉えるという種類の拡張である。このようなメタファーを介する種類の拡張を通して、「上(うえ)」は、「に」、「で」、「は」といった格助詞あるいは取り立て助詞を加える際に、①前提・継起（「危険を承知のうえで、けが人の救助を行った」）、②領域・側面（「詩精神の位相を再検討するうえでも重要な文献である」）、③添加関係（「花子は美人のうえに、成績も優秀だ」）、④因果関係（「契約を結ぶうえは、条件を慎重に検討すべきである」）という4つの事態と事態との抽象的な関係を言語化している。

一方、中国語の「上(shang)」の場合では、「接触ありの高所」の空間的な用法に基づき、メトニミーによる拡張で、名詞に場所性を与え、すなわち「場所化」という機能を持つようになっている。例えば、「上(shang)」は、黒板と黒板に書かれた文字、天井面と吊り下げ照明、乗り物と乗客との位置関係を言語化できる。

「上(shang)」の場所化の機能について、すでに一部の先行研究で論じられているが、本論文では、認知言語学の枠組みに基づき、なぜ「上(shang)」がこのような機能を持つようになったのかについて分析した。

名詞の場所性というのは、移動や存在する位置を示す性質である。例えば、英語の *John went to Mary.* という文における *Mary* が場所性を有する名詞であり、*Mary* という人が位置している場所を意味している。しかし、日本語や中国語の場合では、*Mary* が場所性を有し

ておらず、「?John は Mary に行った。 / ?John 去了 Mary。」の容認度が非常に低く、Mary の後に「ところ」または「那兒」といった場所を示す表現を付け加えなければならない。「John は Mary のところに行った。」が自然な表現となり、このような非場所名詞を場所名詞にする過程が場所化である。

「上(shang)」の機能が拡張する際は、主に表 5-3 が示すとおり、空間の隣接性に基づき、部分を全体で示すメトニミーと、時間的な隣接性に基づき、一方の状況がもう一方の状況を示すメトニミー、という2種類のメトニミーが関わっている。このような拡張プロセスを介して、「上(shang)」は、本来のトラジェクターとランドマークとが重力軸に沿って並んでいなくても構わず、壁のような垂直面、天井面、乗り物の内部、抽象的な範囲といった場合でも、場所化の機能を果たすようになっている。

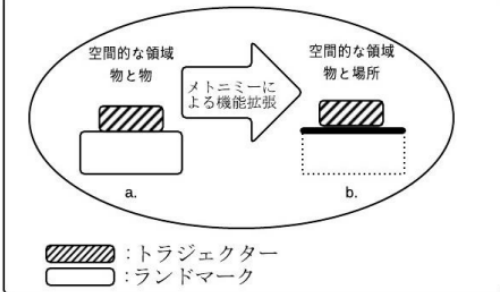
 <p>「上(shang)」の機能拡張：物体と物体との位置関係から、物体と場所との存在関係へ拡張する。この拡張のプロセスにおいては、全部で部分を示し、時間的な隣接性に基づき、一方の状況がもう一方の状況を示すという2種類のメトニミーが関与している。</p>	①垂直面の場所化	蜘蛛在墙上。 (クモが壁にいる。)
	②天井面の場所化	天花板上有一隻蜘蛛。 (天井に一匹のクモがいる。)
	③乗り物の場所化	火車上有小偷。 (汽車にはすりがある。)
	④行為の存在する所の場所化	舞會上一起跳過舞，頗為熟識。 (ダンスパーティーで一緒に踊ったこともあり、かなりよく知っている。)

表 5-3 「上(shang)」の機能拡張

詳しく言えば、中国語の「上(shang)」は、①垂直面の場所化（「蜘蛛在墙上（クモが壁にいる）」）、②天井面の場所化（「天花板上有一隻蜘蛛（天井に一匹のクモがいる）」）、③乗り物の場所化（「火車上有小偷（汽車にはすりがある）」）、④行為の存在する所の場所化（「舞會上一起跳過舞，頗為熟識。（ダンスパーティーで一緒に踊ったこともあり、かなりよく知っている。）」）という4つのタイプの場所化機能を有している。「上(うえ)」の非空間的な機能と「上(shang)」の非空間的な機能は、大きく異なっており、互いの対応が非常に困難である。

1.2 「下(した)」と「下(xia)」について

第2章では、日本語の「下(した)」と中国語の「下(xia)」という2つの上下軸における空間辞の意味と機能を記述したうえで比較を行った。以下では、この第2章の内容を①空間的な意味に関する考察、②語彙的な意味に関する考察、③機能に関する考察という3つの部分に分けて概観する。

第一に、日本語の「下(した)」と中国語の「下(xia)」の空間的な意味の異同は次のとおりである。日本語の「下(した)」は、①「下方の用法」、②「下部の用法」、③「内部の用法」という3つの空間的な意味を持っている。これに対して、中国語の「下(xia)」には、①「下方の用法」、②「下部の用法」、③「基部の用法」という3つの空間的な意味がある。

「下方の用法」の場合では、トラジェクターは、ランドマークの位置より低いところにある。本論文では、この「下方の用法」に関しては、「下(した)」と「下(xia)」が対応していると分析した。例えば、「ガラス製看板の下」と「玻璃燈匾下」、または、「枕の下」と「枕下」における「下(した)」と「下(xia)」によって示されている空間的な位置関係は、基本的には一致していると考えられる。

「下部の用法」の場合では、ランドマークとなるのが山やビルのような高い参照物に限り、トラジェクターがその低いところに位置している。本論文では、「下(した)」の「下部の用法」と「下(xia)」の「下部の用法」とは対応すると分析した。例えば、「山の下には寺が幾つか集まっている」における「下(した)」と「山下叢集着一些廟宇」における「下(xia)」の意味は同様である。

日本語の「下(した)」と中国語の「下(xia)」との空間的な意味の相違点は、主に次の2点がある。「下(した)」は図5-1が示すように、トラジェクターがランドマークの内部にあるという「内部の用法」を有している。「下(xia)」がこのような用法を言語化するのは容易なことではない。「背広の下にセーターを着る」や「下着」や「靴下」といった表現における「下(した)」は、いずれも「内部の用法」で用いられている。このような「内部の用法」は、中国語では、「下(xia)」の代わりに、通常「裡(li)」や「内(nei)」といった日本語の「うら」や「なか」に当たる表現によって言語化されている。

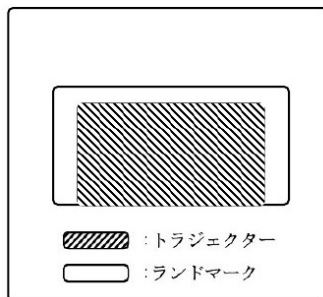


図 5-1 「下(した)」の「内部の用法」

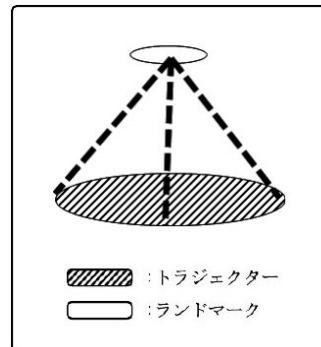


図 5-2 「下(xia)」の「基部の用法」

「下(xia)」は、図 5-2 が示すように、トラジェクターがランドマークの直下を中心とする周辺に、すなわちランドマークの影響範囲にあるという「基部の用法」を有する。しかし、日本語の場合では「基部の用法」は、漢字の綴り方は同様であるが、「下(した)」ではなく、「下(もと)」によって示すのが、一般的である。例えば、「燈下」と「太陽下」における中国語の「下(xia)」は、それぞれ「灯りの下(もと)」と「太陽の下(もと)」と訳され、「下(した)」の代わりに「下(もと)」と対応している。

第二に、「下(した)」と「下(xia)」との語彙的な意味拡張についての分析を示せば、次のようになる。Lakoff and Johnson (1980) によれば、英語では下方を示す表現の多くは、メタファーを介して、悲しみ、低い社会的な位置、悪といった語彙的な意味を担っている。同様に、「下(した)」と「下(xia)」は、下方という空間的な概念を示す空間辞として、「数量が少ない」、「劣る」、「低い地位」という三つの意味を有しており、共通している。ただし、中国語の「下(xia)」は、ある期間、期日より後であり、またはある出来事の発生がもう一方の出来事の発生より後であるという意味を言語化でき、すなわち「順序」という用法を有するが、このような場合では「下(した)」の使用が制限されている。例えば、「下次(次回)」、「下世紀(次の世紀)」のような中国語の表現における「下(xia)」は、「下(した)」による対応が困難である。

意味項目	「下(した)」	「下(xia)」	拡張プロセス
①数量が少ない	農民の平均収入は、省の一人当たりの平均収入より下である。	農民人均收入也在全省平均數之下。	メタファー(トラジェクターがランドマークより低いという空間的なシーンからの拡張)
②劣る	私の責任感と使命感は、君より下なんてあるわけがないと思う。	任感和使命感，我敢說我決不在你之下。	
③低い地位	阿Qの目からは、ヒゲの王よりもう一段下の地位におかれていた。	在阿Q的眼睛裡，位置是在王胡之下的。	
④順序	—	「下回」、「下次」、「下个世紀」、「下週」	メタファー(垂直軸の位置関係から時間的な尺度への拡張)

表 5-4 「下(した)」と「下(xia)」との非空間的な意味の拡張

第三に、「下(した)」と「下(xia)」の機能拡張は大きく異なっている。両者の相違点を示せば、次のようになる。

「下(した)」は、「内部の用法」という空間的な意味に基づき、＜裏/表＞のスキーマを機

能拡張の動機付けにして、メタファーを通して、「予備行動」という機能を持つようになる。

「予備行動」とは、当事者が、正式な場面での行動を成功させるために、公衆や観衆の目から離れた裏という領域、すなわち当事者の個人的な領域で、必要な物や態度や環境を整えるという意味を示す機能のことである。例えば、「下調べ」、「下打ち合わせ」、「下稽古」における「下(した)」は、「予備行動」の用法に当たる。一方、中国語の「下(xia)」は、「予備行動」の意味を示す機能で用いられる「下(した)」との対応が困難である。

「下(xia)」は、「基部の用法」という空間的な意味に基づき、「メトニミーからのメタファー」というプロセスを介して、「影響」、「支配」、「情動による行為」という三つの意味を示す機能を担うようになった。

「監視下(監視のもと)」と「注視下(注視のもと)」における「下(xia)」は、「影響」を示す典型的な例である。この場合の「下(xia)」は、トラジェクターがランドマークの影響範囲にあり、視線によって影響されている。

また、「下(xia)」は「法律」、「原則」、「方針」、「信念」といった類の抽象名詞と共通し、「支配」という意味を示す機能を有する。例えば、「原則下(原則のもと)」と「方針下(方針のもと)」における「下(xia)」は、「支配」を言語化する代表的な例である。「法律」、「原則」、「方針」、「大義名分」といった表現の共通点は、いずれも、人の行動や思想を一定の手段で制限したり、強制したりする効力を持っているということである。

	「下(xia)」	「下(した)」	もと	under
①影響	監視下 注視下	—	監視のもと 観察のもと	under the surveillance under the observation
②支配	方針下 現行法律下	—	方針のもと 現行法のもと	under the policies under the current law
③情動による行為	悲憤下 絶望下	—	—	—

表 5-5 「下(xia)」・「下(した)」・もと・under の比較

上記の「下(xia)」の「影響」と「支配」という二つの意味を示す機能は、日本語の「下(した)」では言語化できないが、「もと」による言語化が可能である。このような場合では表 5-5 から分かるように、「下(xia)」は、「下(した)」と対応できないが、「もと」及び英語の under と対応している。

しかし、「下(xia)」の「情動による行為」という用法は、「下(した)」だけでなく、「もと」及び under との対応も困難である。「下(xia)」の「情動による行為」とは、「憤怒(いかり)」、「失望(失望)」、「慌亂(焦り)」といった急に引き起こされた感情を表す名詞と共に、感情の影響を受け、ついに何かの行為をしたという用法のことである。例えば、「上司在憤怒

下將他解僱了」という文は、上司があまりにも怒って、遂に彼を解雇したという意味である。このような文における「下(xia)」は、「下(した)」あるいは「もと」との対応が非常に困難である。

1.3 「前(まえ)」・「先(さき)」と「前(qian)」について

第3章では、日本語の「前(まえ)」・「先(さき)」と中国語の「前(qian)」という3つの前後軸における空間辞の意味と機能を記述したうえで比較を行った。以下では、この第3章の内容を①空間的な意味に関する考察、②時間メタファーに関する再検討、③時間的な意味に関する考察という3つの部分に分けて概観する。

第一に、「前(まえ)」と「前(qian)」、「前(まえ)」と「先(さき)」との空間的な意味の異同を示せば、次のようになる。前方という空間的な位置関係は、同方向的な方略と対峙的な方略という二つの捉え方がある。日本語の「前(まえ)」と中国語の「前(qian)」は、前後軸が身体・生物の形状に内在する場合、前後軸が機能によって決められる場合、参照物と対照物のいずれも静止している場合では、通常対峙的な方略に基づき、トラジェクターがランドマークの前方にあるという空間的な関係を言語化できる。しかし、移動を伴う場面と移動の傾向がある場面では、「前(まえ)」と「前(qian)」との対応が困難となる。例えば、「往前走不通了」という文における「前(qian)」は、「前(まえ)」ではなく「先(さき)」に対応し、「この前通り抜けできません」ではなく、「この先通り抜けできません」と訳されるほうが自然である。

例えば、図5-3で示されているとおり、移動するまたは移動する傾向を持つ観察者が白い立方体をランドマークにして、トラジェクターの黒いボールとの位置を言語化する際に、「先(さき)」による言語化は可能であるが、「前(まえ)」の使用は制限されている。この場面の位置関係について、「黒いボールが立方体の先にある」が言えるのに対して、「黒いボールが立方体の前にある」は容認しがたい文となる。

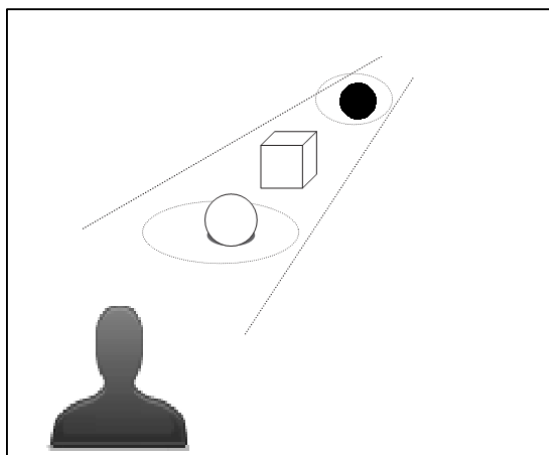


図 5-3

日本語では、前方を言語化する際に、「先(さき)」がよく使用される。「先(さき)」の意味構造についてはすでに多くの先行研究で論じられている。本論文では、「先(さき)」の空間辞としての「移動性」と「方向性」という二つの特徴を、スキーマの複合と変換という概念を取り入れ、改めて説明したうえで、「先(さき)」のスキーマを提案した。そして、スキーマの背景化という現象に基づき、「行先」、「勤め先」、「得意先」といった表現における「先(さき)」の「位置を示す役割」という空間的な機能を分析した。移動を伴う場合と移動の傾向がある場合では、前方を言語化する際に、中国語の「前(qian)」と日本語の「先(さき)」とは一致している。しかし、「前(qian)」は、「先(さき)」のような「位置を示す役割」を持っておらず、「行先」、「勤め先」、「得意先」といった表現における「先(さき)」との対応は困難である。

第二に、時間メタファーに対する再検討の結果を示せば、次のようになる。多くの本来空間的な意味を示す表現は、時間メタファーを介して、時間的な意味を持つようになることされている。本論文では、「前(まえ)」、「先(さき)」、「前(qian)」の時間的な意味を分析するにあたって、主体性および主体性の変化という概念を導入して、時間メタファーを新たに分類した。

時間の種類は McTaggart (1908)によると、A シリーズの時間概念 (過去・現在・未来) と B シリーズの時間概念 (Earlier・Later) という二種類に大別している。Lakoff and Johson (1980, 1999) は、A、B シリーズ時間概念の相違を区別せず、時間メタファーを二分している。これに対して、Moore (2001, 2014) は、A、B シリーズの時間概念の相違を区別して、この2種類の時間概念が共存しないという立場から、時間メタファーを三分している。本論文は、A、B シリーズの時間概念の相違を区別しながら、発話者の主体性の変化という考えを加味して、A、B シリーズの時間概念が共起できる時間メタファーを取り上げた。

第三に、「前(まえ)」と「前(qian)」、「先(さき)」と「前(qian)」の時間的な意味、及びその異同を示せば、次のようになる。

日本語の「前(まえ)」と中国語の「前(qian)」は、未来、過去、発話時と関わる Earlier、発話時の状況と関わらない Earlier という4つの時間的な意味を有している。しかし、「前(まえ)」が、「直」または「この」と共起して「直前」や「この前」のような複合表現で用いられる場合、中国語では、「前(qian)」の代わりに、「上次」・「上回」といった上下軸を用いた複合表現と対応することになる。また、本論文では、「前(qian)」の「未来の期限」という一種の時間的な用法を提起した。この場合では、「前(qian)」は、「前(まえ)」の代わりに、「までに」と対応するのが一般的である。例えば、「25日前肯定回去」は、「25日前に必ず帰る」ではなく、「25日までに必ず帰る」と訳するのが通常である。

日本語の「先(さき)」と中国語の「前(qian)」は、未来、過去、発話時と関わる Earlier、発話時の状況と関わらない Earlier という4つの時間的な意味を有している。しかし、「過去の Earlier」という一種の時間的な意味を言語化できるのは、「前(qian)」のみである。例えば、「吃飯前説的那様、明天開派對」という文は、「食事の先に話したように、明日パーティーを開きます」ではなく、「食事の前に話したように、明日パーティーを開きます」と訳すべ

きだとされている。つまり、発話時を参照し、過去に生じた出来事と出来事との前後関係は、「前(qian)」によって言語化できるのに対して、「先(さき)」のみでは言語化できないということである。

「先(さき)」と「前(qian)」とのもう1つの相違点は、過去の意味を示す際に、「先(さき)」が「前(qian)」と異なり、「近過去」しか表現できないという点である。つまり、「先(さき)」は、発話時よりかなり遠い時点までの過去を言語化できないということである。

また、日本語の「先(さき)」は、「修論諮問は、修論提出のまだその先だよ」や「応仁の乱の先に戦国時代が待っている」といった例から分かるように、時間メタファーを介して、Later という時間的な概念を示す機能を持っている。しかし、中国語の場合では、「前(qian)」による Later の言語化は難しい。

1.4 「後(あと)」と「後(hou)」について

第4章では、日本語の「後(あと)」と中国語の「後(hou)」という2つの前後軸における空間辞の意味と機能を記述したうえで比較を行った。以下では、「後(あと)」と「後(hou)」の空間的な意味と時間的な意味との異同をまとめる。

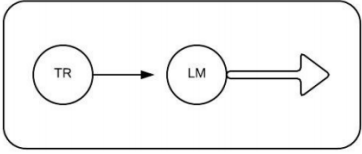
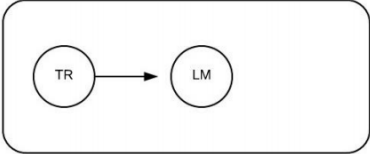
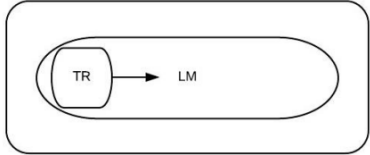
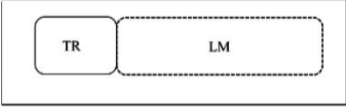
	意味・機能	「後(あと)」	「後(hou)」
空間的な意味	「後方」		
		「後(あと)」のランドマークには移動という特徴がある。 「後(hou)」のランドマークには移動という制限がない。	
	「後部」	—	
		「後(あと)」は、トラジェクターがランドマークの一部で、ランドマークの後ろ側にあるという「後部」の用法を持っていない。	
	「余地・残留」		—
		「後(hou)」は、「後(あと)」のように、残された、あるいは、余った容積や距離や分量を示す用法を持っていない。	
TR : トラジェクター LM : ランドマーク			

表 5-6 「後(あと)」と「後(hou)」の各意味・機能

表 5-6 に示されているとおりに、日本語の「後(あと)」と中国語の「後(hou)」のいずれも、トラジェクターがランドマークの後方に位置しているという空間的な意味を有する。しかし、日本語の「後(あと)」によって言語化される後方は、ダイナミックな後方である。つまり、トラジェクターが移動するランドマークの後方に位置している場面に限って、「後(あと)」による言語化が可能であるということである。一方、中国語の「後(hou)」は、このような制限がなく、トラジェクターが静止しているランドマークの後方に位置しているという空間的な位置関係も言語化できる。例えば、「小孩子畏縮地躲在母親身後（子供はおずおずと母親のうしろに隠れている）」という中国語の表現における「後(hou)」は、そのまま日本語の「後(あと)」と訳すと不自然になってしまう。

中国語の「後(hou)」は、トラジェクターがランドマークの一部として、ランドマークの後ろ側にあるという「後部」の用法を持っている。しかし、日本語の「後(あと)」は、「後部」という空間的な位置関係を示すのが困難である。「後部」という空間的な位置関係は、日本語では、「後(あと)」ではなく、「うしろ」で言語化するのが一般的である。例えば、「劇場のうしろに座れる」が自然であるのに対して、「劇場の後(あと)に座れる」の容認度は比較的低い。

日本語の「後(あと)」は、「余地・残留」という意味、すなわち残された、あるいは、余った容積や距離や分量を示す用法を持っている。例えば、「後 3 キロ」や「後 3 人が座れる」という表現における「後(あと)」は、この「残留・余地」の用法に当たる。しかし、「後(hou)」は、「残留・余地」という用法を持っておらず、中国語では他の表現によって言語化されている。

日本語の「後(あと)」と中国語の「後(hou)」は、現在または発話時の状況に関わる場合の Later と、現在・発話時を参照しない場合の Later という 2 つの時間的な意味を示す機能を持っている。しかし、「後(あと)」は、さらに「残りの時間」という用法を有する。この「残りの時間」という用法の背後には、「後方」と「余地・残留」という 2 つの空間的な意味が、拡張の動機付けとして機能している。

一方、中国語の「後(hou)」は、「余地・残留」の空間的な用法を持っていないため、「残りの時間」の「後(あと)」との対応が非常に困難となっている。例えば、「後数時間」、「後 3 ヶ月しか日本にいません」といた表現における「後(あと)」は、中国語に訳す際に、「後(hou)」ではなく、通常「有」や「剩」といた日本語の「ある」や「残る」に対応する表現によって表される。

2. 今後の課題

本論文では、認知言語学の枠組みに基づき、日本語と中国語における上下軸と前後軸の空間辞を比較してきた。本研究の考察によって、「上(shang)」と「上(うえ)」、「下(した)」と「下(xia)」、「前(まえ)・先(さき)」と「前(qian)」、「後(あと)」と「後(hou)」という 4 種類の用法を分析して、それぞれの共通点と相違点を明らかにした。

本論文は、日中両言語の空間辞の異同に関して、従来の多くの先行研究より詳しく比較してきたが、引き続き検討すべき点もある。今後の課題として、以下の3点を挙げる。

第一に、本論文の主な研究対象は、日本語と中国語における上下軸と前後軸の空間辞であるが、上方、下方、前方、後方という空間的な概念が両言語ではどのように言語化されているかをより詳細に比較するには、研究の対象をさらに拡大しなければならない。つまり、空間辞に限らず、「昇る」、「沈める」、「進める」、「升(sheng)」、「沉(chen)」、「進(jin)」といった上下軸または前後軸での移動を示す動詞の空間的な意味に対しても、認知言語学の枠組みに基づく分析が必要である。また、現代中国語では、空間辞は「上(shang)」、「下(xia)」、「前(qian)」、「後(hou)」のような単音節の種類にのみならず、単音節の空間辞がさらに「頭(tou)」、「邊(bian)」、「面(mian)」と複合して、「上頭(shang tou)」、「上邊(shang bian)」、「上面(shang mian)」となるような多音節の空間辞も存在している。中国語における単音節の空間辞と多音節の空間辞の違いをどのように記述するか、また、こうした中国語の空間辞を日本語における大和言葉の空間辞とどのように比較するかといった問題について、今後は更なる分析が必要である。

第二に、本研究は、前後軸の空間辞の時間的な意味を分析する際に従来の Lakoff and Johnson 及び Moore の時間メタファー理論を踏まえたが、発話者の主体性を導入して、A、B シリーズ時間概念が共起できるタイプの時間メタファーを提案した。しかし、A シリーズの時間概念と B シリーズの時間概念が具体的にどのように関わっているのか、また、本論文で提案した時間メタファーの分類が日中両言語に限らず、他の言語における空間辞の時間的な意味の記述にも適用できるかどうかといった問題は、まだ課題として残されている。より厳密な精査とより広範な調査が必要である。

第三に、実際には空間辞の習得は、日中両言語の空間辞が同じ漢字で綴られているため、一見すると習得しやすい表現のように見える。しかし、空間辞の習得は日本語の学習者にとっても、中国語の学習者にとっても、必ずしも容易なことでは言えない。今回の研究を通して、得られた分析の結果を、日本語教育および中国語教育の場にどのように活用するかについては、さらに検証を進めなければならない。

これらの問題点を今後の課題としたい。

参考文献

日本語文献

- 秋元美晴(1994)「談話における漢語系接尾辞『-上(じょう)』の機能について」『恵泉女学園大学人文学部紀要』6, 1-16.
- 荒川洋平(2011)『日本語多義語学習辞典』アルク.
- 有馬道子(2001)『パースの思想：記号論と認知言語学』岩波書店.
- 有光奈美「英語における前後の空間認知と行為の実現性」『東洋大学人間科学総合研究所紀要』8, 87-101.
- 安在珉(2012)「身体名詞の意味拡張による空間的用法について：日本語『脇』が表す空間の曖昧性を中心に」『言語科学論集』18, 67-82.
- 安在珉(2014a)「日本語の空間名詞『上・下』が表す空間について」『日本認知言語学会論文集』14, 336-348.
- 安在珉(2014b)「日本語の空間名詞『前・後ろ』が表す空間について：指示の曖昧性および上下軸との関係性」『言語科学論集』20, 1-14.
- 池上嘉彦(2002)「コトの出来る場としての自己(1)<モノ>と<コト>、そして<トコロ>-日本語における<主観性>をめぐる」大修館書店『言語』31, 72-83.
- 池上嘉彦(2004)「言語における<主観性>と<主観性>の言語的指標(1)」ひつじ書房『認知言語学論考』4, 1-60.
- 池上嘉彦(2005)「言語における<主観性>と<主観性>の言語的指標(2)」ひつじ書房『認知言語学論考』5, 1-49.
- 池上嘉彦(2006)「日本語と日本語らしさ：外からの視点・内からの視点」『昭和女子大学大学院言語教育・コミュニケーション研究』1, 1-15.
- 一色舞子(2011)「日本語の補助動詞『-てしまう』の文法化：主観化、間主観化を中心に」『日本研究』15, 201-221.
- 稲葉みどり(2004)「中国語を母語とする日本語学習者の空間表現『上・下・中』と助数詞の過剰使用」『愛知教育大学教育実践総合センター紀要』7, 27-34.
- 岩崎真哉(2010)「メタファーとメトニミーの認知的分析：時間表現を中心に」『大阪工業大学紀要(人文社会篇)』55, 1-22.
- 上野誠司(2007)『日本語における空間表現と移動表現の概念意味論的研究』(ひつじ書房研究叢書 第46巻) ひつじ書房.
- 碓井智子(2001)「空間認知表現と時間認知表現 日本語『マエ』と『サキ』の認知言語学的考察」京都大学修士論文.
- 碓井智子(2002a)「空間認知表現と時間認知表現 日本語『サキ』の認知言語学的考察」『日本認知言語学会論文集』2, 150-159.
- 碓井智子(2002b)「時間認知モデルー認知言語学的観点からの考察」『言語科学論集』8, 1-26.

- 碓井智子(2003)「空間から時間へー『アト』(跡・後)の認知的観点からの考察」『日本認知言語学会論文集』3, 63-73.
- Usui, Tomoko(2005) “Motivations and Constraints from Spatial Domain to Temporal Domain.” 『日本認知言語学会論文集』5, 263-271.
- 碓井智子(2006)「時間認知モデルー時間のメタファー理論」『日本認知言語学会論文集』6, 266-276.
- 王秀英(2012)「日本語の複合動詞『～こむ』類と中国語の複合動詞『～進/入』類との対照研究：認知意味論からのアプローチ」『言語科学論集』16, 73-84.
- 王軼群(2009)『空間表現の日中対照研究』(Frontier Series 日本語研究叢書23) くろしお出版.
- 大谷直輝(2009)「認知主体の視点と価値付与の反転-英語不変化詞 up-down、in-out、on-off を例にして」『日本認知言語学会論文集』9, 121-131.
- 大谷直輝(2013)「語彙の多義性を再考する：前置詞の意味と機能の連続性を中心に」『日本認知言語学会論文集』13, 108-120.
- 大橋浩(2013)「文法化」森雄一、高橋英光(編)『認知言語学基礎から最前線へ』くろしお出版, 155-180.
- 大野晋(1999)『岩波古語辞典』岩波書店.
- 大堀壽夫(2005)「日本語の文法化研究にあたって：概観と理論的課題(〈特集〉日本語における文法化・機能語化)」『日本語の研究』1, 1-17.
- 笠貫葉子(2002)「複合的比喩の認知的基盤」関西言語学会『KLS Proceedings』22, 105-114.
- 笠貫葉子(2013)「メタファー」森雄一、高橋英光(編)『認知言語学基礎から最前線へ』くろしお出版, 53-75.
- 片山晴一(2009)「日本語と英語の移動事象における経路」『東京外国語大学日本研究教育年報』13, 25-43.
- 韓 涛(2008)「中国語空間辞“上”の意味拡張及びその動機付けー中、日、英語空間辞の意味拡張におけるタイポロジー的特徴を試みる」『杏林大学院論文集』5, 67-92.
- 金善花(2014)「次元形容詞『高い』の意味体系に関する日中対照研究」『日本アジア研究：埼玉大学大学院文化科学研究科博士後期課程紀要』11, 165-181.
- 金容澤(2001)「韓国語と日本語における前・後を表す空間表現の文法化」『日本認知言語学会論文集』1, 77-87.
- 久島茂(1995)「〈物〉の〈境界面〉と〈形態的方向〉の意味的連関：『表・裏』『横』の意味分析」『國語學』183, 75-62.
- 久島茂(2001)『「物」と「場所」の対立：知覚語彙の意味体系』くろしお出版.
- 久島茂(2002)『「物」と「場所」の意味論：「大きい」とはどういうこと?』くろしお出版.
- 工藤真由美(1989)「現代日本語の従属文のテンスとアスペクト」『横浜国立大学人文紀要』36, 1-24.

- 工藤真由美(1992)「現代日本語の時間の従属複文」『横浜国立大学人文紀要』39, 169-192.
- 国広哲弥(1997)『理想の国語辞典』大修館書店.
- 国広哲弥(2006)『日本語の多義動詞(理想の国語辞典2)』大修館書店.
- 坂詰力治(2007)「形式名詞から接続助詞的用法へ『～うへ(上)は』を中心に」『文学論叢』81, 149-163.
- 篠原和子(2002)「空間的前後と時間概念の対応」『日本認知言語学会論文集』2, 243-246.
- 篠原和子(2008)「時間メタファーにおける『さき』の用法と直示的時間解釈」篠原和子・片岡邦好(編)『ことば・空間・身体』、ひつじ書房, 179-212.
- 篠原和子, 松中義大(2005)「日本語の空間語彙と参照枠についての実験的研究」『日本認知言語学会論文集』5, 471-481.
- 嶋田紀之(2009)「『V てみる』の多義性と文法化」『日本認知言語学会論文集』9, 132-142.
- 鐘勇, 井上奈良彦(2013)「日本語における上下メタファーの体系構成及びその特徴に関する一考察」『言語文化論究』30, 13-26.
- 徐蓮(2009)「日本語と中国語における〈深/浅〉の認知的対照研究」『第4回国際日本学コンソーシアム論文集』, 1-15.
- 徐蓮(2011)「日中同形多義語〈深/浅〉の意味構造対照分析」『日本認知言語学会論文集』11, 309-319.
- 白井清子(1995)「類聚名義抄の和訓『ノチ』をめぐって」『学習院大学上代文学研究』20, 15-23.
- 瀬戸賢一(1995)『空間のレトリック』海鳴社.
- 瀬戸賢一(1997a)『メタファー思考:意味と認識のしくみ』講談社.
- 瀬戸賢一(1997b)『認識のレトリック』海鳴社.
- 高尾享幸(2003)「メタファー表現の意味と概念化」松本曜(編)『認知意味論』大修館書店, 187-249.
- 高橋奈津美(2009)「現代日本語における空間相対名詞の修飾節についての試論」『言語学研究』28, 185-204.
- 高橋弥守彦(1989)「方位詞の用法について」『中国語学』236, 84-94.
- 田中寛(1999)「接続助詞化した形式名詞〈ウエ〉の意味と機能」『語学教育研究論叢』16, 145-165.
- 田中茂範・松本曜(1997)『空間と移動の表現』(日英語比較選書 第6巻)、研究社出版.
- 谷口一美(2005)『事態概念の記号化に関する認知言語学的研究』(ひつじ研究叢書) ひつじ書房.
- 丹保健一(2010)「時間名詞の特性に関する一考察-格助詞『に』との共起に注目して」『三重大学教育学部研究紀要』61, 39-47.
- 趙無忌(2014)「日本語の『前(まえ)』と中国語の『前(qian)』の空間的意味に関する研究:対時的方略と同方向的方略の視点から」『比較文化研究』113, 105-115.

- 趙無忌(2015)「イメージ・スキーマの事例化：『サキ』の多義構造を中心に」『日本認知言語学会論文集』15, 220-231.
- 張麟声(2001)『日本語教育のための誤用分析：中国語話者の母語干渉20例』スリーエーネットワーク.
- 陳瑞英(2014)「中国語の方位詞『上』と日本語の『うえ』の意味と機能について—空間的用法を中心に」*Polyglossia* 26, 79-90.
- 辻幸夫(2003)『認知言語学への招待』(シリーズ認知言語学入門 第1巻)大修館書店.
- 辻幸夫(2013)『新編 認知言語学キーワード事典』研究社.
- 鄭新爽(2015)「時間の概念化に関する日中対照研究：『先』の用法を例に」『日本認知言語学会論文集』15, 434-446.
- 寺崎知之(2010)「空間語彙と時間語彙への意味分化の考察：日本語の『サキ』の分析」『言語科学論集』16, 1-23.
- 寺崎知之(2010)「時間・空間語彙の関係性の認知言語学的考察—日本語の『間(アイダ)』の広がりを通して」『日本認知言語学会論文集』10, 524-534.
- 寺澤知美(2008)「現代中国語の方位詞『上』, 『里』について—空間を表す名詞を中心に」『多元文化』8, 257-268.
- 寺澤知美(2010)「現代中国語の方位詞『上, 下, 前, 後』の時間的用法について」『多元文化』10, 99-111.
- 中村芳久(2004)『認知文法論』(シリーズ認知言語学入門 第5巻)大修館書店.
- 仲本康一郎(2011)「メトニミー再考」『山梨大学教育人間科学部紀要』13, 302-320.
- 鍋島弘治朗(2002)「メタファーの身体的基盤について」『ことば工学研究会資料』12, 21-30.
- 鍋島弘治朗(2006)「論理と客観性・感性と主観性—イメージスキーマと主観化の観点から」『ことば工学研究会』22, 53-60.
- 鍋島弘治朗(2011)「主観性とメタファー：Sモード認知を中心に」『人工知能学会誌』26, 374-380.
- 鍋島弘治朗(2011)『日本語のメタファー』くろしお出版.
- 檜和千春(1997)「時間表現における『先』について」『Dynamis: ことばと文化』1, 59-67.
- 檜和千春(2005)「Front と Before について：空間から時間への意味の拡張を中心に」『鳥取環境大学紀要』3, 111-117.
- 西村義樹(2002)『認知言語学：事象構造』東京大学出版会.
- 根木英彦(2014)「空間から時間への意味拡張 日英対照：『さき』と ahead」『語学教育研究論叢』31, 201-214.
- 橋本修(1994)「上代・中古和文資料におけるノチ節のテンスとアスペクト」『文藝言語研究(言語篇)』26, 55-72.
- 長谷部亜子(2013)「多義語ウエの意味の分析：空間名詞・形式名詞・複合辞としてのウエ」『日本認知言語学会論文集』13, 63-75.

- 馬場俊臣(2005)「接続助詞的用法の複合辞『うえて、うえは、うえに、うえ』—統語的特徴の整理と各用法の関係を中心として」『北海道教育大学紀要(人文科学・社会科学編)』55, 27-42.
- 馬場俊臣(2006)「複合辞『うえて』について—特に動詞の基本形に接続する『うえて』の特徴」藤田保幸, 山崎誠(編)『複合辞研究の現在(研究叢書)』和泉書院, 41-60.
- 范喜春(2014)『日本語と中国語における数量表現の対照研究—形式と意味の観点から』宇都宮大学博士学位論文.
- ヒューマンアカデミー(2015)『日本語教育教科書 日本語教育能力検定試験合格問題集』翔泳社.
- 深田智, 仲本康一郎, 山梨正明(2008)『概念化と意味の世界: 認知意味論のアプローチ』(講座認知言語学のフロンティア 第3巻) 研究社.
- 方小贇(2011)「日本語と中国語における身体語彙慣用句の比較研究: 認知言語学の視点から見た『頭部』表現を中心に」宇都宮大学博士学位論文.
- 方允炯(2005)「現代日本語における『うえ』の意味・機能」『日語日文學研究』53, 177-192.
- 方允炯(2009)「現代日本語における『した』『もと』の意味と機能」『韓国日本語文学会学術発表大会論文集』7, 108-116.
- 方允炯(2013)「接続助辞化した『～うえて』の意味と機能—明治期と現代との用例比較を通じて」『日本言語文化』25, 207-223.
- 方美麗(2003)「方向の結びつき 日中対照分析」『外国語教育論集』(阿部軍治教授・外国語センター長 金原礼子教授退官記念号) 25, 175-185.
- 方美麗(2004a)「中国語と日本語の空間表現」『国文学解釈と鑑賞』69, 76-92.
- 方美麗(2004b)『「移動動詞」と空間表現: 統語論的な視点から見た日本語と中国語』白帝社.
- 本多啓(2011a)「言語に現れた主観性と間主観性: 生態心理学の観点から」『人工知能学会誌』26, 344-351.
- 本多啓(2011b)「時空間メタファーと視点—生態心理学の自己知覚論をふまえて」『ことば工学会』37, 77-86.
- 本多啓(2011c)「時空間メタファーの経験的基盤をめぐって」『神戸外大論叢』(和田四郎教授記念号)62, 33-56.
- 本多啓(2013)『知覚と行為の認知言語学: 『私』は自分の外にある』開拓社, 2013.
- 町田章(2012)「主観性と見えない参加者の可視化: 客体化の認知プロセス」『日本認知言語学会論文集』12, 246-258.
- 町田章(2013)「身体的経験者と観察者: ステージモデルの限界(ワークショップ 身体経験に基づいた文法研究の可能性)」『日本認知言語学会論文集』13, 661-666.
- 松井真人(2013)「英語と日本語における『完了は上』メタファーの経験的基盤について」『山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所報告』40, 15-24.

- 松中義大(2001)「接続助詞『うちに』の認知言語学的考察」『東京工芸大学芸術学部紀要』7, 41-49.
- 松本曜(2003)『認知意味論』(シリーズ認知言語学入門 第3巻)大修館書店.
- 丸尾誠(2004)「中国語の場所詞について:モノ・トコロという観点から」『言語文化論集』25, 151-166.
- 丸尾誠(2005)『現代中国語の空間移動表現に関する研究』 白帝社.
- 丸尾誠(2008)「現代中国語にみられる空間認識」大修館書店『言語』37, 64-69.
- 宮下博幸(2006)「文法化研究とは何か」『早稲田言語研究会会報』10, 20-47.
- 苗苺(2012)「中国語動詞『上』の意味カテゴリーと意味拡張のプロセスについて」*NEAR Conference Proceedings Working Papers* (北東アジア言語教育学会).
- 村松由起子(1993)「日本語の『まで』『までに』と中国語の『到』『以前』」『雲雀野:豊橋技術科学大学人文科学系紀要』15, 67-77.
- 村松由起子(1994)「『うちに』『まえに』『あいだに』『までに』について」『雲雀野:豊橋技術科学大学人文科学系紀要』16, 29-39.
- 村松由起子(1997)「順序を表す『～てから』と『～まえに』」『雲雀野:豊橋技術科学大学人文科学系紀要』19, 45-54.
- 望月満子(1987)「アトとノチの語義について:その史的推移」『国語学』日本語学会, 148, 1-15.
- 榎山洋介(2014)『日本語研究のための認知言語学』 研究社.
- 森田良行(1980)『基礎日本語』 角川書店.
- 森貞(2006)「『前に』の前の気になる用法:『しない前に』と『した前に』」『福井工業高等専門学校研究紀要』40, 1-8.
- 森雄一(2013)「メトニミーとシネクドキー」森雄一, 高橋英光(編)『認知言語学:基礎から最前線へ』くろしお出版, 79-100.
- 森山新(2008)『認知言語学から見た日本語格助詞の意味構造と習得:日本語教育に生かすために』(シリーズ言語学と言語教育 16) ひつじ書房.
- 山梨正明(2000)『認知言語学原理』 くろしお出版.
- 山梨正明(2007)『比喩と理解』 東京大学出版会.
- 山梨正明(2012)『認知意味論研究』 研究社.
- 吉村公宏(2003)『認知音韻・形態論』(シリーズ認知言語学入門 第2巻)大修館書店.
- 渡辺実(1995)「所と時の指定に関わる語の幾つか一意味論的に」『国語学』日本語学会, 181, 18-29.

英語文献

- Bender, A., G. Bennardo, & S. Beller. (2005) "Spatial frames of reference for temporal relations: A conceptual analysis in English, German, and Tongan." *Proceedings of the Twenty-Seventh Annual Conference of the Cognitive Science Society*. Lawrence Erlbaum Mahwah, 220-225.
- Bender, A., G. Bennardo, & S. Beller. (2010) "Temporal frames of reference: conceptual analysis and empirical evidence from German, English, Mandarin Chinese, and Tongan." *Journal of Cognition and Culture* 10, 283-307.
- Bender, A., & S. Beller. (2014) "Mapping spatial frames of reference onto time." *Cognition* 132.3, 342-382.
- Clark, E. (2003) "Languages and representations." In: *Language in Mind*, D. Gentner, & S. Meadow (eds.), MIT Press, 17-23.
- Clark, H. H. (1973) "Space, time, semantics and the child." In: *Cognitive Development and the Acquisition of Language*, T. E. Moore (ed.), Academic Press, 27-63.
- Clausner, T. C., & Croft, W. (1999) "Domains and image schemas." *Cognitive Linguistics* 10, 1-32.
- Evans, V. (2003) *The Structure of Time*, John Benjamin's Publications.
- Evans, V. (2005) "The meaning of time: polysemy, the lexicon and conceptual structure." *Journal of Linguistics*, 41(01), 33-75.
- Evans, V. (2013) *Language and Time: A Cognitive Linguistics Approach*, Cambridge University Press.
- Gardenfors, P. (2007) "Cognitive semantics and image schemas with embodied forces." In: *Advances in Consciousness Research*, J. M. Krois, M. Rosengren, A. Steidele, & D. Westerkamp (eds.), John Benjamins Publishing, 57-75.
- Goossens, L. (1995) "Metaphonymy: the interaction of metaphor and metonymy in expressions for linguistic action." In: *By Word of Mouth: Metaphor, Metonymy and Linguistic Action in a Cognitive Perspective*, John Benjamins Publishing, 159-174.
- Grady, J. E. (1997) "Theories are buildings revisited." *Cognitive Linguistics* 8(4), 267-290.
- Heine, B. (1989) "Adposition in African languages." *Linguistique Africaine*, 2, 77-127.
- Heine, B., U. Claudi., & F. Hünemeyer. (1991) *Grammaticalization: A Conceptual Framework*. University of Chicago Press.
- Heine, B., & T. Kuteva. (2002) *World Lexicon of Grammaticalization*, Cambridge University Press.
- Heine, B., & H. Narrog. (2010) *The Oxford Handbook of Linguistic Analysis*, Oxford University Press.
- Hill, C. (1978) "Linguistic Representation of Spatial and Temporal Orientation." *Proceedings of the 4th Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*, 524-538.
- Hill, C. (1982) "Up/down, front/back, left/right: A contrastive study of Hausa and English." In: *"Here and There": Cross-linguistic Studies on Deixis and Demonstration*, W. Jürgen, & K. Wolfgang (eds.), John Benjamins Publishing, 13-40.
- Kranjec, A. (2006) "Extending spatial frames of reference to temporal concepts." In: *Proceedings of*

- the 28th Annual Conference of the Cognitive Science Society. Mahwah, 447-452.
- Lakoff, G. (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things*, University of Chicago Press.
- Lakoff, G. (1990) "The invariance hypothesis: Is abstract reason based on image-schemas?" *Cognitive Linguistics* 1(1), 39-47.
- Lakoff, G. (1993) "The contemporary theory of metaphor." In: *Metaphor and Thought*, A. Orthony, (ed.), Cambridge University Press, 202-251.
- Lakoff, G. & M. Johnson. (1981) *Metaphors We Live By*, University of Chicago Press.
- Lakoff, G. & M. Johnson. (2003) *Metaphors We Live By (New Version)*, University of Chicago Press.
- Lakoff, G. & M. Johnson. (1999) *Philosophy in the Flesh : the Embodied Mind and Its Challenge to Western thought*, Basic Books.
- Langacker, R.W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar: Theoretical Prerequisites*, Stanford University Press.
- Langacker, R. W. (1999) *Grammar and Conceptualization*, Walter de Gruyter.
- Langacker, R. W. (2002) *Concept, Image, and Symbol*, Walter de Gruyter.
- Langacker, R.W. (2006) "Subjectification, grammaticization, and conceptual archetypes." In: *Subjectification: Various Paths to Subjectivity*, A. Athanasiadou, C. Canakis, & B. Cornillie, (eds.), Walter de Gruyter, 17-40.
- Langacker, R.W. (2008) *Cognitive Grammar: a Basic Introduction*, Oxford University Press. (確井智子, 大谷直輝, 木原恵美子, 児玉一宏, 中野研一郎, 深田智, 安原和也, 山梨正明訳 『認知文法論序説』, 2011年, 研究社)
- Levinson, S. C. (2003) *Space in Language and Cognition: Explorations in Cognitive Diversity*, Vol. 5. Cambridge University Press.
- Moore, K. E. (2000) *Spatial Experience and Temporal Metaphors in Wolof: Point of View, Conceptual Mapping, and Linguistic Practice*, PhD dissertation, University of California, Berkeley.
- Moore, K. E. (2006) "Space-to-time mappings and temporal concepts." *Cognitive Linguistics* 17(2), 199-244.
- Moore, K. E. (2014) *The Spatial Language of Time: Metaphor, Metonymy, and Frames of Reference*, John Benjamins Publishing Company.
- Núñez, R. (2013) "The tangle of space and time in human cognition." *Trends in Cognitive Sciences* 17(5), 220-229.
- Shi, W., & Y. Wu. (2014) "Which way to move: The evolution of motion expressions in Chinese." *Linguistics*, 52(5), 1237-1292
- Talmy, L. (1996) "Fictive motion in language and conception." In: *Language and Space*, P. Bloom, (ed.), MIT Press, 1-276.
- Talmy, L. (2000a) *Toward a Cognitive Semantics* (Vol. 1), MIT press.
- Talmy, L. (2000b) *Toward a Cognitive Semantics* (Vol. 2), MIT press.

- Tajima, Y., & N. Duffield.(2012) "Linguistic versus cultural relativity: On Japanese-Chinese differences in picture description and recall." *Cognitive Linguistics* 23(4), 675-709.
- Taylor, J. (2003) *Linguistic Categorization*, Oxford University Press.
- Tenbrink, T. (2007) *Space, Time, and the Use of Language: An Investigation of Relationships* (Vol.36). Walter de Gruyter.
- Turner, M. (1993) *Reading Minds: The Study of English in the Age of Cognitive Science*, Princeton University Press.
- Tyler, A., & V. Evans. (2003) *The Semantics of English Prepositions: Spatial Scenes, Embodied Meaning, and Cognition*, Cambridge University Press. (国広哲弥監訳, 木村哲也訳 『英語前置詞の意味論』, 2005年, 研究社)
- Yu, N. (1998) *The Contemporary Theory of Metaphor: A Perspective from Chinese*, John Benjamins Publishing.
- Yu, N. (2012) "The metaphorical orientation of time in Chinese." *Journal of Pragmatics*, 44(10), 1335-1354.

中国語文献

- 蔡淑美 (2012) 「現代漢語“前，後”時間指向的認知視角 認知機制及句法語義限制」『當代語言學』第14輯，129-144。
- 陳茵珮 (2009) 『現代漢語“下”的語義分析』國立臺灣師範大學。
- 蔡言勝 (2008) 『「世說新語」方位詞研究』南開大學出版社。
- 陳朝陽 (2013) 「跨文化視角下的漢日時間隱喻對比研究 ——以“前”為例」『湖北第二師範學院學報』第30期，10-12。
- 方經民 (2004) 「現代漢語方位成分的分化和語法化」『世界漢語教學』第2期，5-15。
- 範繼花 (2006) 「方位概念“前/後”在漢語中的隱喻運用」『北京航空航天大學學報:社會科學版』第19期，66-69。
- 範素琴 (2010) 「方位詞“上”表徵的空間圖式及空間意義」『解放軍外國語學院學報』第5期，12-17。
- 馮赫 (2010) 「元刊雜劇與蒙式漢語文獻方位詞“上”特殊功能研究」『古漢語研究』第3期，68-75。
- 馮赫 (2011) 「元代蒙式漢語方位詞特殊功能形成的內部因素考察」『山東社會科學』第4期，114-123。
- 傅錦花 (2014) 『日本學生習得漢語方位詞“上”偏誤研究』湖南師範大學碩士學位論文。
- 耿凱 (2014) 『漢日方位詞的認知研究』中國海洋大學碩士學位論文。
- 葛新 (2004) 『方位詞“上”、“下”的意義及其演變』上海師範大學碩士學位論文。
- 宮雪 (2009) 『漢日方位詞比較研究』大連海事大學碩士學位論文。

- 縱瑞隆 (2004)「方位詞“上”“下”的語義認知基礎與對外漢語教學」『語言文字應用』第4期, 423-439。
- 谷帥 (2010)『現代漢語方位詞“前”、“後”及其相關詞用法研究』上海師範大學碩士學位論文。
- 胡曉萍 (2012)「談單用的“之後”“之前”」『現代語文』第4期, 53-56。
- 金黎 (2013)『英漢空間方位詞的認知語義對比』延邊大學碩士學位論文。
- 李翠翠 (2008)『漢日語言符號“下”的對比研究』吉林大學。
- 李佳 (2014)『對外漢語方位詞教學研究 - 以“上、下、左、右”為例』廈門大學碩士學位論文
- 李良芳 (2011)「時空詞語“前”, “先”的古今詞義對比研究」『勵耘學刊 (語言卷)』第1期, 200-215。
- 林笛 (1999)「漢語空間方位詞的語用考察」『語言學論叢』商務印書館, 第18輯, 3-37。
- 林維瑄 (2008)『“上”的中日對照研究-從認知語言學的觀點』國立政治大學碩士學位論文。
- 李雲倩 (2013)『方位詞“上, 下”的漢日對比研究』黑龍江大學碩士學位論文。
- 樸璿秀 (2005)『現代漢語方位詞“前, 後, 上, 下”研究』復旦大學出版社。
- 邱斌 (2007)『古今漢語方位詞對比研究』復旦大學博士學位論文。
- 阮氏麗娟 (2011)『漢語方位詞及其類型學特徵—從漢語、越語與英語對比的視角』華東師範大學博士論文。
- 沈家煊 (2004)「語言的“主觀性”和“主觀化”」『外語教學與研究』第33期, 268-275。
- 史佩信 (2004)「漢語時間表達中的“前後式”與“來去式”」『上海師範大學學報: 哲學社會科學版』第33期, 59-64。
- 時雯雯 (2008)『“前後”、“左右”、“上下”的語義考察』廣西師範大學碩士學位論文。
- 王晚明 (2010)「關於方位詞“上”的漢日對比分析」『佳木斯大學社會科學學報』第2期, 160-162。
- 陶魏青 (2007)『日語方位詞多義的認知考察』廣東外語外貿大學碩士學位論文。
- 徐蓮 (2014)「日語和漢語“上”的原型義對比研究」『解放軍外國語學院學報』第5期, 108-115。
- 徐琳 (2012)『從認知角度看漢語“上”和日語“上”的異同點』北京第二外國語學院碩士學位論文。

引用例文出典

第1章 日本語の「上(うえ)」と中国語の「上(shang)」との比較

辞書からの引用例文

- 『日本国語大辞典』 第2版、小学館、2001年 (19頁)
『学研全訳古語辞典』 学習研究社、2003年 (20頁)
『白水社 中国語辞典』 白水社、2002年 (23, 38, 60頁)
『大辞林』 第3版、三省堂、2006年 (24頁)
『中日・日中辞典』 第2版、北京商務印書館・小学館、2002年 (38, 41, 49頁)

コーパスからの引用例文

① <BCCWJ>

- 藤井淑禎 『清張ミステリーと昭和三十年代』 (15頁)
石川淳 『焼跡のイエス・処女懐胎』 (15頁)
清水茂 (訳) 『水滸伝』 (21頁)
稲賀敬二, 森野繁夫ほか (編著) 『高等学校 古典・古文編』 (21頁)
滝本竜彦 『NHK ようこそ!』 (22頁)
有吉佐和子 『和宮様御留』 (22頁)
三田誠広 『団塊老人』 (29頁)
日本林業協会 (編) 『林業白書』 (30頁)
田辺亜木 (訳) 『ブレッシング』 (30頁)
碓井民朗 『一流建築家の知恵袋マンションの価値』 (55頁)
御木徳近 『今を生きる』 (55頁)
東郷公德 『シェイクスピアは楽しい』 (55頁)
榎本捨三 『満洲崩壊』 (57頁)
木村尚三郎 『西欧文明の原像』 (57頁)
新井ひろみ 『プリンセスにお手上げ』 (57頁)
魚柄仁之助 『うおつか流清貧の食卓』 (61頁)
田辺聖子 『霧ふかき宇治の恋』 (62頁)

② <CJBC>

- 石川達三 『青春の蹉跎』 (29, 37, 56頁)
乙武洋匡 『五体不満足』 (30, 58頁)
井伏鱒二 『黒い雨』 (36頁)
水上勉 『雁の寺』 (36頁)

井上靖 『あした来る人』 (37 頁)
五十川倫義 『中日飛鴻・櫻花』 (49 頁)
三島由紀夫 『金閣寺』 (50 頁)
夏目漱石 『こころ』 (51 頁)
夏目漱石 『坊ちゃん』 (54, 55, 60, 62 頁)
大岡昇平 『野火』 (55 頁)
水上勉著 『越前竹人形』 (60 頁)
田中角栄 『日本列島改造論』 (61 頁)

浩然 《金光大道》 (35, 39, 41, 56 頁)
王蒙 《活動變人形》 (35, 58 頁)
巴金 《家》 (36, 47 頁)
劉心武 《鐘鼓樓》 (38, 39, 58 頁)
中央文獻編輯委員會 (編) 《鄧小平文選》 (39 頁)
鄧榕 《我的父親鄧小平》 (40, 51, 57, 58 頁)
謙容 《人到中年》 (41 頁)
史鐵生 《插隊的故事》 (47, 49 頁)
陳建功 《轆轤把胡同九号》 (48 頁)
張海迪 《輪椅上的夢》 (50, 59 頁)
楊沫 《青春之歌》 (50, 51, 56 頁)
莫言著 《紅高粱》 (51 頁)

他の公刊物からの引用例文

朝日新聞社 (編) 『朝日新聞』 (14 頁)
小学館 (編) 『新編日本古典文学全集』 (20 頁)
東亜日報社 (編) 『東亜日報・社説』 (24 頁)
茂木健一郎 『脳が変わる生き方』 (24 頁)
中谷巖 『若きサムライたちへ』 (25 頁)
川坂俊一 『コロンビア協力隊物語』 (25 頁)
木下雄生 『考えることを忘れたスイカ』 (25 頁)
吉田茂 『激動の百年史』 (25 頁)
松下幸之助 『私の夢・日本の夢 21 世紀の日本』 (25 頁)
夫馬進 『善会善堂史研究』 (31 頁)
安藤栄里子 『耳から覚える日本語能力試験 2 級文法トレーニング』 (31, 33 頁)
中村健之介 『宣教師ニコライと明治日本』 (31 頁)
PHP 研究所 (編) 『松下幸之助日々のことば』 (31 頁)

金谷俊一郎 『日本人の美德を育てた「修身」の教科書』 (31 頁)
岩波文庫 『蜻蛉日記』 (53 頁)
岩波文庫 『万葉集』 (53 頁)
アジア学生文化協会留学生日本語コース (編) 『完全マスター2 級』 (61 頁)

人民出版社 (編) 《新華文摘》 (40 頁)
陳雅玫(訳) 《新聞文化》 (40 頁)
中華書局 (編) 《詩経》 (53 頁)
中華書局 (編) 《左伝》 (53 頁)

第2章 日本語の「下(した)」と中国語の「下(xia)」との比較

辞書からの引用例文

『デイリーコンサイス中日辞典』 第3版、三省堂、2013年 (75頁)
Collins COBUILD Advanced Learner's Dictionary, 8th Revised Edition, HarperCollins Publishers, 2014年 (75頁)
『大辞林』 第3版、三省堂、2006年 (82頁)
『中日・日中辞典』 第2版、北京商務印書館・小学館、2002年 (84頁)
『白水社 中国語辞典』 白水社、2002年 (85頁)
『プログレッシブ英和中辞典』 第5版、小学館、2012年 (88頁)

コーパスからの引用例文

① <BCCWJ>

江戸川乱歩 『大暗室』 (66 頁)
杉森文夫 (編) 『とり』 (66 頁)
福井市市役所 (編) 『市政広報ふくい』 (66 頁)
山崎洋子 『柘榴館』 (67 頁)
志村有弘 (編) 『怪奇・伝奇時代小説選集』 (67 頁)
森清範 『清水寺』 (67 頁)
矢部真理 『魔女とプレイボーイ』 (68 頁)
寺垣武 『知恵』 (68 頁)
大越友恵 『ホビージャパン』 (68 頁)

② <CJBC>

- 井上靖 『あした来る人』 (69 頁)
川端康成 『雪国』 (69, 71, 72, 93 頁)
村上春樹 『ノルウェイの森』 (70, 72, 75, 76 頁)
水上勉 『雁の寺』 (71 頁)
大岡昇平 『野火』 (71 頁)
井上靖 『あした来る人』 (72, 76 頁)
三島由紀夫 『金閣寺』 (77 頁)
井伏鱒二 『黒い雨』 (78 頁)
安部公房 『砂の女』 (78 頁)
山崎武也 『気品の法則』 (83 頁)
島崎藤村 『破戒』 (93 頁)

- 茅盾 《霜葉紅似二月花》 (69, 70 頁)
謹容 《人到中年》 (70 頁)
劉心武 《鐘鼓樓》 (70, 84 頁)
楊沫 《青春之歌》 (73, 77 頁)
巴金 《家》 (73 頁)
羅興典 (編) 《日本戦後名詩百家集》 (73 頁)
莫言 《紅高粱》 (77 頁)
王安憶 《小鮑莊》 (77 頁)
魯迅 《阿Q 正伝》 (83 頁)
載厚英 《人啊, 人!》 (83 頁)
鄧榕 《我的父親鄧小平》 (93 頁)

③ <CCL>

- 新華社 『新華社ニュース (1994 年)』 (80 頁)
中国国务院新聞辦公室 (編) 『2004 年中国政府白書』 (81 頁)
謹容 《夢中的河》 (82 頁)
中国新聞社 『中国新聞週刊』 (82 頁)

他の公刊物からの引用例文

- 金子正彦 『四国お遍路旅物語』 (66 頁)
群ようこ 『浮世道場』 (67 頁)
小学館 (編) 『日本大百科全書』 (69 頁)
畝山智香子 『ほんとうの「食の安全」を考える』 (80 頁)

小泉八雲 『日本瞥見記（上）』（80 頁）
長谷川康男 『毎日が楽しくなる季節のお話』（80 頁）
渋谷昌三 『不機嫌な人間関係を変える心理学』（83 頁）
柳川明彦 『夫はつらい』（87 頁）
今野勉 『テレビの青春』（87 頁）
廣田勇 『気象のことば科学のこころ』（87 頁）
日本放送協会（編）『NHK ラジオ英会話』（88 頁）

中華書局（編）《朱子語類》（82 頁）

第3章 日本語の「前(まえ)」・「先(さき)」と中国語の「前(qian)」との比較

辞書からの引用例文

『中日・日中辞典』 第2版、北京商務印書館・小学館、2002年、(113, 115, 127, 130, 133, 134, 141 頁)
『白水社 中国語辞典』 白水社、2002年、(144 頁)

コーパスからの引用例文

① <BCCWJ>

平賀元気 『キリスト屋』（101 頁）
別所誼二 『昭和物語』（102 頁）
大久保寛 『ブルー・ムービー』（103 頁）
ねじめ正一 『昼間のパパと夜明けの息子』（103 頁）
堀辰雄 『プルウストの文体について』（104 頁）
成田陽子 『銀座』（127 頁）
千野隆司 『駆け出し同心』（127 頁）
篠田真由美 『桜闇』（127 頁）
三須啓仙 『十二支運勢宝鑑』（127 頁）
国会図書館（編）『国会議事録』（127 頁）
小原国芳 『小原国芳全集』（130 頁）
遠山長太郎 『ある団塊世代家族の再生』（131 頁）
河合雅雄 『ふしぎの博物誌』（131 頁）
読売新聞社 『読売新聞』（131, 144 頁）
河合雅雄（編）『ふしぎの博物誌』（144 頁）
三好礼子 『砂の子』（145 頁）

黒武洋 『パンドラの火花』 (145 頁)
藤田宜永著 『恋しい女』 (145 頁)
松村和紀子著 『真夜中のヒーロー』 (145 頁)

② <CJBC>

井上靖 『雁の寺』 (115 頁)
水上勉 『越前竹人形』 (116、138 頁)
夏目漱石 『坊ちゃん』 (134 頁)
伊藤正則 『日本経済の飛躍的な発展』 (135 頁)
三島由紀夫 『金閣寺』 (135 頁)
夏目漱石 『こころ』 (136、137 頁)
村上春樹 『ノルウェイの森』 (136、137、138 頁)
井伏鱒二 『黒い雨』 (136 頁)
島崎藤村 『破戒』 (137 頁)

張海迪 《輪椅上の夢》 (99 頁)
冰心 《關於女人》 (134 頁)
浩然 《金光大道》 (140 頁)
劉心武 《鐘鼓樓》 (143 頁)

③ <CCL>

姜彬 (編) 《中国民間文学大辞典》 (144 頁)

他の公刊物からの引用例文

鹿内信善 『やる気をひきだす看図作文の授業』 (99 頁)
岩波書店 (編) 『世界』 (99 頁)
大門良子 『ニコニコクリーニング店の話』 (99 頁)
川添昭二 『北条時宗』 (99 頁)
長野茂 『忙しいあなたの運動不足を解消!』 (101 頁)
鈴木衛 『コンピュータシステムの基礎』 (101 頁)
音羽広士 『ルナティック』 (104 頁)
清泉女学院大学 『清泉女学院大学記事』 (104 頁)
片岡国好 『ことば・空間・身体』 (128 頁)
宮本百合子 『長崎の印象』 (128 頁)
赤澤計眞 『越後織物史の研究』 (129 頁)
鈴木峻 『海のシルクロードの要』 (129 頁)

- 渡部昇一 『不平等主義のすすめ』 (129 頁)
高梨公之 『口語六法全書』 (129 頁)
日本ネットワークセキュリティ協会 (編) 『アイデンティティ管理ガイドライン』
(129 頁)
山村竜也 『史伝坂本龍馬』 (129 頁)
塩崎逸雄 『パチンコ貧乏からの脱出』 (129 頁)
松下幸之助 『リーダーになる人知っておいてほしいこと』 (130 頁)
- 人民日報社 (編) 《大地月刊》 (99 頁)
蕭秀青 (編) 《玫瑰盛宴》 (99 頁)
鮑爾吉 《雪地賀卡》 (99 頁)
菩提法門 《禪修與健康》 (100 頁)
張軼驍著 《保送生活》 (101 頁)
茅捷 《七月冰八月雪》 (101 頁)
蔡駿 《人間》 (102 頁)
莫斯 《宙斯的女兒》 (102 頁)
郭英麗 《MBA 面試指導》 (103 頁)
顏俊傑 《不死器官》 (103 頁)
李近春 《納西学論集》 (104 頁)
朱曉翔 《盜墓玄機》 (104 頁)
鐘嵐 《Maya 6.0 實用培訓教程》 (104 頁)
人民日報社 《人民日報》 (135 頁)

第4章 日本語の「後(あと)」と中国語の「後(hou)」との比較

辞書からの引用例文

- 『大辞林』 第3版、三省堂、2006年、(153頁)
『白水社 中国語辞典』 白水社、2002年、(154, 156頁)
『中日・日中辞典』 第2版、北京商務印書館・小学館、2002年、(161頁)

コーパスからの引用例文

① <BCCWJ>

- 松山善三 『ああ人間山脈』 (152 頁)
片岡鶴太郎 『夢画夢中』 (152 頁)
惠谷治 『アフガン山岳戦従軍記』 (152 頁)

② <CJBC>

- 水上勉 『越前竹人形』 (155 頁)
井上靖 『あした来る人』 (159 頁)
平川祐弘 『マッテオ・リッチ伝』 (162 頁)
吉田茂 『激動の百年史』 (162 頁)

- 王蒙 《活動變人形》 (155 頁)
史鐵生 《插隊的故事》 (155 頁)

他の公刊物からの引用例文

- 一杉武史 『キクタン英検準2級』 (158 頁)
Weblio (編) 『中国語会話例文集』 (159, 161, 162, 163 頁)
- 今井隆吉 『科学と外交』 (160 頁)
柳沢道生 『旅たび倶楽部』 (160 頁)
西隈俊哉 『日本語能力試験3級徹底ドリル』 (163 頁)
カルチャーランド 『老後資金0円からの快適セカンドライフ』 (163 頁)
- 徐月清 《活躍在香港》 (156 頁)

謝辞

本論文の執筆にあたり、何よりも感謝せねばならないのは、始終温かくご指導を賜わりました指導教員の佐々木一隆教授です。テーマの着想から、論旨の組み立て、表現の推敲などに至るまで、佐々木教授の入念なご指導がなくては、本論文の完成は全く不可能であり、ご支援下さいましたことに衷心より厚くお礼申し上げます。学術雑誌へ論文を投稿する際にも、佐々木教授より多大なご助力をいただきました。

次に、博士後期課程に進学して以来、大変お世話になりました副指導教員の中村真教授、松村史紀准教授に深甚なる謝意を申し上げます。1、2年次に論文の方向性を検討した際に、両先生から示唆に富むご助言を数多くいただきました。論文の審査に向けて、親切な励ましのお言葉を掛けて下さいまして、非常に勇気づけられました。

また、本論文の審査及び修正にあたり、大変なご面倒をお掛けしました松金公正教授に深くお詫びするとともに、ご鞭撻、ご支援賜わりましたことに心より厚くお礼申し上げます。松金教授からいただいた貴重な知見を、現在のみならず今後の研究生生活において生かしたいと存じます。本論文の審査をお引き受け下さった倪永茂教授に、厚く感謝の意を申し上げます。倪教授からいただいた懇切丁寧なご教示は、論文をより良くするには大変役に立ちました。修士時代の指導教員であった吉田一彦教授にも深く感謝の意を申し上げます。

学外審査員である東洋学園大学の高尾享幸教授からは、深い学識に基づく貴重なご指摘を多くいただきました。高尾教授からいただいた論文の要点を突いた鋭いご洞察は、本論文を修正するにあたり大いに参考になりました。この場を借りて深謝の意を申し上げます。

本論文の執筆に際して感謝せねばならないのは、文部科学省国費奨学生を推薦して下さいました宇都宮大学国際学研究科の方々です。国費奨学生として採用していただいたおかげで、後顧の憂いなく研究と勉学に打ち込める環境を確保できました。また、修士時代に奨学金を授与し、経済的な面を支援して下さったロータリー米山記念奨学会に対して、改めてお礼を申し上げます。

日本語表現のネイティブチェックをして下さった森谷亮太さん (宇都宮大学大学院博士後期課程)、柳田文さん (宇都宮大学大学院博士前期課程)、石崎達也さん (東北大学大学院博士前期課程)、浅野みさきさん (宇都宮大学国際学部生)、渡辺ひかりさん (宇都宮大学国際学部生)、秋元愛さん (宇都宮大学国際学部生)に厚くお礼を申し上げます。日々の研究生生活に知的な刺激を与えて下さった先輩の范喜春博士 (チチハル大学講師)、陳懷宇博士 (東北農業大学講師)、宇都宮大学国際学研究科に在籍しているスバゴジョエワ・アセリさん、張婷婷さん、コ・ハスチムガさん、沈宇萌さんにも感謝致します。

また、9年前中国の大学で日本語を勉強しはじめてから現在まで、長きにわたって大変お世話になりました新見正一様と新見玲子様、心より深謝を申し上げます。いつも勇気付けて下さった先輩の王雪嬌さんと友人の侯科さんにも謝意を申し上げたいと存じます。高校

時代からの知友の呉璋さん (香港中文大学博士課程)、呉音然さん (香港浸会大学博士課程) にもお礼を致します。

最後に、生まれてから今まで、始終温かく見守り辛抱強く支援し、精神的な支えになってくれた父・趙楽静と母・李玉雲に対して、衷心より感謝の意を表します。常に私を理解し、論文の完成に向けて叱咤激励してくれた優しい妻・李静にも心から感謝いたします。そして、論文の終了を見届けることなく他界した祖父、外祖母にとりあえず本件を報告します。

本論文は皆様方のご支援とご指摘があっはじめて完成させることができましたが、皆様方のご知見やお教を十分に反映させることができなかつた点もあると存じます。本文の内容に関するすべての責任は筆者自身が負うものであります。本論文の内容について、誤り、遺漏などがございましたら、ご助言やご批判を賜れば幸いに存じます。

平成 27 年 12 月 14 日

宇都宮大学大学院国際学研究科にて

趙無忌